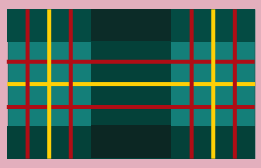
スカウトコースにおける

所員のための指導基準ハンドブック



第１回所員会議		
指導案〆切り		
備品準備、草刈り		
第２回所員会議		
前日集合		
前日所員会議		

茨城県連盟
トレーニングチーム

Ver.2020.　.

トレーナーは、オーソリティになる

指導者のトレーニングとしてあるべき姿は
「**トレーナーに学ぶ**」であって「**トレーナーが教える**」
ではありません。

トレーナーがスカウトスキルを持っていなければ教えられない
⬇
しっかりとした研修ができない
⬇
参加者の成長が望めない。
ではなく、

トレーナーが、たくさんのスカウトスキルを持つことで
参加者達が、**求めて**
トレーナーから多くのことを学びたがる
⬇
研修がもっともっと楽しくなる
⬇
それが参加者自身を（→スカウトを）成長させて行く
です。

だから私たちは
求められるトレーナーになるために
たくさんの、広く・高く・深いスカウトスキルを
それぞれがしっかり身に付けて
目指す分野のオーソリティになりましょう

WB研修所スカウトコースの位置づけ

1. 新体系のスカウトコースの特徴

スカウトコースは、それまでのWB研修所とは展開も方法も全く違うことは承知されているだろう。

従来型は「気づきを促せ」「他の人がやっていることを盗め」「自主性をもって取り組め」・・・を指導者に求めていた。ただ与えられているだけでは身につかない・・・と考えていたからだ。そこに参加者自らの積極的な関与を求めていた。

しかし、スカウトコースは「**基本的なコースの実施展開する場だから、そこで実践･体験して身につける**」ところと位置づけた。つまり「きっかけ（導き）を与え、それを実行させ、体で覚えさせる（Learning by Doing)」というように、実に丁寧な方針に転換したわけである。WB研修所における活動のとっかかりを、「自ら気づきなさい」から「積極的な関与」にして、「こんな仕事がある」「こんな作業がある」「こんな考えを持つ必要がある」・・・という「実際に示して気づかせる」に変更したのである。

これは、非常に大きな変革である。我々トレーナーは、教えてやらせることはできる。

しかし、参加者が目の前のやらねばならないことに対して、

「どのように示して気づきを起こさせたら、どのような意識変化を起こし、どのように導くことで、どのような結果を予想して、どのようなプロセスと方法により、それを為し得ることができるようにするのか・・・」

については、具体的な研究をしてこなかった。

いわば、そこは参加者個人の力量に任せて、形の上では「それを達成しなければならない」としていたが、実際にはその達成については責任を負うことなく、達成度に係わらず修了認定をしてきており、とにかく形式的にであれ「一通り伝えればよい」としてきてしまったわけである。

新体系のスカウトコースでは、その逃げ道は無い。それは、**「絶対的達成目標」が明確に提示**されてしまったからだ。「絶対的達成目標」、それは、WB研修所の４日間でスカウティングを行う（正しいスカウティングの方法でスカウトを導くべき）指導者に対して**「この運動が求めているスカウティングを受け入れる基盤を作り上げること」**である。それを以て「修了」認定をするということである。

つまり、今までのWB研修所に加えて、指導者としてやらなければならないこと、身につけなければならないこと（知識・技能の本質・根拠だけでなく、意識・姿勢・実行力など）を理解させて送り出すということだ。

これはどエライことになった。

いままでのようなトレーニングチームでは対処ができない。トレーニングチームの在り方そのものをリセットして再構築（スクラップ＆ビルド）しなければならない程の「質」を求められたのである。

では、それを「誰」が覚えさせるのか。それは「班担当」である。**セッション担当講師以外の部分は班担当が全て伝え、そして教える。**

How to を伝授するといっても良い。

とにかく、班の中で体と手を動かしているという状況を作る。→何もせずにぼーっとしているを作らない。

「知らない」「出来ない」のであれば、その場で「教えて」「させてみる」そう、やらせるのである。説明だけではない、実際にやらせるのである。まぁそのときはできなくても良い。コースの中で、何度も実践する機会がある。

実践しなければ、寝ることもできないし、ご飯も食べられない。

「なんでできないんだ。」「なんで、知らないんだ。」「そんなこと当たり前だろう。」

・・・そのような言葉は使ってはならない。

彼らは**「できない」からここにいるのである。「知らない」から学びに来ているのである。それが大前提のコースなのである。**

2. トレーナーのあるべき姿を目指す

指導者のトレーニングを振り返ってみましょう。

今までは「気づきだ」「振り返りだ」といいながらも「TTMが教える」というスタンスをとってきた。それがそのままスカウティングの現場に現れていた。

しかし、私たちはトレーニングの中で、「指導するのではなく、支援するのだ」と言ってきた。この２つ、言っていることに齟齬がある・・・よね。

『指導者が教える』は、具体的に示すと

- 隊長（隊指導者）がスカウトスキルを持っていなければ教えられない

⇒野外活動ができない

⇒スカウトの成長が望めない

という考え方であった。

しかし、スカウティングとしてあるべき姿は

「指導者に学ぶ」であって「指導者が教える」ではない。

つまり、『指導者に学ぶ』を具体的に示すと

- 隊長（隊指導者）がスカウトスキルを持っていなければ教えられない

⇒隊長（指導者）が、たくさんのスカウトスキルをもつことで、 スカウト達が、求めて隊長から多くのことを学べる（学びたがる）

⇒野外活動がもっともっと楽しくなる

⇒そうしてスカウトが自分自身を成長させて行く。
⇒だから、求められる隊長になるために、スカウトスキルを身に付けていきましょう

となるのです。

それを指導者にあてはめていくと・・・

「**トレーナーに学ぶ**」が○で「トレーナーが教える」は×となり、

- トレーナーがスカウトスキルを持っていなければ教えられない

⇒しっかりとした研修ができない
⇒参加者の成長が望めない。

ではなく、

- トレーナーが、たくさんのスカウトスキルを持つことで、参加者達が、求めてトレーナーから多くのことを学べる（学びたがる）

⇒研修がもっともっと楽しくなる
⇒それが参加者自身を成長させていくと同時に、スカウトも成長させて行く

となる。

だから、私たちは、参加者から求められるトレーナーになるために、たくさんの、広く・高く・深いスカウトスキルをそれぞれがしっかり身に付けて目指す分野の**オーソリティ**を目指すのである。ベテランでもなければ、エキスパートでもない。目指すのは「**オーソリティ**」である。

更に、全ての分野を目指すのではない。自分が「目指す」分野でいい。そのトレーナーがチームを組むことで、結果として、全ての分野を担えればいいのである。

「トレーナーはオーソリティ」とあるが、ベテランやエキスパートとどう違うのか・・・。

たとえは悪いが「ベテラン」をWB実修所修了者とすると「エキスパート」はベテランより熟練度が高く知的で、指導者研修など高度な役務が担える者→トレーニングチーム員、「オーソリティ」は、「エキスパート」よりも熟練度が高く、さらに知的で、スカウティングの奥義に達している者（ALT. LT）のこと・・・と言える。

トレーニングチーム員は「エキスパート」を目指してもらいたい。

○ エキスパート・オーソリティを目指す

改めて、この言葉を伝える。

「実践躬行」
「Learning by Doing」
「それは何時やる？　今でしょ！」

・・・・これらは、いつもみなさんかセミナーの中で言っていること。実行できないことを言ったりしていないね？

何も「週末毎にキャンプをする」ことを求めているのではない。毎日寝る前に睡眠誘発剤として「スカウティング・フォア・ボーイズ」を読む・・・・でもいい。「BE-PAL」を読むでも、トレーニングチームのデータベースを毎日１つ覗いてみる・・・でも。

要は、「スカウティング」に今まで以上に興味を持つこと、そしてただ読むのではなく、「どうしてこうするのかな？」「こうやった方がおもしろそうだ！」「あ、これやってみよう！！」「もっと知りたいなぁ、他の本を探してみよう！」と、自分の内面から「面白がる」こと、その力を養い育てること。その力から行動を起こすことが大切なのだ。そして、それをスカウティングに繋げていく。日々の小さい活動の積み重ねだ。

そして、たまには仲間と自主トレをしたり、研究チーム活動に参加したり・・・と。

「やらされる」義務感からでは、身につかないし、育たないだろう。なにより「苦痛」でしかない。

3. 一貫性を伝えやすい

スカウトコースで、学ぶ「スカウト活動の基本」は、本家本元のボーイスカウト部門が基礎となっている。それを知ることで、BVS、CSのリーダーにとっては、その対象スカウトの年代に合わせた方法の違いを目の当たりに見て、体験して感じて、本当の意味での一貫性を理解しやすいのだ。

（BS部門ではなく全体としての）ボーイスカウトの活動のエッセンスを具現化したものがスカウトコースである。

そのため、BVS、CSのリーダーが今、自分の隊のスカウトに、何をどのように学ばせるのか、何をどのように体験させるのか、何をどのように身に付かせるのかを、そして、その結果将来どのようにそれが生かされるのか・・・が理解できるコースでなくては意味が無い。

4. スカウトコースについて

(1) コースのねらいと概要

スカウトコースは、従来のWB研修所とは根本的に違うものである。

今までやってきた研修所は「指示的コース」ではあったが、一定の効果があり、決して悪いものではなかった。しかし、何か大きなものが欠けてしまっていた。それは「スカウティング・スピリッツ」の注入である。この運動の「魅力」について、口先だけで伝え、それをセッション全般を通して実践的にやってみることはなかった。その点は反省しなければならない。

このスカウトコースでは、次の２つのことに重点を置く。

①前述のトレーナーは「オーソリティ」として、トレーニングチーム員は「エキスパート」として振る舞い、参加者達が、求めてトレーナーから多くのことを学べる（学びたがる）構図を作り、それを実践する。

②スカウティング・スピリッツの注入に重点におく。スカウティング・スピリッツ溢れるスカウティングをコース全体で醸しだし、そして伝え、そして体感し、受け入れてもらう（P.6（3）⑧で後述する）。

このように、本当のスカウティングを身につけるための**「基盤（受け皿）」を作ることを最重要視**する。そして、その後、ラウンドテーブルや各種セミナーで、それを自ら身につけていくよう、コミッショナーグループとも協議し、ひとつの茨城としての指導者養成体系を築いていきたい。

(2) スカウトコースの目的と目標

スカウトコースの目的は、「参加者がボーイスカウト指導

者としての責務を果たすことができるように、スカウト教育に関する基本的な内容を習得することを目的とする。」とし、課程別研修は、「参加者が当該部門の隊長としての責務を果たすことができるように、隊運営に関する基礎的な方法を習得することを目的とする。」とある（教育規程施行細則 8-3-2）。

また、参加者が研修を通じて達成される学習の目標は以下のとおりである。

＜コースの目標＞

1. 隊長の役割と責務を理解する。
2. スカウト活動の基本的な知識・技能について修得する。
3. スカウト活動の基本的な実施展開について理解する。
4. 部門の特徴を理解し、プログラムの計画と実施が出来る。（課程別研修）

つまり、

「絶対的達成目標」

・・・が明確になった

「この運動が求める指導者象」

・・・それも明確にする

「スカウティングの本質の理解」

・・・それも「行うことによって」体得する。

「スカウト技能のレベルアップ」

・・・班担当から直接伝授されるよう設計

(3) スカウトコースの性格と運営方針

① ボーイスカウトの隊指導者が身につけるべき基本的で且つ共通な内容を取り扱う。

つまり、ボーイスカウト課程のコースではない。ボーイスカウトコースを基本にしながら、全ての部門の指導者が共通して理解すべき内容を、ここでは展開するのである。

②学習の場は今までのような「講義」だけでなく、全ての野外生活においてもセッションと位置づける。

「知る」→「やってみる」の体験型に変更。

スカウトコースは食事もセッションである。

ということは、ただ食べられればいいというわけはない。セッションとして効果ある構成が必要である。

③「How To」を身につけることを主とした研修とする。

➡やり方を教える

ロープが結べない富士スカウト

料理のできないＲＳ・・・

ナタの使い方を知らない指導者・・・

→以前の研修所は、「考えさせる」「気づきを促す」「推理と観察を実行させる」「そなえよつねに的見地での事前準備」・・・・を声高に言ってきた。

→しかし、「知らない」ということは、知る環境がなかったから、未だに知らないのである。知る術を持たなかったから、未だに知ることができないのである。

だったら、How To を教えよう！！

しかし、ただ教えるのではない。繰り返し教え、繰り返し実行してもらう。

つまり、如何に手を動かし、何度も繰り返し、疑問を抱かせ、どうしてなのかを考える環境を作る。

「体で覚えたものは離れない」・・・のだ。

→だから、グループ編成も重要である。考慮する必要がある。

班の性質、特性を考えよう、一番効果のある班編成を行う。

➡セッションの方法を変える

今まで、トレーニングチームが伝統的に行ってきた方法は**「座学（基本知識の修得」）→「実習（体験による体得）」**であった。これはこれで日本人には合っているだろう。

しかし、新たに設けられたスカウトコースでは、「班担当所員（キャプテン）」を置いているのである。彼らは、チューターではない。はっきり言ってしまえば「コーチ」なのだ。細かい How To は彼らが担ってくれる。だからこそ、大胆なセッション展開ができるのである。それを旧態依然としたセッション展開でやってしまうと、彼らの存在は不要となる。

そのため、スカウトコースでは、彼らの存在を有効に活用し、かつ参加者が印象深く理解していけるセッション展開方法で行う。その方法は・・・

実習（体験） ➡ **解説（知識・理論）**

という流れでセッションを構成することである。佐野常羽が唱えた「清規三事」でも「実践躬行」「精求教理」「同心堅固」という順序をスカウティングの教法として説いている。

これは、まず「実習」を起点として物事を考える・考えさせるようにするものである。「実習」を振り返ってみて、必要な課題をそこから抽出し、それを「解説」によって理解（ガッテン）していくのだ。そして、それを再度「実習」に戻していくことで、定着（体得）させていく・・・というものだ。

このサイクルがスカウティングの本来のやり方であり、その中で「できない」ことを「できる」ようにするのが、スカウトコースにおける班担当所員（キャプテン）の役目なのである。

④ 隊編成で運営し、標準の隊活動や隊運営を体験する。

つまり、ボーイスカウトの本来の隊運営、つまり班制教育（班制度）によって、隊や班の運営を体験することで、ボーイスカウトの本来のやり方を体感させる。

それを実際に体験しているか否かが、今後、各部門の隊を運営する時に、大いに役立つ。スカウトを指導していくにあたって、基本を知っていると他部門との連携ができ、上進に繋げていくことができる。

⑤ スカウティングの基本原則については、研修所での生活やセッション等での学習や体験をふりかえりながら

行う。

ボーイスカウトのやり方は、時々変わっていく。しかし、変わらないのが「基本原則」である。

⑥ 所員全員が学習支援者となる。

⑦「スカウトコース」と従来の「ボーイスカウト課程」との違いをしっかりと理解する

くり返すが、「スカウトコースは、ボーイスカウト課程ではない！」。

詳しく述べるといろいろとあるのだが、単純に言うと、「プログラムプロセスを学ぶところではない」ということだ。班会議、班長会議、班長訓練、班集会、隊集会などの要素はそのまま使うが、それぞれの意味や意義を具体的に詳しく教える必要はない。それは課程別研修で行う。

つまり、参加者としては、前述の要素の概要について知ってもらい、それがどのように流れて（プロセス）いくか・・・を知ってもらい、それを実習によって体感するのである（スカウトコースは「体感」でいい。できれば「体得」にまで繋げたいところだが）。体感のアトでそれが解説されることで、しっかりとイメージができるのである。

特に、§８→§11→§12の流れには、この点を注意してもらいたい。

また、§３の野営技能も、できればこの方法を適用してもらいたい・・・が、「解説」の時間を捻出することは難しいだろう。

また、「班制度（班制教育）」と「野外活動」は、コースの中で体験するが、「進歩制度」には、触れない。

⑧スカウティング・スピリッツの注入を基盤におく。言い換えれば「スカウティング・スピリッツ」を体得させるのがこのコースなのである。

「スカウティングはゲームである」ということを思い出してもらいたい。「スカウティングは（楽しい）ゲームである」とも言う。

では「楽しい」とは、どんな状況をいうのだろうか。単刀直入に言うと、それは**「力を出し切ること」**なのである。所長の入所の言葉の中に

「3つ目は、規律と秩序を守りつつも、自ら楽しむという意識と姿勢で積極的に行動し、ベストを尽くすこと」

とあった。**「ベストを尽くす」＝「力を出し切ること」**なのである。誰かに押しつけられてやるのではなく、自分がやりたいから全力でやる。その「自らの全力の取り組み」で達成感や充実感を得ることこそが、スカウトにとっての「楽しい」瞬間なのである。

だから、辛い作業やハードな活動にも「楽しい」があてはまり、「楽しい」からこそ「ゲーム」になるのである。むしろハードであればあるほど「楽しい」の度合いが高まるのである。

そして、「班」の解釈だが、本来は次のような意味合いである。

日本のスカウティングにおける「班」では、班員の1人ひとりは「班の一員」として班に貢献すべきであり、個人はあくまでも班のためにある・・・という考え方が大勢を占めている。

しかし、本来の班と個人の関係は、基本はあくまでも個人。「オレがオレが」と主張する個人が集まるから、結果として強い班が出来あがる。しかしそのために求められるのが、個人の完成度である。中途半端ではダメなのだ。与えられた任務･役割を最大限に発揮できるまでに、自分を高めていくのだ。

この「楽しい」と「個人の完成度」こそ、スカウティングをより楽しいものにしていく「核」であり、「スカウティング･スピリッツ」の大きな要素である。残念ながら今のスカウティングに大きく欠けてしまっている部分でもある。だから、スカウティングが楽しくないのではなかろうか。

このように、本来の魅力あるスカウティングを復活させるために、今のスカウティングの現場で、希薄になってしまった「スカウティング･スピリッツ」の重要性をしっかりと認識してもらうことが、スカウティングの復権のための最重要課題であると日連は言っている。

そのスカウティングに込める思いは、我々茨城のトレーニングチームも同じである。是非とも、スカウティング･スピリッツを溢れるスカウティングをコース全体で醸しだし、そして伝え、そして体感し、受け入れてもらおう。

コーススタッフの皆さん、よろしくお願いします。

【基本原則】

定義

1. スカウト運動は、創始者によって考案された目的、原理、方法および以下に述べる事項に従って、性別、出生、人種、信条による区別なく誰をも対象とした、青少年のための自発的で非政治的な教育的運動である。

目的

2. スカウト運動の目的は、青少年が個人として、責任ある市民として、地域、国、国際社会の一員として自らの肉体的、知的、情緒的、社会的、精神的可能性を十分に達成できるように青少年の発達に貢献することである。

原理

1. スカウト運動は以下の原理に基づいている。

●神へのつとめ

信仰上の原則の堅持、それらを表明する宗教への忠誠、およびそこから生じる義務の受け入れ

●他へのつとめ

— 地域、国、国際間の平和と理解と協力の促進と調和した自国に対する忠誠。

— 人間であることの尊厳や自然界の完全性を認め、感謝と敬意をもった社会発展への参画。

●自分へのつとめ

— 自分自身の発達に対する責任

ちかいとおきての遵守

2. スカウト運動の全ての加盟員は、神へのつとめ、他へのつとめ、自分へのつとめの原理を反映し、各国スカウト連盟の文化や文明に適切な言語で表現され、世界機構によって承認されたスカウトのちかいとおきてを遵守することが要求され、またそれによって導かれる。

（中略）

方法

方法とは、「目標を達成する際に用いられる手段、あるいは取られる処置」として定義されている。方法は、常に一連の原理を持っており、スカウティングの場合も、これらの原理に基づいていなければならない。

スカウト教育法は、右下図に示す 8 つの方法を用いて行われる。我々は、これら全ての要素が、統合された教育システムに結び付けられた場合にのみ「スカウト教育法」と呼ぶ。このシステムは、「段階的自己教育」という考え方に基礎を置いている。

◆ちかいとおきて

スカウティングの原理に基づいている「ちかい」は、集団のルールを守ることを約束するだけでなく、自らの人生に責任、つまり自らが成長することを表明するものである。「おきて」は、成長・進歩における指針であり、これはこの運動に参加するすべての人が共有する。

◆小グループでの活動（パトロールシステム）

ボーイスカウト部門では8名程度の少年で「班」を構成する。この班はスカウトたちを管理するためにあるのではない。この小グループでの生活体験をスカウトたちが共有することで、各自が集団の中での適切な立場、役割を見出し、自分の意見をきっちりと述べ、仲間の発言に耳を傾け、意思決定に加わっていく。

◆行うことによって学ぶ

実行によって学ぶとは単に野外活動技能等を学ぶことだけではない。例えば班での生活は他の人と関わることを実際的に学び、ちかいは約束を果たすことを学び、奉仕活動は時に連帯意識を生み出す。積極的に興味を持っていることに挑戦することは、結局、問題解決の能力を伸ばしていくことであり、それは生きることを学ぶことになる。

◆象徴的枠組み

象徴的なものの活用。「スカウト」とは 20 世紀初頭の森林生活者、探検家、猟師、船乗り、飛行家、開拓者、辺境移住者などのこと。この運動はこれらの人々の野外技術、未知の世界を冒険する技術を実践する方法をモチーフに少年たちに道徳心を芽生えさせるための活動を提案してきた。より豊かでより充実した人生を送るために、想像力を豊かにする、刺激することがこのねらいである。また、ユニフォームもこれにあたり、青少年が「私はスカウティングに参加している」と最も強く感じるのはこれを着用して活動している時である。

◆個人の進歩

スカウトたちはあらゆる領域で進歩する。そしてその進歩の評価は誰かと比較することではなく、自分自身で設定した目標に対してどれくらい達成できたかということである。 進歩は主に進級課目として制定されおり、青少年が目標に向かうことを動機付けるように設定されている。

◆成人の支援

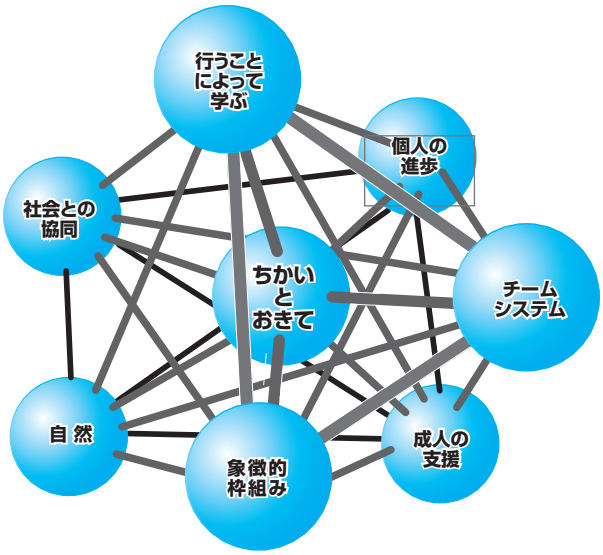
スカウティングが一つの教育運動であることは先に述べたとおりであり、この中での成人の役割も「青少年の成長に寄与する」ことであることを説明した。しかし、これは単に成人（大人）が青少年を庇護するようなことではない。そこには世代を超えた関係や挑戦により、互いを尊重し合う心が育まれる。成人にとっても一つの挑戦である。

◆自然の中での活動

「野外はスカウティングの教場」であるとよくいわれている。自然の持つ力を観察し、その中で生活することは自分たちの限界に挑むことである。 また興味や楽しみもそこにあるが、自然と調和を図ること、自然の相互依存を理解することは「環境」のための行動を起こす一歩にもつながる。

◆社会との協同

スカウトたちは「社会との協同」を通して様々な人々と協働し多様性を学んでいく。それ故、社会と向き合う、または社会の中に入る、ということで、スカウトたちは文化の違いを乗り越えてお互いを理解する、また世代間に横たわる問題をしっかり認識する、そして様々な形で社会とより深くかかわる、といった力を身につけることができる。



この運動が求める指導者研修の本当の姿

B-P の言葉にこのようなものがあります。

「スカウティングは真面目に勉強しなければならないような学問でもなければ、学説や出典を集めたものでもない。さらに少年たちに規律をくり返し教え込んだり、その個性ややる気を抑圧するような規則でもない。

そう、それは野外での楽しいゲームである。

そこでは、少年の心を持った大人達と少年たちが兄弟として一緒に冒険にでかけ、健康と幸福、手技と役に立つことを身に付けることができる場所なのです。」

「しかし、我々指導者をとりまく、あらゆるものを見ていると、時として我々はゲームにしては、あまりに深刻なものにしようとしているのではないかといぶかしむことがある。」

・・・です。

ここにあるように、私たちはこの指導者研修を「**あまりに深刻なもの**」にしてしまっているんじゃないですか？　スカウティングはゲームなんですよね、ゲーム！

一方、今の指導者を見ていると、皆さん真面目ですので、研修で学んだ活動のスタイルや内容を、隊でそのまま真似て実践しているようにも見受けられます。

しかし、研修の目的は、

- **その研修が終わったときに何ができるようになるか**
- **講師は、「教える」ということによって、参加者（指導者）から「望ましい行動」を引き出し、参加者が研修で学んだことを活かして、さらに活躍（楽しく魅力ある活動を）してもらうために存在する**

とあるように、研修で学んだ知識やスキルを活用して、魅力ある素晴らしいスカウティングを展開して、スカウトが「参加したい」と思うスカウト活動が企画・実施できる・・・という「結果」を出してもらうことを目的としています。

にもかかわらず、実際の活動で「座学」をする、インドアの活動をする、理論や理屈が前面に出てくる・・・と指導者研修をマネた活動を行っているということは、上記の目的が達成できていない、研修所の本来の在り方が分かっていない、展開できていない・・・ということにほかなりません。その結果、本来のボーイスカウトが求めている活動（アウトドア、体験、観察と推理、ゲームなど）とかけ離れた活動になってしまっているのでしょう。ですので、研修を実施展開するにあたっては、この点をよく評価･反省し、分析・研究して研修をデザインをしなければなりません。

活動での座学、インドアの活動、理論や理屈だらけの活動・・・というものは、スカウトにとっては、面白いものとは言えないでしょう。スカウティングは学校教育ではないし、家庭教育でもないのですから。

そう、**「たのしくなければスカウティングではない」、「楽しい」と「愉しい」が基本**です。

では、どうしたらボーイスカウトが本来求めているアウトドア、体験、観察と推理、ゲームなどの活動を隊の現場に戻せるのでしょうか。それにはやはり指導者研修しかありません。え、矛盾しているって？？？（汗）　いやいや、指導者たちが自分で楽しい活動を生み出すことが難しくて、どうしても指導者研修を真似てしまうのであれば、**指導者研修そのもののスタイルを本来のスカウト活動に近いものにしてしまえばいい**のです。それには、私たちトレーニングチームの頭の中の凝り固まった既成概念を捨てるところから始めましょう。

さぁて、どうしましょうか。

それは、決して難しいことではありません。基本通りの「班集会」と「隊集会」をすればいいのです。

まず、指導者は基本となる知識やスキルは、「課題研修」として、「e- ラーニング」や「書籍研究」をしたり、「ラウンドテーブル」や「ラウンドテーブルの分科会」に参加して習得します。そう「組・班集会」です。

そして、その後に、実習としての集合訓練を実施するのです。そう、こっちは「隊集会」です。隊集会へは、６～８人の「班」を単位として参加するのです。

隊集会での活動は、長期記憶に定着させるために、対班競点（班制教育とチームゲーム）を主体に構成します。

このようにすると、今までのような１日で何から何までを行うこれまでの県定型訓練と違って、事前研修の履修を前提に、内容を精査できますので、実際の隊集会のように数時間や半日単位での研修で十分な効果が得られるでしょう。時間になったら終わるも良し、または参加者同士の懇親やコミュニケーションの時間を設けてもいいでしょう。

この方法が使える指導者訓練であれば、基本的に各隊で実施されている隊集会と同様となります。つまり、研修スタッフは、隊指導者と同じように必要最小限の人数で済むでしょうし、開催場所も隊集会と同じように公民館や、野外の公園などでの実施も可能となり、開設経費も少なくて済みます。

そして、スタッフが演じる隊長、副長、上班などの動きやスカウト達を惹きつける演出なども身近に見ることができます。

プログラムの提供は、トレーニングチームの任務のひとつとなります。このように指導者研修の中で提供できるとなれば、「プログラム作成」というニーズを持った指導者を取り込めます。

つまり、参加者が増える ➡ 隊に持ち帰る ➡ スカウトが楽しいプログラムを体験できる ➡ 隊活動が活性化する ➡ 保護者の満足度がアップする ➡ スカウティングの認知度のアップ ➡ 新たなスカウト獲得・・・・と連鎖していくのではないでしょうか（そのように仕組み作りと取り組みも）。

このようにいいことずくめのようですが、これを行うには、大きな問題があります。１つは事前研修の課題に取り組むのための**テキスト（ノートや参考書）がきちんと出来上がっていること**、もう１つは、**「面白く、指導者引き込める」隊集会プログラム**とそれを展開する**「憧れられる、実力のある、納得できるイメージリーダー」としてのスタッフが存在**していることです。

いいと思うことは、「まずはやってみよう！」がトレーニングチームのモットーです。さぁ、動き出しましょう。

◉ ウッドバッジ研修所スカウトコース茨城第 3 期

1. コーススタッフ（トレーニングチーム）

コース役務	氏　　名	区　分	所属団	団役務	登録番号
所長					
主任所員					
隊長					
副長（健康安全）					
副長（生活）					
副長（プログラム）					
上級班長					
班担当所員					
班担当所員					
班担当所員					
班担当所員					
記録担当					

2. 運営スタッフ（トレーニングチーム、及び候補者）

コース役務	氏　　名	区　分	所属団	団役務	登録番号
QM					
AQM					
QMF					
奉仕					
奉仕					
奉仕					
奉仕					

3. 開設スタッフ（指導者養成委員会等）

コース役務	氏　　名	区　　分	備　　考
開設責任者			
同　　代理			
開設担当者（主）			
開設業務			
開設業務			
開設業務			
開設業務			

ウッドバッジ研修所スカウトコース　茨城第　期

		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
第1日	11月1日（金）	受付開始 受付	入門式 開所式 隊編成式 集合写真撮影	§1 研修所について	オリエンテーション	§2 基本動作	§3－Ⅰ スカウト技能（野営技能） （設営を含む）	§4－Ⅰ 野外炊事ーⅠ （夕食を含む）	§5 スカウト運動	§6－Ⅲ 夜のプログラムーⅢ （歓迎の営火）	班長会議 今日の話題 スカウツオウン				
			30	60	75	75	150	120	90	60	30				
第2日	11月2日（土）	点検 朝礼 スカウツォン ゲーム	§7 安全教育と安全管理	§9 ワークショップ		§4－Ⅱ 野外炊事ーⅡ	§8 班長訓練	§10 安全の構築と運用	§4－Ⅲ 野外炊事ーⅢ （夕食・サイト改善を含む）	§6－Ⅰ 夜のプログラムⅠ （夜間ゲーム）	班長会議 今日の話題 スカウツオウン				
			75	135		90	120	60	120	90	30				
第3日	11月3（日）	点検 朝礼 スカウツォン ゲーム	§11 班集会 （技能伝達・ソング・スタンツ）		§4－Ⅳ 野外炊事ーⅣ （昼食を含む）	§12 隊集会		§13 スカウト教育	§4－Ⅴ 野外炊事ーⅤ （夕食・サイト改善を含む）	§6－Ⅱ 夜のプログラムⅡ （キャンプファイア）	班長会議 今日の話題 スカウツオウン				
			150		90	180		60	120	90	30				
第4日	11月4日（月）	点検 朝礼 スカウツォン ゲーム	§14 指導者の役割と責務	§3－Ⅱ スカウト技能（野営技能） （撤営）			質疑応答 （会食）	解隊式 閉所式	解散						
			90	150			30	30							
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21

○スカウツオウン　11/1 夜（吉田）　11/2 朝（小峰）　夜（熊谷）　11/3 朝（富田）　夜（石井）　11/4 朝（大月）

ウッドバッジ研修所の運営

◉ ウッドバッジ研修所の運営について

ウッドバッジ研修所の開設の基本についてては、所員ハンドブックに書かれているので、そちらを確認ください。

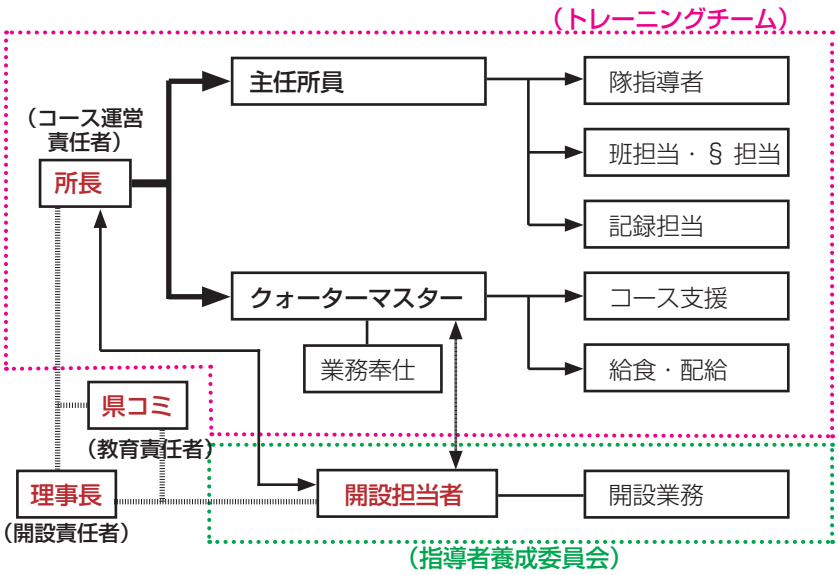
1. ウッドバッジ研修所運営の基本的な考え方

(1) トレーニングチームと指導者養成委員会の任務

指導者研修へは、トレーニングチームと指導者養成委員会が関わります。

教育面はトレーニングチーム、運営は指導者養成委員会といわれていますが、これを正しく示すと、**コース運営（教育とその支援業務）は「トレーニングチーム」**で、**コースの開設業務は指導者養成委員会**がそれぞれ担います。

それを図に示すと



となります。

トレーニングチームの部分は、所員ハンドブックは、多少違っていますが、所長が ALT の場合には、その支援（指導･育成含む）のために主任所員（LT: 茨城独自。対外的には「所員」）を置きます。任務の概要は右欄を参照ください。

指導者養成委員会の担当委員（2 ～ 3 名）は、開設を担当します。具体的には、

- ウッドバッジ研修所の予算と決算管理（県連から一時金を預かり、QM に渡す。事後 QM から会計報告を受ける。）
- ウッドバッジ研修所の会場、施設・設備・備品の確保（予約、支払精算等）
- 施設・会場管理者との調整（施設・設備の使用について＆確認：事前・コース中、事後）　* コース中に委員不在の場合は、QM に委任しても可。
- 所員会議のロジスティック（会場確保、会計、主な資料の準備、他）
- 参加者の受付（受付の準備、名札の準備、参加費の徴収他の対応含む）
- 参加者駐車場の確保と誘導（初日 *、最終日）と期間中の管理（* 初日の誘導は、業務奉仕の支援を得る）
- 開会式、閉会式の運営と、開設責任者の対応依頼（理事長の招請）、来賓の対応、
- 傷害保険への加入（加入から、事故事務対応まで）
- 参加許可書の送付と、修了証、修了者名簿の準備と作成。配付物の準備。

○所長（LT,ALT）

- スカウトコース全般の運営・指導・管理・安全管理
- 日連が委嘱

＊以下県連 TT としての任務（委嘱行為は不要）

○所員

- ●主任所員（所長が ALT の場合にのみ置く。所長経験の LT に限る）
  - 所長（ALT）の支援・指導
  - 全てのセッションの指導・支援
- ●所員（LT.ALT.TT）
  - 担当セッションの運営、所長の指示による他セッションへの支援

○隊指導者

＊所長の指示を受けて、スカウトコース全体を「隊」として捉え隊を動かす。

- ●隊長（LT,ALT）
  - 隊運営全般（隊関係セッション含む）
- ●副長（ALT,TT）
  - **プログラム**：隊プログラム担当。それ以外に、隊活動における、教具・教材・資材・資料準備、プログラム支援
  - **生活**：生活全般及び野営の指導・支援。
  - **健康・安全**：参加者の健康管理、安全管理。

  ※参加者に女性がいる場合は、必ず女性指導者を置くこと。
- ●上級班長（ALT,TT）
  - 班制度を体感させる要。
- ●班担当所員（班数）（LT,ALT）
  - 学習と生活の支援

  ※所員 HB P.3　2.（3）を熟読のこと
- ●記録（できれば LT,ALT）
  - 所員会議およびセッション内容の記録

○ QM（LT,ALT）

- コースのバックヤードの管理と運営全般
- ●コース支援 :AQM（ALT、TT）
  - QM の補佐
  - 教具･教材･資材･資料などの調達･準備、施設との調整 *
- ●給食・配給 :QMF（ALT、TT）
  - 配給品・食材の調達
  - 所員の給食の用意

• 開設写真の撮影と配付準備

これらの開設業務については、所長、QM 及び開設担当者（指導者養成委員長）と十分に打合せし、コースの意向を聴取した上で、それを可能な限り実現するべく対応すること。

(2) 所長の動き、留意事項（事前）

① コーススタッフの確保と把握（TT 業務）《4 ヶ月前》

- TT の年度計画に従い、奉仕する所員を確認し、奉仕可能の有無を確認する。
- 年度当初に奉仕スケジュールが提示されているので、基本的に奉仕することが当然という考えでいく。都合により奉仕ができない場合は、その事実が発覚した直後に、本人がディレクターに連絡することが大原則。ディレクター * は、その替わりになる人をあらかじめ人選しておく。直近の身内のご不幸、病気・ケガ等突発的な場合は、即所長とディレクターに連絡するよう伝える。

② 所長方針を作る《4 ヶ月前》

- 所長方針は、長ければいいというものではない。
- 所長として、研修所の在り方と位置づけを十分に理解した上で、参加者に特に（スカウティングの）何を伝えたいのかを明確にし、それを文章としてスタッフに伝え、それを柱としてコースを作り上げていく基本とする。それが所長方針である。
- 所員ハンドブックに書かれていることを、くり返して表す必要はないが、特に強調したいものについては、改めて書き表して、配付する。

③ 開設打合せ → 開催通知の送付《3 ヶ月前》

- 開設に当たって、基本事項を確認するために、県連盟コミッショナー、指導者養成委員長と（主任所員が決まっていれば主任所員も）、開設の方向性と概要を確認する。
- その打合せを基に、開催案内、開催要項を作成し、指導者養成委員長を経て、県連事務局から各団、他県事務局等に送付する。

④ 所員会議（第 1 回）《2 ヶ月前》

- 所員会議を行うため、コーススタッフ及び業務担当を招集する。
- 所員の役務を決め、所長方針を提示し、セッションの担当を決める。セッションを担当する者に対しては、ポイントと内容と方向性の確認と、実施要項の提出先・期日を伝える。
  →セッション要項は、所長が受理・確認した後、主任所員にコメントをつけて送る。
- コーススタッフの構成を決める（業務奉仕員の招請計画）
- また、トレーニングチームに対しては、まだまだスカウトコースの位置づけが十分に浸透していないため、この冊子を活用して、コースの概要と方向性、各分担任務を明確に伝える。

⑤ 予算案の作成

- 参加者のだいたいの見当がついたところで、コースの予算案を作成する。（指導者養成委員長と。できれば QM と主任所員も同席する。）
- 施設使用料、食費、必要な資材費、プログラム展開費用、弁償支辨費、人件費（交通費、講師謝金）、事務費などを見積もり把握する。
- 収入より支出が多くなる場合は、指導者養成委員長と協議し、その対応を考える。

⑥ 参加者の課題の確認と参加許可書の送付

- 参加者名簿は、県連事務局で作ってくれるが、参加者の状況が一目で分かるスタッフ用の名簿を作成し、主任所員に送付する。個人情報であるため、その取り扱いには十分に注意する。
- 参加者の課題を確認する。入所のレベルに達していないと判断した場合は、地区コミッショナーに（cc. で県連盟コミッショナーにも）期限を付けて、修正のポイントをコメントし、期限を切って差し戻す。（課程別研修でも同様）

▶指導者養成委員会は、必ずしも常駐することはない

- 左記の業務が執行できれば、開設担当及び開設業務は、無理に全期間宿泊して常駐することはない。
- コース中に発生する、施設との調整等は、QM に委任することも考える。
- また、QM からの依頼があれば、可能な範囲で支援する。

＊ここでのディレクターの対応

コースに所員を送り込むことは、ディレクターの大切な任務である。

したがって、所長に確認させることなく、ディレクターが事前に確認して、所長に連絡をすること。《4 ヶ月前までに》

※ディレクターは、所長からの相談・依頼がない限り、コース展開に対しては、口出ししないよう努めること。あくまでも、コースの運営責任者は所長であり、開設の担当は指導者養成委員長である。

例えば、研修備品の設備、会場の整備など、研修周辺業務等、トレーニングチームとして動くべき場合は、ディレクターの指揮の下に TT として活動する。（そこは、たとえコースであったとしても。）

▶課題研修の入所レベルについて

●内容の量、深さを求めないが、真剣に取り組んであるかどうかを確認する。

また、入所レベルに達している場合は、課題の内容をより詳しく確認し、コメントがあればそれを付けて、主任所員に回付する。

- （主任所員は班編制をする）主任所員は、その課題を確認し、参加者それぞれの理解度の順位を付ける。そして、参加者の研修歴、指導者歴等からその参加者の野営スキルレベルを推測し、また、所属部門、男女比、平均年齢が各班均等になるように、**班編制**を行う→班編制名簿を作成する。所長は確認し、確定する。
- 所長は、確定した班編制名簿を所員と担当指導者養成委員に送付する。
- また、所長は、参加許可書のひな形を作り、担当指導者養成委員に送り、指導者養成委員会より参加者に送付する。

⑦ 参加申込〆切り。研修備品・装備・会場の確認《1 ヶ月前》

- 参加者の申込状況を確認し、コースの内容を確定させる
- 第 2 回所員会議の前に、研修に必要な備品・装備、施設資材の内容・状態を確認し、不備・不足があれば修理・調達の計画を立て、対応する。
- 研修での使用を前提に、会場の状況・状態を確認し、研修計画に反映させたり、不備・不足があればその対応をする。

⑧ 所員会議（第 2 回）《1 ヶ月前》

- 全コーススタッフと担当指導者養成委員はもとより、業務奉仕者にも参加する。
- コースの運営&教育方針について、改めて所長より全員に周知する。
- コース日程に従い、全スケジュールの流れ、セッションの内容を確認する。
- その後、トレーニング（主任所員）とバックヤード（QM）それぞれに分かれて詳細を詰めていく。（所長はそれぞれを把握する）
- 最終的に、それぞれの摺り合わせ（総括）し、漏れのないようにする。
- 研修前日の集合時間と所員会議、準備のスケジュールを伝える。
- 所長は、スタッフのモチベーションを高めて、気持ちをひとつにして会議を閉じる。

⑨ セッション指導要項の確認と担当者への指示と支援

- 第 2 回所員会議では、第 1 回所員会議以降に指示した事項について、主任所員を通して確認するとともに、完成形に近づけるべく支援をする。
- セッション実施要項等 * その他指示・連絡事項については、コース実施日以前に各スタッフ間でメールによって連絡し、その内容（概要）を掴んでおくよう、また、自分が担当する部分があればその部分を精読し十分に理解しておくよう伝える。
- 当日は、事前の打合せなく、即座にセッションに取りかかれる位になっていてもらいたい。（もちろん前日の所員会議で簡単な確認は必要）

⑩ その他

- 土浦訓練野営場で実施する場合は、できれば周辺の住民に回覧板等で、研修の実施をお知らせする（騒音、火気使用の心配の解消、夜間の行動、キャンプファイアの声等）。
- 必要に応じて、キャンプ場の草刈りを実施する。
  →これは、指導者養成委員会とディレクターの主導により実施する。
- 土浦青少年の家で実施する場合は、開設日の 1 週間以上前に、管理人との打合せが必要（指導者養成委員会で対応）
  - 入浴の有無と日時。
  - 食事の調理支援の依頼 * の有無。（施設の厨房の利用は調理師への依頼が必要）
  - 暖房の使用の有無（施設側で灯油を準備する都合があるので）。
  - その他研修に必要な、借用物の可否と、所在と状況確認。
  - ゴミへの対応。
  - 会計のタイミング。
  - 研修日程表の提出。
- 研修前日（または事前）の準備
  - 当日慌てないように、動きをお復習いし、準備をする。
  - 野営備品、配給、施設資材の準備については、担当所員の指示を

＊このタイミングでの確認は・・・

研修用品の中には、調達に時間がかかるものもあるため、最低でも 1 ヶ月の余裕がほしいため。

＊班担当者に送付するもの

・参加申込書　・健康調査書
・課題研修まとめ用紙

を担当班分のみを送付する。

＊セッション担当者が作成するもの

・セッション実施要項
・口述要項
・関連資料（板書計画、PPT など）

▶土浦青少年の家の厨房の利用

土浦青少年の家で実施する場合、衛生・栄養管理の観点から、また、ゲストナイトの料理を準備する都合から、できる限り厨房を利用して調理をする。QM は、所長の意向を聞いた上で、指導者養成委員会から、管理人に依頼してもらうこと。（土浦青少年の家の担当がいなければ厨房は使用できないので。）

ただし、厨房を使用する場合は、業務等から 2 ～ 3 人を供出しなければならない。

受けてから対応する。

- 掲示板、道心門、国旗掲揚柱の設置、野外食堂のフェンスの取り外し、屋外用のホワイトボード、ボード用マーカーとイレーサー、コードドラム・・・の準備など。
- キャンプファイアの薪、工作用の竹や麻紐、食卓用のコンパネ・・。
- 研修備品（県連から）・・・プロジェクター *、書画カメラ、模擬キャンプファイアセット、掲揚国旗、三脚国旗、研修隊旗、賞状盆、記録用のカメラセット（これらは指導者養成委員会にて）
- スクリーン大、コードドラム、屋内用のホワイトボード、ボードマーカーとイレーサー・・・。

※プロジェクターは、EPSON の EBW420（黒）をしっかりと確認すること。
また、書画カメラは、同じく EPSON の白プロジェクターのケースに同梱されていますので、これも用意してください。
プロジェクターには、
・電源コード
・HDMI 接続コード
・USB コード
・D-Sub 接続コード
・レーザーポインター
が入っていることも確認してください、

- 奉仕員の選出
  - 奉仕員は、QM の下で、運営支援、フード（食材購入、調理、給仕等）に当たる。
  - 最近まで、指導者養成委員会がそれを担ってくれていたが、トレーニングチーム予備軍の養成機関という従来の位置づけに戻す。
  - 奉仕員は、地区コミッショナーの推薦により、各地区のウッドバッジ実修所修了者の中でトレーニングチーム員候補者、若しくは、今後トレーニングチーム員として活躍できる資質を有する方（実修所の修了は問わない）等の中から、**所長と QM の協議で、地区コミッショナーを通して依頼**する。*
  - コーススタッフからの推薦がある方についても、地区コミッショナーを通して、その意向を重視しなくてはならない。
  - 奉仕期間は、原則として全期間とするが、最低でも 2 日以上奉仕できること。宿泊、通いは問わない。
  - 奉仕人数は、地区の意向も考慮するが、コース予算で賄える範囲とする。

▶奉仕員へのWB実修所支援
トレーナーは、研修期間中、折りを見て奉仕員に対して、WB実修所への参加を奨励し、また、第1教程や第3教程への取り組み支援を行うとよい。

▶ WB 実修了奉仕員への TT への勧誘
WB実修所を修了している奉仕員については、この研修中にトレーニングチーム員の動きをよく見せて、次期トレーニングチーム員になろうという意欲も持てるよう、いろいろなチャンスを与える。

(3)（期間中）コーススタッフの生活と健康管理

所長は、コーススタッフの健康管理に留意しなくてはならない。また、スタッフ自身も健康には十分に留意する。

① スタッフの宿泊
- 所長、主任所員、セッション担当、QM、業務、指導者養成委員は、
  →宿舎泊。（部屋割りは QM が行う。所長、主任所員、セッション担当、QM 等の部屋は、即時対応を考え隣接させる。）
- 隊長、副長、上級班長、班担当キャプテンは、
  →参加者に隣接するキャンプサイトで、一緒に野営。
  テントは、基本的に各自で持参（共用可）。

② スタッフの食事
- 所長、主任所員、セッション担当、隊長、副長、上級班長 QM、業務、指導者養成委員は、
  ・・・・本部にて給食。
- 班担当キャプテンは、
  ・・・・担当班において班で作った食事を一緒に摂る。

▶隊指導者は野営とする
- 参加者同様に、野営地に隊本部を構え、そこに寝泊まりする。
- 隊会議、班長会議も原則そこで行う。

▶班担当（キャプテン）は野営とする
- 隊本部に宿泊テントを設置し、そこに寝泊まりする。

＊・・・が原則であるが、班担当は舎営としている（運用）

▶この他のコース運営スタッフ
- 原則舎営とするが、野営をでもかまわない。

③ 所員会議
- 「今日の話題」終了後に実施。
- その日の状況（改善を要する点への対応）、翌日の日程･セッションの確認。
- どんなに遅くても、0 時を超えないように。

④ 入浴
- できる限り所員会議を早く切り上げて、入浴の時間をとる。
- 入浴は、毎日とする。

⑤ 班担当所員の休憩時間の確保について
- 班担当所員は、ほぼ 1 日参加者と行動を共にしている。しかし、その年齢を考えると、1 日に数度（午前午後各 1 回程度）のまとまった休憩時

間を設けることが望ましい。

- 特に班担当が付かなくても良いセッションについては、努めて休憩時間をとるよう指導する。宿舎内に仮眠できる部屋を用意しても良いだろう（所長、主任所員、セッション担当の部屋を充てる等）
- 休憩する時間は、1 時間程度。（§7, §10、§13、§14 辺り）

(4)（期間中）所長の留意事項

①参加者に対して

㋐ 参加者は、それぞれの社会的経験、職業経験等から様々な価値観を持った「成人」であることを十分に認識し、接することが必要。また、参加者の多くは、指導者としては初心者なので、時には指示的な態度を取ることが必要なこともあることを理解しておく。

㋑ 基礎訓練課程を終えても、隊長としての役割を十分に果たしていくためには「スキルトレーニング」を修了し、1年後「ウッドバッジ実修所」への参加が必要であることを伝え、実修所の課題研究の内容や学習の概略を説明し、更なる研修への参加意欲が向上するように配慮することが必要。

②情報の提供と個人情報の取り扱いについて

研修所では、さまざまな情報を提供しているが、日本連盟や県連盟で検討中の未決定事項については、原則として情報提供をしないこと。仮に、提供しなければならない場合においては、何をどのように伝達するかについて精査し、あくまでも『検討中の未決定事項』として提供するとともに、そのことについて所員にも十分に周知徹底する。

また、研修所で知り得た参加者の個人情報については、慎重に取り扱う。

③所長・所員に求められるもの・心構え（態度）について

㋐ 所員は、参加者の学習を支援し、促進する役割を担っているということを常に意識し、確認しながら運営にあたることが大切。

㋑ 指導者の訓練に携わる指導要員は、**それにふさわしい品性**が必要とされ、指導要員として**常に参加者の模範**となり、**良い意味での威厳を保つ**ことが必要。

㋒ 飲酒は厳に慎む。このことを所長と所員は率先垂範して実践し、参加者への模範となること。

㋓ 喫煙については所定の場所以外では喫煙しないよう、またくわえタバコでの歩行は厳に慎む。

㋔ **飲酒や喫煙に関して守らない参加者や所員は退所**させる。

④所員への支援

㋐ 所員の各役務に対して、特に十分な支援･指導を行うこと。その人にとって研修所は実務研修の場であり、所長にとっては良き指導要員を養成するための個別支援の機会である。

㋑ 所員が作成するセッションの指導要項について、主任所員と共に十分な指導・支援をする。

⑤履修・修了認定について

各コースの履修・修了認定については所員の意見を参考にして、所長の責任で行う。

認定者には、基本型の場合、所長からスカウトコース履修証とギルウェルウォッグルが授与され、課程別研修修了時に、主任講師から当該課程の基礎訓練課程修了証が授与される。一括型の場合、所長からスカウトコース履修証、ギルウェルウォッグル、当該課程修了証が授与される。

訓練修了記章は課程の基礎訓練課程修了をもって着用できる。

⑥研修所全体の評価について

研修所の全体的な評価については、所長を中心に最後の夜の所員会議または、全日程が終了した直後に『管理と運営』『セッションの展開』『目的と目標の達成』等についての総合的な評価を行う。

▶日本連盟委員（参考）

- プログラム委員（中島）
- セーフ・フロム・ハーム・安全委員会（宮田）

隊指導者の位置づけと任務

◉ スカウトコースとボーイスカウトコースの違いとは

「スカウトコースはボーイスカウトコースとは違う」と言われている。つまり、ビーバーからローバーまでの既存の部門の他にもう１つの部門が存在するとでもいうのだろうか？

スカウトコースの所員用ハンドブックによると、目的は、

スカウトコースは、

○参加者がボーイスカウト指導者としての責務を果たすことができるように、スカウト教育に関する基本的な内容を習得することを目的とする。」

となっていて、

課程別研修は、

○参加者が当該部門の隊長としての責務を果たすことができるように、隊運営に関する基礎的な方法を習得することを目的とする。」

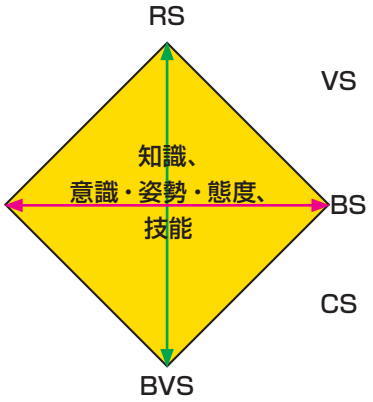
となっている。

つまり、スカウトコースは、各部門隊長として、横断的かつ縦断的にスカウト運動を理解するために必要となる共通事項である「知識」であり「意識」であり「姿勢」であり、「態度」、そして、スカウティングを明確に伝えられるだけの技能と体験。そしてビーバーからローバーまで派生していった原点であるボーイスカウト部門の基本的な活動方法・指導方法・運営方法のココロ（根底に流れる在り方）を理解してもらうことにある。

したがって、「スカウトコースはボーイスカウトコースとは違う」と言われている意味は、ボーイスカウト（ボーイ部門）のやり方によって研修は行われるが、具体的にボーイ隊の運営方法のイロハを学ぶのではなく、前述の知識・意識・姿勢・態度、そして技能を体験し、スカウティングの基本や各指導者の任務の違いを体験によって理解するコースであるということで、ボーイスカウト隊の方法そのものを否定しているわけでも何でも無い。そのため、次の学習到達目標が設定されている。

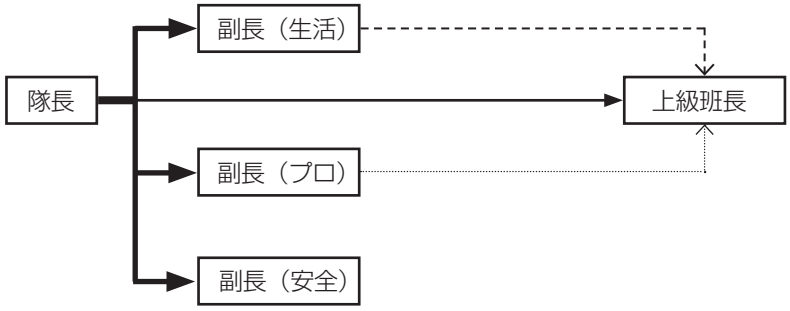
＜学習到達目標＞
1. **隊長の役割と責務を理解する。**
2. **スカウト活動の基本的な知識・技能について修得する。**
3. **スカウト活動の基本的な実施展開について理解する。**

※スカウトコースでは、年代特性、進歩制度、プログラムプロセスには触れていない。



◉ 隊長、副長、上級班長

まず、指揮系統を見てみよう



●スカウトコースにおける隊長の任務

（1）隊長の任務

①日連トレーニングチームの方針に基づいた隊運営、諸活動を行う
②隊の運営管理に責任を持つ
③隊のプログラムに責任を持つ
④スカウト教育法を用いる
⑤班担当所員を介して、参加者の自発活動を促し、支援する
⑥隊長自身がスカウターの模範を示す
⑦副長、上級班長を指導する
⑧所長やQM、他の所員と有効な連携を図る

この指揮系統については理解いただけるだろう。

それぞれの任務については、後で述べるが、ここで注目してもらいたいのが、副長から伸びる線に「破線」と「点線」があると言うことだ。つまり、それぞれ関わり方が異なるということ。変な言い方だが、２人の副長それぞれから、同時に別の任務を指示された場合、上級班長の身体は１つしかないし、またスカウトでもあるので、できる範囲とできるレベルは限られてしまう。そんなことにならないように、敢えて線の太さと黒の面積その比率によって指示する内容を限定していることを表してみた。ずいぶんと生活側に寄っていることが解るだろう。

また、隊指導者は「チーム」であるとボーイ隊リーダーハンドブックに書かれている。確かにその通りだ。しかし、スカウトコースでは、これら隊指導者や上班の位置づけと在り方について、その動きを見せて具体的に理解させていくことが重要となる。基本ボーイ隊と同じだが、そこには多少なりとも脚色がされている。

下記に役務について、それぞれの任務について述べていくが、その辺りのことが含まれていることを理解してもらいたい。

隊　長

- 隊長は、隊における全ての責任者である。そしてチームリーダーでもある。
- 任務については、右ヒントに掲載したのでそれを確認のこと。
- リーダーシップには３種類あると言われる。それは**自由放任型、民主主義型、独裁型**の３つである。
  - ○いい隊長は安楽椅子に座っている、という言葉があるが、**自由放任型**はこれである。スカウトたちが自発的に自分たち自身で活動を展開できるなら、見守っているだけでいい。
  - ○そこまでの状態ではなく、相談をしながら活動を決め、展開していくのが、ごく普通に行われている**民主主義型**である。
  - ○最後の**独裁型**は、緊急時にだけ発動されるようなリーダーシップである。

優れたリーダーは、これらを巧みに使い分けていると言われている。是非、隊長にはそれを伝えてもらいたい。

隊長としての存在感をどれだけ出せるか、が問われる。

副　長

- 隊長から分掌された任務を担う。
- スカウトコースでは、任務は「プログラム（教務）」と「生活･健康･安全」とする。

  また、３人の副長をおく場合は、「プログラム（教務）」と「生活」と「健康・安全」担当とする。
- 女性参加者がいる場合は、女性の隊指導者を置くこと。
- このコースで、参加者に見せ理解させたい指導者の動きは、ほぼ副長の動きなのである。そのため次の点を特に意識し動いてもらいたい。
  - ○副長の「意識」「姿勢」「態度」がそのまま参加指導者に伝わり、それを隊に持ち帰られてしまうことを十分に認識すること。
  - ○全てに対して、事前に用意周到な十分の準備をし、スカウト（参加者）の前では、ただただ当たり前のようにソツなくやり遂げること。
  - ○行動は機敏に、質問には的確に、判断は正確に（基本は隊長に判断を仰ぐが、TPO＝時（time）、所（place）、場合（occasion）により、副長判断は可。その場合アトで隊長に報告する）。決してダラダラしないでいつもスマートネスとスカウト精神を身にまとっていてもらいたい。

(2) 隊長に求められる知識・技能

①日本連盟の教育方針を受容し、それを参加者に説明し理解を得られること

②ボーイスカウト年代の青少年の特性について指導上必要な深い知識と理解を持っていること③「ちかい」と「おきて」についてトレーナーとして十分に説明できること

④「ちかい」と「おきて」について成人指導者として実践し、また参加者にかみ砕いて説明できること

⑤「行うことによって学ぶ」ことの教育的意義を理解し、機その会を効果的に提供できること

⑥パトロールシステムの教育的意義を理解していること

⑦チームシステムの教育的意義を理解していること

⑧スカウトの興味を基盤とした野外におけるゲーム、スカウト技能、地域社会への奉仕を中心としたプログラム活動の意味と意義について十分に説明でき、また、段階的かつ刺激的なプログラム活動を幅広く効果的に推進する能力を有すること

⑨ BS、VS を考査することができる知識、技能を有すること

⑩ より高度な野外活動技能を身に付けている

⑪ 副長、上班を指導できる知識、技能を有すること

●生活担当副長の主な役務

①集合時に上班から報告を受け、出欠を記録する。

②集合場所（セレモニー、集会、セッション全て）を把握し指示する。

③タイムキーパー

④生活指導、野営指導

⑤野営装備の貸与・管理

⑥点検の主担当

●プログラム（教務）担当副長の主な役務

①隊集会プログラムの準備

②野営・ハイキング・CF 等プログラム全般の準備と進行、導入（隊長の出番の調整）

③プログラムのタイムキーパー

④ソング・ゲームリーダー・YM

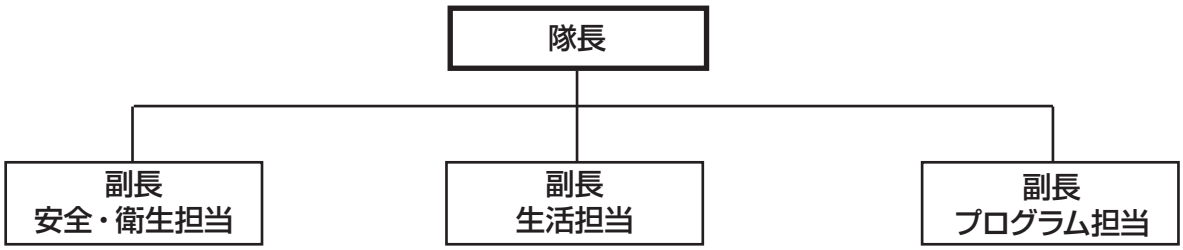
⑤朝礼、国旗掲揚

●健康・安全担当副長の主な役務

①コースの安全管理者を兼ねる

②野営の安全管理、参加者の健康管理

③事故・病気への対応



・健康調査と管理
・参加者の体調観察と怪我・病気への対応
・安全確認と指導
・危険箇所確認と除去
・点検の安全担当
・食材・調理場の衛生
・避難経路の確認
・天気予報の確認

・出欠、点呼、報告受け
・出欠の記録
・集合場所の確認と指示
・生活指導と注意
・点検の主担当
・入浴の指導
・食事の指導、食材の調達
・野営装備・資材の貸与・管理
・避難経路の確認
・天気予報の確認

・隊集会プログラムの準備と展開
・野営・ハイキング・CF 等プログラム全般の準備と進行、導入（隊長の出番の調整）
・（設営、撤営指導）
・（野営工作指導）
・（炊事指導）
・朝礼、国旗掲揚降納の指導
・プログラムのタイムキーパー
・ゲームリーダー
・ソングリーダー
・雨天対応
・キャンプファイアの指導
・事前訓練
・STA

副長補・隊付

• 副長補、隊付は置かないので省略。

上級班長

• 上班はあくまでもスカウトである。指導者ではないことを再確認する。
右のヒント欄に任務を載せたが、
上班は「訓練」は担わない。　（→訓練を受ける方）
• ほとんどが、各班のとりまとめと伝達・指示がその任務だ。
→①②③④
• 唯一⑤に「班長へ指導」とあるが、
○**指導とは**「人に寄り添って（気持ちに立って）導いていくこと」とある。つまり、**目標に向かわせ、それを自力で達成するよう導くこと、相手に十分に考えてもらう、考えながら実践をしてもらうこと**である。
決して「**教える**」のではない。
○教えるというのは「技術、知識、情報、フローやルールなど、いわば、基本や型、任務上最低限に知っておかなければならないものを伝え・理解させる＝身に付けさせる」こと。

この点を、所員全員がきちんと理解して置いてもらいたい。

ついでに

●上級班長の役割
（上級班長の具体的な仕事）
①班長会議の座長となる。
プログラムの決定権は班長会議にあるが、その座長としてのリーダーシップをとる。
②隊集会の集散をする
③班長の相談役になる。
相談された時は、相手の身になって話し相手になる。
④隊長からの指示を班長に伝える。
指示伝達の流れは
隊長、副長⇒上級班長⇒班長⇒班員
⑤必要により班長へ**技能指導**をする

本来の上班はスカウトであるため、尊敬される先輩として、スカウト技能を身につけて指導できるようになる。
上級班長に自信を付けさせ、班長との信頼度を向上させる、そして隊長と上級班長のコミュニケーションを図り、信頼関係を作り上げること。
そのために、班長訓練と同等、あるいはそれ以上に、上級班長訓練が必要なのだ。
これにより上級班長 としての自覚と自信がつき、集会への出席率も向上し、上級班長としての役務の遂行ができ、ベンチャースカウトとして本人の成長や自己の向上にもつながる。

班担当所員（キャプテン）

- 技能指導、生活支援を担当するのが、班担当所員である。
- 指導とは、上班のところにも書いたが、「人に寄り添って（気持ちにたって）導いていくこと」とある。
　つまり、**目標に向かわせ、それを自力で達成するよう導くこと、相手に十分に考えてもらう、考えながら実践をしてもらうこと**である。
　しかし、キャプテンにとってのその方法は上班とは異なり、**レクチャーであり、サポートであり、モチベーションアップ！**　となる。

- 班担当所員への指示はもちろんある。　それは隊長からだったり所長からだったり・・・。
　しかし、特に定められた指示系統はない。そのため、班担当は、「いつ」「どのタイミングで」「何に配慮して」「どのように」指導をするのか・・・。それは、指示系統に頼らず、班の状態・状況を即座に判断して自発的に行わなければならない。また、それに対しては、所長も隊指導者もその立場を尊重する（その場でも否定はしない。班担への指導は別の機会にする）こと。

- それは、班担当は、隊の指示系統をよく理解して、その領域には踏み込まず、それをじゃましない（→空気を読む）と言うこと。

- また、実際の隊では「班長」が行うべきことがある。例えば「たちかまど」を作るとしたら、そのキャンプの環境（場所、人数、季節、植生、物資の調達など）を観察して設計図を描いて、どんな材料が、どれだけ必要で、どのような技法と技能で、どのように組み立てていくか、どこにどんなポイントがあって、どんな器具が必要になる・・・などだが、このコースでは、それを考えさせ、ハウツーを指導をするのは、班担当＝キャプテンとなっている。

- 実際の班では、これは本来班長を含めたＧＢから伝えていく内容だが、スカウトコースにはそれだけの力量を持った参加者（班長）はいないという前提でコースを設計しているので、本来「班長」の持つ知識・スキルについては、「班担当」がそれを肩代わりするというものである。だからキャプテンなのである。

- つまり、スカウトコースでは「班長」は、二重人格者？のようなものである。１人目の人格は、コースで今回割り当てられた「班長」という任務を担う参加者だ。しかし班長に求められるスキルやノウハウに関しては、２人目の人格（影武者とでもいうかな）がででで～んと姿を現す。すなわち、それをキャプテンが担うってことだ。そのとき、１人目の班長は置き去りにしないで、１人目の班長としての役割（→例えば、役割分担の指示をするとか）を担ってもらうように配慮する。

- また、班サイトだけがキャプテンの活躍の場ではない。全てのセッション、室内でも屋外でも、ごはんのときも寝るときも・・・・いつも班員と一緒。だから二重人格者班長（の２人目）なのである。

- さて、そんな影の班長役のキャプテンがいるおかげで、安心して参加でき、かつ「ほぅ！」とか「おぅ！」とかの感嘆詞による感動と納得がそこに生まれるのである。
　班長との立ち位置の違いを、班担当同士で共通して理解すること。

- P.5 の４.（3）③にも重要なコトが書かれているので、それもしっかり理解してもらいたい。

この「班担当」の位置づけをしっかりとココロに焼き付けてもらいたい。

①班担当は全てに係わる

- 起床から消灯まで係わる。すべてのセッションにおいて、班における生活と学習の両面において支援を行う。
　これは、キャンプでの生活や野外における活動が、スカウト活動の基本的な知識や技能を体得するために、非常に効果のある機会となるからであり、設営や野外料理の指導、野営工作の日々の改善、撤営を含め、参加者とともに生活や活動を共有することにより信頼関係を築き、参加者の心と身体の両面に研修効果を与えることになる。
- 唯一、関わらないのはハイキングだけ（ということになっている）。

②班担当は、セッションを担当しない

- しかし、班担当は全てのセッションを正しく理解していなくはいけない。
- なぜなら、セッション担当者と各班担当者が違うことを言うことは参加者を混乱させる。ましてや、セッション担当者を否定するような発言があっては、班担当者と班員の信頼関係が壊れてしまう。
- セッション担当者と事前に十分な理解の摺り合わせが必要である。

→つまり、単独県連で開催することが望ましいということである。

- 班担当者は班に1名とする。班に複数の班担当者がいると班員との密接な信頼関係が築きにくいからである。

③参加者の個人の特性を伸ばそう

- 班担当所員は、担当する参加者の特性、経験、技能等を十分に理解し、それらを受容し支援を行うことが大切。
- これは、実際のスカウト活動でも行うことでしょう研修も同じである。

※そのために班担当がいるのである。

◉ スカウトコースにおける指示・伝達・報告の流れ

○通常の指示系統

（所長→）隊長 → 担当副長 → 上級班長 → 班長 → 班員

○集合時

（集合指示）（隊長） → （担当副長） → 上級班長 → 班

（報告） 班長 → 上級班長 → 生活担当副長 （→隊長）

（プログラム担当副長）

○班長会議

隊長 → 上級班長 → 班長

↓↑

副長 →

○班長訓練（上班訓練）

隊長 → （副長） → 班長

隊長 → （副長） → 上級班長

○隊活動において、まま発生する指示

（隊長） → （担当副長） → 上級班長 → （班長） → 班員

※この場合でも原則は班長を介すること。特にルールを破り注意を与える場合等は、本人と班長を呼び、必ず班長に問題点を伝え、班長から班員に問題点を問題点と認識させ、その対応と対処は班長に任せること。ラグビーのレフリーの警告のやり方と同じである。（スカウト精神とフェアプレーの精神を意識させる）

◉ コース展開中に、すべての所員（隊指導者・班担当所員、業務も含む）に守ってもらいたいこと

①セッション会場の近くで タムロして おシャベリをしない。
→おしゃべりをするなら、参加者から見えない所で。
声が届かないように離れて。
（決して、そんなことは起こらないだろが・・・）

②行動はテキパキと。移動は小走り・早足で。ダラダラと歩かない。

③参加者に対して所員自らが「範」を示す・・・という意識を持つ。
（「範」とは全ての行動・意識・姿勢・態度・捉え方・対応等）

④口元の「微笑み」を忘れない。

⑤最後まで「かっこいい」所員を演じきる。

●名札ケースの考え方について

指導者研修では、基本的に名札を着用させる。名札ケースにはいろいろな種類があろうが、「安全」配慮の上、適切に使用してもらいたい。

①野外で、実習等活動を伴う研修の場合

（ウッドバッジ研修所、野営法、野外活動研究会など）

→ソフト素材のボタン穴がついていて、胸ボタンにつけるタイプを使用。ボタンがない場合は安全ピンでとめる。（エンタ取扱品・品番 71535）

→ハードタイプは使用しない（転んだときのケガの予防措置）。

→ヒモで首から提げるタイプも使用しない（木の枝等にひっかかって首が締め付けられることの予防措置）。

②野外で、活動を伴わない「講義」主体の研修の場合

→①のソフトタイプは使用可。

→胸に安全ピンで取り付けるハードタイプは使用可。

③室内で、活動を伴う研修の場合

→ソフトタイプのボタン穴がついて、胸ボタンにつけるタイプを使用。ボタンがない場合は安全ピンでとめる。

→ハードタイプは使用しない。
ヒモで首から提げるタイプも使用しない。

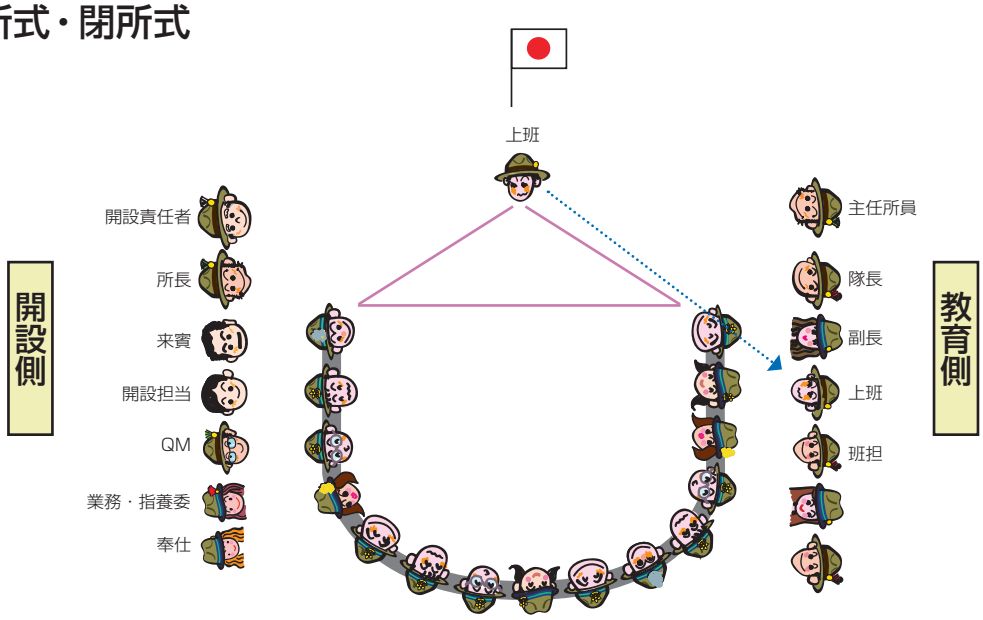
④室内で「講義」のみの研修の場合

→ソフトタイプはもちろん、ハードタイプ、 ヒモで首から提げるタイプも使用可。

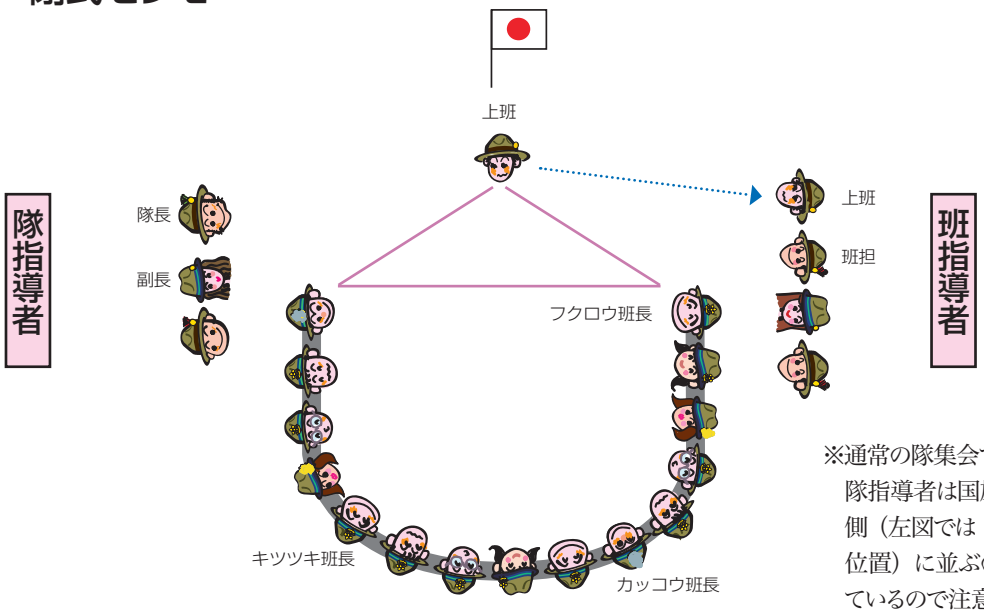
前日のスケジュール

時間	項　目	細　　目	担当	対　　応
15:00	一次集合	①先発スタッフ集合 ②所長、ＱＭ、指養チーフの打ち合わせ		
	所員準備	①所員ルームのセッティング（配置、備品） ②県連からの備品受け取り （国旗、研修隊旗、隊旗の竿･竿頭･三脚、プロジェクター、模擬ファイアセット、プリンター等） ③班旗＋棒、班任務章、 ④点検用品の準備 ⑤道心門の設置 ⑥隊掲示板の設置 ⑦視聴覚器材・教具器材の搬出 ⑧倉庫周辺の片付け ⑨その他	所長か主任	①談話室 ②指養から ③倉庫から ④ブルーシート３枚 ⑤設置位置確認し設置 ⑥隊本部に隣接 ⑦スクリーン、ホワイトボードマーカー、ドラム等 ⑧ ⑨
	QM 系準備	①業務ルームのセッティング（配置、備品） ②県連からの備品受け取り （お盆、資料等）→資料配付 ③調理・給食器材の準備 ④所員用資料配付ボックスの設置 ⑤プリンターの設置 ⑥所員の宿泊部屋割指示（前泊は全員舎営で） ⑦夕食（二次集合者除く）・懇親会の準備 ⑧施設との打ち合わせ（再確認。指養とともに） ⑨その他	QM	①業務と指養は基本的に同居 ②指養→ QM ③施設→ QM ④所員ルームに ⑤ ⑥食堂に貼付 ⑦ ⑧ 16:30 までに ⑨
	指養準備	①参加者受入準備 （参加者名簿、名札、参加費箱、領収証、他） ②施設との打ち合わせ（再確認。QM も） ③県連からの備品受け取り （お盆、修了証、等）（所員、QM へ引渡し） ④開設責任者の来場の確認連絡 ⑤写真撮影器材の準備 ⑥前泊者の受付と宿泊の指示と注意 ⑦その他（QM チームへの支援）		① ② ③所員、QM へ引渡し ④ ⑤ ⑥前泊対応は所長とＱＭと相談 ⑦夕食、懇親会等の支援をよろしくお願いします
18:30	夕食	一次集合スタッフの夕食		
19:00	二次集合	全スタッフの集合		
19:30	所員会議	①全体会議（所員、QMG、指養の担当者） ・全体概要確認 ・受付から開所式までの確認 ・所員生活と日課の確認 ・その他 ②それぞれの会議 所員：セッション内容の確認とＱＭとの連携 ＱＭ：コース運営、食材調達計画の確認 指養：受付、遅参舎対応、駐車場誘導の確認 ③その他	所長	①食堂でしましょうか
～ 18:00 ～ 22:00 ～ 21:30	その他	①夕食の用意 ②風呂の用意 ③チーム作りの会（懇親会）の用意	QM QM QM	※前泊者への配慮
21:30 ～ 22:30	チーム作りの会（懇親会）	①所長の挨拶、ＱＭの挨拶 ②会参加者への注意の周知（前泊者対応） ③終わりの時間の周知		
	その他	①スタッフそれぞれの準備		
～ 24:00	就寝			

入門・開所式・閉所式

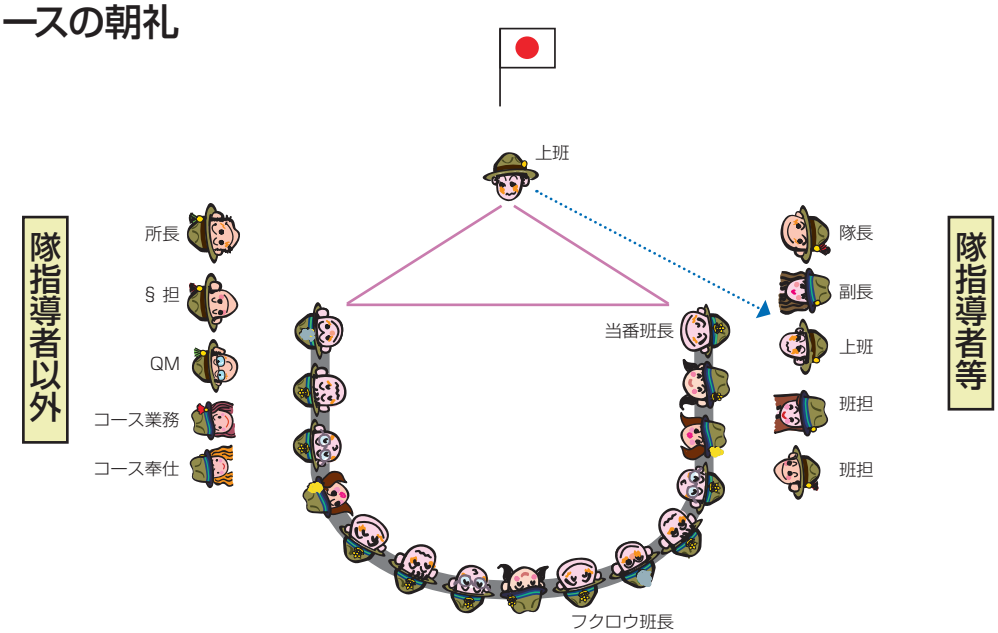


隊集会開式・閉式セレモニー



※通常の隊集会では、隊長以下隊指導者は国旗に向かって右側（左図では「班指導者」の位置）に並ぶのが通例となっているので注意。隊指導者に続いて隊付・上班の順に並ぶ。

スカウトコースの朝礼



受付～入門～開所式整列まで

11月1日(金)　8時40分

時間	項目	場　所	担当	内容	準備品
8:40	準備		開設 開設 全員	★開所式の準備事項・分担 ①スカウト広場の国旗準備の確認 ②自動車による参加者に対して、案内、指示 ③受付準備（　　） ④各自、服装を整える。	
8:45	受付	研修室外側	開設 開設 開設 開設 隊長 副長	①受付開始（準備が整えば５分前から可） ②参加者の名簿チェック、名札の貸与 ③提出物（参加費等）の確認 ④健康調査書、写真・指導者手帳の受取り ⑤記章・標章不備者には、翌朝までに正しくつけ直すよう指示する。 ⑥荷物1つの確認と、再パッキング指示。	・受付名簿 ・領収証 ・筆記用具 ・健康調査票
	指示	研修室外側	隊長 QM	①不参加者・遅参者の確認と報告（受付との連携） 隊長・所長の携帯が連絡先となっている。 ②連絡の無い遅参者に連絡、状況確認。	
9:00	集合・点呼 誘導	研修室前	上班 副長Ａ 副長Ｂ 副長Ｂ 開設	①上班は、時刻になったら（全員受付が修了したら）荷物を　持って集合させる。 ②担当所員は、組編成表によって参加者の名前を呼ぶ。 ③班横隊（縦隊）に並ばせる。 ④荷物を持たせ、点検場まで誘導する。 ⑤遅参者のために1名残る。	・仮組編成表
9:05	点検	ギドニーステージ	副長Ｂ 班担 班担 副長Ａ 班担 班担 班担 班担	①副長は、各班を点検場に横隊に並ばせ、気をつけをさせた後に、生活担当副長は、隊長に到着報告をする。 ②隊長は、点検の主旨をきちんと端的に説明する。（必要な物を持ってきているか、不必要な物はないか）　点検時間は5分間。 ③班担は点検表を配付し、自主点検させる。ひとつひとつ確認するが、バッグ等から出さなくても良い。班担は疑問・質問の相談にのる。常識外の物については、指導する。 ④忘れ物、足りない物については、提出用点検表に明記させる。 ⑤副長は健康状態を観察し、要留意者を確認する。 ⑥不要品は、各自で管理させる。 ⑦昼食を除き、食品の残りは出させる。 ⑧貴重品は、各自で管理させる。 ⑨点検表を回収し、携行品をパックに収納させる。ノートと筆記用具を出させる。	・ブルーシート（班担） ・点検表（班担） ・没収袋（副長） まとめた点検表を副長Ａへ提出
9:15	誘導	ギルウェル広場	隊長 隊長	①荷物を持って、道心門の前に誘導する。 ②所定の場所にＵ字形に整列させる。整列完了したら所長に報告する。（間隔を詰めて）「本研修所、参加希望者○○名、ただ今、到着しました。」 ③隊長・副長は、自席にもどる。	※ P.22「入門」隊形。 ※この時点では、まだ参加希望者。道心門をくぐって参加者となる。

●点検の対応

①点検用のブルーシートは、班担当が予め用意して敷いておく。
②点検が終わったら、すぐにたたみ，所定の場所に３枚まとめて置く。
③参加者は、パッキングに不慣れであろうことが十分に予想されるため、本来は、携行品については、全部出して確認することが基本ではあるが、持参の確認ができればチェックしても良いこことする。
　リードする隊長は「全ての携行品を実際に確認すること」と指示する。
④パックへの収納は、中途半端にせず、最後まできちんと行わせる。
　何事も，自分の責任に於いてキチンとやり遂げることが大切であることを、この時点から意識させる。
　全員がキチンとパッキングできるまで、移動しないで待つ。

●「入門」の実施

研修のスタートにあたり、参加者および運営に携わる所員全員が、「成人としての学習」への取り組みについて清新な心構えをもって臨むことを、所長を中心に一人ひとりが確認すること、また、スカウト運動に関わる成人として、運動に参加する青少年の成長に貢献することの決意を新たにすることをねらいとして「道心門」を設置し「入門」を行う。

時間	項目	場　所	担当	内容	準備品
9:16	入門の言葉	同上	所長	①研修の意義と入門の心構えについて話す。 （例）「良くいらっしゃいました。このWB研修所は、隊長として、また指導者として、必要な基本事項を体験学習によって体得し、隊活動がきちんと運営できる、スカウトにとって魅力ある指導者を養成するコースです。」 「そのため、スカウト教育の原理と方法について理解を深めると共に、『実行によって学ぶこと』、『班の一員となって活動すること』を体験し、スカウトの訓練と、隊運営の基本的方法を学ぶわけです。」 ②「従って、入所にあたって、研修の成果を最大限に上げるため、次の３つの実行を約束していただ　きます。」 ③「１つは、現在までの社会的地位、職業、年齢等は門の外に置いていき、等しく一参加者として人に対して、学習に対して主体的·積極的に関わること」 「２つ目は、従うことを学ぶこと」 「３つ目は、規律と秩序を守りつつも、自ら楽しむという意識と姿勢で積極的に行動し、ベストを尽くすこと」です。 ④「皆さん、この３つ、守ることのできる者は、これから一緒にこの門をくぐります。もし守ることのできない者はこの場からお帰りください。」 （確認の「間」）	
9:20	入門	道心門	所長 隊長 班担	①「それでは、皆さん、お約束いただけましたので、これから、この研修所の期間、このスカウティングという道を共にベストを尽くして真摯に取り組んでいくことを誓うための『道心門』という道の心の門をくぐります。」 「それでは、皆さん、先ほどの3つの実行に約束の確認と、各自の入所の決意を、再度心の中で確認しながら、道心門をくぐってください。くぐる際は脱帽し一礼をしてください。」 ②所長を先頭に、次に隊長が誘導して、班ごとに班担当が先頭で入門する。所員は最後尾につく。（携行品が重すぎて、体勢を崩す参加者の補助するため、QM、AQMは道心門で待機し、最後に入門する。） 　所長→隊長→1班担当→1班参加者→２班担当→2班参加者→３班担当→３班参加者・・・→副長→上班→所員→QM、AQM、QMF 　※開設担当指養委は、道心門はくぐらない。 ③隊長は、各組の荷物置き場（<u>パクストゥ２</u>）に誘導し、荷物を降ろさせる。 ④服装点検をし、正装となる。（スマートネス） 余計な装着物は外させる。	・道心門 ・副長が進行指示 ・荷物を置く位置を決めておく
9:28	整列	スカウト広場		①班担当は、パクストゥ2脇に縦列に整列させる。 ②開所式の集合位置＊で集合の合図。（U字形） ③所員・業務は所定の位置に（即座に）つく ④生活担当副長は誘導し、U字形に整列させる。 ⑤上班は、全員の服装を正させ、確認してから、所定の席に戻る（戻ったことが準備完了の合図）。	・合図の位置を予め決めておく

●注意事項（雨天対策）

①雨天の時は、レインスーツを着用して集合させる。パクストゥ２で点検をする。
②開所式でも、レインスーツで可。
③大きめの透明のビニール（ゴミ用）袋を雨天対策用に用意しておく。使い方は、特に指示しない。

開所式　プログラム

11月1日(金)　9時30分
場所　スカウト広場

時間	項目	司会の言葉	担当	内容	準備品
9:30	開式のことば	「ただ今より、WB研修所スカウトコース・茨城第３期の開所式を行います。」	司会	国旗準備 U字形に集合（杉浦）→服装の確認を行う	開所式プログラム
9:30	国旗儀礼	「国旗掲揚」 「国旗に正対」		①正副旗手２名は掲揚柱前へ進む。 ②同時に、所長に合わせて全員国旗に向き、注目する。 ③正手「準備よし」の合図をする。 ④所長、「揚げ！」の号令。掲揚手は国旗を揚げる。 ⑤号令と同時に、全員「敬礼」する。 ⑥旗が冠頭に着くと同時に「敬礼」を（所長→他の順に）おろす。 ⑦正手は、ロープを留める。 ⑧正副旗手は、後退して国旗を仰ぎ敬礼をして自席に戻る。	・国旗は柱につけておく。
9:32	国旗斉唱	（項目は言わない） 「元の位置」		・担当者は、旗手が自席に戻ったのを確認して、「国歌」を歌い始める。 ・先導者に合わせて、全員斉唱する。 ・歌い終わったら、全員元の位置を向く。	
9:33	開設責任者挨拶	「主催者あいさつ 八木・茨城県連盟理事長」	理事長	・主催者は最後に「郡司所長」を紹介する。	
9:37	所長挨拶	「所長挨拶」	所長		
9:40	所員・業務紹介	（所長が席に戻ったのを確認して） 「所員・業務・開設担当紹介」	所長 QM	①所員は指揮位置に進む。所長より紹介する。 ②紹介された人は、一歩前に出て、「氏名・所属団名と短い言葉で挨拶」をする。 ③挨拶が済めば元の位置に戻る。 ※業務は QM より紹介する。	所員、業務名簿
	来賓紹介	「来賓紹介」		来賓ではないが、事務局長が来ている場合は、紹介と一言挨拶をもらう。	
	来賓挨拶	「来賓挨拶」			
9:45	連盟歌斉唱	「連盟歌斉唱」		・担当者は、連盟歌を歌い出し、それに続いて全員で斉唱する。	指揮はしない
9:47	閉式のことば	「これをもちまして開所式を終わります」 「休め」	司会	・「気をつけ」「これをもちまして・・・・・」 ・全員「休め」の姿勢をとる。 ・指養委は、来賓、県連役員を写真撮影場所案内する。	
9:47	隊編成式の指示	「続きまして、隊編成式を行います。杉浦所員に続いて移動してください。	司会	・杉浦所員は、参加者等を順次案内する。 以降、隊編成プログラムを参照。	

・時間前に準備が整ったなら、時間を待たずに始める。
・司会は、テンポ良くかつ歯切れ良く、進行する。
・入所～開所式まで、時間が少ない。開所式が押してしまう可能性大。みんなで協力し、時間の短縮を。

隊・班の編制と役割分担

1. 隊編成と班編制

(1) ここから、研修所が始まる

※隊編成式は、開会式の直後（写真撮影の前）に行なう。

①隊編成の意義

- 班は、班独自の活動をすると同時に、より大きな集団である隊の一員として活動する。
- 各班が隊の優秀班になろうと競う反面、隊を良くするために、他の班と協力する。これは一見矛盾するようだが、矛盾ではない。オーケストラのの各演奏者がそれぞれ最高の演奏者になることは必要だ。しかし、オーケストラとして、よい音楽の創造のためには、指揮者に従い、競争者であるべき他の奏者とも協力することが必要となる。指揮者は各演奏者のよい点を引き出して立派なオーケストラに仕上げるのだ。隊長は、このオーケストラの指揮者と同じ役割を果たすのである。
- 隊集会では、各班に刺激を与え、競い合わせるが、その反面、同じ隊の隊員であるという仲間意識の高揚にも大きく役立つ。（← BS 隊長 HB-S61 第４版より）

②研修所での取り扱い

- この研修所では、特に「標準隊」を意識して隊を編成し「隊長」「副長」「上班」を置き、班には「班長」「次長」、そして各班員は役割分担をする。
- ６～８名を以て１班を組織する。本来の隊教育の要件である複数班における隊班競点により、参加者に「隊」と「班」そして、それぞれの役割を体得してもらう。
- この研修所では、あらゆる面で、スカウト精神を発揮した隊班競点を前面に出して運営する。これは短期間の研修所であるため、隊活動のエッセンスを凝縮していること、また、それにより「班制度」の醍醐味を体感してもらうことをねらっている。
- しかし、それは「班」としての機能がしっかりしていないことには成り立たない。

③スカウトの班・・・・とは

班活動は、スカウト活動の中心で、班長を中心に班員全員の強い仲間意識があってはじめて予期する成果があげられる。

(1) 班意識（班精神）

㋐ 隊長が班長を教育するのは、少年たちの仲間を「真のスカウトの班」に変えることが第一である。

㋑「真のスカウト班」とは、班の仲間とともにスカウト活動を楽しみ、相互に啓発し合い、助け合っていく仲間であって、みんなと一緒に班の善行で汗を流したとき、困難なことにぶつかりみんなでそれに打ち勝ったときの喜び、悲しみの涙にくれたとき・・・、等の豊富な経験が積みあげられてきて、はじめて班意識ができあがってくるのである。

㋒ こうした班意識をもつこと、この経験は、そのスカウトが将来よい社会人としての人格をつくるうえに、大きな役割りを果たす。

(2) 班集会

㋐ 班集会は、班員一人ひとりの進級計画等を、班の仲間だけで行う活動である。

㋑ 班集会では、野外活動の基本技術の練習や習得はもとより、時にはハイキングやキャンプ、特別な奉仕活動などいろいろなことに挑戦し、競

▶隊編成式について

- 隊編成式は行う。
- 隊編正式の時点では、班長は決まっていないが班がわかればよい

次ページに流れを示す。

▶班編成について

一番効果のある？班編成とは。

今までは、スカウティングに関してスキル、経歴も含めて事前リサーチをして「出来るだろう」と推測する人と、「これは本当にキャンプすらしたことがない人」を一つの班にすることで班としての凸凹をなくそうとしていた。

しかし、それによる弊害があった。出来る人は、一人でも全て行えるのである。だが、未経験の人は、下手すると3泊4日、野営生活においてはただ食べて寝るだけに終わってしまう人もいた。そのような人が本当に隊に帰ってスカウトにスカウティングの楽しさを伝えることができるだろうか？

行うことに努力し、挑戦し、その中で自分として何かを成し遂げたと感じる・・・そのことが次の自信となり、新たなることに進む礎となるのではないか。そのような班編成にしてもよいのではないか。

「経験」とは、実修所修了者、研修所修了者、BS経験者の初任者、BS未経験の初任者で、そのような班にすることで、班担当が支援しやすい体制を作ることができる。

つまり、野営が不得意な班には、野営が得意な班担当をつければいいし、理屈を問われることが多いであろう班には、的確な答えを出せる班担当をあてればよいということ。

つまり、支援する内容によってグループの構成を考える必要があるし、スカウトコースでは、それが有効となる。しかし、そこには支援するトレーナー、TTの資質が問われることは前述の通りである。

・・・という議論もあったが、茨城のWB研修所では、従来通り「平均化」した班編制とする。

い合う。

㋒ 班集会は、毎週または 2 週間に 1 回開催し、時間を厳守して実施すると効果的で、日時や集会の時間は班会議で決める。

(3) 班会議

㋐ 班のスカウト全員によって構成され、班の運営は全て班会議において、合議決定することを奨励する。班で行うハイキング、キャンプ、出し物、その他の野外活動、奉仕活動などを計画したり、班の運営に関することを決めたりする会議である。

㋑ 班会議は、定例及び随時に開かれ、班長が議長（座長）となる。時には班員が代って議長を行うこともあり、議長をつとめることはリーダーシップを身に付けるよい機会である。

㋒ 班長は、班会議の決定事項を隊長に報告する。また、班ハイキングなどの計画では隊長と保護者の同意をもらうようにする。

(4) 班長会議（グリーンバー会議）

㋐ 班長会議は、班長、上級班長をもって構成し、上級班長が、その議長（座長）となる。

㋑ 班長会議は、班長教育の一方法であるとともに、隊の名誉を保つこと、隊員の名誉を保つこと、隊活動のプログラムを立案準備すること、隊内運営に関することについて責任を有する。

㋒ 上級班長は、必要に応じて、次長を出席させることができる。
上級班長が欠員または不在の場合は、先任班長がこれに代わる。

㋓ 隊長または副長は、助言者としてこの会議に出席する。

(5) 班長訓練（グリーンバー訓練）

㋐ 班長会議の構成員で（次長を加えることもある）一つの班を作り、スカウト技能の訓練を行うこと。

㋑ 隊長がリーダーシップをとり、副長、副長補がそれを補佐する。

㋒ この訓練によって、各班長は班員を指導していく上でいろいろな資料や方法が得られる。

(6) 班ハイクと班キャンプ

班ハイクや班キャンプは、スカウトの指導性・協調性・自立性を養い、野外活動に対する自信を得る最良の機会である。

㋐ 班ハイクと班キャンプを実施するには、隊長より班長が十分に野外活動に対する能力を身に付けていることが認められ、さらに綿密な計画ができていることが確認され、諸注意事項が明確に理解できた上、許可される。

㋑ 班ハイクは、原則として副長か、副長補が同行し、コースもグリンバー訓練などで経験したことのあるコースに行くことを推奨する。

㋒ 班キャンプは、思い出に残るプログラムだけに、条件が整えば実施する。

(7) その他の班活動

㋐ 近隣地域奉仕、福祉施設訪問、団本部に対する奉仕、スカウトの日等、自発的に活動できることが望ましい。

㋑ 班としての特殊な訓練（アマチュア無線、救急法、応急架橋、なわ結び、ヨット、カヌー等）を班の実状に即して実施すればよい。

(8) 班名・班旗・班別章

① 班名：多くの場合は動物や鳥から名付けられている。（P.34 参照）

② 班旗は、班の活動とともにいつも一緒にあり、班長が持ち、班の仲間は、ユニフォームの右袖にそれぞれの班の班別章をつける。

(9) 班呼（パトロール・エール）

① 班は、班名の動物や鳥の鳴き声を「班呼」とする。

② 班呼は、班長が仲間を集めたり、隊集会のゲームの応援・勝利を告げるのに使う以外に、夜のゲームなどで班の仲間に連絡するための合図として使う。

③ 班呼は、その班固有のもので、隊の他の班と同じものは使えない。

(10) 班歌（パトロール・ソング）

① 班は、班精神を表す班のテーマソングを持つ。

●班員の役割分担

- いろいろと考えられるが、基本は「班精神」が養われ、発揮されている環境が整っていることだ。
- そして、班員それぞれに役割が割り当てられていること。

★ここで、注意してもらいたいのは、WB研修所のような野営での宿泊型の研修では、班員の役割り役割分担は「野営」が基準となってしまっている。それで良いと思っている所員が多いこと。しかし、それはあくまでも野営・キャンプという特別なプログラムに限っての役割分担なのである。

☆通常の「班」では、班活動のための、年間を通した役割が割り当てられているハズだ。実は、それについてはウッドバッジ研修所でもなされていないのが実情だ。この研修所では、パーマネントの班の役割分担にも目を向け、それを実施してもらう。

① 記録係（スクリプト）... 班活動の記録

② 会計係（ファイナンス）... 班活動で使った金銭管理

③ 備品係（クォーターマスター）... 班で使う備品・道具の管理

④ 安全係（セーフティ）..・活動中の安全をチェック

⑤ レクレーション係（チアマスター）.・・ソング・ゲームなどを担当

⑥ 環境係（リーブ・ノー・トレイス）..・活動や後片付けでの環境保護チェック

⑦ 食料係（ザ・フードスペシャリスト）... 食料の配給、保存

⑧ 燃料係..・マキや燃料の保管・管理

⑨ 炊事係・・・ごはん作り

⑩ 水係・・・水の補給、保管

※ 班員数に応じてこれらの係以外にも多くの役務分担が考えられ、班員の数によって、1 人が 2 つ以上の任務を兼ねることもあり得る。

班の機能とは

班には「人を分ける」という意味と「仕事を分ける」という意味がある。
この仕事を分けるということは、愉しい班活動のためでもあるが、ライバルとなる他の班を存在させることで、班の仲間たちは、他の班に負けないように、作戦を立て、任務と役割をそれぞれが分担し、その役割をきちんと果たすだけでなく、もっと良い結果にするべく、より高みを目指すことで、「班」の力を高めていく。
そこには自然とお互いを尊敬し、理解し合う気持ちが生まれてくる。

ボーイスカウトの活動は、この**班と班対抗（対班競点）を活用して、それぞれの班が切磋琢磨して、互いに幅広い知識と高い技能を獲得し、人間性を高め、One for All, All for One. の意識と精神を養って**いくものなのだ。

しかし、勘違いはしないでもらいたい。日本のスカウティングにおける「班」では、班員の１人ひとりは「班の一員」として班に貢献すべきであり、個人はあくまでも班のためにある・・・という考え方が大勢を占めている。
しかし、本来の班と個人の関係は、基本はあくまでも個人。「オレがオレが」と主張する個人が集まるから、結果として強い班が出来あがる。しかしそのために求められるのが、個人の完成度である。中途半端ではダメなのだ。与えられた任務・役割を最大限に発揮できるまでに、自分を高めていくのだ。

班の力を高めることは、班長の強いリーダーシップと、班の先輩から後輩への知識や技能の伝授、班の精神の伝承等によってなされていく。
班のスカウトは、それぞれの成長度合い、能力、得手不得手などによるが、班の中での任務・役務を与えられる。それらは班にとって大切なことばかりだ。それを責任を持って、いかに早く、確実かつ高度なレベルにもっていけるかどうかが求められる。そうなるには班の先輩と後輩の関係が大切になるのだ。
同年齢のスカウトだけだと、お互いに学び合うことよりも、ライバル意識の方が強くなったり、フラットな関係で指示系統が機能しない傾向がある。
異年齢にすることでそれが解消され、互いを尊敬する気持ちが生まれ、競争心も押さえられてくる。
また、できるスカウトができないスカウトを教えてあげるという関わりの中から、優しさやいたわる気持ちも生まれてくる。これらのことは子どもの情緒面の成長にも欠かせないことなのである。

この異年齢集団の班によって、仲間から学び合い、また仲間のために学び合う。年下のスカウトは年上のスカウトの活動を見ることによって、次に何ができるようになるのか、何をやるようになるのかという先見性を養うことができるようになる。
年上のスカウトは年下のスカウトに教えることによって、これまで獲得してきたことを，確認しつつさらに高めていくことができる。そう、「班」は縦の関係なのだ。

さらには、この仲間集団には**「ちかい」と「おきて」を実践する意識やスカウト精神を高めようとする気概、**そして、**自らの活動を立案し実行していく能力**を持たせることが重要だ。

このように「班」という組織はスカウト運動の大きな特色となっているのでである。
この意識や気概、能力を育成するためには、成人＝指導者の適切な関与が重要となる。この成人の関与の仕方は、スカウトの年齢に配慮して関わる必要がありる。班長・組長に対しては直接的に、班・組に対してはグループの支援・後援者として、個人に対しては良き相談相手・良き見守り手としてであり、P.O.R. をきちんと適用しながら、スカウトがスカウトを育てられるような環境を実現するのが指導者の大きな役割となる。

P.O.R とは？

スカウティングには「**P.O.R.** が大切だ」と言われている。

- **P：はポリシー。**スカウティングに当てはめれば「進歩制度」「班制教育」「自然の中での活動」そして、基本原則。
- **O：はオーガニゼーション。**つまり組織だ。ボーイ隊でいえば「班長会議」を最も重要視すること、それがあって隊が成り立つと言うことだ。
- **R：はルール。**指導者にあっては、まずは「日本連盟の教育方針を受容していること」（指導者養成の指針より▶就任時に就任時に備えていることを期待され知識・技能）である。

言葉は乱暴だが、指導者は、自分の掌の上でスカウトをP.O.R. に従って自由にさせること、それが大切なのである。初めから「制御」するのではない。掌から落ちそうになった時に、初めてこぼれ落ちないように修正すればいいのだ。まずはでっかい掌を持つこと、それがスカウティングにおける指導者の位置づけなのだ。

●隊編成式次第

※セレモニーを始める前に、所長から、隊・班編制の主旨、その機能を説明する。（司会は中島）

時刻	項目	司会者の言葉	担当	内容	準備品
	開式のことば		上班 司会	①Ｕ字形に集合をかける ②「気をつけ」 ③「只今から研修隊編成式を始めます」	・式次第
	隊長・副長の任命	「隊長・副長の任命」	司会 所長	①「名前を呼ばれたら、所長の前に進んでください」 「伊澤所員、熊谷所員、吉田所員、石井所員」４人は隊長の前に横隊に並ぶ。 ②互いに敬礼 ③「伊澤所員を隊長に任命します。」 ④「熊谷所員、吉田所員、石井所員を副長に任命します。」 ⑤所長は、隊長、副長を回れ右させ、参加者の方を向かせる。参加者に紹介し、激励の言葉をかける。 ⑥再度回れ右し、互いに敬礼をし、自席に戻る。	・隊指導者名簿 ・隊長、副長の挨拶があってもいい。
	上級班長の任命	「上級班長の任命」	副長 隊長	①「名前を呼ばれたら、隊長の前に進んでください」 「杉浦所員」 隊長と杉浦所員は対面する。 ②互いに敬礼 ③「杉浦所員を、上級班長に任命します。」 ④隊長は、上班を回れ右させ、参加者の方を向かせる。参加者に紹介し、激励の言葉をかける。 ⑤再度回れ右し、互いに敬礼をして、自席に戻る。	・隊指導者名簿 ・上班の挨拶があってもいい。
	隊旗の授与 隊の命名	「隊旗授与」	QM 所長 隊長 QM	①所長と隊長は向き合う。 ②QMは、隊旗を所長に渡し、元に位置まで下がる。 ③所長は「この隊を茨城第1隊と命名します」っつを宣言し、隊長に隊旗を渡す。 ④隊長は隊旗を受け取る。 ⑤互いに敬礼。 ⑥隊長は回れ右をして、参加者に向け、隊旗をかかげる。 「これから、4日間、この隊旗の下でベストを尽くしましょう。」 ⑦隊長は元に位置に戻り、石井副長が隊旗を受け取り、所定の場所に立てる。 ※この流れの動作は、コースのスマートネスに大きな影響を与えるので、心してきちんと行う。	・隊旗、三脚 ・三脚
	班編制	班編制式を行います	副長 隊長 副とょ WB研 修所 隊長	①今から名前を呼ばれた方は、一歩前に進んでください。」「○○さん、○○さん・・・・」 「以上○○班とします。」 「もとの位置へ。」一旦○○班を元に戻す。 「続いて、○○さん、○○さん・・・・」 「以上○○班とします。」 ※同様に全ての班を編制をする。 Ｕ字形のまま行う。	・班編制名簿
	班長、次長の任命	「班長、次長を任命します。名前を呼ばれたら隊長の前に整列してください。」 「班旗授与」	隊長 副長 副長 隊長 副長 隊長 副長 隊長	①隊長はＵ字形の定位置に立つ ②「名前を呼ばれた方は、隊長の前に、班毎に順に縦隊に進んでください。」 「○○班、○○　さん、○○さん」「○○班、○○さん、○○　さん」・・・・ ③「前の列の型は、一歩前へ」 互いに敬礼 ④「あなた方を班長に任命します。班長の任務を頑張ってください。」と激励し、班長章を渡す。 ⑤「前の列と後ろの列を入れ替えてください。」 班長と次長の立ち位置を入れ替える。 ⑥「あなた方を次長に任命します。班長に協力して頑張ってください。」と激励し、次長章を渡す。 ⑦「前の列と後ろの列を入れ替えてください。」 再び、次長と班長を入れ替える。 ⑧隊長は、熊谷副長から、班旗を受け取る。 「この班旗は、皆さんの班のシンボルです。苦しいときも楽しいときも、いつも班と共に持ち歩き、その班旗の下でベストを尽くし、班の結束を固めてください。 班旗を各班長に渡す。 ⑨敬礼して、自席にもどる。	・班編制名簿 ・班別章（名札に明記） ・班長章 ・次長章 ・班旗セット

◎担当の持ち物

司会（隊指導者名簿、式次第）　QM（国旗、研修隊旗、上班章）　**生活班長**（班編制名簿）

安全副長（当番班シンボル、当番班任務表）　**プロ副長**（班長章、次長章、班旗）

時刻	項目	司会者の言葉	担当	内容	準備品
	班担当の紹介	「班担当所員を紹介します。」	司会 所長 所長	①「実際の隊には存在しませんが、スカウトコースでは、班活動を支援する特別のスタッフがいます。その名も『キャプテン』です。 ②「名前を呼ばれた方は、隊長の前にお進みください」 「富田所員」「大月所員」「小峰所員」「若林所員」班担当は、隊長の前に横隊に並ぶ。 ③「あなた方を班担当所員（キャプテン）とします。」 ④所長は、班担当所員を、回れ右させ、参加者の方を向かせる。参加者に紹介し、激励の言葉をかける。 ⑤再度回れ右し、互いに敬礼をして、自席に戻る。	・班担の挨拶と担当班の発表があってもいい。
	当番班任命	「当番班を任命します」	副長 隊長 当番	①「フクロウ班は、隊長の前に横隊で整列」 ②「フクロウ班を、当番班に任命します。頑張ってください。」 と激励し、隊長は、当番班の任務を読み上げる。当番班の任務表とシンボルを渡す。 ③当番班長は「任務表」を復唱する。 ④「元の位置へ」と指示する。	当番班シンボル 当番班任務表
	隊長挨拶	「隊長挨拶」	隊長	「・・・・・・」（自分で考えよう。P.25 参照）	
	閉式のことば		司会	「気をつけ！」 「これをもちまして、研修隊隊編成式を終わります」 「休め！」 「続いて、記録写真の撮影をします。杉浦上班の指示に従って、移動してください。」	

【注意点】

※隊旗用の三脚は 2 つ必要。

①杉浦上班は、写真撮影の場所に引率する。記念撮影は、公式（真面目に）、と非公式（ポーズあり）の 2 枚を。

②写真撮影が終わったら「生活担当副長」の指示で、早速 §1 を開始する。

道心門　〈ドウシンモン〉

ウッドバッジ研修所や実修所に入所するときにくぐる、野営場の入口に作られた自然の樹木で作られた門のこと。入所に当たって、ここで入所者全員が所長の前でおごそかに入門の心構えを確認する。

1925 年（大正 14 年）日本で初めて指導者訓練所（後の実修所）が開設され、所長佐野常羽氏はこの道心門の前で入所者に対して次のようなちかいをさせた。

一、この門より中の野営地は、少年団の道を極め、共に修行する道場である。
一、この門をくぐるに当たっては、この門の外に、現在までの社会的地位、職業、年齢等をおいて、14 ～ 15 才の少年になること。
一、入所中はいっさい批判を行わず、素直にすべての行事、講話を受け入れ、もし批判のある場合は、実修が終わってから行うこと。
一、全期間を野営で行い、すべて自営自活すること。
以上のことを守る自信のあるものはこの門をくぐるように、もし自信がないものはこの場から帰ってもらいたい。

入所者は、この宣誓をして門をくぐり、広場で入所式を行った。

現在の研修所や実修所でも、この精神を踏襲して行っている。

さて、なぜ道心門は大きく広い門でなく、自然木を使った小さな狭い門なのであろうか。

それは、おそらく、茶道の茶室の躙 (にじ) り口になぞらえたのであろう。躙り口は高さ 65㎝幅 60㎝ほどだ。

これは、武士が露地で刀を預け、頭を低くして躙りこみ、全ての客が平等に「一期一会」の心で一碗の茶を喫したもので、これは千利休が、それまで別に身分の高下で貴人 (きにん) 口があったものを躙り口一つに改革したものと言われている。

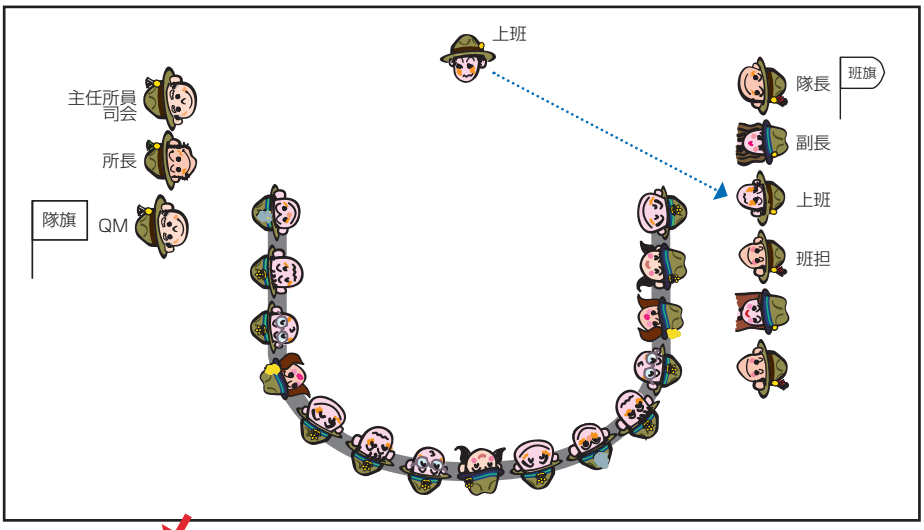
実修所･研修所の道心門は、それにちなんで、参加者だけがくぐるのではなく、所長を先頭に、所員も後に従ってくぐるものであることに意義があるのである。

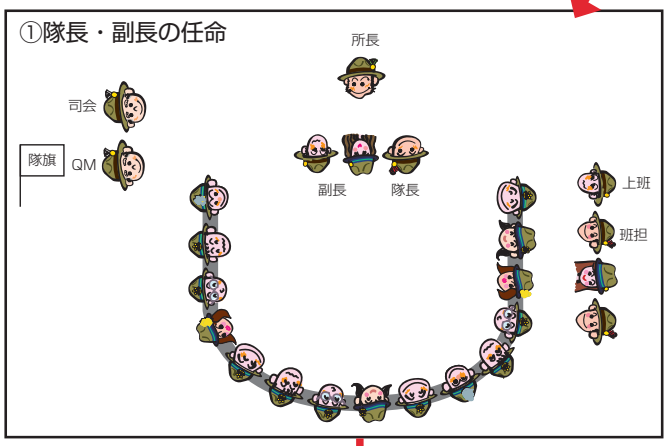
「道心」とは道徳心、仏法を信奉する心を表す言葉であると同時に、出家した人のことを言うが、13 ～ 15 歳で出家すると、「今道心」「青道心」と言ったそうだから、所長が道心門の前で「14 ～ 15 歳の少年に戻って････」と言ったのもそう言う含みがあったのかも知れない。（詳しくは巻末に記載）

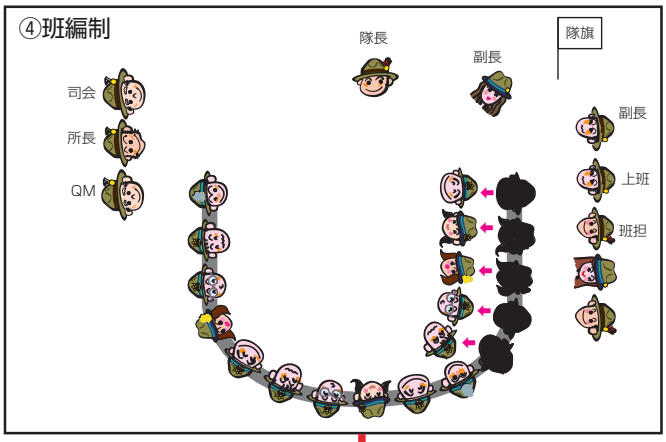
※現在もスカウトコースでは道心門をくぐる。その際の所長の言葉は、スカウトコースの位置づけに合わせた内容としてある。

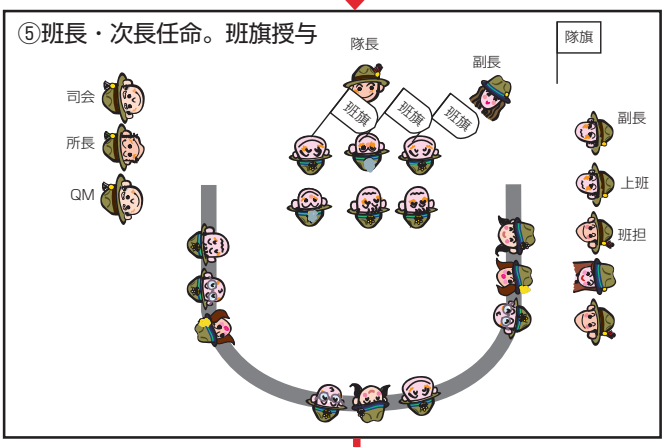
※当時は「入所者」、20 世紀になって「参加者」と称するようになった。

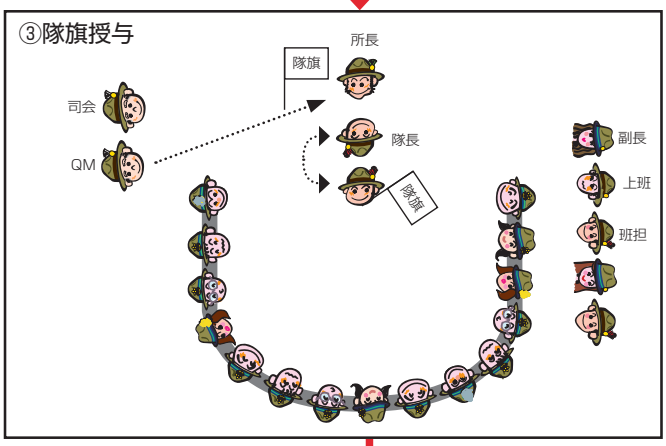
隊編成式の動き

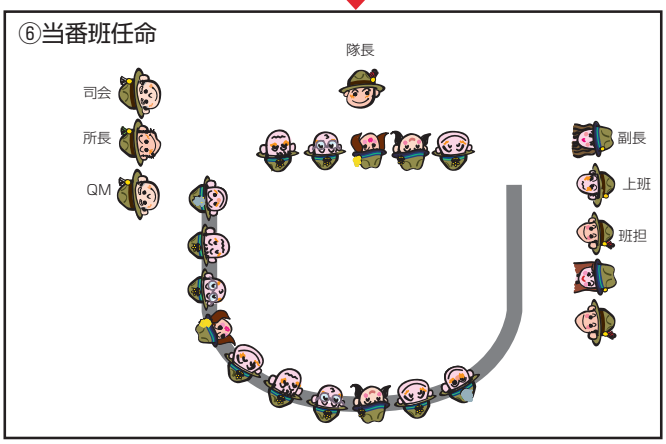












右列上へ

「WB研修所は何をするところか」の共有

2019年度の所員ハンドブックの§1「ウッドバッジ研修所について」の指導者のねらいの1.に「隊長の役割と責務、任務を果たす上で必要とされる知識、技能について具体的に知らせる」とあるが、それ以降の記述を見ても、具体的なものが示されていない。具体的な内容については、P.33の「**(1) この研修所があなたに求めていること**」に詳しく記してある。

が、その前に、この**「WB研修所の位置づけ（在り方）」つまり「ウッドバッジ研修所は何をするとろなのか」**について、参加者に理解を促してもらいたい。

この内容は、§1「ウッドバッジ研修所について」で話す内容であるが、所長だけでなく、全てのスタッフがこの**WB研修所の位置づけ（在り方）**をしっかりと理解していないと、WB研修所そのものの位置づけ・在り方がズレ（ブレ）てしまうことになる。つまり、しっかり組み立てられているこのコースの体系が機能しなくなってしまうことに繋がる。

まずは、下記を良く読んで、理解していただきたい。そして、これに従ってウッドバッジ研修所の運営（セッション展開、隊・班活動、生活、コミュニケーション等）を行ってもらいたい。

●ウッドバッジ研修所とは、

①スカウティングの流れの中で、少年期にあるスカウト達の成長を促す指導・支援の基本について学ぶところである。

②スカウト達が、自分達を見つめ、自分を考え、何をすれば良いのかを考えるプロセスの中で、指導者としては、彼らにどう接し、どう支援し、指導していけばいいのかを考えるところである。

③スカウトコースは、スカウティングの成り立ちを知り、主なプログラムの内容や運営の流れを実際に体験することによって、隊運営の方法を体感し、隊長としての役割と位置づけを理解していくところである。

④スカウティングは、スカウト達の成長を暖かく見守りながら、必要な支援を効果的に実践して行くための方法であり、野外活動を中心とする教育である。それを理解するところである。

したがって、活動は、ベストをつくすことで、楽しく興味深いものになり、結果、成就感・達成感が得られ、「愉しい」になっていくこと、を理解するところである

⑤スカウト年代に適する方法でおこなうことが、積極的な参加を促す不可欠の条件である。したがって、活動がスカウトの進歩・成長を促すように考慮されていることが大切であること、を理解するところである。

⑥隊運営の中心は隊長であり、隊活動の全責任は隊長にあること、を理解するところである。

⑦隊長は、多くの人の協力や支援によって、スカウトの指導のあたるように心がけること、隊指導者はチームであること、を理解するところである。

⑧コースにおける、隊指導者、所員、班担当所員（キャプテン）の「動き」「ことば」「姿勢」「態度」「対応」等から、「自分に何が足りないのか、自分にとって必要な要素は何か」に気づき、それを掴み取り、自分に取り込み、反映させること、を実践するところであり、また、研究テーマとして意識するところである。

⑨以上のことから、**指導者が指導者として身に付けるべき「姿勢」「意識」「態度」「気概」等を正しく理解し、身に付けるところである。セッションの内容は今後も学ぶ機会はあるが、これら精神は、最初の公式コースのここでしか身に付けられない。それだけのインパクトを持つ研修なのである。**

◎この研修所では、短期間に盛り沢山の内容が組み込まれているが、ゆとりをもって、参加者が全体の流れを掴んで持ち帰ってもらいたい。

●ウッドバッジビーズのルーツ

・ディニズルのウッドバッジビーズ

1888年、英国遠征隊が南アフリカのズールーランドに派遣されたとき、聡明でがっしりした体で身長6フィート7インチ(約198cm)もあるズールー族の王、ディニズル(Dinizulu)との間で争っていた。

ディニズルは長さ12フィート（約3.6m)のネックレスを身につけていたと言われている。南アフリカのイエローウッド（Yellow Wood）から作られた1,000個、あるいはそれ以上からなる木のビーズを、生革の紐に通していた。

ネックレスは王権や卓越した戦士達を識別するために授けられた。遠い昔、ナタール及びズールーランドに戦争の嵐が吹きまくったころ、スカウト運動の創始者になった男、当時のベーデン・パウェル大尉は、ディニズルのネックレスを手に入れた。

後年、マフェキングの包囲戦の際、B-Pは年老いたアフリカ人に会い、その男は首から革紐を外し、B-Pの手に渡して言った。「これを身に着けなさい。母が幸運のためにくれたものです。あなたに幸運を運んできますよ」と。

後年になって、B-Pはウッドバッジ訓練を制定した時、ディニズルのネックレスと老いたアフリカ人がくれた幸運の革紐を思い出した。2つの木のビーズをネックレスから取りだし、革紐を通して結び、今日有名なウッドバッジ＝首からかけ、隊長によって着用される唯一の熟達章、をつくったのである。

供給はすぐに底をつき、ギルウェルにあるブナ(beech)でレプリカが作られたのである。

●ギルウェル・スカーフの由来

1921年には、スカウティングにギルウェルを贈与してくれた人物を記念して、マクラーレン家のタータンによる最初のギルウェル・スカーフが登場した。しかし、この手のスカーフは大変高価になることが判り、現在の色のスカーフにタータン（ミニチュア）のパッチを縫い付けたものが採用された。

スカーフの裏の赤色は、スカウターの情熱で、それを内に秘めている・・・といわれている。

「研修生活のきまり」の共有

（1）この研修所があなたに求めていること●

①「ちかい」と「おきて」、「スカウト精神」の実践の場

- 私たちが行っているこのボーイスカウト運動の基本的な精神と生活の規範を示したものが、『Scouting for Boys』に記されている「ちかい」と「おきて」です。（それを理解するための事前課題２）
- 「ちかい」の理解と「おきて」の実践は、確固たる意志と、それが実戦できる環境を作らないと、なかなかできるものではない。
- このWB研修所は、全期間に亘って、その環境を提供する。
- であるから、参加者は、名誉にかけて「ちかい」の理解と「おきて」の実践にベストを尽くしてもらう。
- それを達成したアカツキには、参加者は「スカウト精神」を身に付けているにちがいない。

※スカウティング精神＝スカウティング・スピリッツとは何か？

それは端的に言えば「ちかい」と「おきて」に言い表されている。そして、そこから派生する「スカウトとして持つべき」ココロ（意識であり、姿勢であり、態度、思いやり等）である。自分の成長の責任は自分自身にあることを認識し、それらを自分に課して実行し、繰り返し、自分の資質として定着させること。それを以て、自分を取り巻く社会の、いろいろな場面で発揮できること。それがスカウトの名誉なのである。

②楽しく・魅力あり・ためになるスカウティングを実体験する場

- スカウティングは「自己教育システム」と言われている。
- 自分で自分を成長させる・・・、それはプログラムという名前で提供される多種多様なゲームによって行われる。スカウトたちは、それをより楽しむために、また、他の班との競争に勝つために、知識を仕入れたり、練習をしたり、作戦を練ったり、やり方を研究をしたりして個人→班で準備をする。後輩スカウトは先輩から教わり、さらに先輩スカウトは後輩を教えることで、更に自分を高め・深め・広げていく。→積極的に参加するから「楽しい」
- これらの原動力は、スカウト好奇心や興味をくすぐる仕組みの様々なゲーム（活動）と、「面白い」「負けない」「すぐにやりたい」といったゲームとの関わりそのものにある。ゲーム自体が楽しくなかったり、競う班がなかったり、ライバルがいなかった‥‥としたら、この原動力は発生しようがない。**→ゲームやそれを行える環境、それへの取り組みが「魅力的」**
- この「自己教育システム」は、スカウトが新たに修得したり、すでに習得し身に付けているものを活用して、知識や技能や興味を更に深めたり、自分の資質を更に発達させたりする‥‥というもの。

→それを体感する

③「Learning by Doing」（実践躬行）の体験の場、「意識」「姿勢」「態度」の獲得の場

※「清規三事」＝実践躬行、精究教理、道心堅固

- WB研修所は、「スカウティングの基本」を知ることを目的とするコースである。
- 「聞くことは忘れること、見ることは覚えること、やってみることは理解すること」という言葉がある。

これはスカウトコースに限らず、すべての研修やスカウト活動で適用されなくてはならない、スカウティングで重要な「大原則」であろう。「実践躬行・精究教理」「Learning by Doing」も同様

オリエンテーションノートの解説を含みます。
「●」印は §１で話す概要。

▶スカウトの「ちかい」

私は名誉にかけて次の三条の実行をちかいます

一、神（仏）と国とに誠を尽くしおきてを守ります

一、いつも他の人々をたすけます

一、からだを強くし心をすこやかに徳を養います

▶スカウトの「おきて」

1　スカウトは誠実である
2　スカウトは友情にあつい
3　スカウトは礼儀正しい
4　スカウトは親切である
5　スカウトは快活である
6　スカウトは質素である
7　スカウトは勇敢である
8　スカウトは感謝の心をもつ

▶スカウティングにおいて、スカウト達が「楽しい」と感じられる状況は、

「子ども達に、適切な投げかけをして、好奇心を芽生えさせ、適切なプログラムに沿ってそれらを

① 仲間とともに展開し、
② 発展させ、深めていって、
③ それを自信に繋げていく

というプロセスを、スカウトの内面から湧く原動力によって取り組ませていくこと。」です。このプロセスこそが、このスカウティングの最大の魅力なのです。

また、このプロセスの①の前には、必ず「**基本をしっかりと身に付ける**」ということが行われていなければならない・・・と言われている。

である。

- そもそもスカウトコースは、「何も知らない者」に対して、スカウティングの本来のやり方・在り方を理解してもらうところである・・・と考えたときに、この「聞くことは忘れること、（聞いて）見ることは覚えること、(聞いて見て）やってみることは理解すること」をしっかり組み込まない（実現しない）と、このコースが意図しているものからどんどん離れていってしまう。
- そのために、いつでもどこでも「聞ける」存在の班担当がいるのである。

④自分の目標達成のための、実践の場

- 事前研修で設定した「自己研修目標」を達成する場である。
- 次から次へと、いろいろなことが溢れてきて、つい疎かになりそうだが、「自己研修目標」を達成するためにも、積極的に関わっていこう。

（2）それをどのように実現していくか ●

- 「指導者」とは、スカウトをこの運動が示している方向に導く人である。ということは、この運動についての十分な知識と、スカウティングを実行していくための十分にスキルと経験を有することが求められる。
- その本格的な１歩を踏み出したわけである。
- しかし、まだまだ知らないし、スキルも無いからここに来ているのである。
- ここには、県連盟のトレーニングチームのメンバーがいる。彼らは、この運動についての十分な知識と、スカウティングを実行していくための十分にスキルと経験を有している。
- だったら、彼らの真似をしてみよう。盗んでみよう。「どうして、こうするのだろう？」と疑問を持ちながら。

（3）班のメンバー
は、オリエンテーションで
（4）スタッフ紹介
は、§１で

（5）班について

①どうして班をつくるのか ●

・小グループ（異年齢）による活動

→仲間から学び合い、また仲間のために学び合う。

・人を分ける、仕事を分ける

→他の班に負けないように、作戦を立て、任務と役割をそれぞれが分担し、その役割をきちんと果たすだけでなく、もっと良い結果にするべく、それぞれがより高みを目指すことで、「班」の力を高めていく。そこには自ずとお互いを尊敬し、理解し合う気持ちが生まれてる。

・班のビルドアップ（必要要件は？）

→班のスカウトは、それぞれの成長度合い、能力、得手不得手などによるが、班の中での任務・役務を与えられる。それらは対班競点で他の班に勝つために、班をより高めるために大切なことばかりだ。そのため、それを責任を持って、いかに早く、確実かつ高度なレベルにもって行くように努力することが求められる

→この班という仲間集団には「ちかい」と「おきて」を実践する意識やスカウト精神を高めようとする気概、そして、自らの活動を立案し実行していく能力を持つことが重要である。

→この意識や気概、能力を育成するためには、成人＝指導者の適切な関与が重要となる。この成人の関与の仕方は、スカウトの年齢に配慮して関わる必要がある。班長・組長に対しては直接的に、班・組に対してはグループの支援・後援者として、個人に対しては良き相談相手・良き見守り手としてであり、先に述べたようにP.O.R. をきちんと適用しながら、スカウトがスカウトを育てられるような環境を実現するのが指導者の大きな役目なのだ。

▶班名

●日本の指導者研修における班名は伝統的に鳥名である

ふかきやま →

「**ふ**くろう」

「**か**っこう」

「**き**つつき」

「**やま**ばと」

●班はパーマネントである。

これらを体感してもらうために班をつくる。

②班名・班呼について

・班で活動するので班名を決める（班名は指定する）。
・班旗を貸与する（今後、茨城の WB 研修所で継続して使用するので大切に扱うこと）。
・班呼 = 班名にふさわしい「鳴き声（呼び声）」を決める。

③役務の分担

・班員の任務は、任務分担表の通り。班メンバーで相談し、全員で分担する（兼務あり）。研修中の任務の交替は行わない。
・任務分担表に記入し、1 部は班掲示板に、1 部は本日夕食までに当番班長がとりまとめ、上級班長に提出する。（任務分担用紙は 2 枚配付）

④当番班とその任務

・ 実際の隊活動にはないが、任務遂行の重要さと、運営上役割の一部を順次参加者に分担してもらう主旨から、この研修所では「当番班」を設ける。
・当番班は輪番（ふくろう班・カッコウ班・キツツキ班・やまばと班の順番）とする。交替は 4 班編制のときは、夜の課業終了時（3 班編制のときは午前の課業の終了時）とする。
・当番班の任務は任務表に記載されている。班メンバー全員が協力し、研修の成果があがるように他の班の模範となるよう率先して行動する。

④班報告書（朝の点検時に提出）

・班報告書は所定の用紙に毎朝記入の上、朝の点検前に当番班長がとりまとめ、上級班長に提出。

⑤班長会議（定例）

・夜の課業終了後に、隊指導者及び上級班長と班長で行う。

⑥今日の話題（研修所独自のもの）

・一日の課業終了時に、班担当所員（キャプテン）と班メンバーにより班サイト等で行う。

（6）野外活動・キャンプ生活について

①野外活動の意義

・スカウトに野外活動を体験させるには、指導者自身が野外活動を十分に体得している必要がある。

②野営装備の貸与・返納

・班の野営用具一式を貸与する。責任をもって大切に使用すること。
・野営用具を受領する際には、配給物の過不足、不良品の確認を必ず行い、該当があればその場で担当所員に申告し対応してもらうこと。それ以降の対応はしない。
・貸与品の使用にあたっては、破損をしないよう十分に気をつける。
・返納時は、受領時と同じ状態で返納すること。異なる状態の場合は、担当所員に報告する。

③班サイトについて

・班サイトは、所定の範囲とする。
・立木の利用は極力避ける。もし利用する場合は、立木の保護に努める。（ここは基本をまなぶところであるため。今後、野営法等で立木の利用について学ばせる。）
・夜間就寝時、または課業等でサイトを離れる時は、安全管理の面から、工具・炊具・食料の管理をきちんとし（→収納する）、テントは扉を閉める。（野犬、カラスの被害に遭う可能性がある。）
・本日の設営は 14:00 頃である。

④炊事および工作について

・炊事、調理、食事は野営工作物を作成し、班サイトにて行う。
・調理の熱源は「焚き火」である。燃料は「薪」とする。（火気に

役務の分担には 2 つある
1 つ目は、通常の「班」としての任務分担。
2 つ目は、キャンプにおける役割の分担。

→今回は班長の指示で班内で決める。そのための用紙（任務分担表、役割分担表）を配付。

●当番班の任務

・起床・消灯の合図
・国旗掲揚の準備と掲揚及び降納
・朝礼の運営
・報告書及び提出物の取りまとめ
・時間の厳守（5分前集合の励行）
・セッション中の隊旗の管理
・セッション開始、終了の挨拶
・共用食材の管理と保管
・その他指示のあった事項

当番班の任務のうち
○隊旗の管理は、朝礼前に隊から受け取り、今日の話題前に隊に返す。
○朝礼の運営は、進行表を渡す。朝の歌は事前に各班に通達する。
○報告書・提出物は、上班を経由し担当所員に提出する
○その他指示のあった事項は・・・

▶当番班の交替は、隊長の立ち会いのもと、上班の進行で行う。

▶班報告書が全て提出されて、それを確認した後に点検を開始する。

▶班長会議は、連絡事項の他、問題となる事項とその解決をする。

▶今日の話題は、研修所独自のものである。いろいろな話になったとしても、それを判断したり解決する場所ではない。そこで上がったものは、所員会議に持ち帰り、そこで解決すること。

貸与野営装備品の事前整備について
○事前に、リストに従い「種類」「数量」「状態」を目視確認し、きちんと実際に使えるものを整える。「だろう」整備はしない。
⇒ペグ類、ポール類の数と組み合わせ、取っ手の状態、カビの有無、刃の状態などをチェックする。
○返納時の相違確認用に「名札」を必ず用意し、貸与時との具体的な差異について記入させる。

▶持ち出すとき、パッキングを開くときは、その状態をしっかりと記憶・記録し、その状態にして返却すること。

▶班サイトは、上班の進行で班長の協議によって決めさせる。

▶カセットコンロは、荒天の場合に配給する。

は厳重に注意。防火用水を必ず用意。直火は不可とする。）

・給排水は既設の水場（乙戸の泉）のみを使用する。

・サイトでは、常に水缶をいっぱいに満たしておく。

・野営工作の作成についても、すべて班サイトで行う。また、夜間の作業は行わない。

▶班担当が、班サイトで具体的に示すと良い。

・炊具・工具の取り扱いについては十分に注意し、各自が安全管理に努めること。

⑤宿泊について

・班ごとに班サイトでの野営とする。

・各班の宿営地（サイト）は、別途定める。

⑥食事

・食事は、班ごとにサイトで自炊し摂る。

・食材の配給に関しては、セッション担当者より指示がある。

▶配給は、そのタイミングで必要な参加者分を一括して渡す。それを各班の配給係の協議で分配し持ち帰る。

・食事は、次の課業の時間までに後片づけまでを終える。

⑦洗面について

・洗面所を班サイトに設け、洗面はそこで行う。既設の設備は使用しない。

⑧ごみの処理

・炊事で出たゴミは分別（生ゴミ、燃やせるゴミ、燃やせないゴミ、資源ゴミ）の上、各自で分担して持ち帰る。極力ゴミの出ない炊事に心がける。

ただし、「生ごみ」だけは毎日回収する。

▶そうは言いながらも、最終日には分別して回収する。

▶生ゴミ用の蓋付ポリバケツを、隊本部サイトに用意する。

・よく水切りをして指定のごみ袋に入れ、朝 7:30 ～ 7:50 の間に、隊本部のゴミバケツに収める。

⑨飲用水について

・施設内の水道は上水なので、飲用可。野外水道も上水だが、念のため沸かしてから飲用するように。

・お茶等は、セッション会場にも用意する。休憩時間には自由に飲んでよい。

・セッション中における水分補給に関しては、原則不可。やむを得ず飲む場合は、セッションの妨げとならないように。

▶セッションで水分補給が必要な場合は、生活担当副長の指示、若しくはセッション担当の指示による。

（7）セッションについて

①受講時の立場

・基本的には「指導者」の立場での研修である。

・セッションの中では「スカウト」の立場になっての実習もある。この場合はスカウトの目線での研修となるが、指導者の目線は外さない。

②ノートについて

・このノートが、今後みなさんの指導者としての虎の巻になる。何でもどんどん書き込む。

▶最終夜にノートを提出と確認をする

・ノートは、いつも（朝礼のときも）持参し、必要なことは記載する。

③セッションの場所

・原則として「パクスヒル（研修棟）」と「パクストゥ（野外食堂）1,2」とする。

・セッション場所と集合時間については、原則として前のセッション終了時に伝える。

▶伝えるのは、生活担当副長。

④座席について

・班メンバーの着座位置は、毎日ローテーションする。

⑤教材教具について

・班作業で使用する教材教具は、貸与する。

・セッション時には、いつも携行する。(指示があった場合は除く)

（8）生活全般について

①基本日課　（右表）

②生活目標・野営目標

・毎日「生活目標」「野営目標」を定める。それは毎朝、隊掲示板にて示す。

③STA（閑時作業）　Spare Time Activity

・毎日忙しい中にも気持ちを落ち着ける時間をもち、その時間を利用して指示された課題・作業に取り組む。

・テーマは隊掲示板にて示す。

④笛の合図

・この研修所では、笛の合図を使用する。

・これも掲示板に示すが、この合図は基本的なもので、隊のものとは異なる場合がある。

⑤場内のきまり

・「場内のきまり」はスカウトの「おきて」である。他からの強制でなく自ら「きまり」を守る。

⑥掲示板

・隊掲示板を設けて、次に掲げる事項等の指示する。

　→生活目標、野営目標、ＳＴＡ、笛の合図、場内のきまり他

・また、班毎に班サイトに班掲示板を工夫して作成し、班メンバーの共通理解を図る。

⑦敬礼

・敬礼は節度をもって行い、乱用をさける。

・使用する場合は「三指」とする。

⑧服装

・開閉所式、点検、朝礼、および指示のあった場合は正装（制服・制帽）とする。

・それ以外は、研修にふさわしい服装でよいものとする。

・ネッカチーフおよび名札は常に着用する。

・セッションによっては、服装の指定・指示がある。

⑨国旗の掲揚と降納

・掲揚と降納は、定められた方法により当番班が行う。

・国旗は、プログラム担当副長から接受し、また返納する。

・朝礼時の国旗掲揚をスマートに行うため、班サイト内に掲揚柱を設置し、練習用旗を用いて練習してもよい。

⑩健康と安全

・隊指導者としての意識で、自ら健康を保ち、安全に留意すること。

・体の具合が悪くなった場合は、最寄りの所員に申し出る。

・班に安全管理者、健康管理者、衛生管理者（併任可）をおくこと。

・トイレは我慢せず、セッション担当の所員もしくは班担当所員に申し出て行ってよい。

⑪点検と講評

・点検は健康と規律の維持、安全を確認するために行う。

・朝の点検と夜の点検の意味と違いを理解する。

・朝の点検は午前８時厳守。点検の準備が整ったら、班長は待機している隊指導者を迎えに行き、順次点検を受ける。

・全班の点検が終了した後、所定の場所で点検の講評を行う。

⑫朝礼

・朝礼は、当番班により運営される。内容については、上班と相談して決め、事前にプログラム担当副長の承認を得ること。また「朝の歌」は事前に各班に伝達する。

⑬スカウツオゥン

・スカウツオウンは、参加者自らの信仰心を高め、ちかいとおきての実践をより深めることを促進するために行う。

▶基本日課

6:00	起床・洗面・清掃・朝食
8:00 ～ 8:15	点検・点検講評
8:20 ～ 8:50	朝礼、スカウツオウン、モーニングゲーム
9:00 ～ 20:30	課　業
(17:00)	国旗降納
20:30 ～ 21:30	スカウツオウン、今日の話題、班長会議
21:30 ～ 22:00	入　浴
22:00	消　灯

(日課およびセッション指定時刻を守る。各始業の５分前には集合を完了すること。)

▶場内の決まり

1. 指定された区域より出ません。
2. 喫煙は指定された時に、指定された場所でのみとします。4. 生水は飲みません。
5. 樹木をいたわります。
6. 借用物は大切に扱います。
7. 火の始末を完全にします。

▶隊掲示板の管理は、生活担当副長。

制服と正装について

○「制服」とは服の名称を指し、「正装」とは制服の着用の状態（装い）を指す。
○服装：「制服」・・・は誤り。持ち物：「制服」はあり。
○服装：「正装」はあり。服装：「制服着用」はあり。

▶班担当所員は参加者同様の服装でOK。セッション担当は担当セッションは正装。隊指導者も、隊・班活動時は正装とする。

▶練習用旗は、フラッグボックスに入れて渡す。旗に対する意識を涵養させる。

▶女性参加者への対応（女性スタッフを置く）を忘れずに。

★ボーイスカウト隊での実施方法で行う。

▶「班報告書」の項を参照。

▶点検の項（P.64）を参照。

★朝礼は所員・参加者全員で行う。

▶各隊に帰ったときに使える内容で例示的に実施する。

・また、隊長として助言・援助していくことの必要性を確認するためにも、体験によって学ぶ。

⑭配給について

・食材及び必要物資の配給については、別途指示する。

▶「食事」の項を参照。

⑮施設の使用と清掃について

・トイレ・風呂は、清潔に、静かに、効率よく使用する。
・パクスヒルでは、上履きを着用する。
・共有場所（研修室、野外食堂、トイレ、浴室など）の清掃は、自主運営とする。
※当番班班長を中心に各班長で調整。

▶当番班班長を中心に各班長で調整。

⑯入浴について

・入浴は、毎日の 21:30 ～ 22:00（今日の話題終了後）とする。時間厳守。（本館は施錠される）。
・男性、女性の浴場は、指示のあった場所を使用する。
・入浴時間配分は、当番班長を中心に各班長で調整。

⑰喫煙・飲酒について

・セッション中は禁煙とする。
・施設内は「禁煙」である。喫煙は指定された場所に限る。ただし、スモーキングミーティング（喫煙所での話し合い）は不可とする。
・班サイトは全面禁煙とする。
・研修期間中の飲酒は厳禁とする。どうしてか・・・・よく考えよう。

▶喫煙所はサイト及びセッション場所　の近くに設ける。

▶飲酒が発覚したら、いかなる理由であろうと退所いただく。もちろん修了認定はあり得ないし、参加費の返還もない。

（9）その他

①危急時の対応

・大きな地震があった場合は、班毎に班長の指示で、速やかにギルウェル広場に移動する。倒壊物、落下物の危険のない場所にて所員を待つ。
・豪雨による水害の場合は、安全・衛生担当副長より指示がある。それまでサイトにて待機する。
・火事などを発見した場合は、速やかに所員に通報し、安全な場所に退避する。
・隊指導者は、隊本部にて野営生活をしている。危急時には、相互連絡により対応する。

▶地震の時の緊急避難先は、ギルウェル広場とする。

▶豪雨の場合は、室内に避難先を設ける。

①携帯電話・スマートホン等の使用

・研修期間中は、携帯電話・スマートホンは使用不可。電源を切ってバッグ等に収納し携行する。
　ただし、緊急案件で、やむを得ず使用せざるを得ない場合は、所長もしくは隊長の許可を得る。
　また、E メールについては、消灯後のわずかな時間、起床前のわずかな時間（いずれも 5 分程度）に限り、同室の者に迷惑のない範囲で使用を認める。
・コース期間中の SNS への投稿は一切不可とする。
・携帯電話の充電については、特に配慮はしない。
・施設にかかった参加者への電話は、所員等が受け緊急の場合のみ取り次ぐ。

スマホの使用及び SNS への投稿
○業務上、スマホへの連絡を見なければならない場合があるが、この原則は曲げない。
○また、スマホ等が使用できないのだから、当然 SNS への投稿もできないはず。
○これについては、所員も同様。所員に対しては別途所長から通達されるが、それがない場合にも、TT 及びコミの就任条件として、投稿不可の通達を行っているところ。
○ただし、県連の広報担当者による投稿はこの限りではない。

▶施設の電源を使用した場合は没収する。（ただし、配給するランタンから電源の供給は可能。これについては目をつぶる。ただし、ランタン充電器からの充電は不可）

②カメラ、PC、レコーダーの使用

・カメラ及びスマホ等のカメラ機能の使用は許可があった場合のみとする。ただし、班サイトにおいて工作物の記録等をする場合は、班担当の許可を得る。（班担当は基本的に許可して良い）
・これらは携帯せず、バッグ等に収納し携行する。
・パソコンやタブレット類の使用は不可とする。
・レコーダー類（スマホ・タブレットの録音機能を含む）の使用は不可とする。

▶記念写真やスナップ写真は不可。

③食事以外の飲食

・班サイトで班メンバーの交流のために必要に応じてお茶等を飲むこ

とについては差し支えない。
（ただし配給された物の範囲で）

④消耗品・破損品等請求について

・セッションで使用する消耗品については、通常の使用において不足となった場合はリクエストカードにより生活担当副長に請求する。（私用品は除く）
・備品等を破損した場合は、速やかに生活担当副長に報告し、その指示を受ける。
・野営工作資材の追加補給はないので、配給の範囲で有効に使用し作成する。ただし、自然物の利用は制限しない。（立木の伐採、植物の採取は不可。倒木は可。コンパネやレンガは自然物ではない。）

⑤その他

・セッションには、マイカップ、ノート、筆記用具を携行する。特にノートと筆記用具は常に携行する。
・期間中は、施設外への外出は一切できない。（セッションで外出する場合を除く）
・研修棟（パクスヒル）は、消灯時間（22:00）から起床時間（6:00）までは、防犯のため施錠する。
・その他、不明な点については、生活担当副長に問い合わせること。

● S.T.A.　エスティエー：〈 Spare Time Activities 〉

「閑時作業」、「個別に行う課題作業」のこと。訓練手法としては、自己研修に分類される。一般に自由時間にする課題のこともさす。

S. T. A. という言葉はウッドバッジ研修所や実修所で用いられることがあるが、これはB-Pがそういう名称をつけ、それがギルウェルの実修所で常用されるようになった、1種のスカウト用語である。これを日本へ伝えたのは佐野常羽氏であった。彼はこれを「閑時作業」と言って、昔の（大正末〜昭和初）日本の実修所で課業として取り入れていた。実修所、研修所は大変忙しいプログラムで進んで行くが、その忙しい、閑時などありそうにない時間の中でなんとか工夫をして、Spare Time を見つけ出し（作り出し）与えられた課題（創造的課題）をこなしていくわけである。そのような意味では「節時作業」、「忙中作業」とでも名称を変えた方がぴったりくるかもしれない。

「閑時作業」は単に実修所、研修所だけのものでなく、生活態度の問題であって、いかに合理的に、段取り良く、かつスマートに行動し、仕事をかたずけるかであって、訳語の適・不適は問題ではない。

のんびりさせておいたら人間は怠けると言う日本国民的性格に問題があるようである。

●パクス〈 pax 〉

平安、平和の意味。B-Pが晩年イギリスで生活していたところを「パクスヒル（Pax-hill：平和な丘）」と呼び、1939年ケニアに移住して住んでいたところを「パクストゥ（Pax too：ここも平和だ）」と呼んでいた。

●パクスヒル〈 Pax Hill 〉

イングランド・ハンプシャー州ベントレー近郊のパックス・ヒル（ピース・ヒル）は、スカウト運動の創始者であるロバート・バーデン・パウエルと妻のオレブの家であった。

パクス・ヒルは南に面した赤レンガ造りの家で、後に高い丘があった。

家はもともとは "Blackacre" と呼ばれ、妻オレーブの父親から1918年に贈られたもの。

現在でも、そこに至る道には「Pax Hill」という名の道路がある。

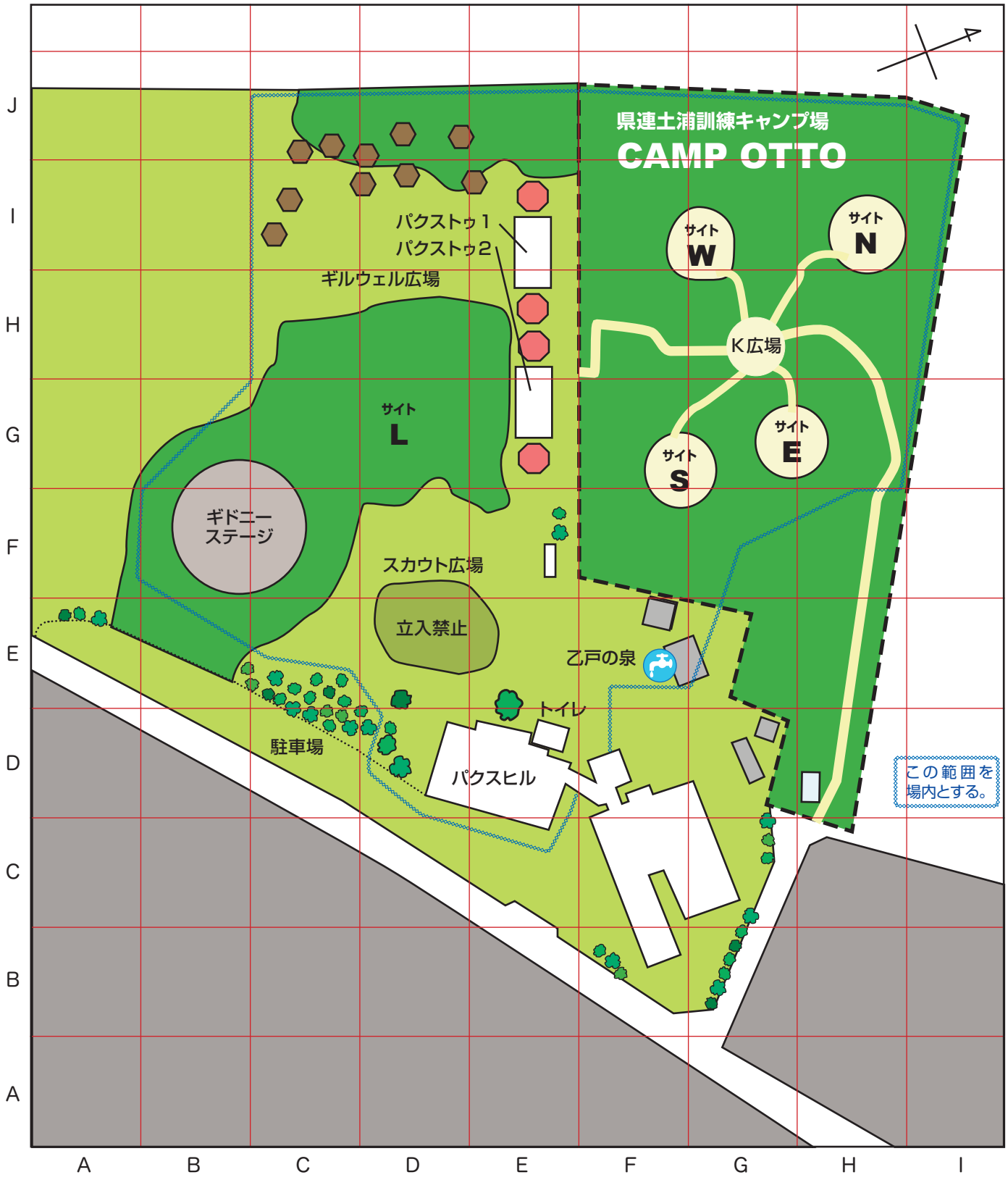
●ギドニー

フランシス・" スキッパー "・ギドニー（Francis "Skipper" Gidney、1890年－1928年）は、イギリスにおけるスカウト運動の初期の指導者のひとり。

ギドニーは、1919年5月に、ギルウェル・パークの初代所長に任命され、成人を対象とした最初のウッドバッジ指導者訓練コースを構成し、1919年9月にギルウェル・パークでこれを実施した。ギドニーは、1923年までスカウト運動関係の組織に勤めたが、その後、ギルウェルには彼の名にちなんで、ギドニー・キャビンと名付けられた訓練センターが設けられた。

ギドニー・ステージはそのギドニーの名を借りた。

土浦市青少年の家
および
茨城県連盟土浦訓練キャンプ場 “Camp OTTO”
見取り図



セッションのポイント

※この「セッションのポイント」は、スカウトコースの試行を実施した報告として、県コミ会議・ディレクター会議で示されたもの。
　従って、今回のスカウトコースとは、多少異なっているが、その意を汲んでいただきたい。

●スカウトコースにおけるセッション、および班、隊の活動の展開の内容について

○１つのスタンダードなものを作って、それで行う。

→作業チームやディレクター特別チームにおいて、班長会議、班長訓練、班会議、班集会、隊集会、キャンプファイヤー、スカウツオウンなどを研究してセッションのスタンダートを作り上げる。

→ＷＢ研では、それを基にして、更にブラッシュアップして、状況（実施時期、天候、参加者の構成、コーススタッフの体制等）によって進化させていく。（ベースは茨城第３期）

○つまり、所長や担当者の意向で、その都度研修のプログラムを作成するのではない。スタンダードのプログラムを基本にセッションを行い、実施後に反省評価し、それをより深め、より高め、より充実した良いものに磨いていく。

○また、変化させる場合でも、なぜ、変えなければならないかを熟慮し、しっかりと研究・議論した結果として行うことが必要。

●共通事項

①セッション中、近くで タムロして おシャベリをしない。
　→おしゃべりをするなら、参加者から見えない所で。
　　声が届かないように離れて。（そんな状況は発生しないだろが・・・）
②行動はテキパキと。移動は小走り・早足で。ダラダラと歩かない。
③参加者に対して所員自らが「範」を示す。その意識を持つ。
（「範」は全ての行動・意識・姿勢・態度・捉え方・対応等）
④口元の「微笑み」を忘れない。
⑤最後まで「かっこいい」所員を演じきる。

○ウッドバッジ研修所全体にわたって

○セッション基本は野外が望ましい

○話として聞いたことは、その場では覚えているが、直ぐに忘れてしまうだろう。そのために「研修ノート」がある。何でもノートに記す。

○座学よりも実習。まずは、実践しよう、それで相当身についていく。実践をした後で、解説を受ければ、その理由・根拠が理解されていく。

○指導者の道標は「清規三事」→「実践躬行」「精究教理」「道心堅固」*

§１ ウッドバッジ研修所について

○セレモニーが終わって、ここからコースが始まる。
このセッションは、コーススタッフと参加者が、研修として初めて対峙する最初の場面である。最初に対面に限っては、所長以下、全てのコーススタッフは、口元の笑みは絶やさないが、トレーナー・トレーニングチーム員として、指導者の指導にあたる者としての誇りと威厳をその芯たる部分に持ち、参加者に対してもらいたい（所員紹介の時も）。参加者は、まだ緊張させておく。

○そして、所長の態度（熱意、誠意、参加者への思い）により、緊張を解いていきながら、参加者のこのコースへの意識（思い・期待）をより高めていく。アイスブレーキング・ゲームについては、それを損ねない適切なものを用いる。

○日連要項に加え、オリエンテーションノートに沿ったもの（P.34 を参照）で展開する。

●清規三事　〈チンギサンジ〉

佐野常羽氏によって示された指導者の道標。英訳も示された。

○実践躬行〈Activity First〉
スカウティングには自らの実行が第一である。

○精究教理〈Evaluation Follows〉
実行にはその価値を評価反省し、そして理論の探求が必要である。

○道心堅固〈Eternal Spirit〉
実行・評価反省を繰り返し「さとり」をひらき、永遠に滅びることのない心境を開く。

▶班旗について

今後、茨城の WB 研修所では、班旗をその都度作らせるのではなく、「班の伝統」を意識させるために、コースとして作ったものを、毎回引き継いで使用させる。

そのコースで獲得したアワード等は、その都度外して持ち帰らせるが、「最優秀班」のアワードを研修所の最終日に授与し、それは班旗に残す。

・・・こととした（R 元年度第１回所員会議での決定事項。）

オリエンテーション

○班担当が班ごとに、オリエンテーションノートをもとに進める
○流れ
①場内案内
②昼食
③食事をしながら、「自己紹介」「きまりの説明」等を説明。OL ノートに記入させる。
○班担当は、参加者と一緒に食事を取る
→昼食は、参加者と同じおにぎりとする。
→これは、班員との人間関係を速やかに構築するためである。スカウトコースは班担当の参加者との信頼関係の構築が肝になる。

※弁当は不可。スカ弁＋ペットのお茶を。

§2 基本動作

○このセッションが事実上の最初のセッションである。**5 分前集合の励行を強調**する。5 分前に集合するためには、どんな意識を持ちとどんな段取りをすれば良いのかを考えさせる。
○集合したら、上班にスマートに報告する。この「報告」は、指揮者が求めたときに行う。
○所員たちも、規律ある行動を。
○そもそも論であるが「何のためにこのセッションがあるのか」「この動作があるのか」を考えさせてもらいたい。→ BS の社会での位置づけ
○スマートネスの実現を意識させる。（制服、記章・標章）
○「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、褒めてやらねば、人は動かじ」
○このセッションの中で完結するのではなく、コースを通じて身に付けるものである
○日々、色々な場面で実践することで、できるようになったという成長を感じさせるようにする。
→例えば、班で統制が取れているって気持ちがいいとか
弥栄が、気持ちよく発せられるようになったとかである
＊トレーナーは、参加者の前で話をするのが役務ではない。参加者にスカウティングの本質を伝えるのが目的である。その中にはスカウト技能も当然含まれる

▶スマートな報告
班長は、その場で指揮指導者を向いて報告する。一歩前や指揮者の前に進むことはしない。報告はゲームとして競争させる。

▶設営手順書
これまで作ったことはないが、作ってください。

▶教育的意味
「設営」の項を参照のこと。

§3- Ⅰ　スカウト技能（野営技能・設営を含む）

○班ごとに指導内容に違いが出ないよう、あらかじめセッションを担当する所員と実技内容について、綿密な打合せをおこなっておくこと。
○「設営手順書」「備品リスト」を作成し、配付すること。
○着替えをさせる。着替えの場所を指定する。

§3- Ⅱ　スカウト技能（野営技能・撤営）

○教育的意味を考えさせる。
①残すのは感謝のみ。
②来た時よりも美しく。
③撤営は、次回のキャンプの始まり（準備）である。
④「おきての実践」
誠実→信頼、
質素→ものを大切に。
感謝の心→感謝
→キャンプグッズは、きちんとメンテし、しまう。
○実際の展開は班担当が行う
○班の構成によっては支援の方法が違って来る
→見守るか、一緒になって行うか

▶献立を作るのは生活担当副長とする。
「食事」の項 P.81 を参照のこと。

▶水は、常にタンク等に満水にしておく。

§4 野外炊事

○食材表は、あらかじめ作成したものを使う。それを元に各班でメニューを考える。
○実習は、班サイトで実施
○セッションの説明は、§3-Ⅰの導入時に一緒に行い、あとは、班担当に任せる。
○わからないことは「教える」。
○班担当は、参加者と一緒に食べ、片付けまで見届ける
　→片付けの方法、食料の保管、水の確保も知らなければ教える
○班担当の食事は、全期間班で班員と一緒にとる
＊食事もセッションである。
＊ここでも指導するのか、見守るのかは班の構成によって異なるが、スカウトキャンプにおける班サイトの機能性から片付けまでの色々な要素も含めて伝える。

§5 スカウト運動

○セーフフロムハーム、バディ・ルールについても知らせる

§6-Ⅰ夜のプログラム（夜間ゲーム）

○教育効果、ゲーム性、安全に配慮して行う。
○視覚以外の感覚を使う。（どきどき、わくわくも）
○感覚を研ぎ澄ますということは、スカウトの成長とどのように関わるのかを考える機会を作る
○内容としては、ボーイ部門を対象としたもので、活動的なものが望ましい
○雨天も考えられるので、雨天対応の代替プログラムも準備が必要である
○安全の確保には十分に留意する

§6-Ⅱ夜のプログラム（キャンプファイヤー）

○キャンプファイアの教育的意義を考えさせる。
○基本的要素（人材、物資、場所、出し物、目的と方法・・・など）
○「ちかい」と「おきて」の実践について、それとなくそそのかす（教える）。
○ボーイスカウト部門の基本的キャンプファイアを体験させる。

▶明確なテーマを
・CF のテーマを明確にし、班に何を求めるのかも明確にする。
・ボンファイアとする。ただし、ビーバーでもなければカブでもない。ボーイ部門で行う。

§6-Ⅲ夜のプログラム（歓迎の営火）

○この研修所への参加にあたって、その自己の参加目的を再確認させる意味もある。
○3泊4日とも仲間と過ごす楽しい集いにする。
○スカウトソングの効果を活用する。
○隊としてで行う。
○茨城２期では、「テーマ」を設け、それに関する思いを、スカウト・ソングの合間に１人ずつ短いフレーズで話す。
　テーマは「私とスカウト精神」。
　　→話す人は、杖を持つ。（参加者も隊指導者も）

▶テーマの例
・私のスカウティングにおける座右の銘
・思い出の活動
・心に残っている指導者（憧れの指導者）
・

今日の話題他

【班長会議】
○班長会議が決定事項の場所であることを意識させるし、そのように展開する
【班会議・今日の話題】
○班担当が、班長の足りない部分を補っても良い
【日々の目標】
○昨晩の班長会議で決定したことを「目標」とする
○2日目　（例）ベース作り

▶日々の目標
初日は、隊指導者が決める。

○3日目　（例）日々の改善
○4日目　（例）安全を考慮したサイトの充実
　＊生活目標と点検をリンクさせると良い

【今日のソング、班のテーマソング】
○各班のサイトから歌声が聞こえてくることの素晴らしさを体感させる。
○「今日のソング」は任意だが、班で決めると良い。
○また、コースを通して、いろいろな場面で、班精神を鼓舞するために歌うことができる「班のテーマソング」を決める。
○コースとしてのソングの指導の例としては、班長訓練→班長→参加者の通常の訓練形態も有り。（正しいソングを覚えてもらう）

【点検講評】
○隊の意思決定の流れをきちんと見せる
　＊きちんととは、上級班長、副長、隊長はどのような動きをし、どのような役割を担い、誰がどの段階でどのような意思決定をしているのかを明示すること

【朝礼後】
○スカウツオウンは、担当所員が実施

§7 安全教育と安全管理

§8 班長訓練

○隊本部サイトで、隊指導者により、各班の班長・次長に対して班長訓練を実施する。（他の参加者は、それを見学する。）
○班長訓練は、セレモニーもしっかりと行う。
　＊言葉の端々に「しっかり」「きちんと」「正しく」「明確に」などなどの言葉が出ているが、これは何を示しているのかを所員間で共通理解を十分に持ってほしい。そうしないと、人によって言っていることが違ってしまう可能性がある。
○この §8、§9、§12 の流れは、このスカウトコースの中の大きなハイライトであり、かつ非常に大切なポイントてもある。

§9 班集会（→ §11 に変更）

○班担当の支援を得て、班長が、「班集会実施計画書」に基づいて行う。
○班長は、§8 の班長訓練で学んだ内容を、ここで班員に指導し、班員がそれをできるようにする。（単にやってみるのではなく、**できるようにさせる**のである。）
○ここで、それができないと、次の隊集会が「楽しい」ものとならなくなってしまう。班員はベストを尽くして「できるように」取り組むべし。

§10 安全の構築と運用

~~§11 班の活動（班ハイク）~~（→ §9 ワークショップとして実施）

~~○班担当はつかない（→班担当の休憩時間）~~
~~○班ハイクの計画を作れる情報を伝える~~
~~○課題も考慮する必要がある~~
~~○班の自治を確立してくる時期になる~~
~~○それが、自立になり、ワクワクし、「なんか楽しい」につなげる~~
~~○班員が、自分たちがやったつもりにさせる~~
~~○そのため、支援の方法は十分に考える必要がある~~
~~○この班ハイクは班の仲間と計画し実施したものである・・・という位置づけである。つまり、§12 の隊集会とはリンクしていないし、リンクしなくていい。~~

▶班のテーマソング
ソングのチョイスは、スカウト・ソングに制限はしないが、「スカウティング」の研修であることを念頭において選ぶ。

▶班の活動（班ハイク）は行わない
設計時に想定したハイキングは、その意図が十分に理解されていないで実施されていることと、このセッションだけが、他の流れから離反していることが報告されているため、日連としても実施の有無を模索しているところ。ただし、全く「班ハイク」をやらないのではなく、その本質を知ることのできる各種要素を取り入れたもので行う。
茨城では、この時間を利用して、「ワークショップ」と題して、「活動プログラムとは何であるのか」「プログラムの成り立ち」のポイント、「想定とストーリー」の効果を、実体験させる。

○このスカウトコースはスカウティングの特質を個々に体験するものである。そのため、プログラムプロセスに関しては、課程別で考える。
＊この班ハイクが、参加者によって最も感動し、印象に残ったものあったようである。そこには、やはり与えられたものではなく、どんなに不格好でも自分たちで行ったことが楽しいのであったようである。

§12 隊集会

○野外で行う（スカウトの立場になって）
○ボーイスカウトの隊集会を行うが、ボーイスカウト部門を実施するのではない・・・と説明を受けたが、所員 HB の目標を見ると「3. ボーイスカウト部門の隊集会を体験する」と書いてある???
○それはこういうことである。
　プログラムプロセスとしては、BS 部門の流れにしたがって展開していくが、BS 部門のWB研修所で行っていたような、それぞれの詳しい位置づけや機能、PDCA サイクルや評価等について、しっかりと理解させることは求めていない。それらは課程別研修等で行う。
○つまり、あくまでもプログラムの流れを**体験（体感）**することがさの趣旨であって、それぞれについて、**詳しく理解（体得）**させることが目的ではないということだ（そう言い切ってしまうと語弊があるのだが）。
　「なるほど、こんな流れで、こんな方法で、隊集会に繋げて&繋がっていくんだ！」
という流れを理解してもらうことが趣旨であると考えてもらいたい。

§13 スカウト教育

§14 指導者の役割と責務

○効果の確認をここで行う

●スカウトコースにおける「教場（セッション場）」環境

○できる限り「野外」でおこなう。
○そのため、視聴覚器材の使用が制限されるかもしれない。
→ということは、板書が多くなることも考慮して、その時間を含んでセッションを組み立てる。
○参加者には、できるだけ「研修ノート」をとらせるようにするが、できれば、重要なポイントについては、ハンドアウトを出すコトも考慮する。
○ PPT（パワーポイント）は、話す項目を提示するに留める。
→全てを PPT に書き込めば、セッションの進め方としては「楽」になる。しかし、書いてあることを読むだけでは参加者のココロに響かない。自分の言葉として伝えるからこそ、伝わるのである。
　したがって、「今、何について話しているのか」のタイトルを参加者伝えるためだ　けに PPT を使いたいものだ。（我々は研修を行っている→考えさせているのであって、研究した内容を発表・説明しているわけではない。PPT の使い方を間違えない。）

●スカウトコースの成功は、スカウティングを如何に具現化できるかである

○3泊4日が終了したら、参加者はどのように変化するのであろうか。
○スカウティング・スピリッツ、そしてリーダー・スピリッツはしっかりと伝わっているだろうか。
○ともすると、野営スキルが重視されすぎていたり、ボーイスカウトコースにより近くなっていたり、してはいなかっただろうか。
○このコースは、基本的なスカウティングのやり方を体験（体感）して、納得・理解して、自分なりの課題を見つけ、コース修了後に、自隊でそれに

▶隊集会
「BS 部門を実施するものではない」と言ってはいるが、それでは、何のために班長訓練、班集会を展開するのだろうか。やはり、班長訓練、班集会が隊集会にどのように繋がっているのかが実感できるものにすることが必要と考える（訓練・実施内容の一致）。
そのため、班長訓練→班集会→隊集会の流れで、それぞれの内容が繋がったセッションとする。
「BS 課程を実施するのではない」については、P.5 の「4. スカウトコースについて (3) ⑦」に書いてある。
活動・ゲームを行うに当たっての「想定」にも触れる。想定があるおかげで、どれほど活動の内容が豊かになるかを実感させる。

取り組むための「きっかけ」を与えるのコースなのである。
→しっかりと「きっかけ」をつくらせることができただろうか。
○それが、スカウトコースの本当の目的なのである。

まとめ

○今までのWB研修所は、基本を知るコースであり、一方的に知識・技術を与えられるコースであった。
今度のスカウトコースは、実践的コース。体験を重視している。指導者の内から湧き起こる「なぜなぜ、どうして」を引き出し、それを実際にやったり、課題として持ち帰ったり・・・と、スカウティングを深める「きっかけ」を作り出すコースだ。
「清規三事」「スカウト教育法の7つの要素」「スカウト精神」「スカウティングの4本柱」の全てがいたる所で効果的に現れている、そんなコースである。
○まずはやってみる（**実践躬行**、先入観を抱かずに素直にやる）。
○その経験を元に考える（**精究教理**。「どうしてこうなるの」「どうしてこうするの」「こうする根拠は」「どうして楽しいの」「だから班の仲間が必要なんだ」「班長はすごい。どうしたらああなれるのか」「こうやったら、ああなるはずだ」等々）。
○そしてガッテンして自分のものにする（**道心堅固**。「できるようになったもんね。エッヘン！！」
○「見て見てほらできた」・・・・・
→「自信に繋がる」→「隊に帰ってやってみたくなる」→「もっと知りたくなる」→「分かると・できるともっと愉しくなる！！」）

・・・というスカウティング本来のやり方で行われる、つまりより現場の指導方法に近づいた、参加者にとって理解しやすい研修所となった。

しかし、どうにも不安が拭いきれない。スカウティングを知らない指導者、スカウティングの基本を知らない指導者、スカウティングのココロを知らない指導者・・・・。これらの指導者に対して、あのような研修方法で、本当に一隊長として本当のスカウティングを展開できるようになれるのだろうか。何かしら大きな欠落があると思われる。（いや、「ある！！」）
それは、スカウティングの精神（態度、姿勢、ちかいとおきての実行と意志、心構え、心配り、奉仕の心等々）についての記載がないこと、所員用ハンドブックに明示されていないことだ。たしかにそれを文章として表すことは難しいだろう。であるならば、日連トレーナーは、行間やら伏線から、その点をしっかりと理解して実現させなくてはならない。ウッドバッジ研修所は、知識とスキルを植え付けるところではない。指導者としての在り方を感じ取り、その道を進んでいこうという意志と原動力を固く心に刻み込ませなければならない。それは、参加者する指導者とって、WB 研修所は最初の大きな公式のトレーニング・コースであるからだ。そのインパクトはたいへん大きいものだからだ。
ぜひ、参加者が目指す「憧れ」の先輩指導者の姿を見せてもらいたい。そう「トレーナーが教える」ではなく、参加者が「トレーナーに学ぶ」だ。
そのためには、WB 研修所を運営・展開して行くトレーニングチーム各員が、確固たる知識と、それを十分に展開できるだけの技能スキル、研修スキル、そしてスカウティングのココロを理解して、身に付けていなければならないし、それを自分自身で体現できなければならない。
そうして、漸く、それらの指導者のココロに響く内容の研修が提供できるのである。彼らのココロに響くからこそ、次に、そして指導者としての道に繋がっていくのである。

スカウティングとスカウト精神

●スカウティングが育てたい（送り出したい）『人間』とは、

- 自主性を持った
  →つまり、自分で決定を下して 人生を切り開く
- 協力的で
  →つまり、積極的に状況を察して他人の世話ができる
- 責任感強い
  →つまり、自分が引き受けたことを責任を持ってなし遂げるため、決断を下して、なおかつ結果も予測することができる
- 明確な主義主張を持っている
  →つまり、一般的なグローバルな価値観に従って生きるように努めながら、さらに自分なりの行き方や理想を持ち続ける

・・・**人間**である。このようなスカウトを育て上げ、世の中に送り出すことがスカウティングの目的なのである。

これは、B-P が「幸せで、積極的で、役に立つ市民」すなわち、性格のよい人 (personal character) という言葉で表現したものである。

このようなスカウトを育てていく（育っていく）ために、スカウトが身に付けていく意識・姿勢がある。それが**「スカウト精神」**である。

「スカウト精神」を理解するには、スカウトは、まず、**「スカウトとしていかにあるべきか」**を求められることを知り。それを受け入れることである。

そして、それを獲得するために、**「今すぐ、始める」**ことが重要なのである。結果として「あとで」そうなった・・・というものではない。「今すぐ」だ。（ここに「清規三事」が現れてくる）

●いかにあるべきか→スカウトはどう在ればいいのか

- 自分自身への関与
  →自分の理想的な成長に自発的に関わる。
- 自らの人生に責任任を持つ
  →個人的目的を設定し、障害を克服する。創意工夫する能力を発達させ続け、何時も責任を持つ。
- 今、行動する
  →責任、約束、技術の習得、個人的発達、他の人との関係を経験する。
- 自己学習を進める
  →スカウティングが求める「実行力と責任感を持った有能な成人」になるために、今、自主、自立、責任、実行、自由、支援することを続ける。

これを**心に刻み（意識として持ち）**、かつ、**実践している（ing）姿勢** *、それが**「スカウト精神」**なのである。

スカウトに「スカウト精神」を理解させるためには、まず、指導者自身が「スカウト精神」を理解し、指導者であり続ける限り、それをより深め続けて行くこと、そしてスカウトがそれを体得できるよう、活動とそのプログラムで、指導者がどれだけの意識と姿勢を持てるか（隊長の背中）が肝要となる。

活動は目標を達成するための一つの手段であるが、それは、最終的にはスカウティングの目的を実現するものである。

それは、次の要素により達成する

- **教育目標**（部門の活動のねらい）
- **活動**（プログラムの内容→月々のテーマ、想定とストーリー、知識、スキルプログラムプロセス→プログラムの流れとスカウトの関わり方）
- **指導者**（少年の教育を託するに足る品性と経歴を有する者、意識と姿勢、職務の遂行、適した人数）
- **班制度**（班の中でスカウトがどのように行動し、影響し合い、相互に作用し、役割を果たすかなど）

←スカウティングが社会に送り込もうとしている人物像、我々が育て上げるようとしている人物像、・・・がこれだ。

ここを意識してもらいたい。

* 「Catch the Scouting Spirits」

これは、茨城県連盟の 50 周年及び 60 周年のキャッチフレーズだ。

ポイントは「Catch」にある。「Get」ではない。「得る」のではなく「掴む」のである。そこには「自ら掴みに行く」という内なる意識と力、つまり意志が大切なんだよ・・・というところから、このキャッチフレーズとなった。

スカウト精神も同じだ。『**心に刻み（意識として持ち）**、かつ、**実践している（ing）姿勢**、それが「**スカウト精神**」なのである』とあるように、内発性がなければ、ただのかけ声になってしまう。

セッションの展開・進め方

ここでは。実際のセッション展開・進め方の留意事項について述べる。

●セッションの直前の準備

○視聴覚器材、ハンドアウト等配付物、板書関係用具、教材の確認。

●セッション会場に入る。

○セッション会場には、5 分前までには到着し、前のセッションの終了を待つ。
○前のセッションが終わる直前に、生活担当副長から、次のセッションの確認（時間、場所、持ち物、服装等）があるので、確認し合う。
○前のセッションが終わったら、セッションの準備を開始する。視聴覚器材については、PC とプロジェクターの接続、動作確認を行う。
○時間に余裕がある場合は、ゲーム、ソングを展開し、会場の雰囲気に慣れる。

●セッションを開始する。

○当番班長による開始の合図・・・でセッションを開始する。
「姿勢を正して」「よろしくお願いします。」
○まず、「セッション番号、セッション名」を板書する。（セッション表示プレートがある場合はそれを貼る。）
○最初の担当セッションのときは、最初の 3 分程度をつかって、自己紹介をし、自分の人となりを知ってもらい、セッションを進めやすくする。

◀セッション番号、セッション名は、必ず表示する。

※セッションの進め方については、別資料「」もやもやからなるほど！へ」を参考にしてください。

●セッション中の指示

○グループワーク、作業、トイレや休憩等の、講師から離れる場合には、明確な指示をしてから、その作業に移らせる。
• 何の作業（話し合い）をするのか・・・・・
→いつまでに（when）、誰と（どんなグループで）（who）、どこで（where）
→テーマ（what）、方法（how）、導き出す結果の形（how）*
* →どのような形で、作業の成果（結果）を提示・提出するのか
○グループワーク、作業についての終了時間は、予告をする。
→「5 分前」「3 分前」「1 分前」
○大休憩は、90 分に 1 度、10 分ほどとる。（脳が集中をキープできるのは 90 分までであるため）

◀トイレ休憩（小休憩）は、45 分に 1 度くらい？

●セッションの振り返り（リビジット）と終わり

○それぞれのセッションでの「まとめ」のあとに、「**このセッションを受けて、自分は今後どう実践していこくか**」をノートに書いて、それを赤で囲ませましょう。そのために 3 分ほどの時間を初めからとっておきます。
○時間が来たら、一旦作業止めさせて、セッションを終わりにします。
○当番班長による開始の合図、「姿勢を正して」「ありがとうございました。」

●次のセッションの指示

○生活担当副長は、次のセッションの指示をします。**端的かつ明確**に。
→いつ、どこで、何時から、何を持って、服装は
→サイトを離れる時の対応、天気・気温等への対応にも触れる。

◀参加者から、指示が不明確であるとの指摘あり（3 期）。伝達事項を事前に確実にしておき、端的かつ明瞭に伝える。

基本動作（規律と秩序）

◉ポイント

なぜ「基本動作」を行うのか、身に付けるのか。

① 基本動作とは、

ボーイスカウト運動は、青少年に対し、良質なプログラムを提供し、彼らがのプログラムに主体的に参画することで、彼ら自身が成長し、よき市民として社会に貢献できるよう育成することを目的とした運動である。

このボーイスカウトが求める成長とは、人として**「良き社会人」になるためのたくさんの資質を養い身につけること**。良き社会人とは・・・

⦿より良い社会生活を送るために
　　他の人との関係を良い形で持つことができ
⦿いろいろな知識や技能を身につけることで
　　他の人のために役立つことができ、
⦿みんなの意識や気持ちをよい方向に導くことができること

がその基盤（ベース）としてあることを指導者は理解していなければならない。導くためには、まず指導者自身に受け入れてもらわなければならないのだ。

- スカウトの笑顔･明るさのある班とそうでない班では、どちらが行き（入り）やすいだろうか？
- 指導者の笑顔・明るさのある隊とそうでない隊では、どちらが行き（入り）やすいだろうか？

人が成長していくためには、基本というものが必要である。こと社会を営む人間関係においては「人を受け入れる」「人と良好な関係を作る」ことが基本なのである。そこには「規律」と「秩序」がある。そのための動きが「基本動作」なのである。つまり、一人ひとりの規律があって、初めて集団での秩序が生まれる。一人ひとりの意識が他の人に向けられることによって、全体の秩序が保たれる。

この運動の全てはそこから始まるのだ。

ここで実際に行う「基本動作」はその中のごく一部、ボーイスカウト・ボーイ隊で行うものだが、その動作だけを覚えさせるのではなく、その背景にある本来の基本動作の意味（規律と秩序、健康増進、意識醸成、我慢と忍耐、自分に負けない・克己心、友情友愛等）も含めて教えてもらいたい。

② 社会の評価と「基本動作」

私たちのスカウトは、やるべきことをやり、やってはいけないことをしないことが重要なポイントとなる。

当たり前のことを当たり前にやって、初めて地域社会が認めてくれるのである。

やらねばならないこと（＝基本）（今、目の前で要求されていること）を当たり前に実践できることが、スカウティングの評価につながり、それが、あなた自身、人間としての魅力を評価してもらうことでもあるのである。

基本動作２つの基本とは
- やらなければならないこと（が当たり前にできること）
- やってはならないことは（を知りもそれを）やらないこと

自分では一生懸命やったつもりでも、評価するのは地域社会である。地域社会から「感謝・感心」されるだけでは足りない。そこには「感動」をもなければならないのだ。

◎どこまで指導するかについて

まず、実施する研修によって、どのレベルまで指導するのかは異なる。

例えば、ウッドバッジ研修所スカウトコースの目標では、「各種動作ができる」となっているし、野営法 STEP1 では「基本動作が持つ意味を考えながら、その動作を行う」と。ずいぶんニュアンスが異なっている。

本来では、「意味」と「動作」とそこに込められている「気持ち」は、いつ・どこで・誰が指導しても同じであるべき。

しかしながら、日程的な制約等により、研修する範囲（幅と深さ）が異ならざるを得なくなっているのも事実だ。

さらに、「知る」のか「理解する」のか「身に付ける」のか・・・、「説明」なのか「レクチャー」なのか「実習」なのか・・・、そして「講義」なのか「指導」なのか「訓練」なのか・・・・と、その目的によって方法も異なってくる。そこに注意して対応してもらいたい。

つまり、左記の本文の内容はケースバイケースでピックアップしていくことなるわけだが、トレーニングチーム員・トレーナーは、まず全てを知った・理解した上で，チョイスすることが求められる。

㋐ 教える・身につけさせる行為

【教育】 教育とは、学校で言えば読み書き、計算、社会なら基本的なルールや規制、皆が共通して認識しておかなければならないことを身に付けさせること。

【研修】 研修とは、職務上必要とされる知識や技能を高めるために、ある期間特別に勉強や実習をすること。

【指導】 指導は、相手によって受け止め方が異なり、それを踏まえてその人に合わせて導いていくことをいう。

㋑ 学ぶ・身につける方法・手段

【練習】 練習とは（自分で）学問や技芸などを繰り返し練習する。一定の作業を反復して、その技術を身につける。習い事などを習得するイメージ。

【訓練】 訓練とは、（人に対して）ある習慣や能力、技能などを体得させるために、教え込んで慣れさせること。習慣などの体得も含んでいる。また、来るべき時にうまく行動出来る様に練習しておく事や、物事を一定のレベルに達するまで何度も繰り返すこと。実際に行ってみて身体に覚えこませたり、慣らす事がメインで、学習、講義等の比重は軽い。

そして、あなた隊のスカウトの行動（挨拶、身だしなみ、意識・姿勢・態度）を地域社会の方々は不快に感じてないだろうか。いや「あなたの行動」を地域社会の方々は不快に感じてないだろうか。素晴しいと感じてくれているだろうか。

「スカウトは見ている、あなたの一挙手一投足を」・・・ということだ。

言い換えれば、それが**スカウトの制服を着る→スカウトのプライド**ということなのである。

スカウティングにおける「隊長」という位置付けは、それはスカウティングの「目的」なのか「手段」なのかと同様に考えることができる。単に、プログラム活動を行うためのみの存在であるならば、それは**手段**であり、つまりは「隊長」でなくてもよい（→隊長としては大いに不足している）。

「**隊長とは、自らスカウティングを具現化する**」存在であって、それは「**目的**」である。皆さんは改めてスカウティングを通じて自己の豊かさづくりを目指す存在であることを知っていただきたい。

それは自己や家庭を犠牲にすることではない。よいスカウティングをすることが、地域社会や家庭、職場にとって役立ち、まわりまわってあなたに返って来る（Good Turn）。スカウティングを通じてあなた自身の人間的魅力を増し、社会常職を備え、社会人としても成長していけるのである。

そのためにも、社会人・組織人として正しい物の見方・考え方（価値観）そして、あるべきスカウトの姿（スカウト精神）を理解し、自ら具現化していくことが大切だ。

さて、前文を受けて、

「スカウトって何だろう?」、「どうして社会の人は、スカウトを見ると『きちんとしている』っていうイメージを持つのだろう?」

を考えてみよう。

→　右欄上の４つのポイント＊から考えてもらいたい。、そして、「スカウト運動の原理」「スマートネス」「スカウト精神を身につけている」に繋げて考えてみる。

では、

「スカウトのどこに、それが表れているのか?」

について、更に一歩進んで考えてみよう。そして「『きちんとした』といわれるスカウト像」を明確にしよう。

→そのスカウト像がスカウト精神そのもの。

→ **スカウト精神を1つの動作として表したものが「基本動作」の形**である。

そこには、これらが含まれている。

- **スカウトとしての意識付け**
- **教育面、安全面についても有効**
- **健康を保つ**
- **社会的にも、保護者からも規律正しいスカウトの姿が評価**

1. セレモニー

開会セレモニーは、街中であろうがキャンプ地であろうが、基本的に違いはない。しかし、せっかくの自然の中でのキャンプで、スカウトの気持ちもリフレッシュしているし、また期待に溢れ、情熱をたぎらせている。

そんなキャンプにふさわしいセレモニーを演出する。それは司会・進行を担当する者の思いからの態度や言葉遣い、言葉の抑揚によって伝わるものだ。

◎指導のポイント

- 隊集会のセレモニーは、ともすると「いつもやっているから」「内容もだいたい分かっているから」等の理由で、ついおざなりになっていないだろうか。しかし、セレモニーは、その日の活動に対峙する意識を作り上げる大切なものなのである。
- したがって、進行については、スムーズでよどみない進行はアタリマエ！

●4つのポイント＊

1. 挨拶・返事

①規律ある生活を送る原点
②人間関係を創り、人間的魅力創造の第一歩
③意欲向上のシグナル

2. 身だしなみ

①スカウトとしての姿勢
②好感を手にするパスポート
③型は心を宿す

3. 話し方

①心身鍛練の源
②やる気のバロメータ
③自信ある態度の第一歩

4. 基本姿勢

①全ての動作の基本であり、出発点である
②スカウト精神が充実し、厳粛端正な姿勢である
③間締め（まじめ）な人財（間を締める）

●「日本」の読み方

・「ニホン」か「ニッポン」かどっち？

昭和９年３月22日に文部省の国語調査会において、国号呼称は「ニッポン」に統一された。

● スカウトソングについて

ふつうセレモニーで歌う歌というと連盟歌とか光の路等、一部の決められているものだけと勘違いされている方が多い。

スカウティングは、そんな堅っ苦しいものではない。入隊式や上進式ならいざしらず、隊集会や班集会の開会や閉会セレモニーでは、その集会のテーマや内容に即したスカウトソングを選びたい（必ずしもスカウトソングである必要はない・・・が、スカウトソングがほとんど歌われなくなった今、是非ともスカウトソングわ歌ってもらいたい）。

具体的には、スカウトハンドブックの281ページにも掲載されている。

さらにはメリハリ、そして言葉づかい、隊長の言葉によるモチベーションのアップ等、そしてなによりも周到な準備からくる、自信と安心そして気概。これを作りだすことが大切。

⇧コースのセレモニー担当は、この「演出」を常によろしく！

2. 基本動作

隊の中で、基本動作を正しく行うことが、スカウト仲間としての意識付けをし、教育面、安全面についても有効であり、また、健康を保つことにもなり、社会的にも、保護者からも規律正しいスカウトの在り方（→スカウト精神の発露）が評価されることを伝える・・・とWB研修所では伝える。

ここでは、正しい動作、制服の着用により、スカウト一人ひとりの意識が変化し気持ちがシャンとしていく。更に一歩進めて基本動作を「如何にスカウティング・ゲーム」にするかという視点でも捉えさせる。

※観察と推理がここでも必要

「気をつけ」は、目上の人物への敬意や集団の規律を表す、世界共通のボディーランゲージとなっているが、特にボーイスカウトでは、「心に油断がなく注意を払っていること（mentaly awake)」「直ぐに次の行動に移れる準備」のように「そなえよつねに（Be Prepared)」の精神が加わっている。

つまり「気」をつけることであり、また、「観察と推理」がここにも生きている。

U字（馬蹄）形、円形のカブコール、仲良しの輪も同様で、スカウトは「指揮者」の立ち位置をよく観察して、瞬時に自分の立ち位置を見極め、それを推理して行動に移す（指揮者の正面の向き、スカウトの数による輪の大きさ)。これを１発で決めるスマートさ、そしてスカウトとしてのプライドがそこにある。

→　これはまさしく「スカウティングのゲーム」だ！！

◎指導のポイント

- 「礼式の基準」を確実に頭に入れて、指導に当たる。

3. 制服と記章・標章

制服だけでなく、記章と標章の付け方についても言及する。

①スカウトの制服は、この運動が始まった当初から、着心地が良く、動きやすく、天候の変化に対応でき、体を守れるこという理由から取り入れられた。

現在は、各国ごとに色やデザインが異なっているが、基本的な要素は変わっていない。カブの制服も色こそ違うが基本は同じ。

②そして、この制服にはもっと大きな意味がある。それは、世界中の大きなスカウト仲間の「きずな」を表しているということ。

③また、社会的には、社会や地域の人々は、この制服を着ている子供に信頼を寄せている。清潔でスマートで元気なこと、それに全力をつくして duty に従い、社会や人々に良いことをする少年に違いないと信頼を置いているから。

それは、近年の災害支援等の募金のときに見ることができた。多くの団体が全国各地で募金活動を行っていたが、地域の人はスカウトが行っているものには、迷わず募金をされていた。そこに、この制服への信頼が見て取れた。

先人達が築いた、まさに「名誉」がそこにあった。

（1）制服の意味合い

①なぜ制服をきちんと着なくてはならないのか？

→　それは、

- スカウト精神の発露
  - ○社会からの期待と信頼に応える
  - ◎スカウト自身の「名誉」心・・・・信頼

● 気をつけと休め

- 指導者の合図をよく観察し、次を読むことで、素早い動作ができる。
- SFB P.315「隊の行動」には姿勢と健康について書かれている。

気をつけの姿勢で「旨を張って・・・」と良く言われるが、「胸を張る」は、すなわち「肺を膨らます」ことである。

深呼吸をすると肺が膨らみ、肩胛骨が背中の中心に寄り、胸が張った状態になる。その時の姿勢が、自然体で最も良い姿勢とされている。

●「気をつけ」の姿勢

- 両足の踵をつける
- つま先を少し開く
- 両膝をつけて伸ばす
- 腰を伸ばす
- 胸を張る
- あごを引く
- 口を閉じる
- 真っ直ぐ前を見る
- 肘を伸ばす
- 手は掌を開いて伸ばし、中指をズボンの横の縫い目に沿わす。

●「気をつけ」の姿勢をとった場合、基本的には「休め」、「進め」など別の号令が出るまで、姿勢を変えたり、ゆらゆらと動いてはならない。また、私語を喋ってはならない。

● 制服の着用

③次の場合は、制服を着用してはならない。

(1) 商業的な販売及び契約の場合。（ただし、スカウトとしての催し物及びスカウト行事に付随する販売は除く。）

(2) 政治的な会合又は活動に加わる場合

(3) 理事会の承認を受けない商業活動等に用いる場合

●制服と教育

年少のスカウトの場合、制服に意味を持たせるのではなく、初めから制服に意味づけをして、それをしつけや教育に適用するという方法をとってもいいだろう。

→　つまり、スカウトとしてのプライドである。このプライドを如何にスカウトに持たせられるかが指導者のなすべきこと

②では、「きちんとした制服」の「着こなし」とは？

制服とは	日本連盟によって決められている。同系色だからといって、別のものを着ても、それを制服とは言わない。（制服以外の着用を厳に戒める）

【着方・着こなし】

制服そのもの	いつもパリっとしている、シワくちゃでない、裾が出ていない、袖から下着が出ていない。
記章の付け方	規程に従って、きちんとつけられている
ベルト	規程通りの色、材質（意外と知らない）
ネッカチーフ	きちんと巻かれている、汚れていない
ハット	記章の位置は？　正しくかぶっている

→　指導者が制服をきちんと着こなすことは、スカウトの「ちかい」と「おきて」の実践者であることを示している。

→　スカウトの名誉・・・すなわち社会からの「信頼」に繋がる大切なこと。

→　「正装」・・・セレモニー等の時の改まった服装。

「制服」は、決められた服のこと。

「正装」は、正しい装いのこと。

※「正装」のときは、ポケットには最低限のものしか入れない、制服やベルトに余計なものを付けない。 首からぶらさげない。

◎制服の意味と理由

- スカウトであるというあかし
- 世界中のスカウトがそれぞれの環境や特性を活かしながら、同じ「ちかい（やくそく）」をたて「おきて（カブ隊のさだめ・ビーバーのきまり）」を守る兄弟として、仲間意識を体感して、強固にするため。
- 屋外を主とした活動で、活発に活動できるようにするため
- 制服を清潔に正しく着用すること。すなわち記章・標章を正しい位置につけ、スマートネスや自尊心を養うため。
- 社会のスカウト運動に対する信頼を制服を着用することで、高めるため。

それだけでなく、隊長は、この制服が「友情」「自信」「信頼」を表していることを忘れないこと。そして、機会あるごとにスカウトに伝えること。

（2）制服は育てるもの

制服は、最初はみな同じシンプルなものだが、スカウトの活動を続けて行き、進級記章、役務の記章や参加章などをひとつひとつ着けていくことで、世界にただ１つの自分だけの制服を作り上げていく。

それは、同時に自分が行ってきた様々な活動の証であり、そこには忘れ得ぬ思い出もたくさん染みこんでいる。正に自分にとっての勲章そのもの。それは、真剣にかつ積極的に活動に取り組んできたスカウトにとっては、何ものにも代えられないとても大切なものとなる。

スカウトたちが、制服にどんな意味を込めていけるか・・・は、隊長であるあなたの持つ意識にかかっている。

また、この制服は、正式な手続きにより日本連盟に加盟登録をした「加盟員」しか着用できない。つまり、これを着るということは、100 年続いてきたこの運動をここまで育て、関わってきた多くの諸先輩方が築き上げてきた伝統と名誉、そして精神をも身にまとうということ。そんな制服に相応しいスカウトになるよう、励ましてもらいたい。

（3）記章と標章

制服につけられた各種の記章や標章は、自分の所属する地域、団、隊、役務、進歩の状況、取得した技能、参加した大会などが一目で分かる。自分が

● スマートネスの意味

「スマートネス」とは「スマート (smart)」の名詞形。スマート (smart) の意味は、スマートであること。こざっぱりとした服装、気の利いた制服の着こなし、機敏な態度、スカウトらしい言葉遣い等感じが良く交換の持てることを言うが、それ以外に頭の回転がいいこと、シャープであるという意味もある。

他の人がスカウトを見るとき

・感じが良く　　・きびきびしていて
・規律正しく　　・さっぱりとしていて
・好感が持てる

態度と行動である。服装はもとより、人に対する態度、言葉遣いにおいてスマートであることなのである。

特にカブスカウトでは、昔からスマートネスをスカウトたちのしつけの一環として取り入れてきた。「スマートなスカウトはかっこいい」といったイメージを抱かせて、きちんとした身なり、いつも気が引き締まっていることがスカウトなんだと意識づけてきた。この年代のスカウトには、まだまだ「しつけ」が必要な時期だ。物事の善悪の判断についても、成人の指導に左右される。なので、この時代にスマートネスを身につけることは、スカウト精神を身につける第一歩となり、それが「ボーイスカウトはきちんとしている」という評価につながっていた。

スマートネスから士気・やる気を高揚し、さらに、スカウトの活動を通じて、モラル（道徳）までのばして行くことは、スカウト運動の教育のねらいのひとつだ。

ボーイスカウトには「スマートネス」というキーワードがある。

これは、動作や行動がスマートであること、制服の着こなしの良さも意味する。ボタンがはずれていないか、気象が正しく着いているか、常に機を配ることを重要視している。

ボーイスカウトは、全員がまとまって、同じ制服をビシッと着こなすから、団隊としての見た目がとても良くなる。制服を着て、テキパキと働いているお兄さんやお姉さんを見て、小さな子どもは「自分もああなりたい!」、親御さんは「我が子もこうなってほしい」と思うのだ。　記章がついていなかったり、ボタンを外していたり・・・・と、スカウトがそれぞれ違う着こなしをしていたり、だらしなく着ていては、統率がとれていない印象になる上に、全くカッコよく見えません。そんなボーイスカウトに、子どもを入れたいと親は思わないでしょう。（「人を集める技術」P.146 古谷真一郎著）

一員である地域社会、支えてくれている人々、自分の果たすべき役割、自分が努力して社会の役にたつ準備を着々と進めていること、積極的に建設的な役割を果たそうとしているスカウトの精神がそこに表れている。

「記章」→　その人がどの区分のどの位置づけにあるのか
「標章」→　その人がどこに所属しているか

を表している。

制服と同様に、記章や標章も日本連盟が定め、加盟員のみがそれを着用できることと定められている。また、制服につけられる記章・標章と位置は、教育規程によって細かく定められている。

(4) スマートネス (P.53 ヒント欄も参照)

「スマートネス」は、姿だけではない。スカウトとしての気概であり、意識であり、姿勢であり、態度であり、自信であり、責任でもある。それら内面から発するオーラとでも言おうか、それをスマートネスと呼びたい。

そうなるには、日々「ちかい」や「おきて」を実践していくことで、スカウト精神を身に付けることだ。それが周りに対して爽やかで清々しいイメージ=好感をもたらす。だから→カッコイイ！

4. 国旗

国旗の掲揚は「日の出」を、降納は「日の入」を表していると言われている。また、一般社会の国旗に対する考え（雨天時の取り扱い）とボーイスカウトの考えは、多少違っている。そこを押さえる。また、旗の単位は「流（旒）」。

同時に、国際社会における「国旗」の扱い、他国の国旗への敬意についても確認する。

◎指導のポイント

- 国旗掲揚については、三脚ではなくて、掲揚柱を立てて、国旗掲揚を行うことが原則。
  →これは団所有のキャンプ場以外の「野営地では、とりあえず三脚でいいんだ！」的考えを持たせないため。
- 国旗の受け渡しについて。
  「基本動作・礼式の基準」によると、集会では、国旗は隊長から受け取ってからセットではなく、初めから掲揚柱にセットしてあることを基本にしている。WB研修所等でいつも思うのだが、あのもたもたした時間は緊張感ある進行リズム会わないと感じている。スマートネスを第一とするスカウティングであるならば、基準に沿って行っていただきたい。

5. 規律と秩序

- 人間の集団（社会）には、必ずルールがあるし、生まれてくる。ルールを守らないと、その集団のメンバーとして受け入れにくい。集団のルールを受け入れることは、良き社会人になるための第一歩。
- 良い仲間は、約束を守り、集団の規律に従う。仲間に対して迷惑をかけないように心がけることから、仲間に対する思いやりが育っていく。
- 指導者は、スカウト一人ひとり（個人）に対して、こうした面の観察も十分に行う必要がある。
- 一人ひとりの規律があって、はじめて集団の秩序が生まれる。一人ひとりの心が、他の人の規律と同調して全体秩序になる。良い隊は、よい規律から生まれる。
- 隊は個々のスカウトの集合体である。スカウトを集団の中に適応させながら、各スカウトの個性を伸ばしていく努力をしていなければならない。
- 規律と秩序を確立するのは、隊長の責務である。このために、注意力と意識の集中と、その維持が大切である。
- ここにあげたのは一つの型であり、全国統一のもので基本となるもので

■ 国旗掲揚の基本

①門外（正面）から見て左が上位。国旗は、原則として自国旗に最優先権が与えられるが、今日、日本では、とくに外国に敬意を表わすという意味から、外国国旗をポールまたは壁に向かって左側（上位席）に、日本国旗を右側に掲揚するのが一般的な形となっている。

②国旗を旗竿（ポール）に掲揚する場合は、常に旗竿の最上部（竿頭）に接して掲げる。また、三脚などを使用する場合は、旗布を地面につけてはいけない。

③国旗はヒモのついている方を向かって左に、旗を右に流すように掲げる。

④国旗の掲揚は、通常、日の出から日没までとする。

⑤国旗を汚さないよう大切に扱う。雨天でも掲揚するのが基本。

⑥自国の国旗（日本国旗）を掲げることなく、外国国旗のみを掲げない。また、一本のポールに異なる国旗を揚げない。

⑦複数の国旗を掲揚する場合は、最上位の旗を最初に掲揚する。また、降納の場合は、最上位の旗を最後とする。

⑧弔意を表わす場合は、半旗を掲げることがある。その手順は、ポールの場合、一度旗竿の最上部まであげてから半旗の位置まで下げる。

⑨自国・外国にかかわらず、国旗に敬意を払う。国旗掲揚の時、起立して敬礼、または脱帽して敬意を表わすのが（最低限の）国際儀礼。

■ 国旗としての条件

国旗は「国旗を揚げる」という意図のもとに掲揚されたとき、はじめて国のシンボルとして敬愛の対象となるもので、そのためには「旗」、「竿（ポール）」「冠頭」の3つが揃って、はじめて正式な国旗となる。

つまり、**壁等に貼ったものは国旗とはみなさない。**（国旗のようなただの旗）

■ 天候と掲揚時刻

国旗は、天候にかかわらず（雨の日でも）揚げるのが正しい（明治3年太政官布告第57条第三項但書）。

一般では雨天時に国旗を揚げないことが多くなっているが、それは、国連旗がその規程に「天候が険悪な日には掲揚してはならない」とあるため、悪天候時の掲揚は禁止されていることから、それに倣って次第に広まったためと思われる。

また、掲揚する時刻に決まりはない。午前8時頃に揚げ、午後は日没頃や終業時に降ろすのが通例である。

ある。基本を理解したならば、各隊でこれを応用できる。

- スマートネスから士気・やる気を高揚し、さらに、スカウトの活動を通じて、モラル（道徳）までのばして行くことがスカウティングの教育目標である。
  ①基本動作は、隊の秩序やけじめをつける意味で、重要な教育要素である。それだけでなく、ボーイスカウトの基本「スカウティングの４本柱」の「人格」と「健康」を育む重要な教育要素でもある。
  ②日常の隊活動で扱う動作なので、期間中に身に付けてほしい。
  ③スカウトの立場での実習であったが、実際には指導者としてスカウトを指導する立場であることを認識してほしい。
  ④この時間で全てを身に付けるのではなく、コース期間中を通して身に付ける。

●キャンプにおける開会セレモニーの例

★キャンプ場の集合地点（到着地点）に、指導者と上班集合。
★国旗掲揚柱を設置・確認。プログラム担当副長は、隊長から国旗を受け取り国旗掲揚ロープにセットする。そしてスカウト達の到着を待つ。
★集合地点には、荷物置きシート（濡れている場合）が置いてあり、タープ（雨天の場合）が張ってある。国旗・隊旗もセットしてある。
★スカウトの集合地点は、セレモニーの広場からは見えない、ちょっと離れた場所。そこで全員の到着を待ち、広場に向かう。
★広場に到着したら、班長は上班に到着報告をする。上班は、荷物を降ろさせ、開会セレモニーのために、服装を整えさせる。
★全ての班（スカウト）が到着し、服装を整えたら集合をかける。
○上班
「集合!!」（U字形の身ぶり信号）
※集合がもたもたしていたら（していなくても）、一旦解散させ、再度集合をかける。
★きちんと整列し（班長はU字形における自分の位置と姿勢について指示する）、セレモニーの開始できる態勢が整ったら「気をつけ」の指示。
→A副長（プログラム担当）に集合完了の報告をする。
○プログラム担当副長（→隊の開会セレモニーなので隊指導者が司会進行）
「ただ今より、10月隊集会、開会式を行います。」
「国旗儀礼」（→この合図で全員国旗に向く）
★当番班の国旗掲揚手（正副）が出てきて掲揚準備。準備完了の挙手。
○隊長
「揚げ!」
★掲揚手は国旗を揚げる。
○プログラム担当副長
「元に位置に。」（この間も、掲揚手は綱を留めている。）
★国旗掲揚手は国旗に敬礼し、班の所定の位置に戻り、回れ右をして、気をつけの姿勢をとる。
○プログラム担当副長
「ソング・谷間のキャンプ」（参加者が知らなくてもとにかく歌う!）
★当番班の担当スカウトは一歩前に出て指揮をする。
○プログラム担当副長
「隊長の話」
★隊長が出てきて… 元に位置に戻る。
○プログラム担当副長
「以上をもって、隊集会開会式を終わります」
「今後のスケジュールを知らせます。
この後、00:00から設営を開始、00:00終了。国旗降納及び配給は00:00。」

★キャンプ地での掲揚

●国旗は「国旗を揚げるという意図のもとに掲揚されるとき、初めて国のシンボルとなり得る。そのためには「旗」「竿」「冠頭」の三つが揃って初めて正規の「国旗」となる。
●冠頭は「金色の玉」であることはなく、また旗竿も白黒である必要はない。「冠頭」に何もないことがいけない。
●また旗布が畳んであるうちはまだ正式の国旗ではない。
▶ボーイスカウトのキャンプなどでは野営場の適当な立木の枝にロープをかけて国旗を揚げることがある。
➡冠頭もないし、綱止めもないが、略式として行うことは差し支えない。

● 隊旗と組旗について

教育規程では各隊は「隊旗」を持つこととなっている。

隊旗は隊の象徴であり、いつも隊とともにある。スカウトは「ちかい」をたてるときに、隊旗の下で誓う。隊旗という「モノ」に対して誓うのではなく、国旗と同様に、隊とって隊旗は隊そのものなのだから、スカウトはその隊で活動し立派なスカウトになることを自分自身、そして他のスカウトや指導者に対して誓うのだ。

「班旗」については、教育規程には明記されてはいないが、全国ほとんどの班が班旗を持ってる。この班旗は、班のシンボルであり、班の仲間の拠り所として位置づけられている。であるから、その意味と取り扱い方をスカウトにしっかりと伝え、粗雑に扱ったり、地面に直接置いて汚したりしないよう、きちんとそのココロを伝えてもらいたい。

軍人は自分より階級が上の将官・士官の前では基本的に気をつけの姿勢をとる。「気をつけ」の姿勢をとった場合、基本的には上官からの「休め」、「進め」など別の号令が出るまで、あるいは「楽にしたまえ」といった口頭での指示が出るまで姿勢を変えたり、ゆらゆらと動いてはならない。また、私語を喋ってはならない。

6. 行進

行進は、今では特に学校でもきちんと教えてはいないようである。

ジャンボリーや高校野球の開会式を見ていても「歩くのが下手だなぁ」と感じる。先頃実施された茨城国体の入場でもそれは感じられた。プラカードを持つ女子高生の足の運び、リズムの取り方が実に下手なのである（47 都道府県中、きちんとできていたのはたった２人（東京と愛知担当）だけだった）。今は、先生も大会関係者も「行進」についての知見がないのであろうか・・・。

◎指導のポイント

【前へ進め】

●合図

㋐「前へ……進め」

㋑号令は、リズムとテンポが大切。それによって、歩き出しのタイミング、歩く速度が決まるため、しっかりと合図を出すこと。

♩	♩	♩	♩	♩	𝄽	♩	♩
ぜんた	あー	あー	い！	すすめ！		左足	右足

このように合図は６拍で、歩き出し動作は次の７拍目から。

㋒テンポは、４拍子で、ボーイ以上は　♩=120

カブ以下は　♩=130

が適当（リズミカルに１秒で約２歩）。

ただし、音楽（行進曲）があれば、それに合わせる。

●方法

㋐歩き出しは、**<u>左足</u>**<u>から</u>踏み出す。

㋑上体は自然に起こし、腰とひざを伸ばし、足は踵からつくようにする。

㋒腕は前後に自然に振る。

㋓頭は起こして前方を見る。

㋔カブ年代では、拍子に合わせ、縦の列をそろえて歩く。

歩調がそろっていない時は、ツーステップの要領でそろえる。

●留意点

㋐足先は、まっすぐ進行方向に向けて歩く。

㋑足をあげるタイミング、地面に着けるタイミングを合わせて正しく歩く。（基本は、足を地面に着けるタイミングを拍子に合わせる）

㋒太腿が地面と平行になるまで挙げるのが基本だが、例えば足の裏を地面から 20cm 上げるというやり方も可。

㋓（余談）ちなみにマーチングバンドでは、5m=8 歩、つまり１歩＝62.5cm の歩幅が基準となっている。

【全体、止まれ】

●合図

㋐「全体……止まれ」

㋑号令は、リズムとテンポが大切。それによって、歩き出しのタイミング、歩く速度が決まるため、しっかりと合図を出すこと。

♩	♩	♩	♩	♩	♩	♩	𝄽
ぜんた	ー	ー	い	止まれ	（右）	（停止）	

このように合図は５拍（４拍子で１小節）、停止は２拍後。

●方法

㋐「止まれ」の合図から、２動作で完了する。

㋑第１動作で、右足を１歩前に踏み出し、第２動作で、後ろの左足を引きつけて止まる。

●留意点

㋐１歩前に踏み出す足は、踵から踏みだし、２動作で気をつけの姿勢をとらせる。

＊「ぜんたあーあーい」の４拍の長さで歩く速度を示す。「あー」は「ー」とただ伸ばすのだはなく、抑揚をつけて「あー」「あー」とリズムを刻んで声をだす。

＊合図を３拍＋１拍休みで行い、５拍目に左足から歩き出すやり方もあるが、テンポが取りづらい。

＊行進曲がないときのかけ声の例
（土浦・鈴木志郎氏より。これは 1967 の第 12 回世界ジャンボリー：アメリカで習ってきたとのこと）

Your Left, Your Left, Two Three Four
Your Left, Your Left, Two Three Four
Count (One, Two),
and more (Three, Four)
One, Two, Three, Four
(One Two, Three Four)
※はじめからくり返す

安全・衛生

(1) 指導上のねらい・ポイント

衛生と安全は「楽しいスカウティング」「楽しいキャンプ」を過ごすために必要なことである。そのために、

・事故を起こさない
・病気にならない
・怪我をしない
・心と身体を健やかに保つ

これが「安全は全てに優先される」

ということなのだ。これについては、カブはもちろんのこと、ベンチャースカウトであってもなかなか自己管理をすることが難しいものである。

そのためにも指導者が存在するわけだが、その指導者自身がこれらの内容を知らないとすれば「楽しいスカウティング」「楽しいキャンプ」は成り立たないことを理解してもらいたい。

(2) キャンプにおける衛生の必要性

楽しい活動をするには、健康を保つことが第一となる。少しでも健康を損ねると、いろいろなところに影響を及ぼし、せっかくの楽しいキャンプが台無しになってしまう。特に、スカウト活動は少人数のグループで行われることから、たった 1 人でも健康を損ねるということは、全体の行動を制約し、また士気の低下を招くことになる。

以下に、キャンプで起こりそうな健康阻害要因を列挙してみる。

項目	原　因	症状・状況	防止策・対策
便秘	環境の変化が大きい。	腹が張って苦しくなる。腹痛、頭痛、吐き気、不眠、精神的不安、思考能力の低下等。	普段通りの生活リズムの維持、果物の摂取（リンゴ酸、クエン酸）等
手を洗わない	手洗い設備がない（不足、遠い）	腹痛、吐き気、食中毒	サイトには手洗い所を確実に設ける。石けんで 15 秒以上の時間を掛けて手を洗う。爪を切る。
水の飲み過ぎ	水の飲み過ぎ	腹痛、バテ。	スポーツドリンク、食塩添加のトマトジュースや麦茶を一口ずつゆっくり飲む。清涼飲料水は不可。
熱中症	強い日差しのもとでの労働や長時間の歩行等。	頭痛、吐き気、めまい。顔が赤くなり、皮膚は乾燥、早い脈や呼吸。	適当な木陰での休憩、帽子の着用、汗が蒸発しやすい衣服の着用など。また、水分の十分な補給。
害虫	刺される、触れる	腫れ、痛み、意識不明、アレルギーなど	生息環境を取り除く。殺虫剤。投薬（ヒスタミン系）、塗り薬。
下着を替えない	汗、皮脂の分泌	下痢、不眠、	下着の着替えは汗を吸うことで、発汗をよくし体温を一定に保つことにある。なるべく乾いた乾きやすい材質のものを。昼間着た下着はすでに汗を吸っていて身体を冷やす。また清潔を保つことからも、乾いた下着を寝る前に着るように。
テント内の食料	体温や人いきれ、結露等で温度・湿度が高い	食料が腐敗しやすい。また、害虫等を呼び寄せることになる。	食料は原則として冷暗所で害虫のなどを防御して保存する。適切な換気。
トイレ 水穴	処理の不足	におい、害虫の発生。	土で覆う。薫りのある植物の葉の利用。 土による濾過、地中バクテリアによる分解を考慮。定期的な消毒。
ゴミ	処理の不足	におい、害虫の発生。	分別して、生ゴミは密閉容器に入れる。

(3) キャンプにおける健康の確認と維持

スカウトの健康については、隊長は次の要素を理解しておくことが大切である。

○少年少女の特性を知る

精神と肉体のアンバランス、未熟さとともに驚くべき成長、飽きやすさ疲れやすさが少年期の特性だ。

成長期であり思春期でもある。

隊長はまずこれらの点を知っておく必要がある。

○健康であることの確認

スカウトの健康状態を常に把握し、その健康を確認しておかなければならない、そのためにはスカウトの保護者と連絡を密にして、スカウトの健康状態に関する情報の収集か必要（健康調査書）、常にスカウトと接し、異常を感じることがないかという点にも留意する。多くのスカウトと接していると、ひとりだけ何か異常のあるスカウトには気づくものだ。

また、キャンプの前には健康診断を行うことが多い。担当した医師がキャンプには参加しない場合、健康診断で気がついたことを健康安全担当の指導者にきちんと引き継がなければ、健康診断を行った意味がない。大切なことは、一人一人のスカウトを継続的に観察し、記録を保存して上進の際には次の隊に引き継いでいくことである。特に持病・アレルギーなどには重大な結果をもたらすものがあるので、指導者も熟知していなければならない。

また、ボーイ隊の進級課目では、自分の健康状態のチェックがステップアップしてできるように組み立てられている。

○活動に応じた休養と休憩が必要

スカウトは、まだ成長期の年代である。常に休養・睡眠と栄養が必要。このことを隊長は機会あるごとにスカウトと話し合い、実行させるよう努力するべきだ。

現代のスカウトを取り巻く環境は、睡眠時間の減少による慢性睡眠不足で、これにより注意力の散漫、思考力の減退を招き、健康に悪いばかりでなく、場合によっては、大きな事故つながることもある。

○病気の早期発見を

病気には多種多様なものがあり、その総てを見極めるのは無理である。しかし、自分自身で早期に発見可能な病気も数多くある。こし食欲・便通・体温などはよいバロメーターだ。自分で自分を注意する。この簡単なことが極めて大切であると言うことをスカウトに機会あるごとに話そう。

○心の健康にも注意

健康とは身体的なものだけでなく、精神的・心理的な健康も考えなければならない。

現代は、いろいろな意味で環境が整っているため、ちょっとしたダメージ（病気、怪我、人間関係等）により落ち込んでしまったり攻撃的になったりする、ガマンができない、いわゆる打たれ弱い子どもが多くなった。

また、いじめについては、いくら「ちかい」をたてたスカウトの間でも見られないワケではない。その多くは「標準」から外れている者が攻撃の対象となる。これは日本の社会に特有？のもので、いわゆる個性が突出している者は脅威となり得るから、集団の力で排除する・・・というモノである。しかしスカウト教育は「個性教育」つまり、良い個性を伸ばすことをこの運動の方針のひとつにしている。そのため「キミ」と「ボク」は違っていて当たり前という価値観を機会あるごとに話そう。

(4) 作業と休養と栄養

作業、休養、栄養に調和のある日程であって、初めて周到な計画といえる。

① キャンプ地に到着する時刻は、設営作業が日没までに完了するよう予定されていることが望ましい。到着日の夜間作業はその日の過労に追打ちをかけ、事故発生に直結する。

② 日々の作業は目標と作業の分担、および共同の方針が明らかであれば、厳しくても耐えられる。適当な時期に休み、汗の始末をし、身体を清潔にする。

③ 作業と発汗との関係を考え、寒い時は、初めは少し厚着であっても、作業の状態によって順次脱がせる。真夏に裸になったり無帽で長時間作業をさせることはさけるべきである。

④ 就寝、消灯の時刻は、その日の作業の程度、あるいは翌日の起床時刻の繰り上げなどによって早めることはあっても、延ばすことは望ましくない。

⑤ 指導者が過労に陥ることは、情緒の安定を欠きやすく楽しいキャンプという目的にそむき、大事故につながる。指導者が常に冷静に行動できる協力態勢を要す。

○睡眠と仮眠（午睡）

① ボーイスカウト初級の年齢では、午前 6 時起床、午後 10 時就寝の 8 時間睡眠は最小限の時間である。真夜中 12 時を越しての就寝は疲労が著しいため、8 時間寝かしても疲労の回復は困難となる。

② 8 時間睡眠を最も有効にするには、就寝前に精神と肉体の興奮が静まるように、心静かな夜話等が必要である。

③ 寝ぼけ、夜尿症の傾向のあるスカウトに対して、指導者は快くその面倒の労をとってやりたい。安心して熟睡できるような信頼関係にありたい。

④ 仮眠（午睡）は睡眠と異なる。引続いての作業の途中、例えば昼食後、または真夏の午後 2 時から 3 時頃に、たとえ眠れなくても眼を閉じ、しばらく身体を横たえて過労を防ぐことを目的とする。

⑤ 仮眠は 60 分以内がよい。深い眠りに入る前に起こして次の作業に入る。

○栄養

栄養は作業による消耗を補填するだけでなく、全キャンプ生活を通じいて、筋肉質な身体に変えていくためにも、量と質に充分の配慮が必要である。

① 蛋白性食品の欠乏がないようにする。好き嫌いなく何でもよくかんで食べる習慣をつけ、年齢、体格に応じたカロリーを日常生活より 2 ～ 3 割多くとるとよい。

② 生野菜、特に生のまま食べられるキャベツ、トマト、ピーマンや、果物が現地購入できることが望ましい。野草、山菜などは、その班別、調理法に経験と自信のない場合は危険である。キノコ類は特に注意することが必要である。

③ 間食は栄養分の不足を補う目的で食べるとよい。菓子類なら何でもよいということでなく、蛋白質の多いものとか日頃の栄養を補うものや果物がよい。

④ インスタント食品、人工着色、人工甘味の飲料水等は健康上好ましくない場合があるので注意をようする。

(5) 夜の野営地における適切な明かりの取り方。

○まず第一に、必要十分な明るさが必要範囲で確保できれば良い。必要以上でも以下でもよくはない。煌々とまばゆい照明は野営には似合わないし、他のキャンパーや野生動物等に悪影響を及ぼす。

その逆も真なりで、共用のキャンプ場で、他のキャンパーの煌々としたランタンの明かりは、時に迷惑である。

○少ない明かりだと安全が損なわれる。ということで、複数の照明をその照

明器具の特長を生かして配置する。
○虫害を防止するには、虫集め用の明るい（白色光）照明（ガソリンランタン）をやや遠方に置き（照らしたくない方向には、リフレクターを付ける等の工夫も）、食卓等には、多少暗くした照明（電池ランタン）を置く。作業をするのであれば、ヘッドライトで手元を照らす。
○深夜は、特にカブのキャンプでは、長時間点灯可能なランタンをやや暗めに灯して、各テントから遠くない所（ランタンの光がほんのり届く程度のところ）に置いておく。闇への恐怖を希釈するためと、トイレのための寝起きしてもスカウトが安心できるように。

(6) 灯火の正しい使用法

○燃焼系というと乾電池を除くものとなる。現在最もポピュラーなのはホワイトガソリンとカートリッジガスであり、灯油を使用するものはほとんど見なくなった（インテリアとしては「ハリケーンランプ」があるが・・・）。そのため３種について使用法を学ぶと言っても、、ガソリン、ガス、ロウソク（キャンドル）の３種で良いだろう。
○まず、ガソリンとガスのランタンは基本的にストーブと変わらない。炎をマントルと呼ばれる部分（触媒）で光に変えるものである。燃料による明るさもさほど差はない（ガスは初めから気体、ガソリンは気体にしてから燃す）。マントルは、布製の網を燃やした、言わば灰でできているから、大きな振動を与えるとこわれやすいので、取り扱いには注意が必要だ。
○ガスのものは、カートリッジと本体と分離できるので、それぞれはさほど大きくないが、ガソリンのものは一体となっているので大きく重いし、燃料の補充の際にポンピングが必要となる。。
○ランタンとストーブは、同じ燃料のものを用意するのが良い。同じ種類だと調達が１回ですみ、また使い回しができる。
特に自分達で装備を運ばなければならない場合はガス、車で運べる時はガソリンを使い分けるといい。
○キャンプの夜の月や星の淡い光とバランスがとれるのは、キャンドルである。

※現在は、高輝度 LED が急速に普及し始めており、価格もこなれてきた。それを使用した照明器具が多数出てきた。それも考慮する必要があろう。特にヘッドライト･ハンディライトそれぞれに特長があり、得意とするシーンがある。どちらか１つを選ぶのであれば、単三･単四電池を使用するヘッドライトとなろう。

(7) テント・寝具の衛生

①テントの湿気の防止と乾燥作業の必要性とその方法。

○湿気の原因　→　地面からの湿気、夜露、結露、雨など。
○湿気の作用　→　体調変化（冷えからくる頭痛、腹痛、便秘、下痢、不眠、発熱）
○対　　策　→　乾燥に心がける。昼間は扉を開け、ウォールをあげておく。グランドシートを外して干す。
シート下の地面も乾燥させる。

※詳しくは、冊子「野営章」P.39 ～ 43 特に詳しく掲載されているので、担当者は精読しておくこと。

(8) 炊具の洗浄と乾燥

①水の使い方、排水の処理

○スカウトキャンプでは、炊事や洗面等は全て班サイトで行うことを原則としている（たとえ炊事場や水道が完備されているキャンプ場であっても）。

水場からサイトに水を運ぶことは重労働なのである。

○ボーイ隊では、水汲みは新入隊員の大きな仕事だ。

この意味は、「先輩達が辛いことを押しつける」ということではなく、「水」という必需品の補給と管理という重要な任務を任されている・・・ということを理解させる（この辛い経験がスカウトには大切であることを忘れてはいけない）。配給を取りに行くのも同じ。

○そのため、限りある水をいかに有効利用し、炊具や食器を洗うかの工夫を、ここでは考えなければならない。

- 大昔は「コップ１杯の水で、歯を磨き、顔を洗う」・・と言われていた。化粧をする成人女性は無理だろうが、その精神（意図）は汲んでもらいたい。
- 無駄な使い方をしないことは、スカウト達は身にしみている。指導者はどうか?

（ア）炊具を汚さない工夫

- メニューの多様性と栄養価のバランスは保ちながら、使う食器が少なく、炊具が洗い易く洗う手間が少ない献立を考える。
- キャンプでカレーは定番であるが、洗うという視点で見ればカレーは嬉しくない。

（イ）食器を汚さない工夫

- 食器をラップで覆って、そこに料理を盛る。紙食器を使う。食器をトイペで拭く・・・などいろいろ行われているが、どこかはき違えているような気がしてならない。
- 基本は、日本の家庭で昔から行われてきた伝統的なやり方の「使った食器でお茶を飲む」だろう。無駄を出さない、まさに「スカウトは質素である」だ。

（ウ）洗い方の工夫

- 少人数の班では、かえって水の無駄使いになってしまうが、こんなやり方もある。
- 水を入れたバケツを３つ用意する。１つめは洗剤が入った「食器洗い」用のバケツで、２つ目は、それを濯ぐ「すすぎ」用のバケツ。３つ目は残った洗剤をさらに落とす「仕上げ」用のバケツ。順に食器を浸して作業を行い、洗っていくという方法。

（エ）環境への配慮

- 一昔前までは「水穴」を掘って、そこに排水を捨てていた。潜在が含まれていようが、油が含まれていようが。
- 今は、下水道に捨てることを大原則としている。下水道が整備されていないところでは浄化槽を経由させたり、油取りフィルターなどを通すことも考える。

②炊具や食器の乾燥

○その目的は・・・・雑菌の繁殖を抑えること。（きれいにすること）

- まず、水気を布巾で拭いて乾燥させる。
- 乾燥は天日を利用する。まずは直射日光→日陰で確実に乾燥。
  これは、太陽光の赤外線で「乾燥」させ、紫外線で雑菌の繁殖を防ぐ。
  その後、日陰で確実に乾燥　させたうえで、収納する。
- 調理台を作ったのであれば、キャンプ中の昼間（キャンプを離れないとき）はそのまま調理台に置いておくことも可。
  夜間やサイトを離れる場合は収納する。

(9) 食料の保管

①食料の保存との衛生管理

●食料、特に肉、魚、野菜類の整頓と保存法

- 熱気が留まらないところ、冷暗な所や風通しの良い場所に保存する。人が寝ているテント内は、人の息や体表面からの水蒸気と温度によって、周囲よりも高温･多湿になっていることが多い。すなわち、細菌やカビが増殖しやすい環境になっており、食品の腐敗が進む可能性が高い状態にある。そのため､寝るテント内に食品を貯えることは避けなければならない。
- 肉類など腐敗しやすいものを購入したときは、真っ先に調理し食べるか、炊事をするまでに時間のあるときは、火を通して保存しておく（常温の時はその日のうちに食べること。ただし、必ずしも安全だとは言えない)。
- 肉の塩漬け、みそ漬加工したものは、夏のキャンプ地では、必ずしも安全だとは言えない。
- 比較的安全な保存方法は、肉を冷凍し、板氷を入れたクーラーボックスに入れておくことだ。以前は、冷たい流水の中か、井戸水の中にビニール袋に入れて保存するといった方法もとられていた。
- 現代は、食品流通が格段に良くなっており、結構な山奥でも新鮮なままで購入できるようになってきている。キャンプ地の近隣で、肉、魚、野菜が手に入れられる商店やスーパーを探せれば、保存を考えるよりもまず、新鮮なものを手に入れることを考える。
- キャンプ地での食料の保管は、野犬や野生動物による被害の対策を必ずすること。（特に野犬と熊）

(10) キャンプにおける安全

キャンプにおける安全については､(1) の囲みにある｢事故を起こさない｣｢怪我をしない｣を実現することである。どうすれば、それが実現できるか・・・。それは、危険な状況を「作らない」ことである。すなわち予防（希釈、排除、安全能力のアップ等）をすることである。

しかしながら、ウッドバッジ研修所の中で、例えば、「安全能力のアップ」を実現しろといってもそれは無理がある。あるがままの安全能力で如何に「安全」を確保できるかが問われるわけだが、その実現は難しいものがある。常に「安全」に対する意識を傾けさせ、その予防を実現させていくかにかかっている。

● ここが危ない

①ポールでの突き刺しや打撲

ポール等長尺物取り扱い時の作業空間の確認

②ポール跳ねによる突き刺しや打撲

作業時の身体保護（帽子や軍手の着用等）

③ペグの打ち作業時の打撲やペグの引き抜き時の腰部傷害

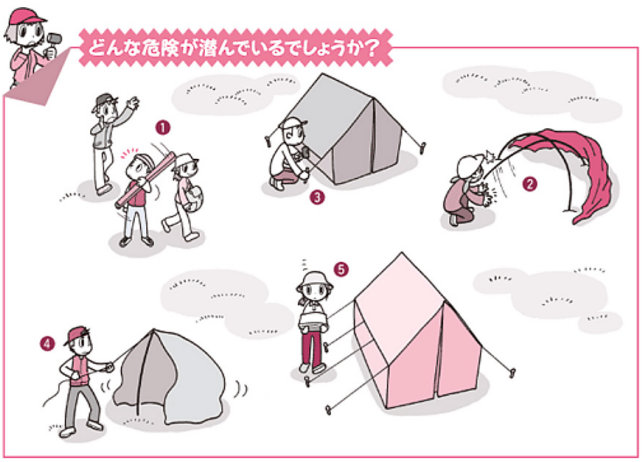
ハンマーのすっぽ抜け時の危険(前後方向の危険範囲)･手の保護等

④風であおられてのロープでの火傷

風により幕体があおられた時のロープによる火傷についての危険性を知らせ、保護具（軍手等）の使用

⑤張り綱でのつまづきによるケガ

張り綱が 1 つだけ飛び出ていると、引っかかってケガする危険が増しますので揃える。また、夕方や夜間になると足もとが見えにくくなるため、テントの張り綱やペグに白い布などをつけて、見やすくしておく。



● ここが危ない

①ナタを持つ手に軍手をしている

軍手をしていると滑りやすく、ナタがすっぽ抜ける危険。

②薪を持つ手が素手

薪を持つ手には、切り傷防止のために必ず軍手を付ける。その際、より安全のためと片方の軍手の紛失防止のためにも、薪を持つ手には　２重に軍手をつけると良い。

③石の上で、薪を割ろうとしている

ナタの刃が欠けたり、石が割れたりして、周囲に飛ぶ危険がある。必ず枕木（薪割台）の上で行う。

④不安定な姿勢

不安定な姿勢での薪割りは、自分の足にケガをすることがある。安定した姿勢で薪割りをする。

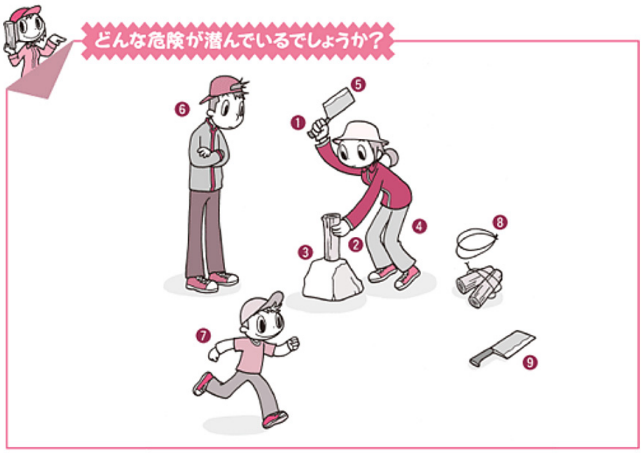
⑤ナタを振り上げている

ナタを振り下ろして左手を切る危険があるす。薪を割る時には、ナタの柄に近い部分の刃を、立てた薪の上部に当て、薪と一緒に軽く持ち上げて落とし、刃を薪に食い込ませる。その状態になったら、ナタを上下させて薪で枕木を何度か軽く叩く要領で割る。

⑥⑦ナタを扱っている人のそばに人がいる

すっぽぬけたナタや、割れた薪が飛んでくる危険性がある。

ナタを扱っている人の正面や背後には立たないようにする。



必ず薪割りの作業場を設置し、その中には入らないようにします。

⑧針金の輪が出しっ放し

薪を束ねていた針金の輪が、出しっ放しになっている。足を取られてケガをするので、片付ける。

⑨ナタが地面に放置されている

ナタが地面に放置され出しっぱなしになっており、踏みつけたら足をケガをするので、刃物は決められた道具置き場に戻す。

● ここが危ない

① 防火用水の準備がない

必ず防火用水を用意する。準備ができてからでないと、点火をしない。

②火のまわりを走り回っている

転んでケガをする危険がある、誤って火の中に飛び込んでしまう危険もある。ゲームや出し物を行うときは、走り回るものや火に近づくようなものは避ける。

また、井桁の周りに囲むように薪を置いて、火に近づきすぎないための目印にすることもある。

③井桁が大きすぎる

太い丸太で大きな井桁を組み、むやみに大きな火にすることは危険。自然環境の保護や資源の無駄遣いをなくすためにも、適度な火の大きさにする。

④灯油缶が燃えている井桁の近くに置いてある

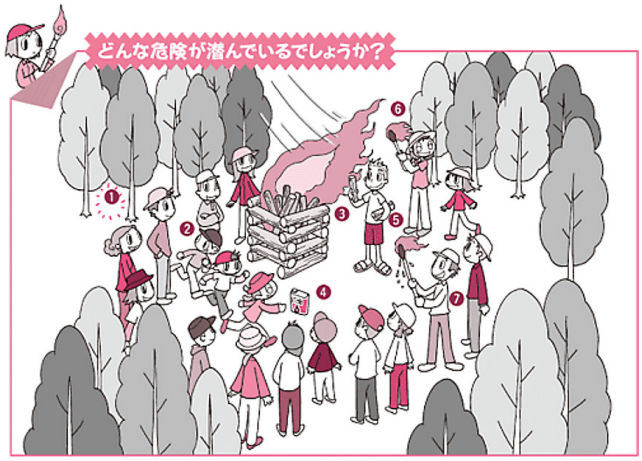
薪を組んだときに置き忘れたと思われる灯油缶が置かれている。爆発の危険がある。井桁を組み終わったら、まわりに火が燃え移るものがないように、井桁まわりをきれいしておく。

また、なるべく灯油を使わない薪組みを心がける。なお、燃えている最中に、灯油をかけるようなことはしてはならない。引火して大ヤケドを負う危険がある。

⑤風下から薪をくべようとしている

風下は、炎や火の粉をまともにあびて危険だ。しかも無帽・半袖・短パンでは、ヤケドの危険もある。ファイアキーパーは、危険から身を守るために必ず風上から近づき、ヤケド防止のため、帽子をかぶり、長袖、長ズボンで（化学繊維のものは避ける）、熱に強い皮手袋を着ける。

なお、ファイアキーパーが何度も薪を足すようではス



マートとはいえず、工夫不足が否めない。点火後は、危険回避以外に、火にふれないような薪組みを心がける。

⑥トーチの炎が風にあおられ、顔に向かっている

風にあおられたトーチの炎で、顔面にヤケドを負う危険がある。

風向きを考えてトーチを持つ。トーチは風下にして、先端を上げて持つように。

⑦トーチから灯油がたれている

トーチに浸した灯油が流れ落ちている。灯油が手元の方に流れ落ち、火が走りヤケドを負う危険がある。

トーチは、灯油に浸した後、灯油が垂れないようによく絞っておくことが大切。

● ここが危ない

①無帽で、薪をくべている

火の粉が飛んで、髪の毛に燃え移る危険がある。熱中症の予防のためにも、野外での活動では必ず帽子をかぶる。

②軍手を水でぬらしている

火を扱うときに軍手をぬらすと、かえって熱の伝導を助けることになりヤケドの危険がある。必ず、乾いた軍手や皮手袋を使う。

③着火剤をつぎ足そうとしている

着火剤のつぎ足しは、突然燃え上がり、ヤケドの危険があるので、点火後の着火剤のつぎ足しはしてはいけない。

④引火物が散らかっている

火が燃え移る危険がある。整理整頓する。

⑤素手で持とうとしている

調理に夢中になり、つい素手でつかむとヤケドをする。火に強い木綿の軍手や革手袋をしする。なお、化繊の軍手や滑り止め付の軍手は、火で溶けてヤケドをする危険がありますので使用してはならない。

⑥大きなナベを１人で運んでいる

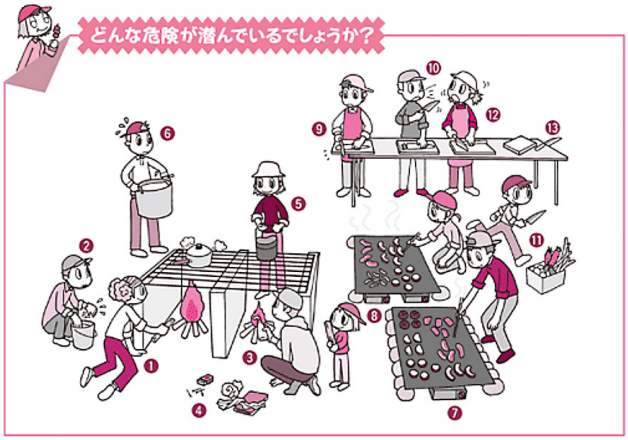
ナベを落としたり、中身をこぼしてヤケドの危険がある。中身を分けて運んだり、何人かで周囲に注意しながら運ぶ。

⑦コンロが囲われている

コンロの周囲を囲むと、熱対流が起こり、ガスボンベに熱がこもり爆発の危険がある。鉄板焼きなどのときは、コンロの通気性を良くして使用する。

⑧コンロを並べて、その上で鉄板を使用している

コンロを２台以上並べて、その上を大きな鉄板で覆うと、鉄板からの輻射熱でボンベが加熱され爆発する危険がある。コンロを並べて、その上で鉄板を使用してはならない。



⑨不安定な場所にまな板を置いて包丁を使っている

まな板がすべり、包丁で手を切る危険がある。まな板は、平らで安定した場所に置いて包丁を使う。

⑩包丁で指示している

包丁がそばの人に当たり、ケガをする危険がある。

包丁を人に向けるのは危険だとわかっていても、つい忙しいときなど、包丁を持った手で指示したりしてしまうことがある。人に向けることがないように細心の注意を払う。

⑪子どもが包丁をもって走っている

石などにつまずいて転ぶと、包丁で切る危険がある。包丁に限らず、刃物を持って走ったり、ふざけないように事前に注意を与え、見守る。

⑫よそ見しながら包丁を使っている

手元がおろそかになり、手を切る危険がある。事前に刃物を使用するときの注意をきちんと説明をする。

⑬包丁が調理台の端に置かれている

近くを通る子どもに触れたり、包丁が落下してケガをする危険がある。刃物を置く場所には気を配る。

スカウツオウン

（11/1）　　夜：吉田
（11/2）朝：小峰、夜：熊谷
（11/3）朝：富田、夜：石井
（11/4）朝：大月

研修所における「スカウツオウン」というと、一方向的な感話を聞いて、各人の信じる神（仏）にお祈りをする時間を設ける・・・という形式になりがちです。

しかしながら、研修所の位置づけを考えると「指導者（隊長）として基本を学ぶむところ」であり、言い換えれば、そこは全て模倣の対象であり、そこでのあらゆることは、そのまま隊に持ち帰られてしまうのです。「これは研修所特有のものなので」と但し書きを付けたとしても、そのまま隊で実行されると思ってください。

したがって、研修所では、極力、隊で実施できる形で行わなければならないのです。

ここでは、キャンプにおける朝夕のスカウツオウンの一例を提示します。

キャンプにおけるスカウツオウンは、その日の活動テーマに基づき、自分がするべきこと・できることを約束する機会です。何が自分にできるかを考え、そして実施し、一日を振り返る機会とします。

当然、「自分ができることを約束する機会」を設けるということは、「結果はどうでしたか？」という振り返る機会も必要になるということです。

【スカウツオウンの進め方　その 1】

●司会進行役

隊や班単位によって、副長や上級班長、班長や次長となりますが、スカウツオウンが活動の中で、定着化することによって、誰もが役を担うことができるようになります。

このコースでは、隊指導者→上級班長→班長→スカウトという順で行いましょう。

●内容

内容は、最初こそは隊指導者が立案していきますが、これも回数を重ねていくことで、スカウト自身が企画立案できるようになってきます。

●単位

スカウツオウンの単位は、隊･班単位となり、状況に応じて変えることが望ましいです。

●進め方（例）

1．黙想（静かに目を閉じる時間）
2．歌（できるだけ活動のテーマに合ったものや心が落ち着く歌にする）
3．おきて唱和（活動テーマに合う「おきて」を一つ選ぶことによって、印象づける）
4．B-P の言葉（B-P にかかわらなくても良いが、活動テーマに合った短い話にする）
5．発表（活動の始めは自分ができること、活動の終わりは自分ができたことを発表する）
6．黙とう（祈りの時間。活動の始めなら自分ができることをちかい、活動の終わりなら自分ができたことに感謝する）（しずかに目を閉じる）

（「信仰奨励章取得のための手引き」より）

- 参加者に対して、信仰心を高め、ちかいとおきての実践をより深めるために、スカウツオウンを行います。
- スカウツオウンの実施は、期間中に 3 回組み入れるほか、所長の裁量により隊集会の中で、あるいは夜の課業終了時などに班を中心として自発的に体験を重ねる機会を作ることも必要です。
- スカウツオウンの実施に際しては、次のことに留意し、参加者にも伝わる様な配慮をお願いします。
- スカワツオウンは「Scouts' own Service of the Scout, by the Scout, for the Scout」のことであり、スカウト自身が行う礼拝のことである。
- スカウツオウンは、キャンプ期間中の日曜日に行うものであると考えられていた時期もありますが、本来はいつ行ってもよく、また、キャンプ期間中だけでなく、隊集会、班集会など、あらゆる場面で実施する。
- 朝礼の後で行うときは、朝礼と区別するために、向きを変えたり、場所を変えたりして、はっきりした意図をもってスカワツオウンを行うようにする。
- 夜、火を囲みながら行うときは、キャンプファイアやヤーンと混同しないように配慮する。
- スカウツオウンの形式は自由であるが、聖句や聖歌など、スカウツオウンにふさわしい言葉や歌を組み入れて実施する純然たるスカウト活動である。
- サービスには祈りという意味がある。歌で気持ちを一つにし、その祈りを高揚させるためのお話し（言葉）を組み入れることが大切である。

●２日目のスカウツオウン
【テーマ：さらに深めよう】

●３日目のスカウツオウン
【テーマ：感謝の心】

進　め　方	内　　容	
【朝】		
①黙想	（静かに目を閉じる）	（静かに目を閉じる）
②歌	「平和の騎士」	「名誉にかけて」
③おきて唱和	「スカウトは勇敢である」 （全員がスカウトサインをし、司会者がはじめに独唱し、その後全員で唱和）	「スカウトは感謝の心をもつ」
④ B-P の言葉	「困難」 「困難な仕事に取り組まなければならない時は、それを助けてくれるよう神にお願いしなさい。そうすれば、神はあなたに力を与えてくれるだろう。しかし、それでもなお、あなた自身が取り組まなければならないことだ」	「班長たち」 「班長になった時、覚えておかなければならないことは、自分が本当に大きな責任と重要な地位についているのだということである。というのは、あなたは多くの班員たちの面倒を見なければならなくなるし、班員はあなたのお手本と指導で人格を形成することになるからだ。従って、もしあなたが怠け者になれば班員らもそうなることだろうし、逆にあなたが立派なスカウトになれば、班員らもほとんどそうなるものだ。 　あなたは自分の班を導いていかなければならない。そう、自分自身を信頼できる時だけ、班員たちの信頼を得られる。そして、自分の仕事を充分によく知っている時にだけ、自分に自信を持つことができるのである。 　あなたはあなた自身の個人的なお手本を示すことによって、完全に指導できるのだということを忘れてはならない。私の言いたいのはそのことで、これは成功を手にする簡単な方法なのである。そして、これは簡単な方法だということだけでなく、この方法しかないのである」
⑤一日の実践目標	一人ひとりが今日一日、人のために何をするか発表する	今日一日の実践目標を立てる（班単位：司会は班長）
⑥黙とう	実践目標として発表したことをちかう	実践目標を必ず実行するということをちかう
【夕】		
①黙想	（静かに目を閉じる）	全員がロウソクを手に持ち、火をつけて座る）
②歌	「ひとひの終わり」	「営火の祈り」
③おきて唱和	「スカウトは勇敢である」 （全員がスカウトサインをし、司会者がはじめに独唱し、その後全員で唱和）	「スカウトは感謝の心をもつ」
④ B-P の言葉	「幸福」 「神は私たちが人生を幸福に楽しむよう、この世界に送られたものと私は信じている。幸福を手にする本当の方法は、他の人に幸福を与えることである」	「祈り」 「祈りは心からするもので、暗記するものではない。私が個人的に好む祈りの主な原則を言うならば、祈りは短く最も簡単な言葉を使って表現し、次の二つの考え方のうちのいずれか一つに基礎をおくべきである。 　神から受けた恩恵または喜びを神に感謝すること。神に何かお返しするのに必要な精神的な保護、体力または導きを求めること。」
⑤一日の実践目標	一人ずつ何ができたか発表する	班全体で何ができたか班長一人ひとりが発表する。発表の終った班から火を消す。
⑥黙とう	実践目標を達成できたこと、無事に過ごすことができたことに感謝する	実践目標を達成できたこと、無事に過ごすことができたことに感謝する。

点　検

1. 点検は、有用な教育方法のひとつである。

特にスカウト･キャンプにおいては、実施と工夫･改善をくり返し（反復し）ながら、さらに高い次元に進んでいくプロセスの中で重要な位置を占める。

そういう意味からも、「点検」は、スカウトに真のスカウティングを実際に行わせる絶好の機会であり、自然の中での共同生活を通じて、「相互理解」「自己の改善」「進歩」を促す生活をさせることを主たるねらいとする、身体と心を磨く生活指導の重要な場であることを指導者は知っていなければ、点検は単なる「チェック」となってしまう。そのために、それが理解できるような「点検」を行うことが求められる。

ポ**イントは、「ちかいとおきて」の 実践、安全・衛生ができているか、次の行動･ 活動を見越した備え（整理整頓）がなされているか等を確認・評価し、また班の体制や規律の維持、スカウト同志のコミュニケーション状況、心理的なストレスの有無等を確認し、キャンプをスカウト自らが楽しむ→進んで行動・参加できる環境をつくり、日日の改善での進むべき目指す方向ことを知らせる場**でもある。

繰り返すが、点検の主たる目的は、キャンプの基準、安全･衛生を確保し、健康の維持、生活指導と、進歩と向上心を励ますため･･･に行うものである。また、朝の点検と夜の点検は、全くやり方が異なる。

（1）朝の点検

●このコースでは、点検は副長３人で行う

- 生活担当副長は、責任者となり、各班を総合的に評価する。点検の評価を所長に報告する。
- 他の副長は、補助者として、それぞれの担当項目について点検する。
  - ◦健康・衛生担当・・・・生活担当副長
  - ◦安全担当・・・・・・・安全・衛生担当副長
  - ◦野営担当・・・・・・・プログラム担当副長
- 班長は、あらかじめ班内において点検をしておく。

●点検を行う者の心構え

- まず、制服を正しく着用する。まず点検者相互で服装点検をして、班サイトに入る。スマートネスである。
- 点検は「あら探し」ではない。気づいた点は、具体的かつ親切にその場で指導する。
- 良い点や進歩した点を見つけ、賞賛し、勇気づけてやること。
- 改善や進歩に対するヒントを与える。
- 点検の結果をメモするときは、参加者の前で行わず、サイトを出てからに行う。

●点検を受ける者の心構え

- 班長は、あらかじめ班内で相互点検をする。班員のことについて十分に把握しておく。班報告書を作成し、当番班長に提出する。
- 制服を正しく着用し、班長は班旗を持って、班サイトの広場（広場がない場合は、班サイトの入口から少し奥まったところ、タープの前など）に横隊に整列して待つ。

（2）朝の点検の実際

●点検の３要素は「健康」「衛生」「安全」である。

- 特に健康については、重視しなくてはならない。
- 「ちかい」の3つめに「1. 体（physical）を強くし､心（menal）を健やかに､徳（moral）を養います」とある。
- これはそのまま一連の進行形として捉えると言われている。

●点検目的

●ちかいとおきての実践
●キャンプ基準の維持
●班制と進歩制の維持
●規律とチームワークの維持
●整理整頓と日々の改善
●健康管理と衛生管理
●災害防止と安全管理

●点検を実施するポイントは、次の４つである。

「スカウトの健康」
「スカウト及びキャンプサイトの衛生」
「キャンプサイトの安全」
「日々の改善」

●班長会議での指導

隊長は、点検の方法とポイントについて前日の班長会議でよく説明をしておく。

それにより、翌朝の点検がスムーズに行われる。

また、点検は制服を着用の上で規律正しく行われる。その意味と意図を班長に伝える。

●点検の時間

朝の点検は、朝食の片付けが終わった後、朝礼までの間に行うのが通例である。

この時間でなくてはならないということではないが、活動のタイミングからすれば、ここで行う　のが良いであろう。

●1班あたりの点検に要する時間

- だらだらと時間をかけるものではない。長くても1班あたり5分以内で終えたい。
- キャンプ2日目の最初の朝の点検は、評価の基準となるので、確認と指導も含めて時間を掛けて行っても良いだろう。
- 次回の点検からは、主として改善の度合いを確認することになるので、短時間で効率よく行うようにする。あまり長い時間を掛けることはスマートではないし、それ以降のプログラムに影響が出てしまう。

・つまり「体（physical）を強くし」⇨「心（menal）を健やかに」⇨「徳（moral）を養う」で、身体が弱ければ心は健やかにならない、心が健やかでなかったら徳は養われないと言える。

●スカウトに対して、主として班員の健康の観察と確認、身体の汚れや爪の状態の確認。

・挨拶、返事に精気と生気があるか、目はきちんと見据えられているか、姿勢はどうか等々身体と心の健康を確認する。

・身体・衣服・手・爪・靴の汚れ（スマートマス：常に清潔にしておく）（カブについては、生活習慣の励行の意味で、上記に加えてハンカチ、ちり紙、爪、手洗い等を）

●キャンプサイトは、テントの乾燥、寝具の乾燥、衣類の清潔さと着替え、食料の保管状況、ごみの始末、炊事場等の衛生の状況。

・テントの設営状況、備品の保管とメンテ、刃物の管理、炊事場やかまどの安全の状況を確認する。

・これらは、これからの1日を安全かつ楽しく・快適に過ごすために、スカウトの精神を引き締め、安全項目の周知と確認をするため。

・また、各人の成長を促すために、厳しい父親→「厳父」の心で愛情をもって行う（「厳父のごとく」）。

※点検は日によって、また状況に応じてポイントを変えて行う。

●点検は、指導者が責任を持って行う。

・これは、特に健康面についてであるが、スカウトにおいては、健康状態を常に把握し、その健康を確認することは隊指導者の責務である。そのため、隊長若しくは隊長から任務を分掌された副長が責任をもって行う。
このスカウトコースでは、分掌された副長によって行う。

●「朝」の点検の注意

・点検を行う指導者は、規律ある姿勢で「厳父」の心で行う。

・点検はあら探しではない。より快適な野営生活を送るための改善への気づきを促す。

・野営担当、安全担当がスカウトに指導する場合は、健康・衛生担当がスカウトをチェックするのを終えてからにする。

・WB研修所等では、全部の班を一斉に整列させて順次点検を行っていく方法であったり、点検の準備が整った班の班長が指導者を迎えに来る等の方法をとっているが、点検やり方に決まりはない。上記の主旨や意図が効果的に伝わるよう行えばいい。

・指導者のためのスカウト・キャンプや外国の書籍を見ると、全ての個人装備をシートの上に並べて点検を受けているイラストが載っている。本来はこのようにすべきである。
　これは全ての荷物を日々把握し、その日に使用するものを取り出しやすい場所に収納しておくこと、そして、全ての荷物をさらけ出すことで、隠し事なく清々しい気持ちで1日をすごすことができ、かつ指導者とスカウト信頼関係→より良い成長へと繋げられることからである。是非とも行ってもらいたい（女子に関しては下着や生理用品等に十分な配慮をすること。これは女性の副長から女子に伝えてもらう。）

（3）夜の点検

●主として安全衛生と整理整頓の状況に重点を置く。

●消灯後にスカウトの安全を願って静かに行う。

・不備な点、危険な点があれば、一応修正処置を施して、翌朝の点検時に注意・指導する。今日一日でどれだけ進歩改善されているかを評価する。スカウトが　　安心して安らかに眠れるよう優しい母の心をもって慈しみながら行う（「慈母のごとく」）。

※詳しくは「指キャン」P.48 ～ 55 参照のこと。

▶WB研修所における点検の手順

①班サイトを整理整頓する。

②衛生、安全の確認をする。

③次長は「班報告書」を作成し、上班に提出する。

④全班員が制服を着て、サイトの入口（ゲート）から入った正面に整列する。

⑤スカウト相互でスマートネスのチェックをする。

⑥チェックを完了したら、班長は班旗を隣のスカウトに渡し、点検を担当する指導者を呼びに行く。
「○○班、点検を受ける準備ができました。点検よろしくお願いします。」

⑦担当指導者は、班サイトを訪れる。
班長は「気をつけ」の号令を発し、その姿勢で待つ。

⑧相互に向かい合って「敬礼」をしたら、主担当副長は「これから点検を行います」と宣言する。

⑨健康・衛生担当（生活担当副長）は、班の全スカウトの健康状態、衛生状態をチェックする。この確認が終わるまでは、スカウトは動かさない。

⑩それが終わったら、安全・衛生担当副長は、食品、飲用水、食器関係、寝床等の衛生状況を確認に動く。

⑪同時に、サイトレイアウト、それぞれの保管状況、工作物等の安全を確認する。

⑫野営担当（プログラム担当副長）は、班サイトの設営状況を確認する翌日以降は、その進捗度、改善度を確認する。

⑬それぞれの担当指導者は、元の位置に戻り、スカウトと向かい合う。スカウトからのコメントを求める場合は、ここで求める。また、即時指導が必要な場合はここで行う。極力スカウトを移動させない。

⑭点検を終了する時は、互いに向かい合って、班長は「気をつけ」の号令を発し、双方気をつけの姿勢をとる。主担当副長は「これで点検を終わります」と宣言し、敬礼をして、サイトを去る。班は点検担当副長がサイトから出たら、気をつけの姿勢を解き、班長を中心に早速改善計画を練り、改善を開始する。

⑮点検担当副長は、サイトの外に出てから、合議し、それぞれ５点満点で得点を合計する。

⑯点検担当副長は、次の班の向かう。

●「夜」の点検の注意

- スカウトが安眠できるよう。また夜間にトイレ等に起きてサイトを歩くときに、その動線上に危険となるもの、事故の誘因となるものはないか。（工具、資材、工作物等）
- 野犬や野猫、その他の動物に食糧やゴミを荒らされないよう対応してあるか。
- 風や雨への備えができているか
- 雨の時は、雨水が溜まらずに排出されているか。
- 風の時は、テントやタープが飛ばされないよう張り綱やペグがきちんとと処理されているか、
  また、サイトにある他のものも対策が施されているか。
- 火の始末はきちんとされているか。
- 水（飲み水、雑用水、防火用水）は容器に満たされているか。
- 薪は翌日の分まで確保されているか、濡れないように処置してあるか。
- 炊具や食器は乾燥した状態で衛生的にしまわれているか。
- 工具は、工具箱に入っているか、入らないモノは安全対策をとって保管されているか。
- テントの換気はきちんとなされているか
- 靴は脱ぎっぱなしになっていないか（雨・夜露対策、野犬対策）
- 万一の場合に、最短の時間で撤収・撤退が可能なように。個人の荷物は整理・整頓されているか。
  →「そなえよつねに」である。

（4）点検の講評

●スカウトコースでは、点検の講評は、朝礼前に生活担当副長により行う。

- 点検担当指導者は、採点用紙を予め準備し、隊長の指示によりチェックと集計を行い、優秀班を決めておく。
- 隊長は、優秀班賞（彰）を用意しておく。
- 講評は、責任者である生活担当副長が行う。
- 朝礼の場所とは、異なった場所を選んで行う。上進がテキパキとU字に集合させる。
- 各班の生活状況とその進歩についての評価を発表する。
- 各班個々の問題点は、各班サイトで伝達することを原則として、全体の共通点（欠点を指摘するのではなく、良い点を褒め、悪い点については改善を促す）、特に重点目標を設けた場合は、それについて簡潔に講評する。

【留意点】

- 言葉づかいには十分に気を付けて、大きな声で明確に話す。
- 講評する内容については、要点をまとめ、端的に話す。
- 講評は、参加者に工夫の方向性を示唆し、サイトの状況を改善したり、進歩向上してい経過について励ますものである。
- 野営生活および野営基準の向上を促し激励するために「優秀班」を定め表彰することは望ましいこと。選定の基準としては、
  ⓐ採点表を集計し、いちばん上位の班
  ⓑ毎日の基準点を決め、基準点を突破した班（複数可）
  ⓒ重点目標を定め、それを重点的に採点
  ⓓ改善、工夫の跡が顕著な班

※参加者の野営経験に十分配慮にして決めること。

▶WB研修所における点検講評と優秀班の表彰の手順

①点検講評の場所で、上班が集合をかける（U字形）。
②上班は、隊長に集合完了報告。
③講評は、責任者である生活担当副長1人が行う。
④良いところ、更なる改善を要するところ、スカウトに目指させる方向などを、端的に講評する。（褒めて育てるということを忘れない）
⑤点検担当副長は、回れ右。隊長は、点検担当副長に対面の位置に進み出る。
⑥点検担当副長は、隊長に優秀班を報告する
「報告します。本日の点検の結果、○○の点が特に評価できたので□□班を優秀班とします。表彰をお願いします。」
⑦生活担当副長は、定位置に戻る。
⑧隊長は、優秀班を前に呼び。横隊に整列さる。
「優秀班、おめでとう。他の班の模範となるよう、今後もがんばってください。」
と言いながら、 班旗に「優秀班賞（彰）」を付ける。
⑨隊長は優秀班を回れ右させる。当番班長が祝声を送る。（当番班が優秀班の場合は、次の当番班の班長が祝声を送る。）
このタイミングで隊長は、列に戻る。
⑩優秀班は敬礼してそれを受け、答声を返す。
⑪優秀班は、列の元に位置に戻る。

▶点検講評の留意点

①ここでは、WB研修所での点検講評の手順を挙げたが、実際に隊において点検を行う際に誤解のないように、所長は登場させず、隊指導者によって講評・優秀班表彰を行うこととしてある。
②ただし、所長の意向で、変更はあり得る。

朝　礼

（1）朝礼は「所」としての朝礼とする。

朝礼は、隊キャンプにおいては、公式な一日の訓練日程の開始を示す重要なプログラムである。実施に当たっては、次のことに注意する。

●ポイント

- 朝礼は、隊指導者とスカウト（コーススタッフと参加者）の朝の公式な出会いの場である。
- 朝礼は、当番班の司会進行により進行し、定められた時間内に終了するよう心がける。
  班担当の指導で、進行表を作成し、プログラム担当副長の承認を得る。
- 国旗掲揚は、本番でもたつかないように、事前に十分練習しておく。（「朝の歌」は、事前に曲名を各班、所員に周知しておく）
- 所長の「朝の言葉」は、参加者それぞれが今日一日どのように過ごしていくかの指針となるよう、今日のテーマや目標について、短時間でかつ簡明な表現で伝え、一人ひとりが確認できるよう心がける。
  →後刻、隊掲示板に掲載する。
- 朝の歌は、スカウトソングの中から、研修所の朝のスタートにふさわしいもの、その日のテーマと研修所の流れを損なわないものを選ぶ（場合によっては、プログラム担当副長の指導が入る）。「朝の歌」は、事前に曲名を各班、所員に周知しておく。

●朝礼の進行

1	朝礼広場にU字形に集合 「気をつけ」
2	「○月○日、朝礼を行います。
3	「国旗掲揚」
4	「所長、朝の言葉」
5	「朝の歌、○○○○」
6	「気をつけ」 「これで朝礼を終わります」
7	（次の指示） 生活担当副長から指示する。

モーニング ゲーム

（1）研修所ではモーニングゲームを行う

WB研修所では日課の項目として取り入れられているので行うが、隊においては特段必須事項ではない。しなくてはならないと勘違いしているスタッフも多いのではないだろうか。

●ポイント

- この時間は、WB研修所で、午前の課業までの間の時間を活用して、士気や鋭気を養い、研修へのモチベーションを高めるために行ったのが、始まり。
- 何もゲームであることなく、ソングの練習だったり、班集会でも良いのである。・・・・がゲームを行う。
- ゲームをするのであれば･･･、この時間は、まだまだ「カラダ」は目覚めきっていないので、軽い体操の要素を含んだ（カラダをほぐし、安全の確保ができる範囲で）、班対抗のスカウティング･ゲームであること（班のチームワーク、結束度を高める）が望まれる。
- また、成人の研修では、年配者がいる（→特にボーイスカウトの指導者をしている人は、気持ちが若い方が多く、身体がそれについていっていない、つまり衰えていることを自覚しないで、ついやってしまう方が多い！！）ことを忘れてはならない。過激なゲームは（若者にとっては過激でも何でもないものであっても）控えることが賢明である。
- ゲームは表彰の対象とするため、その主旨にしたがったものを。

スカウティング・ゲーム

（1）良いゲームの要素

良いゲームとは・・・・

第１に、スカウトたちに興味が起こり、楽しさがあるものでなければならない。もちろんゲームの最中には、スカウトにとっては苦しみもあるだろうが、それらの苦しみを克服したとき、そこには大きな楽しみがあるのである。

第２に、一人でやるのではゲームではない。どうしても協力が必要になってくる。そこに協力の楽しさが生まれます。

第３に、班員全員が参加できるゲームでなければならない。特定の者だけができるというのでは、スカウティングとしてのゲームではない。班員全員が参加し、他班と競い合い、ともに楽しむ、それがゲームのよさである。

最後に、設備用具が簡単で、ルールが単純なものがよいゲームといえる。ルールブックを片手にしながらのゲームは、楽しさがなくなる。

2. ゲーム実施についての注意

(1) 適したゲームを選ぶこと。

どのゲームがどの班に適するかなどということを事前に決めることはできないが、しばらくの間いろいろ試しているうちに、その班や隊に適するゲームが見つかるはずだ。

しかし、適するからといってそのゲームだけを連続して行うことは、スカウトにあきられ逆効果となる。少なくとも１ヶ月ごとに、新しいゲームを試す必要がある。

(2) 全員が活躍できるものであること。

見ているだけ存在のスカウトが一人でもいてはならない。見ているだけではあきてしまい、あきればいたずらもしたくなる。

(3) 班をゲームのチーム（単位）とすること。

班を崩すのは、よほどの理由がなければしてはならない。

(4) ゲームもグリーンバーたちがリードして行う。

一般的にゲームの進行は副長補にもたせるのがよいが、上級班長にもたせるのも一案である。また各班長にも新しいゲームをリードする機会を与えるのも必要である。

(5) ゲームは、指導者より正確に教わること。

ゲームのルールをよく理解しておかないと、うまくゲームは進行しない。そのためには次の点の配慮と必要なる。

① ゲームに名称をつけること。これがないと次のときにも困ってしまう。
② そのゲームのためのフォーメーション（列とか、円とか）を正しくとること。
③ ルールを理解すること。正しく、はっきりと説明してもらうこと。
④ ゲームをやって見せてもらう。初めてのゲームはグリンバーたちだけでとか、１コ班を使って見本を示してもらう。
⑤ 質問を受けてもらう。不充分な理解のままゲームを始めることのないようにしなければならない。そのためには充分質問し答えててもらう。
⑥ ゲームの開始は、必要な用具や審判者などを整えてから開始すること。

スカウティングとキャンプ

（1）スカウト・キャンプと一般のキャンプとの違い

○一般のキャンプとスカウトキャンプの違いを明確する。それはどのような運営によって効果が現れるのかを考える。

◆一般のキャンプは、キャンプすること（野外でテントを張って泊まり、楽しむこと）そのものが目的。

◆スカウティングにおけるキャンプとは、キャンプすることが目的ではない。それはスカウト教育を効果的に行う場であり、そのための方法である。→ **「教育」という明確な目的を持っている。**

その点が、スカウトのキャンプとの大きな違いである。

①スカウト・キャンプが意図するもの（意義）とそれを実現させる方法

スカウトキャンプは、「真のスカウティング」をスカウトたちに行わせる絶好の機会！！と言われているが・・・

では、それはどんな状況で、どのように導き出すことができるか・・・・・

→　まずは、前述の「目的」の存在。

→　次に、キャンプという不便な状況を、いかに知識と技能、そして創意工夫で解消するか、それを楽しむ（心を養う）、仲間とともに取り

スカウト・キャンプの詳細については、別資料「野営大全」を精読ください。ここでは、ポイントを示すのみとします。

なぜキャンプを行うのか？（スカウトキャンプが意図するもの）

①キャンプを通してスカウトの発達（身体的、知的、情緒的、社会的、精神的）に寄与する。

②スカウティングの目的を達成するのに有効である。

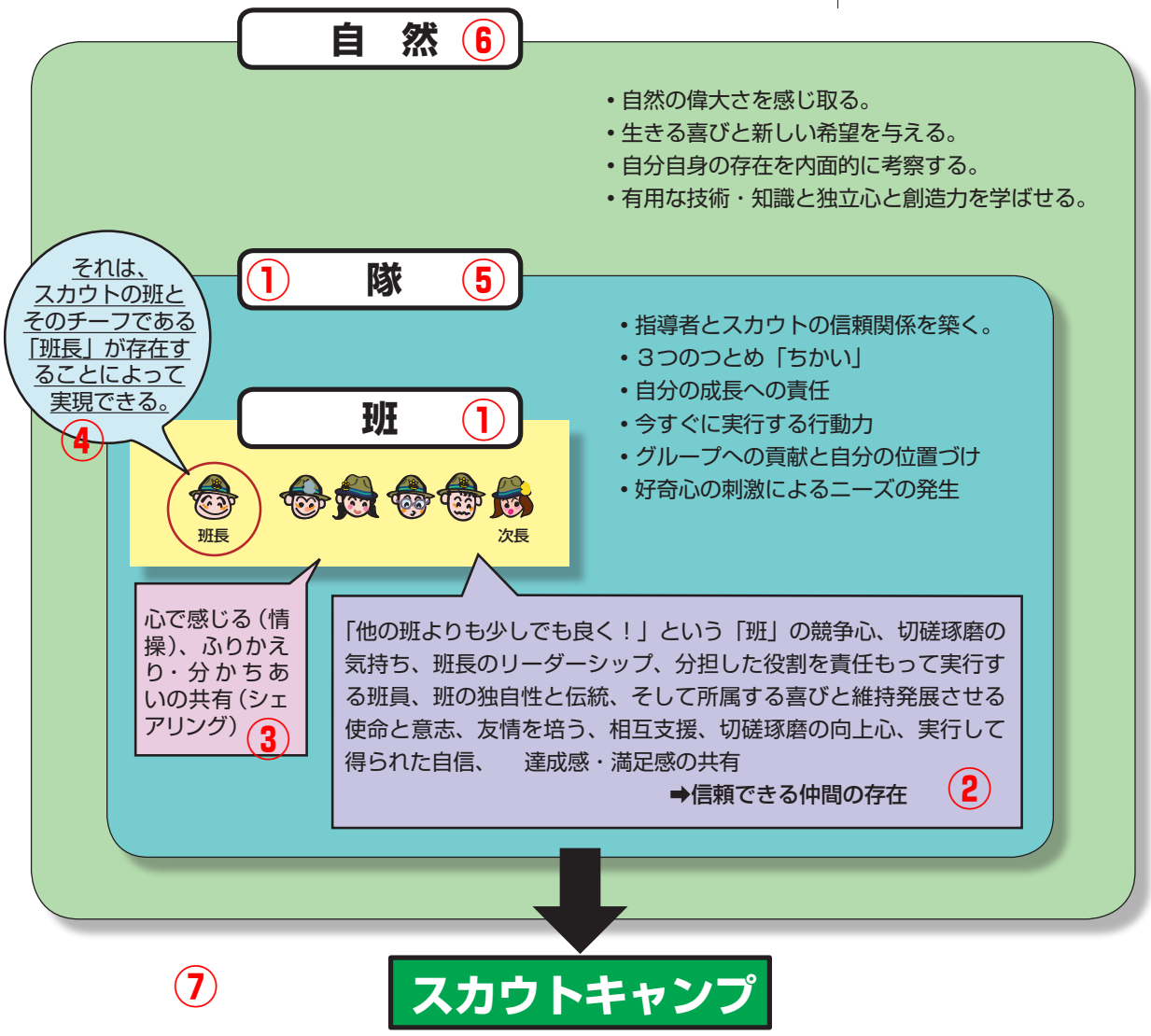
③スカウティングの目的とは ⇒ より良き社会人 ⇒人格・健康・知識と技能・奉仕

○ 自然の偉大さを感じ取る。

○ 班の共同生活による、指導性と責任感と友情を培う。

○ 他の班よりも少しでも良くという「班」の競争心、切磋琢磨の気持ち。

○ 真のスカウティングをスカウト達に行わせる絶好の機会



組み、結果を分かち合うのがスカウトキャンプ！

→　何で楽しいのか？　それは、創意工夫し、実際に行ったことが、すぐに結果として表れる・・・

つまり不便が改善されるのを目の当たりにでき、そのよろこびをに仲間と共有できるからだ！

→　そこには PDCA がある

（Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Act（改善）

スカウトキャンプの目的とは、

①班長を中心に「班」で取り組むことを決め、責任を持ってそれを遂行することが基本にある。

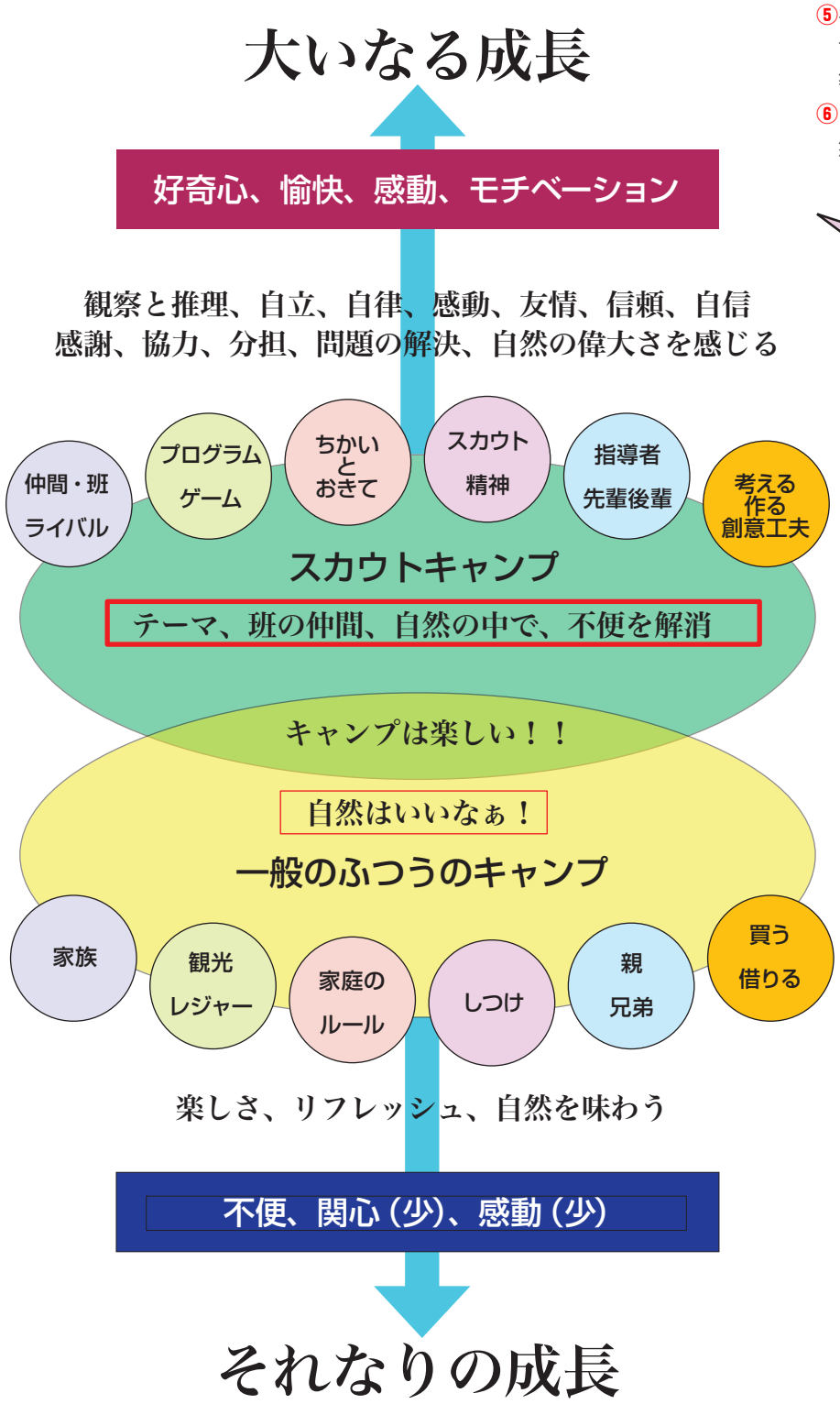
②「取り組むこと」は、できることではなく、努力してチャレンジすることで到達しうるものであること（目標）。

③そのために、班集会、隊集会で準備（知識・技能・精神）をしていく。

④ウイークエンドキャンプ、１泊キャンプを重ねて、長期キャンプにチャレンジする。

⑤キャンプ生活、健康保持、体力配分、協調性、積極性、向上心、思いやり、等々を育み、「班」を作り上げる。

⑥自然の中での腕試し。創意工夫、自然のすごさ、偉大さ。感謝、感動。



要するに、スカウトキャンプは、スカウト教育そのものである。

自分を成長させる場

そのための意図したプログラム

↕

家族の団らんの場

キャンプを楽しむアクティビティ

○プログラムとアクティビティ

個々の活動項目をアクティビティ、全体をプログラムという。この違いを使い分けてもらいたい。

１つのプログラムは、いくつもの一連のアクティビティで構成されている。

スカウトキャンプのルール

（1）スカウトキャンプのルールの例を示す

1.「安全の 3 原則」を必ず守ること。
① ルールを守る。:＜規範・道徳の原則＞
② 当然予想される危険を予防する。⇒安全は全てに優先する。:＜先取優位の原則＞
③ 思いがけず発生する危険に対処できる。⇒ 安全は自分で守る。:＜自守の原則＞

2. 安全について次の事項を守ること。
① ルールを守ること。
② 自分自身の行動に責任を持つこと。
③ プログラムを正しく実施すること。
④ 用具を正しく使用すること。
⑤ 健康状態を正しく把握すること。
⑥ 適正な服装と的確な行動をすること。

3. 生水は絶対に飲まない。

4. 燃えるゴミはできるだけ燃やす。カン、ビン、ペットボトル、プラスチック類はそれぞれ別の袋に分別して持ち帰る。

5. 汚水は直接流さず汚水処理場に流す。汚物は焼却場で燃やして廃物は埋めずに持ち帰る。

6. 作業中は、作業着にネッカチーフ、作業帽、軍手を着用し、雨天時は必ず雨具を着用する。

7. 本部への要求は班長をかならず通す。

8. 本部には無断で入らない。
本部に用事があるときは「○○班○○です。○○の用事で来ました。」とはっきり大きな声で名乗って、リーダーの許可を得てから入ること。

9. 体調の悪い者は班長に申告し、班長の指示により衛生係が本部に連れてくる。

10. サイト内の整理整頓に心掛ける。

11. サイトを毎日少しずつ進歩させる。⇒「撤営までが設営」

12. 班長の指示を守る。

13. 時間厳守、5 分前には集合完了ができているように段取りをよくし、配布するプログラムに従って行動する。

14. 毎日サイト、個人装備等の乾燥作業を行う。

15. サイトから離れる時や寝る時、朝の点検の時は火が完全に消えていることを必ず確認する。

16. 禁止されたところへは立ち入らない。

17. ランタン・ローソクは絶対にテントの中には持ち込まない。

18. 初級スカウトは刃物を使わない。

19. 国旗降納の合図があれば、全員が作業を止めて掲揚柱の方向に向かい敬礼をする。

20. 配給は、本部まで取りに来ること。

21. 一度配給された食材は、班で責任をもって保存すること。⇒「保存の工夫」

キャンプ装備

(1) 個人装備の重量について

まず、個人が背負えるバックパックに入ったキャンプ道具全体の重量は、どれくらいだろうか。もちろん男女・年齢・筋力差によって相当異なるが、概して体重の 1/5 と言われている。しかし、本当にそうなのだろうか・・・・。

実はその重量には根拠があった。それは「歩荷量」というらしい。

班キャンプに行くときに、班のキャンプ装備を分担して担いでいくことになる。その際に装備重量を割り振らなくてはならなくなる。そのために、適正な割り振りを知る必要がある。

当然だが・・・

・より若い人のほうが荷を担ぐのは、普通

・女性より、男性のほうが担ぐのは、普通

だ。そのためには、まず個人装備の重量を把握しておく必要がある。そして歩荷量に沿って、班装備を割り振ることになる。

そのためには、ある程度は根拠のある数値のデータが欲しいところだ。

今は、軽さはお金で買えます。

①男女差について

男女差については、スポーツ科学の分野で、ある程度、信頼性のある数値が出されている。

- 男性でも女性でも筋肉 1kg あたりで出せる力は同じ
- 男性は筋肉量が一般的に体重の 40%　女性が 35%。
- 有酸素作業能力や無酸素作業能力において女子は男子の約 70%前後とのこと。

つまり、体重 50kg の女性と体重 70kg の男性を単純に筋肉量で比較すると、

（体重）		（筋肉量割合）	（総筋肉量）
45kg 女性	×	0.35	= 15.75kg
50kg 女性	×	0.35	= 17.5kg
60kg 男性	×	0.4	= 24kg
70kg 男性	×	0.4	= 28kg

となる。

筋肉 1kg 当たり出せる力= 1kg と仮定すると、そのまま歩荷量が求められる・・・・70kg だと 28kg・・・・いやぁ無理でしょ。

≪仮定≫

・20 歳時 : 筋肉 1kg 当り担げる力 1kg

・年筋肉量が 1%ずつ減る

・20 歳未満は、15 歳→ 20%、12.5 歳→ 30%、10 歳→ 40% と仮定

②年齢差について

これは加齢を加味していないので、加齢について考慮する必要がある。

- 最大換気量は直線的に低下し、60 歳代では 40 ～ 60%低下する。
- 筋力は 20 歳～ 30 歳代でピーク。30 歳代～ 80 歳代までに約 30 ～ 50%低下。
- 筋力及び筋量の低下の割合は 50 歳くらいまでは小さく、50 歳を超えると大きくなる。
- 一般成人は 20 歳～ 50 歳までの間に約 10%の筋量を失うが、50 歳を超えると 80 歳までにさらに 30 ～ 40%という急激な筋量減少が起こる。20 歳未満の青少年は、身体作りの時季ということで、年 1%の筋肉量喪失、と仮定して、計算すると・・・(→ヒント欄)。

もちろん個人差がある。これは「ポテンシャルデータ」としてのスタンダードとしよう。リスクを含めると歩荷量はもっと下がる。

また、男性も女性も年齢変わりなく、一律○ kg の共同装備という割り振り方は、不平等ということを理解しておこう。

○女性（体重 50kg）　の歩荷量

年齢	筋肉減少量	歩荷量
10 歳	= 40%	= 10.50kg
20 歳	= 0%	= 17.50kg
30 歳	= 10%	= 15.75kg
40 歳	= 20%	= 14.00kg
50 歳	= 30%	= 12.25kg
60 歳	= 40%	= 10.50kg

○男性（体重 70kg）　の歩荷量

10 歳	= 40%	= 16.8kg
20 歳	= 0%	= 28.0kg
30 歳	= 10%	= 25.2kg
40 歳	= 20%	= 22.4kg
50 歳	= 30%	= 19.6kg
60 歳	= 40%	= 16.8kg

(2) 必要度・重要度について

①まず考えなくてはならないのは、どんなタイプのキャンプを実施するか。

まず、個人装備には、全てのキャンプに使用するであろう「基本装備」と、ある条件で行うキャンプに使用する「特別装備」がある。

ある条件とは、春夏秋冬の季節、低地か高山かの標高差、市街地周辺か辺境の地か、徒歩か自動車か・・・・などである。

ここでは、一般的なスカウトコースにおけるキャンプ（低地･5 月～ 10 月頃）での個人装備について考える。

次の頁に一覧表を付してあるが、どんな性能のものが必要か、どんなものを選べはいいのか・・・については 100% 講座（一部は事前訓練でも実施）で既に行っているのでパスする。

スカウトコースでは､それを実際にパックに入れて持ってきてもらうわけなのだが、その重さはほぼ未体験であろう。

ここでは、それまでの指導者体験（全く足りないんだが）を元に､「必要度」と「重要度」という 2 つの軸から確認する。

②どうして「必要度」と「重要度」という軸とするか。

便利なキャンプを実現するために、あれやこれやといろいろと持って行く。するとどうなるか。重い・辛い・疲れる・・・で，キャンプを楽しめなくなる。これでは本末転倒だ。

何を持って行くかではなく､何を持って行かないかという視点で考えなければならない。

つまり､「便利＆快適」なキャンプではなく､「多少不便＆快適」なキャンプでいいのだ。多少不便だけど快適・・・だなんて意味がおかしいと思うかもしれないが、ボーイスカウトの真骨頂は「創意工夫」にある。現地にある物を利用したり、持っている物を流用＆活用したりの創意工夫によって、不便を便利に変えていく。それがボーイスカウトのキャンプの楽しみのひとつになっている。

それは、応用力（対応力 → 本質を掴む力）を育てることになる。これが社会に出てから役立つのである。ましてや、先の大震災の時などで真価を発揮する。

リストを作ることは忘れ物を無くすることに繋がる。これは大切なこと。

もし、何かを忘れてしまったのであれば、創意工夫によって，その場で解決していこう。三人寄れば文殊の知恵である。

さて、スカウトコースの参加者は、基本的にキャンプ初心者～初級者であり、かつ BS、VS だけでなく CS、BVS の指導者も参加していることを考えると、適正な内容と量の個人装備を選び持って来るということは、けっこう大変な作業と思われる。

そのため、その指標となる知識を伝授するために、選択するポイントを挙げた。それが、「必要度（A , B）」と「重要度（X , Y）」の 2 つの軸に分けて考えてみる。それが右の表だ。

それを見ていくと、

AX:　必ず使用するもの
AY:　必ず持って行くけれども、使ったり使わなかったりするもの
BX:　あると便利で役立つもの
BY:　使うかもしれないもの

の４区分となる。実は、それぞれの度合いを「大」「中」「小」としたかったのだが、「小」は、そもそも持って行かないものなので、ここからは敢えて外すこととした。だから「大」と「中」のみ。

→だいたいの装備は「AX」に分類される。

→しかし、経験度によって、その量は異なる（ベテランほど AX は減り、初心者ほど AX が多くなる）。（→ヒント参照）

→初心者は、いろいろとキャンプの場面を想定して「あれも必要」「これも重要」となってしまい、結果としてパックいっぱいの荷物となってしまう。

→ベテランは「いかに持って行かないか」が個人装備選定の指標となる。無ければ作る、他のものを上手く活用する。そんな応用力や創意工夫力は、たくさんの知識と経験、そしていかにものごとの本質を捉えているかによって培われていく。(→それがボーイスカウトの目指している姿のひとつである)

→それは「無人島にだった一つだけ持って行けるグッズがあるとしたら、あなたは何をもっていくか?」という問いの答えに表れる。

ベテランは口を揃えて「ナイフ」というだろう。ナイフがあれは多くの必要なモノを作り出すことができる・・・から。

● 必要度・重要度チャート

	必要度大・A	必要度中・B
重要度大・X	必ず持って行かなければならないもの。必ず使うもの	あると便利で役立つもの
重要度中・Y	ある条件の場合に必ず持って行くもの（季節・標高等）	使うかもしれないもの

（2）キャンプ用品の雨対策。

参加者の意識は「雨天以外」に向いていると思われる。まぁ「雨具」はリストアップされているが・・・。

キャンプの雨天時に当てはまる活動は、

- サイト内の活動
- サイトを出ての活動〈キャンプ地でのハイキング等〉
- 行き帰りの移動

が考えられる。

では、雨で問題となるのは何か

- 着ているモノが濡れて「不快」になること。
  - ➡いかに「濡れない」「蒸れを外に出す」かを考える。防水透湿性（ゴアテックス等）の素材でできているセパレート型のレインスーツで蒸れを防ぐ。下着は「綿」でなく化繊のものを。脇の下や背中に蒸れ防止の小窓がついているものもある。たたし、汗かきの者では、透湿が追いつかなくて、汗で濡れてしまうことも。
  - →行動中に着替えをしても、また濡れてしまう。着替えはゴールして活動が終わってから。
  - →また、行動中は、汗でぬれても不快なだけだが、風にさらされると体感温度が下がり、低体温症になる危険も。→防風着を着用する。
- パックが濡れて、中味まで濡れてしまうこと。
  - →時と場合によっては「生死」に関わる。
  - ➡パックカバー（ザックカバー）は必須アイテム。それでも水は浸入してくるので、濡らしてはいけない衣類やスリーピングバッグは防水の袋（スタッフバッグ）に包んでおく。もしくはパックの中に大きな防水袋を入れて、その中にパッキングすることとなる。
- 靴が濡れてそのまま歩くと「マメ」ができやすいこと
  - ➡足の皮膚が水分により柔らかくなり、そこが靴に当たるとマメができる。晴れていても靴の中が蒸れていると同じことが起こる。そのため、いかに蒸れを靴の外に出すかを考える。
- 気持ちが沈む、モチベーションが上がらない
  - ➡その多くは、過去に経験した雨の活動・行動時のマイナス要因に起因する（上記も含む）。であれば、雨でも快適な環境を構築すれば気持ちは上向きになるかも。また、「班」の仲間と行動すること、目的と目標、やり甲斐のある役務分担などによるモチベーションのアップも効果的。
- 安全の問題
  - ➡そして、最大の問題がコレ、「安全」の確保が難しくなることだ。
    - ・**視界が狭くなる→**フードを被ることで、通常の左右の視界が大幅な制限を受ける。メガネをかけているとレンズに雨が付いて全体的に見えにくくなる。曇ることもある。
      （対策）キャップを被った上からフードを被る。または、フードではなく、レインハットを被る。
    - ・物音が聞こえにくくなる→フードを被ることで耳の外側に幕ができてしまう。
      （対策）フードではなく、レインハットを被る
    - ・**足下が滑りやすくなる→**ケガに繋がる。
      （対策）滑りに強いソールのトレッキンクシューズを履く。
    - ・**手も滑る→**しっかり握れなくなることで、事故に繋がる。
      （対策）革製の手袋をする。
    - ・**不安になる→**集中力が欠けることでの事故に繋がる。これって伝染する。
      （対策）とにかく雨ニモ負ケズ、ポジティブシンキングで楽しんでしまう。

設　　営

1. その前に、スカウト・キャンプとは・・・・

1．ボーイスカウトにとって、スカウト・キャンプ（野営）は必須プログラムである。スカウト・キャンプが必要だからといって、キャンプばかりやって、他のことを軽視するのは、間違いである。

→例えば、キャンプには参加するが、ハイキングにはいつも欠席する・・・というようなこと。

2. ボーイスカウトのキャンプは、固定キャンプである。移動キャンプはまだ早い（のでしてはならない）。

㋐野営法の基本は、固定キャンプで養われる。基本を疎かにして、急いで移動キャンプにとりかかることは、スカウト・キャンプの位置づけを蔑ろにすることである。

→固定キャンプのプログラムを充実することができない指導者が、野営生活の変化の醍醐味を移動キャンプでカバーする・・・・陥りやすいワナである。

㋑移動キャンプは、ベンチャースカウトの領域である。その事前課題として、1 級考査があり、1 泊旅行が課せられている。

3. ボーイスカウトのキャンプは、徹底的に「班制度」によることが基本である。

㋐各班は、自分の班のテント、炊具、工具、シートなどを所有すること。

→班備品を大切に使い、メンテナンス（手入れ･修理）し、愛護することで班精神を培い、他の班と友情ある競争（対班競点）をすることができ、そこに班制度の花が咲くのである。

㋑「班」は、スカウティングの単位チームである。チームの全員が揃わなければゲームはできない。チームのメンバーは、それぞれ自分の分担任務を持ち、その分担を責任を持って果たし、その合作であるチームワークによってゲームができるのである。

4. ボーイ隊のキャンプには、隊キャンプと班キャンプがある。

㋐隊キャンプについて

- 隊長が野営長となって行うものである。言い換えれば、隊集会を野営で行うものである。
- 隊キャンプといっても、各班はそれぞれの班サイトに分かれて設営する。テント村やテント街を作るのではなく、各班の間隔は十分に取りねそれぞれの班活動をする。
- 隊長や隊本部の指示で活動するならば、班制度は形骸化して、班活動の醍醐味ほ味わうことなく、単なる行事に終わってしまう。

㋑班キャンプについて

- 班会議で企画し、リーダー会議の承認を経て、隊長が許可するものである。したがって、班が勝手に、無断で野営をするものではない。
- 野営長は班長であるから、班長は少なくとも「1 級」以上のスカウトで、班員も大半が 2 級以上でなければ許可しない位の条件が必要。
- 班キャンプとはいっても、必ず隊指導者が黙って近くに設営して見守ることを忘れてはならない。

㋒班キャンプを行う場合は、事前の訓練が大切である。

- ぶっつけ本番というやり方は、プロジェクト法を無視している。事前に班活動でキャンプの準備・研究を行う

→個人携行品の点検、工具・炊具のメンテナンス、テントの腫れ方、カマドの作り方、野営工作、献立の立て方、野営料理の作り方、刃物の使い方、焚き火の仕方、ロープワーク、マッチの防水加工など限りがない。

㋓次のコトを忘れては、スカウト・キャンプではない。

●最近の隊キャンプの傾向について

多くの団では、集合地点からキャンプ地まで徒歩で移動、若しくは、直接キャンプ地に集合であろう。移動の場合、スカウトはともかく、指導者は同じように荷物を背負ってキャンプに行くのだろうか? それとも、車でいくのか?

最近の隊キャンプを見ると、「隊本部」には、マーキーが張られ、発電機で煌煌と明かりが点いている。中には、そのマーキーの中でスカウトが事を摂っていたりする!!!

これは、時代の流れと一言で片付けられない大問題が潜んでいる。スカウティングがどうたらとか言う前に、指導者の任務（役割）を安全管理の面から再確認してもらいたい。

キャンプにおける（スカウティング全般も同様）との役割の最大のものは何か、それは安全の確保（と危険の排除）である。「安全は全てのものに優先する」のである。

まずはスカウトの安全能力を上げ、ケガをしないよう、その対処能力を上げること。これは日頃の隊集会や班集会で培う。

それ以外にも、考えなければならないことがある。例えば、荒天が迫って早急に撤退となった時の対応である。

この場合、指導者はスカウトの安全を確保しながら、まずはスカウトの撤収を手伝うのである。自分たちの撤収はさておいてだ。スカウトたちの作業に見通しがついた後に自分たちの撤収となる。もしくは、いち早く隊本部を撤収して、スカウトの支援に駆けつけるのだ。その時にマーキーが、発電機が・・・・では、どうであろう。

いち早くその場を立ち去らなければならないのに、それらを運ぶには、相当な人手と手間が必要でますます撤退する時間が遅くなる。車がそこになかったらどうするのだろう。

スカウトキャンプの基本は「そなえよつねに」である。この考えは、「何かがあったときのために、モノを持って行く」ではなく、それとは全く逆で「**何かがあったときにのために、如何に持って行かずに創意工夫で対処するか**」ということなのである。どれだけコンパクトに最小限の装備で隊運営に支障がないよう運営できるか、なのである。それができるだけの知識や技能を身につけて、それを駆使して実践するということなのである。それがスカウターという者の気概（意

• 国旗の掲揚と降納、朝の点検と講評、夜の点検、救急の用意、スマートネス、事前の現地調査、事後の報告など。

2. 指導者とスカウト・キャンプ（野営）について

1．キャンプとは、テントを張って、野外に寝る生活様式であると、一般に解釈されている。それだけであっても、スカウトは魅了されるモノである。そして、自然の神秘に触れるところに B-P がスカウティングの主軸に据えた第１の理由がある。
2. スカウティング（Scouting）という８文字のスペルの後半の６文字（outing）は、野外生活の意味である。つまり、スカウティングの 6/8 → 3/4 は、野外活動なのである。その野外活動の最大にして最も魅力あるモノが、スカウト・キャンプなのである。
3. スカウト・キャンプは、スカウトの憧れであると共に、スカウティングの主軸であるから、運営を誤ると、その失敗は致命的となる。
4. スカウティング・キャンプの運営の責任は、指導者の能力にかかっていることを忘れず、指導者自身が研鑽によって野営スキルを深めるよう努めなければならない。WB実修所、県定型訓練の野営法研究会、野外活動研究会、スキルアップセミナーなどに参加して、研鑽を積むこと。

3.「設営」について、共通認識をすることの背景

1．実は、この「設営」については、今の指導者研修では、しっかりとした説明がされていない。WB研修所もWB実修所の所員 HB にも、「設営」については全く触れていない。過去の「入所者」と呼んでいた頃の所員 HB に掲載されている「設営について」の解説を右に掲げておくので参考にされたい。

　実は、今までの野営法でも、「設営」については触れていない。順序や方法については、いろいろなところに書かれているので知っている方も多いだろうが、「心構え」や「持つべき意識」についてまでは言及されていない。

2．このセッション後、具体的にキャンプの作業（活動）に取りかかる。つまり、スカウト・キャンプを体感する最初のセッションになる。そのために、設営に関することを、きちんと説明することが求められるので、時間を確保して十分に説明する。

3．また、経験が少ないと（というより経験が多くても意識していないと）初日の設営には、どのくらいの作業量があって、何人で、どの位の時間が必要なのか、どの位の設営技能が必要か・・・の把握はたいへん難しい。

　つまり、具体的に説明したとしても、予定の時間には収まらない。そのため、それぞれの工程にかかる時間を守るための指標となる「目標時間」と管理するタイムキーパーが必要となる。

　この目標時間は、参加者の経験度と持っている知識・スキル、そしてその作業に取りかかる人数によって大きく変化するので設定しづらいが、スタッフの経験値で設定しなくてはならない。

4．また、班担当所員においては、説明に当たっては、セッションは、特に途中で作業を中断するような説明はしない。とにかく時間まで作業をさせることが原則。

　しかし、研修によっては、初めから担当所員が介入するコトを求められることがある（例えば、WB研修所スカウトコースの班担当所員）。その場合は、その研修の方針に従うこと。

　特に H31 ～ R 元年度のスカウトコース参加者は、任意の「100% 講座」しか受けていない。スカウトの野営法の主たる部分は、ウッドバッジ研修所修了後に受ける「野営法研究会（STEP1）」まで待たなければならない。STEP1 は、このウッドバッジ研修所での野営体験があること、を押さえた上でセッションが構成されている。（R２年度からスカウトコース前に受講できる識であり姿勢であり在り方）なのではないだろうか。

　つまり、これが「不便を楽しむ」という意味なのだ。

　結論は、「指導者も個人装備を背負って、スカウトと一緒に徒歩でキャンプ地に向かう」が正解である。班装備や最小限の隊装備は、支援者が車で運搬することになるだろう。その範囲でおこなうのである。

　つまり、指導者は、必要最小限の装備で「快適」&「充実」したキャンプができるよう、かつ、スカウトに十分な支援と指導ができるよう、研鑽と研究を重ねることの重要性を伝えていただきたい。

●WB研修所における「設営」の流れ

１．設営について

①設営に当たっての指示
- サイト設計図の作成
- 設営順序の説明（寝る、食う、排すの順）
- 設営と夕食の同時進行
- 支給されたもの以外は使用しない
- 撤営の指示があるまでは設営
- テント、炊具、工具の取り扱い

②自然保護
- 「場内のきまり」にある「樹木を大切にする」の遵守

③調理の熱源
- 焚き火、薪の場合
- ガスコンロの場合

④ゴミの処理
- 可燃物と不燃物の扱い
- 分別とゴミ出し

２．配給について

①担当、時刻、場所、必要人員について説明する（テント、工具、炊具、資材、教材・教具、食料品＋献立表）

３．連絡事項

①作業着への着替え
②サイト設計図の提出
③国旗降納の時間と担当
④教材・教具は常に携行
⑤次のセッションの場所、時間、携行品

４．質疑応答

る研修を実施する予定）

つまり、ウッドバッジ研修所の参加者の野営レベルは、「野営法のさわり」を知っている段階であって、「なぜ」「どうして」にまで深く達してはいないとみてよい。そのため、「なぜ」「どうして」の深い部分はSTEP1任せ、スカウトコースでは、**ごく基本的な「まずはこのような手順でやりましょう」**でいきます。

5．隊編成をして「上班」がを置きます、参加者には、その上班の位置づけと役務を明確にすること。

6．設営時間の要所要所で、進捗を確認して作業の進行を把握し、時間の延長などの対応をすることがままある。

スカウトコースでは、プログラム担当・生活担当副長は各班を回り、設営の進捗を確認する。それを持ち帰って、設営を延長するかどうかを隊長と相談する。しかし、延長の可否については、班長からの申請を上班が受け、班長会議により隊長に許可をもらうかどうかを協議すること要する。隊長は上班からの申請と、先ほどの副長からの報告を勘案して延長の可否を決める。

→ただし基本的に延長はしない・・・方向で進めてもらいたい。

◉ポイント

1．設営の前に（設営の意味、順序、タイムキープ）について、共通理解を図る

（1）設営には２つの意味がある。

「設営」という言葉には、大きく２つの意味がある。

㋐１つは、まず、限られた時間内に、取りあえずその日の生活に必要なものを整えること。

→ここでは「制限時間内に何を作り上げるか」がポイント。

㋑２つめは、キャンプの全期間に亘って、順次「快適なキャンプ」にするべく、整えていくこと。

→ここでは「撤営までが設営である」の意識を持ち、常にその姿勢でキャンプに臨み、かつ持ち続けることが求められる。

（2）設営許可の手続き

ＷＢ研修所では、設営に際して、隊長から設営の注意があり、**所長の許可**を得て設営に取りかかる。（※前述の注意事項を確認）

それは、指導者研修では、指導者を介して原隊の活動に適用させることが目的であることから、上記の方法を採る。その理由は・・・

ⓐ今回の研修のために集まったメンバーで、班として班員の役割が明確でなく、誰がどんな知識と技能を持っているのかが不明である。

ⓑ隊キャンプとしてのプログラムの区切りというかけじめの意味。

ⓒ参加者に「設営」に対する心構えと守るべきルールを知らせる。

これはあくまでも「スカウトコース」でのことであって、原隊のキャンプにそのまま適用するものではない。（もちろん、原隊で真似してもよい形をとる）

◉どうして所長や隊長の許可がいるのか

○スカウトキャンプは、スカウトキャンプなのである。レクリエーションのキャンプではない。

では、スカウトキャンプの目的は何か？　それは、スカウティングの目的である教育を行うことにある。それに最も適した「場」が自然の中の野外であり、人の集まりが「班」であり、方法が「キャンプ」なので

５．設営の指示

①設営に当たり簡単な指示（隊長）
②設営の指示を受ける（隊長→所長）
③設営の許可（所長→隊長）
④設営の指示「設営にかかれ」
（隊長→参加者）

※ここでは「所長」が介入しているが、実際の隊では、その役目は「隊長」である。であれば上記の「隊長」の役目は「生活担当副長」となろう。
しかし、コースでは所長が許可する。
※このように、コースと原隊の違いを明確にし、参加者が混乱しないよう、コースを運営してもらいたい。

●2つの教育

「教育」と表現される言葉は、英語では「Instruction」「Education」と2つの言葉で表される。知識を与える、教え込むという意味の「Instruction」、能力を引き出すという意味の「Education」、前者は「教」、後者は「育」である。「教」では自発活動はあり得ない。「育」であるからこそ、そこに自発活動があるのである。

ある。

「撤営」の項にも明記してあるが、「信頼を得るためにきちんと撤収をするのではない（受動的）。我々の行動によって更なる信頼を得るためである。我々の行動の結果が「信頼」を獲得し維持していくのである（能動的）。『最後の最後まできちんとやり遂げる』ことの意味と意義を、まさしく行動によって示す」のである。

そう、スカウトキャンプとは、まさに「ちかい」と「おきて」の実践の場であり、スカウト精神の実践の場、すなわち「修行」の場なのである。その修行のスタートが、この「設営」なのだ。

その修行（心を新たにする、覚悟を決める、意志を固める、やるべきコトを明確にする）を開始するためのセレモニーが、きちんと整列をして、所長の許可を得て、隊長が開始の合図をするのである。

単なる形式ではない。

＊コラム「道心門」を参照

（3）設営の順序

設営の順序には、変えられない順序と、そのキャンプの状況に応じてフレキシブルに対応する順序がある。

変えられない（基本的に変えない）順序とは、

①場所の決定
②サイト設計
③設営の役割分担

の順である。

また、状況に応じて順番が変えられるものは

「寝る」「住む」「食う」「排す」の各要素

で、その変更は、

①キャンプの目的
②設営の時刻
③天候

等によるものだ。（「排す」は最近では環境問題も含めて、既設の施設もしくはポータブルトイレ等の使用を推奨している。）

隊のキャンプであれば、どんな種類のキャンプであっても、設営前に「班長会議」を招集して、初日には、何をどこまでやるのかの共通認識を持つと良いだろう。

中長期のキャンプでは、２日目以降に、必要に応じて野営工作をしていく。

①寝具や洗濯物の乾燥のための、モノ干し場
②工具を取り出しやすく、安全に保管するための工具置き場。
③手を清潔に保つための、手洗い場
④安全に薪をつくるための、薪割り場と薪置き場
⑤靴底の泥をおとすための、泥かき場
⑥班サイトの入口に設ける、班ゲート

など。

また、「設営」には、テントを張ったり工作物を作るだけでなく、「サイトの居住環境づくり」の意味も含んでいる。

最近ではやってはいけない？とされている、雨溝掘りや、床の斜面の修正を始め、風向きや日照、そして下草への影響を考えた、テントの移動。生活動線を考えた、各種工作物の位置の変更などがそれに当たる。

（4）まず、何に着手するかと守るべきルール

（1）の㋐と（2）のⓒに「心構えと守るべきルール」が書かれている。

㋐１つは、まず、限られた時間内に、まずは優先的にその日の生活に

必要なものを整えること。
ⓒ参加者に「設営」に対する心構えと守るべきルールを知らせる。

これは『「制限時間」内に、今日必要となるものを整えること であり、それを達成するぞ！』という積極的な関与意識と目的に対する姿勢を持たせることだ。*1

※これを明確にしないと、ズルズルと時間だけが過ぎて行ってしまう。
そんな隊キャンプが、今ではそこかしこに見られる。

そして、もうひとつのねらいが、作業に計画性と目標を持たせること。
それは・・・

役割分担→段取り→準備→作業→作業終了→確認

までのプロセスをその制限時間で配分し、それにしたがって作業を進めることだ。つまり段取り力を養うこと。

例えば野営工作を例に取ってみると、ここでは短時間で完成させなくてはならないわけで、このキャンプに来てから、構造を考えて設計図を書いたり、必要な結びを覚えたり、組み立て練習をしている時間はない。それは、それまでの「班集会」の活動でやっておかねばならないこと・・・なのである。（※しかし、スカウトコースの参加者は、そのような準備はしていない）

このように「いつ」「何がある」かを年間プログラムから読み取り、事前に何をしておかなければならないのかを観察・推理し、それを「班」として計画的に実行していくこと（→班集会の開催）は、班長としての責任ある班の「スキルアップ＆運営計画」の企画・実践であり、年間計画の中でそれが展開できるように組むことは、班長会議と隊指導者の責務となる。そのことを、ぜひとも理解してもらいたい。（ここではそのような本当のスカウティングの在り方を伝え、確認させる。）

① 守るべきルール

それは、「班キャンプ」の設営には、班に与えられたものしか使ってはならない。ということだ。（このような制約を創意工夫に結びつけさせる）

つまり、与えられた「班装備」のみで設営をする、班の生活サイトを作りあげること・・・だ（自然物の活用は OK である）。

ここにも２つの意図がある。それは・・・

１つ目は、常に、創意工夫の意識と姿勢を養って、その実践の場とすること
２つ目は、メンテナンスをしっかり行う習慣を身に付けさせること

だ。

１つ目については、説明はいらないだろう。そう全てのスカウト活動は「観察と推理」によって創意工夫する力を付けて、快適な生活・活動にしていく。スカウトキャンプ、いやスカウティングは、そのココロを持たなければならない。何をどうしたらそれを生み出す（作り出す）ことができるか、常日頃から情報アンテナを張り巡らしておくことが重要だ。

２つ目については、例えば、前回のキャンプでナタの柄が折れてしまったとしよう。それをそのままにしておいたら、次のキャンプでは使えない。→薪をつくることができないので、ご飯が食べられない・・・となる。まぁキャンプの現場で隊指導者に申し出れば代わり（それとも替わり？）の品を貸してくれるカモしれないが、それではスカウティングとは言えない。

キャンプの後には必ずメンテナンスをして、次のキャンプでは支障なく使えるようにしておかなければならない。「撤営は次のキャンプの準備（始まり）である」という言葉もある。

このメンテナンスを含めて、「班集会」で研究しておくべきことは・・・

・個人携行品の点検　　・工具、炊具の点検修理

＊1
これは、キャンプという限られた期間と時間で、キャンプでしか為し得ないプログラムを行うための時間を確保するためである。つまり、スカウトキャンプは、プログラムによって各人の様々な「進歩」を促すことで、また、キャンプのプログラムを最大限楽しむことで「成長」に繋げるために、そして、自然から影響によって、感動や情緒、感受性、そして自然に対する対応力の伸張をねらって行っているのである。設営だけのために行うのではない。

その大切な「プログラム」を行う時間を確保するためには、決められた時間内に当面の設営を終えることが求められているのだ。（設営もプログラムだが。）

それだけではない。時間内に終わらせるためには、自分たちの実力をつけなければならない。その場はどこか。そう「班キャンプ」である。班キャンプで技能を磨いて、隊キャンプで発揮する。つまり、隊キャンプで時間通りに設営を終了できねようにするということが、班キャンプでの訓練目標でありモチベーションのひとつになってくる。

・設定した時間内に班サイトを作り上げる
・テント、タープの張り方　　・かまどの作り方
・調理台の作り方　　・火の起こし方
・マッチの防水加工　　・野営料理の作り方
・キャンプで想定されるケガ等の救急法
などがある。

この考え方は、スカウトコースのように野営装備を貸与されたときも同じ。コーススタッフよって装備の状態は事前に確認はしているが 100% 完璧ではない。そんな中で不備があったらどうするか、

① まずは「創意工夫」で対応してもらいたい。
② それでもどうしようもなくて、にっちもさっちもいかなくなった時に、初めてスタッフに交換を求めてもらいたい。

そんな意識と姿勢を養うよう、指導してもらいたい。*2

②班サイトを選ぶために

サイトを決めるポイントのプライオリティは「指導者のためのスカウトキャンプ」（P.20）に書いてあるが、その他に、

ⓐ班の参加スカウトの男女比
ⓑスカウトの進級の度合い（WB 研修所では参加者のスキルの度合い）

を考慮する。

ⓐは、単純にサイトの広さの問題。設営物は参加人数に比例して大きくはならない。ただし、男女両方が参加している場合はテントがそれぞれに必要となる。→テントを張るスペースが必要ということ。
ⓑは、野営技能が十分にあるかどうかによって、サイトの地理的条件（斜面や土質等）や植生等を考慮する必要がある・・・かもしれない。

それらを鑑みて、隊長のアドバイスと班長の相談（上班のとりまとめ）によって、班長がそれぞれの班サイトを決め、それを隊長が承認する。

③選んだ班サイトを、どのようにレイアウトするか

設営での「変えられない順序」の２番目は、サイトの設計である。

これは当然①のサイトが決まらなければ、具体的な設計はできない。しかし、サイト設計の原則というものはある。それについては，右のヒント欄に挙げたので確認しておいてもらいたい。

＊2
昔の WB ベンチャー研修所のことである。備品貸与時にポリタンクを渡すのを忘れてしまったことがあった。
後でそれに気づいたのだが、参加者からは、特にその指摘も要求はなかったのである。不思議に思ってサイトに行ってみたら、なんとポリ袋に水を溜めて、木から吊して使っていた。
参加者に聞いたところ、「無いんであれば工夫すればいいじゃん。それがスカウトってもんでしょ！」
おみそれした瞬間でした。

▶キャンプ地選定に際しての具体的な基準については「指導者のためのスカウトキャンプ」P.14 に掲載されている。

「班用テント」「指導者用テント」の使用について

このスカウトコースでは、当面の間ドームテントのみを使用し、「班用テント」「指導者用テント」は使用しない。

その理由は・・・

①参加者が初心者であること。すなわち家型テントを張るための事前準備 * をしてきていないこと。
②そのために必要とされる設営時間は計算に入っていないため。（設営のセッション時間はたった２時間→これは説明含む時間）
③このスカウトコースは「野営」を楽しむことがその根底にある。それを実現することを優先する。
④「班用テント」「指導者用テント」については、現時点では、野営法研究会 STEP1 において、研修する機会がある。

＊スカウトコースに移行する際の説明で、設営は班担当所員の指導で行うとあったため「キャンプ講習会」を廃止した。しかし、実際に実施してみると、班担の解説・指導で所定の時間内に設営を行うのは無理と判明した。そのため、県連として「WB 研修所を 100% 楽しむスキル講座」で班用テントの張り方・しまい方の講義を設けるか、「野営法講習会・基本」や「キャンプ講習会」を WB 研修所参加の必須要件とする等の措置が講じられるまで、ドームテントを使用することとします。

時刻	項目	内容	準備品
	設営にあたって	①班サイトの設計は、班長を中心にして作成する。 ②寝る→食う→排すの原則により設営する。 ・第一日目の野営生活に必要なものをまずする。 ・トイレは既設のものを使用する。 ③設営と夕食は別である。班員の分担を明確にして、所定の時間内に基本作業を終えること。 ④支給されたもの以外は使用しない。 ⑤撤営の合図があるまでは、設営である。	
	自然の保護	①場内のきまりにあるように「樹木を大切にします」をよく守りたい。 ②立木を利用するときは、立木の樹皮の保護を考える。	
	薪の利用	①薪は、キャンプサイト周辺から拾って使う。 ②枯れ木は薪として利用しても良い。	
	ゴミの処理	①生ゴミ、燃やせるゴミ、燃やせないゴミ、資源ゴミに分別する。 ②回収場所は、備品倉庫脇のゴミヤード前。	
	注意事項	①作業着に着替えて、作業を行う（着替えの場所の指示） ②班の分担表と班サイトの設計図は、____時____分までに、生活担当副長に提出すること。 ③次のセッションについて（時間、場所、持ち物等） ④ギアボックスは常に携行する。	
	設営の指示	隊長：　　設営に当たり簡単な注意 隊長→所長：設営の指示を受ける 所長→隊長：設営の許可 隊長→各班：「設営にかかれ」	

※設営中のスタッフの対応

①隊長は、各班の設営の進行状況を把握する（副長、上班を介して。もちろん直接見てもよい。）。

班担当所員（キャプテン）は、各班の進行状況に応じて、指導助言する。ハウツーを教えてもよい。

②第１日目として、必要最低限のものができるように。

かまどについては、「簡易型たちかまど」（WB研修所を 100% 楽しむためのスキル講座で作成したもの）でも良いので（コンパネ、煉瓦は貸与する）、火が焚ける状況にする。

風雨が強く、立ちかまどが作成できない場合は、やむを得ず「カセットコンロ」を貸与するが、これについては、<u>各班長と上班の協議により、上班から生活担当副長に申し出て、隊長の許可を得る</u>・・・という手続きを敢えて踏んでもらいたい。

③生活担当副長と上班は、常に各班の進行状況を確認し、連絡を取り合って、定刻までに②が完了するように指導する。

2. 実際に設営にかかる

さて、では実際に設営に入ろう・・・・・とその前に「時刻」と「天候」を考えることが大切だ。

⦿時刻

- ポイントは、太陽の光（自然光）があるうちに設営を終えられるかということ。
  →安全上、夜間の設営はしない・させないことを原則とする。
- 日没後にまで設営がかかるようであれば、設営計画を修正し、日没前に設営できる範囲に優先順位を修正する。

⦿天候

- 天候により、設営する順序が異なり、また、そのポイントがある。
- 雨・雪の場合は、荷物を濡らさない（特に衣類）ことを最優先する。
- 風の場合は、テントやタープが風に煽られて人が引き倒されたり、綱の先についたペグが抜けて飛んでいったりという。大ケガに繋がることが発生する。まぁ、火も焚けないので、こんな場合はキャンプ自体を中止するコトが賢明だ。

（1）設営の順序

次の順序で設営にかかる。

①作業服に着替えをし、作業手袋をする。（エプロンを着けたり、ナイフや汗拭き、虫除けや虫ささされ薬も携帯）

②班装備の置いてあるところに行き、全て班サイトに持ってくる。

→WB研修所では、員数のチェックをするが、通常「隊」では、班に班のキャンプ装備一式を管理させているハズである。したがって、キャンプ場に着いた段階では、既に員数のチェックがなされているハズ。

→しかしながら、研修では県連のモノをお借りするので、ここで員数のチェックをする。

③サイトプランニングにしたがって配置する

→サイトプランニングの基本は、野営法（基本）でやるので、それを元に設営プランを作るのだが。今回は、「指導者のためのスカウトキャンプ」により設営プランを立てる。次の２点に注意するよう指示する。

ⓐサイト内での生活の場面を想像し、スムーズに流れるような動線となるように

ⓑ夜間の安全を考えて、動線上に障害物（張り綱、工作物、資材等）がないように

→サイトプランニングの基本は、野営法（基本）で行うので、それを元に設営プランを作る。ただし、現在では、受講はWB研修所後となので、スカウトコースでは、「指導者のためのスカウトキャンプ」により設営をしていく。

令和２年度から、WB研修所前に受講できるよう調整している。

④標準的な「晴天」「無雪期」での設営の基本順序

○ポイントは・・・・

（ア）設営の順序は、「食う・寝る・排す」ではなく「寝る・排す・食う」の順序が基本である。

（イ）まずこの順序で基本的な設営を行い、快適さと衛生については設営後の「日々の改善」によって随時獲得していく。

（ウ）夏季は、直射日光による被害（人体・食料）を避けるために日射を遮ぎるものが最初になる。

（エ）サイトレイアウトを参照しながら、キャンプ場の土質、傾斜、風向きに注意して設営を行なう。

（オ）雨天時は、雨水の流れを確認し、流れや水たまりにならぬ場所に、泥を直接テントに付けないように、床の部分をそれ以上濡らさないように設営する。（最近の指導者テントのグランドシートは完全放水なのでまぁ安心。）

（カ）雨天時は多少張る順序が違うの（→ヒント欄参照）

- 晴天時で地面が乾燥しているのであれば、特に設営の順序は問わない。きちんと張れればいい。
- 雨天時には、居住＆寝室部分を濡らさないことを第一に考える。そのため、最初にタープを張って、雨が防げる荷物置き場＆作

●班のキャンプサイトのレイアウト

①太陽光よりも「風向き」を重視する。
②もっとも風上に班テントをたてる。
③風下に焚火・かまど。
④さらにそれよりも風下にトイレ。

業スペースを作る。※
そして、 ドームテントを張っていく。　４.②でも説明
（キ）茨城では、春先は意外と風が強い日が多く、初夏は多湿。夏は雷雨や猛暑、秋口も残暑が残り、その直後から急に冷え込む。晩秋も風が強い日が多い傾向にある。冬だが、耐寒キャンプ以外はまずキャンプはしない。特に積雪時のキャンプはまず行わない。

（2）テント・タープの正しい取り扱い方、標準的な張り方

①キャンプ地に着いて、おおよその班サイトのレイアウトが決まったら、まずは地ならし。

○サイトの状況に合わせた、適切な設営をする。
（ア）地面の状態の確認（草、土、砂、砂利・・・）
草　：グランドシートの濡れや撤収時の原状回復
土　：雨天時の泥、雨水の流れ
砂　：ペグの刺さり（固定）具体とテントの保持
砂利：寝心地
（イ）土地の傾斜、凸凹、風向き、使い勝手を考えてレイアウト
傾斜：雨水の排水方向や寝る方向（出入口との関係）
凸凹：雨水が溜まらないかどうか。お尻の下が凹になっていると寝やすい。
風向：気圧配置、地方風。陸海風、山谷風等。風が孕まないように（入口は風下に）
（ウ）テントを張る場所の地面の整備
小石・小枝の撤去で　：小豆大の小石が安眠を阻害。マットの活用緩和。
凸凹の修正い　：基本的にフラットに。おしりの位置は多少凹んでた方がいいとも・・。

②張る順序は、「タープ」が一番先で、次いでドームテント。

○まずタープを手早く張って、そこに班装備や個人装備を置く。
○次に「ドームテント」を張って、最後に「班用テント」の順となる（この順序は雨天の場合の設営順序でもあります）。時間的に余裕があれば「指導者用テント」も張ってみる。<u>（※スカウトコースでは「班用テント」「指導者用テント」は使わない！！）</u>
○ドームテントを先に張る理由は・・・・
（ア）構造上班用テントに比べて簡単に建つため。そして、雨天でもテント内部が濡れにくくなっているため。
（イ）移動が簡単なためレイアウトの微調整がしやすい。
（ウ）作業着に着替える更衣室となる（特に女子）。
（エ）その中に個人装備をしまって、タープの下の荷物を少なくし、作業スペースを作る。
○取り出す順序、部品の数量のチェック、収納袋の管理を徹底させる。たたむ時も折り目、空気抜き、たたむ大きさ、収納順序、負荷のかかり具合等に注意させる。
○この時に考えなければならないポイントとは、タープとテントの張り綱の関係。動線に重ならないような位置関係でそれぞれ設置するように。

③スカウトコースにおける意図は、テントを安全に正しくたてること、安全な使用方法を知る。

スカウトコースでは、単に手順書通りにテントを張ることを体験する。テントの構造や力学的なことまでは求めていない。
それが「安全な使用」に即繋がる。そこに意味がある。
＊野営法 STEP1 では、実際に各自がそれを知った上で、どのような順序で、どこにポイントを置いて張ればいいのかを考えながら、その意味を

※雨天時の設営順序

①個人の荷物は、それぞれが持参したレジャーシートの上に濡れないように載せ、そしてそのシートを覆うような大型のシートで雨を防ぐ。
②続いて、班装備を所定の場所から持ってくる。所定の場所には、雨仕舞いがされているハズなので、濡らさないようにシートをかけたりして移動し、サイトでも濡らさないように工夫する。
③続いてタープを張る。張る位置は、仮ではなく、雨水の通り道や人の動線、使い勝手を考慮し、きちんと決めて本設置とする。張るときには、タープを地面に付けないよう注意する。晴天時では２人で張るのを基本とするが、素早くかつ汚さないように張るため、全員で協力して張る。
④張ったタープの下に、ブルーシートを広げ、そこに班装備や個人装備を移動する。風がある時は、雨の吹き込みで濡れないように。
⑤続いてテントを張る。
まずはドームテントを。その後に指導者用テント（ジャンテン）を。ジャンテンは本体の４隅が決まればテントが自立する。雨中ではグランドシートを置いて４隅を決められないので、どうすればいいのかを考えさせる。
⑥テントが張れたら、そこに個人装備を入れる。
⑦ポイントは、装備をいたずらに濡らさないことである。

実際に作業をして確認をしていく。

（3）ペグと綱について知り正しく使う。

①ペグ打つ角度は何度がいいのか。どの深さまで打ち込めばいいのか。

《ペグ》

- 原則は、綱が土に接地しないぎりぎりの高さまで打ち込む。しかし、十分な保持強度が出れば、途中までででも可。
- 打ち込む角度は、綱に対して 90 度と言われているが、これは理想的環境の場合のこと。地面に対しておよそ 45 ～ 90 度の範囲で、最も利くところ（地面との抵抗等強度が保てる角度）であればいい。
- ペグを打つときは、右の写真のように、差し込み角度を一定にするよう片足をペグに付けると同時に、ハンマーがペグの差し込み角度と 90 度の角度で打ち込めるようにする。

《ピン》

- テントの裾やボトムを固定するピンは、途中までにしてはダメ。返しの部分までしっかりと打ち込む。　地面と接することで→風がテントの下に孕まないのだ。

②ペグ・ピンが抜けないときはどうするのか。

- 先がとがったハンマー等があれば、それをテコのようにして抜く。
- 堅い木とロープで、ペグリムーバー（ペグ抜き）を作って、ロープを引っかけて抜く。
- ピンであれば、穴や返しに他のピンを差し込んで抜く。

③抜けやすいときはどうするか。

- 予備ペグがある場合は、より太く、長いペグを使用する。
- または、ペグを並べて 2 本打って、張り綱をその両方に掛け、牽引力を分散する。
- 砂や雪の場合は、ペグを交差させて十字型に縛り、そこに張り綱を掛け、埋め込む。

（4）ペグを打ち込む角度の考察（→70° がいいかな）

以前はペグは 45 度（張り綱に対し 90 度）で打つと言われ続けてきたし、そう信じているトレーニングチーム員も少なくない。

しかし、最近は 90 度（地面に対し垂直）という主張がある。

それはなぜなのだろうか。

そもそも、張り綱（力の方向）を地面に対し 45 度に引くとすれば、その力の方向に対し 90 度になる 45° でペグを打ち込めば最も強度は強いはずである。だから以前はペグは 45 度で打つべしだったのである。これは、力学的には正解だ。

しかし、この理論は力のベクトルのみを考えた場合だ。ペグの形状や地面の固さなどの実際の使用条件が加味されていない。

力学的には力の方向（張り綱）に対し 90 度で受ける 45 度が絶対的に正解なのである。

しかし、実際には土は崩れるものだから崩れやすい 45 度が正解とは言い切れなくなる。

そこで

- 抜け防止には角度を付けた方が良い
  （理想は張り綱に対し 90 度（地面に対しては 45 くらい））
- 土の崩れ防止には 90 度（地面に対し垂直）が良い

という相反することを考慮し、間を取って 70 度前後が基本スタイルというのが良いのではないかと思う。

まあ、70 度くらいならば、抜け防止としてもそれなりに効果あるし、崩れ防止としても 45 度ほどではない。

基本スタイルというのは、あくまでも基本であって、土の硬さや、ペグの形状等、その時々によって臨機応変にという意味だ。状況により変わるものだから。

野営工作物をつくる

◆ここでは、WB 研修所における「野営工作」の在り方と位置づけについて理解してもらいたい。

1. 野営工作の必要性は？

つい近年まで、キャンプは一般のものではなかったため、スカウト･キャンプで求めるレベルのキャンピング･ギアは市場にほとんどなく、またあったとしても大所帯の「班」での使用には向いていないものが多かった。「指導者のためのスカウト･キャンプ」が執筆された昭和 50 年当時はなおさらである。いや、もともとそれらがなかった時代から、ボーイスカウトは伝統的に、必要なものを創意工夫して「自作」してきたという歴史がある。それは「そなえよつねに」のひとつの意味の手業の修得の精神であり、また、教育的価値と効果があるものとして、現在も「野営工作をする」ことが伝統的に奨励されている。

しかしながら、伝統は伝統として尊重するが、時代背景と本来在るべきスカウティングの姿を鑑みれば、そろそろ見直す時期が来ているのかもしれない。

（1）野営工作とは

では、野営工作とは何を指すのでろうか?

野営工作とは、キャンプ（野外活動を含む）での活動、生活を安全で快適かつ文化的なものにするために、身の回りで手に入る物を活用して作る工作物のことだ。スカウト･キャンプにおける野営工作の条件は・・・

- 求める機能を有している
- その機能を果たすための必要最低限の強度がある
- 少ない材料で、簡単に短い時間でできあがる
- 環境に配慮されている

である。

（2）野営工作の必要性は?

スカウト･キャンプで野営工作をする理由は、キャンプでの活動、生活を安全で快適かつ文化的なものにするためであるが、それは何をねらってのことなのだろうか。それは・・・

- 今まで培ったスキルを更に応用していく
- 既成概念にとらわれない自由な発想･応用力を養う。
- 創意工夫、考える力を育てる。
- 知識や技能の習得の重要性を気づかせる。
- 形状･構成などから、構造力学や安全への意識と養う。
- 被災時等においても、役立てられるように繰り返す。

である。

しかしながら、現在のスカウト･キャンプでは、 自然環境保全という意味では、整備されたキャンプ場が増えていて、材料の現地調達が難しくなっており、また、諸事情により、なかなか長期キャンプが行えなくなっているという現状がある。更には、隊指導者においても野営工作の実習する場が減っており、知識や技能の不足や欠落が見られ、また、スカウトにおいては興味や意識の低下もみられる。

更に、現代では、アウトドアショップやホームセンターを覗けば、ボーイスカウトのキャンプの現場でも十分活用できる、テーブル、調理台、かまど（ストーブ）

○野営工作に必要な技能知識

●ロープワーク
実用的で確実な結びの知識と技能

●刃物と道具
正しい刃物の使い方と適切な道具の選択

●材料
材料の特性と調達

●構造
必要十分な強度と安定

○野営工作物の基本技術

●縛る
ロープ、ひも、つるなどを使って物を固定する。

●切る
刃物を使って材料を作成したり道具を作る。

●繋ぐ（打つ、接ぐ、組む）
材料の特性を生かして接ぐ・つなぎ止める。

●編む
ひも、弦、竹などを使用して編み込む。

●練る
土、粘土を成形して利用する。

●積む
石、木などを積み上げて利用する。

●撓（しな）る
材料の特性を生かし張力を利用する。

●吊る
材料の形状を生かし物を吊る。

●削る
素材を削ることにより整形し利用する。

この絵は、ノーマン・ロックウェルの「We Thank Thee, O'load」という 1974 年の描かれたもの。机、椅子、キャンググリル等を見てもらいたい。これらを当時から取り入れていた。B.S.A では、そもそも野営工作そのものにこだわってはいないようである。

等のキャンプグッズが所狭しと並んでいる。「元々はなかった」から作ってきたのであれば、「今はある」のだから、どうして野営工作をしてこれらを作るのか。手間も時間も材料も無駄ではないか・・・と、当然思う指導者もいることだろう。結論は、別にそのような「市販品」を使っても何ら差し支えないし、否定することではない。

しかしながら、「教育効果」という面から見ていくと、どうであろう。スカウティングは自然に中での「教育活動」なのである。要は、どこにその教育的目的を置くか・・・なのある。

これは、「A型テント」か「ドームテント」かと全く同じ議論でもある。

①それでは、教育的要素を考えてみよう

【教育的要素】

- 材料が現地調達可能であれば、用意し、運搬する装備が少なくなる。
- 「作る」ことから得られる教育効果（結び、構造、力学、材料の組み合わせ等）がある
- 時間内に作ることから、チームワーク、役務分担、加工技術、資源の有効利用、段取り力等が養成される
- 自分たちの「基地」を作るという、意欲と期待、そして創意工夫、仲間意識が発露される。そして不便を楽しむというというスカウト精神が発動される。
- 野営工作は自分が考えた物が出来上がるという喜びと、完成までの工程や改善を楽しむことができる。
- 事前に野営工作物を設計し必要な材料の調達、工具の選定、知識、技能の修得等の計画力・段取り力を身に付けられる

等であろうか。

ここに野営工作の意義が見い出せる。

つまり、（キャンプ以外の）ある特定のプログラムを実施するためにキャンプを行う（例えば「登山」のベースキャンプ）・・・というのであれば、特に工作を必須とすることはないだろう。

要は、そのスカウト・キャンプは何を目的にし、何を身に付けさせようとしているのかによるのであって、それが上記を目的とした野営工作であるならば、異を唱えるものではない。ただし上記の目的が野営工作以外でも達成できるのであればそれでもいい。

このように野営工作はキャンプの目的ではなく、方法・手段なのである。ただし、その位置づけやウェイトは相当大きなものであることには違いない。

②夏季長期キャンプの準備

ということを言う方もいるが、工作については、準備は計画的に班集会・班キャンプで行うことができる。

このような班キャンプは、夏季長期キャンプの準備として主に行っている。しかし、準備キャンプには「宿泊を伴うキャンプ」をしなければ達成できない「目標」があるハズ。それを優先すべき。（→だから、班集会で行う）

③野営備品がない！！

ちなみに、県連の野営装備には、テーブルも、調理台も、かまどもありません。なので、作るしかない。

2. 必要な順序を「時系列」に考える。

1. は野営法の「基本」で説明するものであって、スカウトコースではあくまでも基礎的指導者研修ということで、「指導者にボーイスカウトの基本的なキャンプを体験をさせる」ことが目的となっている。なので、「カマド」を作る。

①基本的に、キャンプ初日に作らなくてはならない工作物は、

ⓐ食卓・・・　食事をとるところ

ⓑ調理台・・・　食事をつくるところ

ⓒカマド・・・・　煮炊きをするところ（長期キャンプでない限り、立ちカマドは必要ないかな。班員数が多ければ作ってもいいね。）

②それらの使用する順序、そしてそれらを作るのに必要な時間を考慮して、工作物の作成に取りかかる。

③カマドについては、土浦訓練野営場においては「掘りカマド」は不可＆厳禁です。

●その理由は、土壌が「堆積腐葉土」であり、燃えやすく、山火事と同じで、地中で火が燃えて移動し、別のところから発火する可能性があるから。

なので、直火は厳禁である。ただ、立ちカマドの火床を部分だけを作ってそれを土の上に置いて火を焚くこと（これは直火ではない）は、許容範囲でしょう。また、どうしてもカマドができなくて、食事を作れないっていう場合は、一時的にカセットコンロを貸すことも可とする。

④班員数が少ない場合は、スカウトコースであるなら、食卓についてもコンパネを一時的に貸すことはいいと思われる。あくまでも、一時的に。野営法基本以降は、コンパネは不可としたい。

⑤ここまで妥協したんだから、調理台くらいは作ってもらいましょう。
使用する順序、そしてそれらを作るのに必要な時間を考慮して、分担して工作物の作成に取りかかることが大切。

3. 工作物の要件

①次に、スカウトキャンプに求められる工作物の要件を考えてみよう。

②基本的な要件として挙げられるのは、

- 基本は、木とヒモを使って作り上げる
  →釘と金槌、ねじとドライバーも否定はしない。また、土を使ったり、粘土でレンガを作ったり、丸太を利用したり、創意工夫でいろいろと考えられる
- 移動ができるようにする
  →サイトを有効利用するために、移動できると良い。急にサイトレイアウトを変更しなければならない場合などへの対応。
  →天候に左右されないものにする。それは雨の時には、タープの下に移動したり。風が強い時は、タープで防風壁をつくって工作物を配置したりすることも想定する。
- そのキャンプに必要な大きさのものにする（人数等）
  →４人しかいないのに、８人用の工作物はいらないだろう
- 配給されたモノの範囲で作ろう（自然物は除く）
  →前述

4. キャンプサイトの構成物を作る意味と意義

「茨城の指導者のための野営大全」P.46-47 に、班サイトのイメージ図があるが、そこにはテントやタープなどのいろいろな構成物がある。その多くは、班で行う中･長期キャンプでのものであり、その期間の快適なキャンプ生活を送るために作るものであって、例えば１泊キャンプの場合や、特にキャンプの他に目的が明確な場合には、そのすべてを作ることはない。

何度もくり返すが、スカウト･キャンプは、テントを張ったり、立ちカマドを作ることが、その目的ではない。テントを張る、立ちカマドを作る・・・といった活動を通して、人格、健康、知識・技能を育んでいくこと、そしてそれを仲間と楽し

●地中火

一般に地中火とは地中の可燃物、たとえば泥炭層や腐葉土層などが燻焼状態にあることをいう。地中火域の把握は地表からも上空からは困難である。対策は人間がスコップでここはと息う所に一つ一つ穴を堀って確認し注水をしている。地中火の状況を掘んでいなかったために、森林火災が思わぬ方向に拡大したり、消火体制を縮小した後に再燃拡大した例が数多くある。

地中火拡大速度4～5メートル毎時と言われている。

く行っていくことが、その目的であり、そんな場であり機会であるのがスカウト・キャンプの姿なのである。

そして、班の仲間とのキャンプを面白がり、その結果に満足するためには、「なぜなぜ?　どうして?」というそれを行う根拠や意味合い、そして目標を設定して、それを達成するための作戦と実行と協力、その完成度を高めるための知識や技能、そして得られる達成感などが共有されていることが大切だ。

そして、**毎年入ってくるメンバーに、それらが順次受け継がれていくこと、更に最終的には、他の班と競い合っても負けないまでに全てを高めていくこと・・・を班の大切な伝統として持ち続けること、それが「面白がる」ことに繋がっていく。**

そう、テントを張ったり、立ちカマドを作ったりという行動には、これらの意図が組み込まれていなければならないのである。

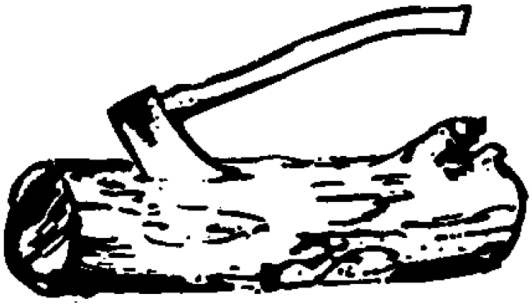
そのためには、指導者がそれらの取り扱い方、作り方、キャンプにおける位置づけ等を「なぜなぜ?　どうして?」という視点で、その根拠や意味合いを充分に理解していなければならない。

それらを理解するためには、その基本や基準を理解していることが重要となる。ただし、それは机上の空論では決して得られない。スカウト･キャンプを実践して初めて得られるものである。しかし、指導者がそれらを得られるようなスカウト・キャンプを体験する場や機会は限られている。それを体験して得られる場が野営法研究会 STEP1 なのである。

ここでは、キャンプの構成物それぞれの張り方や作り方ついては説明しないが、作り方は、ONLY ONE の方法･手順として示しているわけではない。他にも方法はある。極論すれば 100 人いたら 100 通りの方法があるのだ。

ここでの説明の主点は、「なぜなぜ?　どうして?」である。それを理解してもらうための一連の方法であることを理解してもらいたい。

切った丸太に斧が刺さったデザインは何のシンボルか



ここに示したアックスとログのマークは、一体何のシンボルであるかを知っているだろうか？

知っている者は激減してしまった。中にはトレーナーであっても、平気で「ウッドバッジ」のシンボルだという者まで現れる始末である。

これは「ギルウェルバークのキャンプエムブレム」なのである。

使用され始めたのは 1920 年代の初期、最初のギルウェルキャンプチーフであったフランシス・ギドニー (Francis Gidney) 氏が、当時の本部のビジネス流儀に反してギルウェルバークをアウトドアとウッドクラフトに結びつけて、特別なロゴを作ろうと試みた結果である。

ギドニー氏は 1919 年に開設された際の最初のキャンプチーフであると共にコース中のアックス投げの演示と斧の使用法 (Axemanship) で知られている。また、ギドニー氏はマクラーレン家のタータンを取り付けたギルウェルスカーフの考案者でもある。

野営炊事・食事をつくる

1. キャンプの火について

（1）キャンプの火について知る

キャンプの火・・・というと、歌って踊ってのキャンプファイアを連想する。そんなキャンプファイアにも、歌って踊るボンファイア、お話や語り合うカウンシルファイア、そして儀式のためのセレモニアルファイアがある。その他にも広い意味でのキャンプファイアには、炊事の火、明かりの火、暖を取る火、サイン（印）としての火、不要なものを焼却する火などがある。

（2）火が燃える原理

まず、基本中の基本だが、物が燃えるために必要な3つのものは何か。それは、

・燃えるもの（燃料）
・酸素（空気）
・温度

である。なので焚き火をするコツは、たったの3つだけだ。

①落ち葉や小枝、焚き付けになるものから徐々に太いものに
②薪は空気が通るように組む。縦に並べない。
③着火時には、ウチワであおがない。あおぐのはしっかり燃え移って火を起こす時。

では、説明していく。

① 燃えるものを準備する

燃料となるのは「薪」。これを燃焼させるのである。

薪を拾い集める時は、長さはまちまちでよいので、まずは、細いものから太いものまで、いろいろなサイズのものを集める。メインの薪は、腕の太さぐらいがよい（次ページ参照）。

なお、生木は採らない。それは、水分を多く含むので、燃えにくく、火にくべても煙たいだけだ。もちろん、木の枝を折るのは厳禁である。

②空気を送り込む

物が燃える（燃焼）とは、燃料を急激に酸化させること。燃料と酸素の化学反応なのである。空気はたくさんありますが、空気が燃料と接触できるのは、燃料となる薪の表面だけだ。効率よく空気を送り込むことが必要となる。

③温度を上げ続ける

燃料と酸素がそのまま置いてあっても、燃え出すことはない。燃料が燃えるためには、発火する温度まで温度をあげなくてはならないのだ。そのためには、きっかけづくりが必要だ。そのきっかけとなるのが、最初の着火である。これは、マッチやライターの役目となる。

時折、大きな薪をマッチで火をつけようとするスカウトがいるが、それでは薪は燃えない。なぜなら、マッチはあくまできっかけづくりだからだ。

マッチの火は、燃料を少しだけ燃す。そのときに出る熱（燃焼熱）が周囲の燃料の温度を上げ、さらに燃料が燃えていく。この連鎖反応が起きた時に燃料は燃え続けるのである。

そのため、最初に着火するものは、小さな物、つまり温度が上がりやすいものでなくてはならない。

これで、なぜ新聞紙が簡単に燃えるか理解できたろうう。薄く、小さいから、新聞紙はよく燃える。しかも、燃えるために必要な酸素ともたくさんの面積で接していいる。

着火できたら､それをもうひとまわり大きな燃料（焚き付け）に火を移し、さらにそれに火がついたら、もうひとまわり大きな燃料（細薪）に火を打を移す、という具合に連鎖させていく。熱は、上に行くから、少しずつ大きな薪を上に積んでいくようにする。

なお、生木というのは水分をたくさん含んでいる。水は温度が上がるときと水蒸気になる時に、たくさんの熱を奪っていく。そのため、燃料の温度が上がらない。そして、煙もたくさん出る。

雨天時など、もしも大きな薪だけがあって、着火できるものが他にあまり集められないといったときは、薪の表面を薄くナイフで削るといった方法もある。

④マッチの使い方

「ボーイスカウトであるならば､マッチ２本以内で焚き火をつけろ」と言われてきた。それは、今でもキャンプの先人としてのプライドとして残っている。

ライターやチャッカマンではない。マッチである。

しかし、最近、マッチで着火することがめっきり減ったせいか、マッチで火をつけられないスカウトも増えてきた（指導者も・・・）。

そこで、マッチの使い方について、ちょっと触れておこう。

㋐マッチは、細い木の軸の頭に発火性のある混合物がついている。
㋑親指、人差し指で軸の終端をしっかり挟み、中指で頭を押さえて、マッチ箱の側薬に押し当てながら勢いよくこする。
㋒頭薬が発火するので、火がつく直前には中指は外す。
㋓頭薬に火がついたら、頭を下にして、火を軸に移す。
㋔そして、火をつけるものに着火する。
㋕また、風で消えてしまうようなときは、風上を手などで覆う。

以上が火をつける手順である。

マッチの火を使って､小さなものに火をつけて､その火が中くらいのものに火をつけて、最終的に大きなものに火をつけて料理に利用する。その過程で、空気を上手に送り込むのである。

⑤薪を拾い集める

薪をサイズ別に分けて、ナタなどを使って枝分かれがない状態にする。そしたら、薪を積んでいく。一番下は、着火剤となる杉の葉っぱ等。その上焚き付け、細い薪、中くらいの薪と重ねていく。この段階では、大きな薪はまだ置かない。下から順にというのは、火は上へと行くからである。。もちろん、隙間なく積み重ねると、酸素が入っていかない。かといって隙間がありすぎても温度が上がらず燃えていかない。

木の積み方にはいくつか方法はあるが、一番簡単なのは、長い薪の遠い側の先端を斜めに地面に刺し、それに持たれかけるように左右に振り分けながら、逆Ｖの字に置いていくやり方だ。

こうすると、空気が通るある程度の隙間が勝手にできていくのである。もちろん、長さが長いものは、手前の方に出しておく。

キャンプファイヤーのように井桁に組む方法、すべての方向から中心に向かって積み上げていく方法もあるが、野外料理の使う場合は、カマドに適した薪組みをすることが大切だ。

ここまでできたら、あとは、マッチで着火するだけだ。

最初は、炎がちょっとの風で消えてしまうこともある。手で囲ってあげたりして、風を防ぐ。まだ、ウチワであおいではいけない。

小さな炎が少し安定したら、必要に応じてウチワで空気を送る。たいがいは、風が吹いてるので、その自然の風で燃えていくだろう。

●炭と灰の違い

炭と灰は、ものを燃やした時に残るものであるが、ここでは木を燃やした場合で説明していくことにする。

炭は、木に火をつけ炎が立たない程度に酸素を供給し、約 1200 度の高温で蒸し焼きの状態で作られる。この方法により、木の水分などはガスとして蒸発し、残ったものは炭素として結合する。こうして出来上がるものが炭である。

灰は、木に火をつけ、何らかの制限を加えることなく酸素をどんどん供給していくと、やがて燃え尽きて最後に粉っぽいものが残る。それが「灰」である。これは、木の中にある水や二酸化炭素は完全に蒸発するが、無機質や微量に含まれている金属元素などは燃えることなく残るのである。

●火口の必要性

火口とは、火起こしの際に、マッチやライターの火を移し取って、大きな炎で燃えて、焚き付けにその火を移す役目の材料のことである。

スカウトキャンプで最も身近で、手に入れやすいのは、「麻ひも」をほぐして、くしゃくしゃしたやつなのだ。

麻ひもをほぐしたものがよく燃えるのは素材と素材の間に空気がたくさんあるからで、フェザースティックや細い薪がよく燃えるのも同じ原理で、空気とのバランスが良いからなのだ。

（3）キャンプの火を使うときの注意事項を知る

キャンプにおいて、最も気をつけなければならないことは「火気」に対してである。それは絶対に「火事」を出さないということ、つまり防火と延焼の防止対策、そして、ケガ（火傷）を出さないということだ。そのためにも、指導者としてはスカウトに十分な知識とスキルを身に付け、スカウトに指導できるようにしておかなくてはならない。言い換えれば指導をしないでスカウトに「火」扱わせてはならないと言うことだ。

スカウト・キャンプでは必ず火をつかう（ランタンやストーブも含めて）。裸火を使う際の注意事項は、

- **風に対する注意**
- **延焼をさせない注意**
- **火傷をしない注意**
- **完全な消火**

である。

中でも、一番大きな注意要素は「風」である。風により火の粉が飛んだり、火が大きくなって延焼に繋がる。

①風の強さ

風が強い場合「焚き火はしてはならない！」

これが大原則だ。特に「乾燥注意報」が出ている「強風」ときは決して焚き火してはならない。火の粉が飛んで火事になる危険が非常に高いからだ。（「異常乾燥注意報」であればなおさらだ）

→天気予報の確認とガスコンロ等化石燃料の準備

②風向き

風向きに注意し、焚き火をする場所の周辺の落ち葉等をできるだけ除去する。周囲 3m 以内（特に風下）に引火するモノを置かない（取り除く）こと。

③それ以外にも

○「火守り」（焚火の責任者）を決める。

○防火用水を準備する（最低でも 20 リットル）

→ポリタンクではなく、バケツで。それは消火のための水をコントロールしてかけやすいから。）

○風除けの設置

→燃焼効率の点で。また防火という観点では、火の粉が飛んでいかないように。

○穴を掘ったり、かまどを設置したりして火を制御する。

→土壌が腐葉土の場合は穴を掘った焚き火は不可。腐葉土自体が可燃物なのである。

○終わったら完全に消火する

→水をかけて、足で踏み砕くか、燃えさしを火消し壺等にいれる。そして最後は土をかける‥‥等が考えられる。

○十分な薪の確保をしておく。

→薪が無くなったとき火守りがその場を離れないように。

→火が付いている間は、必ず責任者がその場にいるような役割分担と人員配置を行うことを指導する。焚き火をする場合は、防火用水は常に用意する。

○炊事の火を使う場合、カマドを正しく安全に使う

→立ちカマドが崩れない、構造材や縄に火が燃え移らない。風の強いときは使わない）こと。

○地面の草や立ち木の枝葉の保護。

④続いては火傷である。

たかだかマッチの軸径ほどの火傷１つで、楽しいハズのキャンプは台無しになってしまうものだ。治療をするにしても、流水で冷やすのが良いことが分かっていても、流水が無かったり、氷もなかったり、時には水すらなかったり・・・・。

それ以外には、衣服に燃え移ってしまうこともある。ズボンの裾やシャツの袖、ネッカチーフなどに燃え打った例がある。

そして、最後にして最大の注意事項は、「完全なる消火」である。
一番いいのは「灰」になるまで完全に燃してしまうこと。灰はそれ以上燃えることはない（右欄ヒント参照）。
炭や燃えさしの場合は、燃焼を止めることである。燃焼が継続するには可燃物、酸素、温度の３つの要素（燃焼の三要素）が揃う必要がある。これらのうちのどれか１つを取り除くと燃焼は停止する。方法としては

- 酸素の供給を絶つ（土や防火布をかぶせる、消し壺に入れる）
- 可燃物の温度を燃焼に必要な温度以下に下げる（土、砂、水をかける）

がある。

4）焚き火の薪について

焚き火をするには、その燃料となる「薪」がなくてはならない。
最近では、整備されたキャンプ場が多くなり、そこを使わざるを得ないために、その周辺で薪が拾えず、やむなくホームセンター等で薪を購入している隊もあると聞いている。
しかし、薪だけでは、いくらマッチを近づけても火は着かない。

㋐「火口（ほくち）」（着火剤としての新聞紙、枯れた杉の葉など）
㋑「焚き付け」（楊枝～割り箸位の太さ枝先）
㋒「細薪」（鉛筆～大人の小指くらいの太さの小枝）
㋓「中薪」（大人の親指～親指と人差し指で作った輪位の太さの枝）
㋔「太薪」（手首の太さ～。これがホームセンターで売っているもの）

という順に順次燃え移して（これを「火を育てる」という）いくことで、焚き火になるのである。ホームセンターでは㋐から㋓は売っていないので、別途着火剤が必要になってしまう。着火剤を使うと、誰でも難なく簡単に火を着けられてるので、そこには創意も工夫もいらない。すなわち、その段階でスカウト・キャンプではなくなってしまっている。㋐から㋓は、家の庭や公園などで剪定したり、風で落ちたりした枝から取ることができるので、機会を見つけて集めておこう。
また、キャンプ場で拾えるならば、次の点を考えて必要な量を拾ってくる

落ちている枝	落ちてから余り時間が経っていない、しっかりした枝を拾う。 時間が経ちすぎて腐ってきているものは、火つきがわるく、火力がでない。
立ち木の枯れた下枝	これは折ったり切ったりしてもよい。良い薪になる。
立ち枯れの木	ほとんどが太い木なので、倒すのが大変だが、倒してしまえば良い薪となる。
切り取って乾燥させた枝	各枝の太さから、用途に応じた薪がたくさんとれる。

○薪置き場（太さにより区分して収納する。だいたいの長さを揃えておく（下表参照）。
○実際に使用するときはその状況に合わせて長さを調整する。
○キャンプで使用する薪が常にストックされているように「薪係」は注意を払う。雨天も考えられるので、濡れ対策も考える。
（→スカウトソング「ぼくら元気」も参考に）
○薪割り場は、みんなから見える場所に設置する（誰が作業しているかを即確認できるように）。
半径 2m の大きさの円の作業場と、その外側に杭とロープなどで囲いと出入口を作る。出入りは必ず出入口から行う。また、作業は出入口に正対（向かって）して行う。これは、入ってくる人を発見

しやすいためであり、入る場合は声を掛けて、相手がそれに呼応し、かつ作業を止めたのを確認してから入るようにする。

薪割りの道具は、使ったら放置せずに、その都度工具（道具）置き場等に戻し、安全に管理された状態に置く。

○焚き火の（火を育てる）道具は・・・・・

- ナタ・・・・・ 薪を適切な太さに割る。（片刃は切り込みを入れ、両刃は割るのに適している）
- 剪定ばさみ・・ 枝をカットする。
- うちわ・・・・ 空気（酸素）を送って燃焼を活性化させる。
- 火吹き竹・・・ 局部的に燃焼させる時に使う。
- 火ばさみ・・・ 薪をくべたり、焚き火を組み直したり。
- 手袋・・・・・ 革製の作業手袋を。軍手の場合は純綿性のものを。
- のこぎり・・・ 倒木や大きな（長い）薪はをカットする。
- いす・・・・・ 火守り（焚き火奉行）が座るため。

2. WB 研修所での食事

（1）献立

研修期間の食事について、献立と所要食材表は事前に所長・QM・生活担当副長の協議により、生活担当副長が作る。（ただし、「ゲストナイト」をする場合は、その献立を各班に出させることも考える。）

献立には変化を持たせる。飽きぬよう、また栄養的に偏よりや不足がないよう材料に変化をもたせることはもちろん必要であるが、調理法も変化に富んだものとしたい。毎日朝夕、ごった煮ばかりでは食欲も減る。得意な料理はもちろんだが、それ以外にも焼き物、炒め物、工夫すればローストもできる。たとえ缶詰を材料に使っても、調理の仕方と工夫によっては、生のものを使うよりも、美味で安上りの料理ができ上る。

スカウト・キャンプでは、献立を作る単位は「班」である。隊キャンプでは、食材の調達の関係から、全ての班が同じ献立となることが多くなってしまうが、それでも各班の班長が班で決めた献立を持ち寄って、班長会議で協議・調整して「隊の献立」を作るということを知らせてもらいたい。

また、献立は融通が利くよう組んでおかねばならない。非常な悪天候、現地調達の手違い、プログラムの変更等の場合、これに即応して献立を変更しなければならないし、最終日に食材を余らせないように、食材の使い回しを考えて献立組むことも必要だ。

非常の時や、急を要する時はインスタント食品も役に立つ。しかし、時間をかけた手料理が好ましいことは平素の家庭生活と同じである。特にスカウトの野営では、食べるだけではなく、作ることにも大きな意義があることを忘れてはならない。

（2）配給は各班の配給係の協議で行う

最近まで、WB 研修所で行われていた食材の配給の仕方は、なぜか「班別」に、しかもカゴに入れられて用意されていた。いつからそうなったのか・・・。そのまま各隊のキャンプに伝播してしまった。しかし、それは「やってはいけない」！

スカウト・キャンプでは、班によって参加人数はまちまちである。その班の人数に応じて食品を分けることは、これもまた手間がかかる。どうして各班に「配給係」がいるのだろうか。そこを考えよう。

主担当は、生活担当副長である。といっても彼が食材を分けるのではない。彼らは、配給の準備や後片付け、そして「どの食事の食材なのか」「他に配給

●献立を立てるときの注意

1 泊程度の短期間のキャンプであれば、各栄養素に配慮しなくても済んでしまうが、中長期のキャンプでは、十分な栄養が摂取できるよう、特に考えて献立を組む必要がある。

専門知識を持つことも大切だが、最低でも、炭水化物、野菜・果物、肉・野菜類等は 1 日どれ位食べればよいのかを知っておくことは必要だ。

また、野菜などは 1 度に使用できないこともある。そのためには食材の使い回しを考え、最後の食事で全て使い切るように計画的な献立をたてることも大切だ。

する食材（例えば冷蔵が必要なもの等）はいつ配給するのか」などの指示を伝えるのが役目であり、どの食材をどれだけ持って行くかは各班の「配給係」の話し合いに任せるのである。

具体的には、指導者が、その配給時間に配給する食材を配給所にまとめて置く。それを各班の配給係のスカウトが集まって協議し、それぞれ班に必要な分だけの食料を持って行くのである。

今どきの食材のパッキングは、決まった数量だったり、重量だったりする。そのため半端な残り物が発生する。成長の真っ最中のスカウト達は腹が減っている。少しでも多くの食料を獲得したい。しかし自分の班だけでなく他の班のスカウトにも等しくなるよう分けなければならない・・・、だがやはり少しでも多く獲得するのが班の配給担当の役目でもある。なんて雰囲気を醸成することで、スカウトにはゲームとなり、また「おきて」の実践の場を提供することになる。

半端な残り物については、隊に返すか、各配給係で話し合って、どの班が持ち帰るかを配給係に決めさせる。

これは、茨城の WB 研修所でのやり方である。あくまでも一例である。配給にはいろいろな方法があるので、その目的に応じた配給方法でよい。

（3）調理と焚火

キャンプでの炊事は１～２人、しかも女性が中心で行われている傾向がある。しかしながら、スカウト・キャンプであるならば、「炊事当番」が行う。いや、行わなければならない。スカウトコースでもそのようにする。

また、良く見かけるのは、食材の準備が整っていないのにカマドでは火がボウボウと燃えている。無駄な燃料を使ってしまっている場面だ。限られた薪を大切に使うことも含め、炊飯やおかずの調理に必要な時間、炊事に使うの火の状態（炎が必要なのか、熾火が必要なのか）までを考慮して、調理と焚火の段取りと連携を考えさせることが大切だ。

また、キャンプにおいて、最も気をつけなければならないことは、前述したが「火気」に対してである。基本的にスカウト・キャンプの場所は、林の中で、燃えやすい木や葉に覆われている。注意を怠れば、それらに火が移り、火事になってしまう。絶対に「火事」を出してはならないことを肝に銘じてもらいたい。（P.85 参照）

さて、美味しいご飯は、いかにβデンプンをαデンプンに変質させるかにある。

米を炊くとふっくらと粘りのある状態になるのは、米の主要成分であるでんぷんの結晶構造が、水と熱の作用でほどけて膨張し、粘性の強い糊になるため。この状態を糊化（α化）といい、糊化する前のでんぷんをβデンプン、糊化したものをαデンプンと呼ぶ。

βデンプンは水に溶けず消化しにくいが、αデンプンになると消化がよくなる。αデンプンは冷めるとまたβデンプンに戻ってしまうが、再加熱により再びαデンプンになる。

デンプンがα化するには、その重量の 30%の水と熱が必要。デンプンが成分の 77%を占める精白米の水分は約 15%。そのため、α化させるには、炊く前にあらかじめ米を水に浸して吸水させ、加熱中にも米粒内に水分を送り込む必要がある。

（美味しいご飯の炊き方は P. ○○を参照のこと）

（4）食事

スカウトの野営は「不便をしのぶ」訓練や、豚のような生活をするために行なうものではない。時間をきちんと守ること、食前の感謝、食事の作法などをスカウトに実践させる＊「おきて」の実践の場なのである。

- 定められた時間の少し前に、班の全員は食卓につく。

再び登場したこの絵。手前に立ちんぼのスカウトは給仕当番である。バツで立たされているのではない。

- 食事中、勝手に盛りつけのため立ったり座ったりせずにすむよう輪番の給仕当番に世話してもらう。（右の絵）
- 食前に水分を多くとることはつつしむ。それは胃液を薄め、昇華を妨げ、胃や腸なと消化器の病気を起こしやすいからだ。
- 食事のマナーは、まず指導者が手本を示してスカウト達を指導する。
- 食前・食後の感謝 * を忘れない。
- 楽しい雰囲気で食事をさせる。
- 食事は 20 分から 30 分かけて、十分に咀嚼するのが良い。
- 偏食をさせない。キャンプでは何でも好き嫌いなく食べる努力をする、良い機会である。
- 食前の手洗い、食後の歯みがきを励行させる。
- 指導者は、時には各班を順次訪問して、スカウト達と一緒に食事するとよい。

（5）飲料水と雑用水

水道水（上水）や、水質基準を満たしている井戸水、ペットボトルで売られている水飲のみを使用すること。それ以外の生水は飲用しないこと。

以前は、沢や川の水を利用することもあったが、現在は自然水は基本的に飲めないと考えでもらいたい。

以前は北海道だけに限定的に発生していた「エキノコックス症 *」は、今では本州でも感染が確認されている。言い換えれば、川の水が付いたままの手や、食器や野菜を川の水で洗ったりした場合にエキノコックスが付着していたならば、直接飲まなくても感染する可能性が出てきたということだ。こう書くと、日本の全ての沢や川がエキノコックスに汚染されているような書きっぷりだが、決してそうではない。2018 年 3 月に愛知県知多半島で検出された例が最南端・最西端であろう。近県では 2005 年に埼玉県から検出されている。・・・ということで「触らぬ神にたたり無し」ということで、「自然の生水は使わない」を絶対に守ってもらいたい。

どうしても沢や川の水を使わなければならない場合は、洗剤 ** で良く洗うか、火を通すかしなければならない。ちなみにエキノコックスは熱に弱く、60℃で 10 分間または 100℃で 1 分間加熱すれば死滅するということだ。

（6）食器洗いと乾燥、使用する洗剤

前述の通り、食事をとった後の、炊具や食器については、洗剤と水道水で良く洗うことを励行してもらいたい。沢水を使わなければならないときは、最低でも 60℃以上のお湯で 10 分間煮沸すること。

洗浄が足りなかったり、水分が残っていると、「カビ」が生える原因となる。よく乾燥させてから収納すること。

一方、環境保護の観点からは、合成洗剤（石油由来洗剤）はやめて、主に動植物製の油で、ヤシ油、牛脂、ラード、なたね油、大豆油、米油、オリーブ油などから作られた、いわゆる「石けん」* を使おう。

合成洗剤の残留性についての文献を読むと、素焼：4.88ppm 金属：0.94ppm、プラスチック：0.55ppm、磁器：0.27ppm、ガラス：0.17ppm と、丁寧に水で洗い流したつもりでも合成洗剤は相当残ってるのだ（三上美樹・藤原邦達・小林勇著「図説・洗剤のすべて」合同出版）。

食器用洗剤原料の「アルキルエーテル硫酸エステルナトリウム」は、皮膚の角質を溶かし、皮下へ浸透することにより皮膚障害を引き起こす可能性があり、また妊娠中に子宮内で死んだ胚が胎盤へ吸収される「吸収胚」のリスクや不妊リスクが増加するという。

他の物質についても、少なくとも「口に入れるには不自然すぎる」ものであることは一目瞭然だ。

*** エキノコックス症**

エキノコックス症は、蚊にさされて発症する「デング熱」や「鳥インフルエンザ」、マダニに噛まれて感染する「重傷熱性血小板減少症候群」「ライム病」「日本紅斑熱」、つつが虫に刺されて発症する「つつが虫病」などと同じ「第四類感染症」に分類されている。

** 洗剤で洗う

これについては、文献が見つからなかった。

エキノコックスについては北海道庁のホームページ（http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/kth/ekinoWeb20150402.pdf）をご覧ください。

◎予防方法

エキノコックス症の予防方法としては、野山に出かけ、帰ったときはよく手を洗うこ とや、犬などとの接触や、虫卵に汚染した可能性のある水、山菜などの摂取を避けることだ。

1 野山に出かけ、帰ったときはよく手を洗うこと。
2 野犬や野生動物にはむやみに触れないこと。触れた場合は、よく手を洗うこと。
3 衣服や靴についた泥はよく落とすこと。
4 沢や川の生水は飲まないこと。
5 山菜や野菜、果物等はよく洗ってから食べること。

●石けんは分解される

石けんは石けんカスができるからどうのこうのという批判があります。石けんカスとは水の中のカルシウムと石けんが結びついたものです。実は石けんカスができるから石けんはいいと、逆の理論が成り立つのです。洗濯している間は石けんで、川に流したらカルシウム石けんになって、これは魚のエサになってしまうワケです。

東京湾には何 ppm という合成界面活性剤がいまだに残っているわけですが、石けんはどこの川、どこの海を分析しても少しも出てきません。1ピコグラムも出てこない。それは石けんがすぐカルシウム石けんになってすべて食べられてしまうからです。下水を廃水処理した結果も、全部分解されて石けんという形では残りません。石けんは作り方がごく簡単ですから、自然の循環でまたすぐ戻ってしまうのです。

合成界面活性剤のように非常に高温高圧の中でしか作れないものは、魚や自然界では分解できずにどこかに留まっていて、それがやがては人間に返ってくる。

（http://www.coara.or.jp/~wadasho/umitosakana.htm）

キャンプファイア

1. スカウトのキャンプファイア

(1) キャンプファイアとは

ボーイスカウトのキャンプ生活において、キャンプファイアのプログラムほど感激が深く、思い出深いものはないであろう。

キャンプの日課がつつがなく終わり、リーダーや仲間と囲むかがり火は、昼間の疲れをいやし、自然のふところで生活できる喜びを味わわせてくれる。これは、人間の祖先が。天地創造の神より火を授けられた時からの恩恵にほかならない。キャンプは、神の存在を知る手がかりとして現代人に与えられた場であるが、キャンプファイアは、さらにその心に触れさせてくれる神聖な場でもある。

キャンプファイアには、このほかに、炊事のためのもの、暖をとるためのもの、夜間に獣類などの来襲をふせぐためのものなどがあるが、一般にキャンプファイアというと、キャンプでのかがり火をいう。

キャンプファイアが、人の心に感激を与えるものであることは、参加者の誰もが認めるところであるが、時として、心ないキャンパーに中には、酒宴の場とし、あるいは宴会の場と勘違いしている者があることは、その本質を忘れたものとして非難されるべきものである。

キャンプファイアが、人心に深く刻みつけられるのは、炎の中に魂の叫びがあるからではないだろうか。炎の叫びは無言であるが、鬱蒼たる樹木に映えて燃え盛る火の魂は、人の霊感に木霊（こだま）して共鳴する。私達はキャンプファイアの意義を個々に発見する。

キャンプファイアは、人格を作り上げ、インスピレーションを向上せしめる隊活動の最も効果的な機会のひとつである。

キャンプファイアの催し物は、屋内でも屋外でも、模型または本物の「火」を囲んで行うことができる。「ちかい」の３つめに表されている理念は、キャンプファイアの諸活動を通して強調することができる。これはスカウトたちに、身体を強くし、精神を目覚めさせ、道徳的に強くなるという言葉の意味を益々よくわかるようにさせる。

スカウティングの諸目的の達成に役立つと同時に、キャンプファイアは楽しいものである。ファイアを囲んで、楽しい時間を過ごす場合に、あのスカウティングの先駆者アーネスト・トムソン・シートンが示した、楽しみのためのルールを思い出そう。

- お金を使わずに楽しむ方法を学ぼう。
- 誰も肉体的にも精神的にも傷つけられてはならない。
- 創造的であれ。最良の楽しみは想像力から生まれるのである。

（B.S.A.---Troop Activies--- より）

キャンプファイアの定義は人によっても異なるが、一緒にキャンプをしている団体のメンバーが集まって輪になり、その中心に薪を組んで、焚き火をする形が一般的である。火が燃えている間、集まった全員で歌を歌ったり、踊ったり、過ごし方はさまざまである。

焚き火そのものの火力の操作などをする人を「ファイアキーパー（営火係）」といい、その周りで、コミュニケーションゲームや歌などの行事全体を仕切る人を「エールマスター（司会）」という。

また、キャンプファイアによっては、「ファイアチーフ（営火長）」や「火の神」などと呼ばれる、井桁などへの点火で重要な役割を行う担当者を設けることもある。この役割の人選にあたっては、学校や各種団体などの責任者、もしくはスタッフの最年長者などが選ばれることが多い。

(2) キャンプファイアの意義 （キャンプファイアに期待されるもの）

○夜のプログラムを有意義に過ごせることができて、そこに楽しさと親しさを与えてくれる。
○班の協力、スカウト全体のうちとけた中に協力の場が展開される。
○スカウトの親密感を自然のうちに作り出す。
○快活、友愛、高度の上品さ、そして Scout Law（おきて）がみなぎる雰囲気。
○火を通して、夜のしじまを通して、夜話を通して、宗教への接点をつくる。
○情熱の発散を秩序立てて順序よく行う（正しい規律）。

(3) キャンプファイアの種類

◎**セレモニアルファイア**（儀式的なもの）
→キャンプの始めや終わりの式、入隊・上進式、など
◎**カウンシルファイア**（懇談的なもの）
→話し合い、語り合い、経験談など（まさに B-P のイラスト）
◎**ボンファイア**（親睦的なもの）
→レクリエーション的な性格、歌や踊り、人間関係の親密を主とする。

が、一般的なものである。その目的によって、このいずれかが強調されることになるが、霊感的なものであると同時に、楽しいものでなければならない。しかも、リーダーのよき指導によって、プログラムには、歌やスタンツ、話・踊りなどが適当に盛り込まれ、感激に結びつくものでなければ、その教育的効果はあがらない。

(4) キャンプファイアの場所

①場所の選定
○厳粛な雰囲気の出せるような場所
○大きな樹木で囲まれ、参加人員に比例した適当なスペースがあること。
○火が周囲や木々の上枝に燃え移らない場所。
○スペースが平坦であること。
○他からファイアが見えないこと。
○風か吹きさらさない場所。
○サイトからあまり遠くないこと。
○場所の近くに電灯などがついてないこと。
○自分たちだけになれること。
○自然の伴奏が得られればこのうえない。
○燃料が得易いこと。

②場所の作り方
○火床（火を焚くところ）の位置を決める
・火床はふつうサークルの中心である。
○営火長席を決める
・営火長の席は北極星を背にした北側にできるだけ決めるようにする。
・北極星の位置は不変であるし、旅人や航海者の暗夜の道しるべである。
○参加者の座席の位置を決める。
・この位置は、参加人数によるが、直径 5 ～ 10m 位が適当である。
・これ以上広くなると親密感を失う恐れがあるし、営火との縁が切れて雰囲が薄れることがある。

・大人数の場合は、１重の円に限らず２重、３重とした方が良い。

○場内の清掃・整備をする。

・特に石ころや木の切り株、木の根などは除去する。（安全対策）

○座席

・座席用に丸太などがあれば申し分ないが、なければそれに代わるものを用意するか、参加者に敷物（シーターポン＊や椅子）を準備させる。

○ステージ

・火の周囲のステージは、スタンツや踊りなども行われる場所であるから、平坦地であることはもちろん、背景に樹木を必要とする。この場所作りは重要な条件になる。

（5）キャンプファイアの準備

①全体計画

目的とその効果が最大限に発揮されるよう、場所、配置、座席、役割分担そしてプログラムをつくる。

②役割と分担

少人数の親睦を目的としたキャンプファイアでは、特に役割を分担しないで進行した方が自然にできる場合もあるが、ある程度のキャンプファイアになると、特に儀式的な要素を加味した場合などでは、営火長、進行係、営火係等を決めて運営した方がすっきりしたキャンプファイアができる。

もちろん、これらの係はその大きさや種類によって省略したり兼任したりしてもいい。

○営火長（Fire Chief）

- 営火長は、多くの場合キャンプ長がなるが、時にはそのキャンプの最年長のリーダーや来訪者にお願いする場合もある。
- 営火長は、キャンプファイア全体の統率者であると同時に演出の中心でもあるので、各係と十分な打合せをしておく。
- 点火、開会、閉会の宣言、献詞、ヤーン等を担当する。
- 営火中は進行係や営火係を側に置き、その指示によって雰囲気を作らせる。営火進行中の指示はできるだけ言葉を用いず、手 や顔の表情で意志の伝達をする。

○進行係（Yell Master）

- 営火長の意を体して、プログラムを進行展開していく。
- プログラムの編成とともに営火長のキャンプファイアに対する考え方と、進行の方針を聞き、それを進行に反映する。
- 不測の事態に備える臨機応変さが必要。
- キャンプファイアが成功するかどうかは、この進行係の演出如何にかかっている。手際よく軽快な動作や、機知に富んだ言動は、そのときどきに応じて雰囲気をつくるのに役立つ。
- 補助としてソングリーダーを設けても良い。
- これらの意味においても、進行係の人選は非常に重要である。

○営火係（Ftre Keeper）

- キャンプファイア中における火守りである。
- スタッフの人数によっては、準備係や後始末係と兼務する。
- 進行係と密接な連絡をとり、スムーズな進行に協力する。
- 進行に伴って、火の盛衰を加減することにより演出を行う。
- 追加する薪は、サークルの外の邪魔にならないところにおく。
- 補充する時は、プログラムの合間をぬって目立たぬようにして入れ

●シーターポン（Sit-upon）

屋外用の簡易ざぶとんのことを言う。

英語で、***sit-upon*** と綴り、敷（し）いたらポン・・・ではない。

厚手のポリ袋の中に絵を描いた厚手の用紙に新聞紙を挟んで作る。

《ポリ袋》

100 均などでも売られている A4 サイズの厚手のチャック付ポリ袋。ポリ袋の厚みは 0.08mm 位が適当で薄いと破れやすくなります。1 袋 6 枚入りくらいで売られている。

《用　紙》

A4 のコピー用紙でも良いですが、挟んだ新聞紙がうっすら見えてしまうので、透けない厚手の用紙が適当。

《新聞紙》

新聞紙５～６枚ほどから好みの厚さに合わせて枚数を調整。新聞紙全面は A4 の約 8 倍あるので、3 回折ります。最近は新聞をとっていない家庭もあるので、配慮が必要。

る。
- 劇や歌などのプログラムの進行中は、よほどのことがない限り、火を直したり薪を補充してはならない。

※営火係は、全く舞台裏で地味な役割であるが、キャンプファイアの主体が火であることを考えると、最も重要でな役であるので、その人選には心したい。

○準備係
- キャンプファイア運営上の一切の準備をする係である。
- 場所の選定、場所作り、薪組み、防火用水の準備、入場者の道案内、着席場所、点火方法などが主な任務。
- 準備係と後始末係は、楽屋裏の名優である。

○後始末係
- キャンプファイア終了後の後始末を行う係であるが、火に関する始末であるので、真剣に取り組まなければならない。
- 消火用水、スコップ等の用意。火を広げながら十分に水をかけて消火する。火が消えたと思っても残っている場合があるので、よくかき回してみる。
- 水が少ない場合、消火には砂や土を利用する。
- 風には十分に注意。
- １～２時間後に再度点検。また翌朝に清掃。
- 紛失物の点検等。

(6) キャンプファイアのプログラム

①プログラムの編成

○プログラムの要素
- ・開式、点火、献詞、歌、劇、スタンツ、踊り、話、ヤーン等の構成要素。(消火・・・はない。)
- ・テーマ、目的、効果等の教育的要素。
- ・静的、動的、儀式的、懇談的、親睦的等の形態的要素。
- ・全体の時間、それぞれの出し物の時間等の時間的要素。

○プログラム作成手順
- ・進行係が中心となって、上記の要素を十分に吟味して、その構成の概要を決める。
- ・その構成に従って、各班に出し物を依頼する。(上記要素を十分に伝える)また、参加者全員が何かをやるように。
- ・出演の順序を決める。
- ・本部の出し物は最後に。(天候によるプログラムの中止対応、参加者の期待、ベテランスタッフの場合のその後への影響力等により)
- ・静→動→静のリズムとその区切りときっかけ・誘導。
- ・スタッフの出したプログラムの検証。

②プログラムの構成要素

○5つのS (Song, Stunts, Stories, Showmanship、Smartness)
- ・これらが如何にうまく構成されるかどうかにかかっている。
- ・キャンプファイアの目的に合った５Ｓのバラエティーが大切。

○歌 (Song)
- ・キャンプファイアを感銘深く、楽しいものとするための歌。
- ・楽しく健康的に、誰もが気持ちよく歌うこと聞けることができる歌。
- ・上手下手は問題ではない。
- ・原則として独唱は避ける。
- ・上手なソングリーダーが必要。(上手＝歌唱が上手という意味ではな

い）

・楽器は特に必要ない。あっても、ハーモニカ、ギター程度か。薪や竹などを打楽器として使用するほうがいいかも。手拍子は最も簡単で有効な楽器。

・全員で歌う歌は、みんなが知ってることが大切。１番だけ繰り返すのも手。（班の出し物としての歌は、得にこだわらない。）

・キャンプファイアは、知らない歌を教える場としては適当でない。

・１回に歌うのは１曲にする。つづけて何曲も歌わない。時間にしては２～３分ぐらい。

○スタンツ（Stunts）・スキット（Skit）

・この語には、妙技。離れ技・仕事・高等飛行等とあるが、キャンプファイアにおいてのスタンツというと、キャンプファイアの演出効果を高めるため、点火や開会を劇化し、儀式的に行ったりする。この劇化するその心と動作がいわゆるスタンツである。

・点火の方法に趣向を凝らす。古風な儀式は非常に重みを加えるものである。

・寸劇はキャンプファイアのプログラムとしては、スタンツの代表的なもの。

・スタンツは時に応じての機知をこそ尊ぶもの。即妙なる機転を高く評価する。

・メーキャップよりも動作で表現。

・ありあわせのものを使う。あまり凝ったものはかえって引き立たない。

・内容はあまり凝らない方がいい。既成の内容は不適。その地域、その場を題材に班員みんなでストーリーを考え、セリフも演じる者が考える。

・時間は５～１０分で終わるもの。

※演じてはならないもの

●障害を持っている人を蔑視すること。
●いかなる宗教も揶揄すること。
●いかなる職業も揶揄すること。
●本物の刃物等を使うこと。
●人種に関するもの（差別化）。
●政治的、思想的なものも避ける。

・フォークダンスの多くは、本来火を囲んでの楽しみから発展したもの。

・いずれもキャンプファイアという火を中心とした集いの出し物であることを確認して、効果的に行われるべき。

○話（Stories）

・火を囲んでの営火長の話は、その話術如何にかかわらず、聞く人の胸をうつ。それは、彼の人生経験から生まれた話であり、また、彼が感激して自分のものとした話だからである。愛情がほとばしる話は、どんな内容のものであってもスカウトの心の中に永く食い込んで離れないものである。

・なつかしい話、ユーモラスな話、感動的な話、心があたたまる話、等。

・あくまで夜話（ヤーン）であって、演説ではない。

・スカウツオゥンではない。

○演出（Showmanship）

・ショーマンシップ（演出）は重要である。演出の上手・下手が、その場の出し物を壊してしまうだけでなく、キャンプファイアそのものまでぶちこわすことになるからである。ココロヨイ演出は観客を楽しませるが、運びのまずい演出は人を不愉快にしてしまうばかりか、ファイアの集いそのものをつまらないものにしてしまう。

・出し物はキャンプファイアの雰囲気に合うものを。

・出演者と観客が火を中心にして、ピッタリ呼吸が合うように。

・唯一の照明である火をうまく利用する。

・舞台は円形野外劇場であることを忘れるな。

●ヤーンとは

Yarn とは「船乗りや旅行者が少々ホラを交えて語る物語」という意味だが、「多少の脚色をくわえた話」程度にしておかないと、ホラ話では困る。

目的は

スカウト達の情操を高め、感銘を与え、又何らかのテーマに彼らの心を引きずり込んで行くような話をすること。

いつ

「夜でなければ」とか「火が燃えていなければ」ということではないが、夜の静寂（しじま）に火がチラチラと燃えている情景は、非常に演出効果の高い設定であることは言うまでもない。

営火の中での最大のクライマックスであることはご承知の通りだが、隊集会、朝礼、宗教儀礼の時などにも実施をしてほしいものだ。

だれが、いつ、どこで?

1907年の夏、ブラウンシー島で行われた実験キャンプにおける営火はそのほとんどがB-Pの語るインドやアフリカでの経験談だった。スカウト達はその話を聞いて魅了され、自分たちも明日にでも同じようにやって見たい、と言う気持ちになってしまった。つまり、明日のプログラムへの導入＝プロローグとして活用されたのだった。

何故

夜の静寂と原始的な裸火のそばで、ヤーンを通して語り掛けるものは貴重な体験談で良いのだが、結果的に「ちかい」と「おきて」につながるもの、又は宗教心への導入であってほしい。もちろん、情操を高め感銘を与える話でなければスカウト達は耳を傾けてくれない。

ヤーンによってスカウトたちが、「ちかい」と「おきて」の大切さを知り、神（仏）や宇宙の真理を感じたならば、ヤーンは成功したと言えるだろう。

どのようにして

最近ではほとんどどの指導者がヤーンを語る時は、営火の中で行うことが多いようだが、営火の中での最大の山場であるヤーンの前には、スカウト達の心を一つにまとめるような歌を歌って、ヤーンを聞かせる「心構え」をもたせてから、語り掛けることが必要だ。

スカウト達は体力が有り余っている時や、他に気を取られている時にヤーンを聞くほど寛容ではない。したがって指導者は意識的にヤーンを聞かせる状況を作り出す（整えてやる）ことが必要であると言うことだ。

どんな話を

人から聞いたり、本を読んだり、マスメ

・出し物には、適当にリズムを作る。
・出し物のうち、リーダーグループの出し物と静かなものを最後に。
・興奮するような出し物は最初のうちに。
・出演の時間が長すぎないように。
・出演の前にタイトル（題名）、内容、出演者等を発表する必要はない。むしろ発表するな。
・火を出し物の道具に使うな。
・扮装の材料は、スカウトの持参品の応用が望ましい。

○スマートネス（Smartness）
・点火前の私語、ライトの点灯を厳禁する。
・出演者はきちんと演じ、見ている方はきちんと見る。
・出演者に対しての拍手は必要なことではない。
・出演者に対して、野次ってはならない。
・他の班の出演中に、自分たちの出演の相談などするな。
・キャンプファイアの終了後大声などだすな。
・自分が楽しむのはもちろんであるが、参加者一同が楽しむものであることを忘れてはならない。

（7）キャンプファイアの規則

キャンプファイアは、楽しいものであるが、それとともに感激的な場でもある。「スカウトの心の内に燃える火」であり「スカウトの心を照らす火である」。決して宴会芸や隠し芸大会会場ではない。あくまでスカウティングとして行われるものであることを忘れてはならない。

キャンプファイアにおいて、ショーマンシップの重要性は前述した通りであるが、しかし、その巧拙よりも、むしろ重要と思われるものは、出演者の気持ちそれ自体である。演ずるものの心が真剣でなければ、どんなに巧みな演出も光らない。

キャンプファイアにはキャンプファイアの規則･ルールがある。忘れがちなこの規則は、リーダーの指導によって彼ら自身に考えさせ、前進させなければならない。

形だけのキャンプファイアなどは、むしろ行なわない方がよい。要は、その精神・態度こそ大切なのである。（→スカウト精神）

（8）キャンプファイアの司会者のルール

（B.S.A. Troop Activites より）

- 必ず注目させる。それまでは話し始めてはならない。スカウトの手信号を利用する。
- 時間通りテキパキとプログラムを進める。これは点火セレモニーの時であり、元気に歌ったり、陽気にやる時である。新入隊員の紹介をしてもいい。
- 「火に従え」 火が燃えるにつれて元気のいい生き生きとしたものをやり、それから静かなものに移っていき、最後は精神的な調子の高いもので終える。これは一般的な規則であるが、しかし適宜変えてるかまわない。
- できるだけ規則を少なくして、それを実行する。
- 全ての用具を、直ぐ使えるように準備しておく。それを迅速に取り出して用いる。
- 全ての「待ち時間」を避ける。だらだらさせないようにする。誰かが遅れたら、次の者に繰り上げてやってもらう。
- 参加者に前もって自分が何をすべきか性格に分かっていてもらう。
- グループ全体に新しい歌を教えようとしてはいけない。それはリーダーグループの特別番組として上演する。
- 変化ということは良いことである。静かな話の後では活発な歌を持ってくディア等から得た知識をかみ砕いてして、自分の物としてから、ある程度自分の経験談のようにして話をする。

人の話を丸暗記しただけではスカウト達の心には入り込めない。皆さんもきっと長い人生経験の中からいろいろな話を持っていることだろう。実際の話（体験談）に勝るものはない。

余韻を残した話し方がスカウト達の心に染みいる。また、彼らがあとから思いだし「あゝあの時の隊長の話はこれだったんだ」という日がくる。その場ですぐに分からせようとしなくても、余韻のある話はあとから効果が出てくる。その場で理解させる方法と、余韻の効果を期待する方法とがあるから、どちらを取るかはその場の雰囲気にもよるだろう。

大成功！と思って、また次の時に同じ話をするのは禁物だ。だからネタはあらゆる本・テレビ・人との会話等の中からヒントを得るようにして言葉を探しておくことだ。

多くの体験を持っている方は、ちょっとした脚色で真実味のある話になるだろう。

日本連盟で発行している「スカウトヤーン」も参考資料として勧める。

る。
- 安っぽい下品な歌やスタンツは許可しない。これらを芽のうちに摘むには勇気がいるが、絶えず注意を怠らず、適宜な方法でこれを問題化しなければならない。我々はスカウティングの理想を固持しているからこそ尊敬されるのである。宗教的な歌又は国家的な歌の替え歌を許してはならない。
- 自分の指導者としてのけじめをつける。他の者達に口を挟ませたり、進行のやり方について、決してあれこれ言わせてはならない。
- 「スカウトは親切である」--- 下品なヤジを飛ばすのは禁止する。感心したときは「ハウハウ (how how)」といい、それ以外の時は黙っていなければならないことを説明する。参加者全員に対して認めたときは、それを示すのに躊躇してはならない。
- 新しいタレントを紹介する時は親しみのあるやり方で行う。
- 時間通りに終了する。タイミング良くするために、プログラムを必要に応じて早くしたり遅くしたりしてもいい。

【結論】

結局、キャンプファイアの司会者として、自分自身（他の人も）快く楽しみ、趣味が良く行儀の良い行いをし、スカウトの理念を行為に移すように務めなさい ----- というとである。

(9) ソングリーダーのためのルール

（B.S.A. Troop Activites より）

- 気を楽にする－－－－キャンプファイアの歌を式するのに、歌手やオーケストラの指揮者である必要はない。手を簡単に、楽に上下に動かすだけで十分である。
- 何を歌おうとしてるのか、はっきり分かりやすく説明し、歌詞を分からせるようにする。
- そのメロディーをハミングで歌ったり、何か楽器を用いてそれにみんなが合わせられるようにする。音の高さがそのグループに丁度いいか確かめる。手を下にふり下ろしたら一斉に始める。
- ユーモアのセンスを持ち続けること。スカウトたちを相手にしているのだから、完璧さを期待してはならない。
- たとえそれがハーモニカによるものであっても、楽器の伴奏がつくと素晴らしい。
- リーダーによる四重唱は、歌の時間の素晴らしい出し物になる。どんな人でも歌詞とメロディーを成功させる。
- それぞれの班にある歌を歌わせ、それから皆がそれに合わせる。これは歌の指導者の間では古くからおこなわれている方法だが、まだまだ相変わらずいい方法である。例えばリーダー達に歌わせ、それからスカウトたちに、それから全員で一緒に歌う。
- 一般的に提案として、あまり長すぎない歌は、全て２度歌うべきである。１回目は練習のために、２回目は完全に歌うために。
- 大声で歌ってはならない歌が多いことを説明する。みんなが本当によく歌えるようになったら、１回は極めて静かに歌わせて、それからちょっとだけ声を大きくさせてみる。
- アクションソングは、とても楽しいものだが、それを良く知っているか確かめること。
- 「次に何を歌おうか」などと絶対に尋ねてはならない。スカウトの数だけ異なった答えを得ることになるだろう。前もって歌う歌を考えておき、２，３の歌は予備にとっておく。スカウトたちがあまり知りもせずに提案する、いくらかうろ覚えの歌を歌うときの助け船になる。
- 何よりもまず、最初の歌は、全員が知っていて、好んでいる曲を選ぶ、最後は愛国的な歌か、精神的な調子の高い歌を歌うこと。賛美歌も素晴らしい。TPO のルールを思い出して、その中のどの言葉も宗派の異なるみんなの気持ちを傷つけるようなものであってはならない。

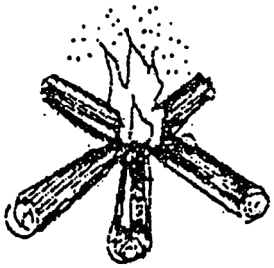
（10）薪組み

キャンプファイアの着火には、一切、着火剤等を使用しない。それがトレーナーの誇りであり、スカウトコースのこだわりとなっている。

なぜか？ 「マッチ３本以内で焚火に火が付けられないとスカウトではない」と言われているように、我々には、焚火に際して、着火のメカニズムを理解し、用意周到な準備をしてから、確実に着火できるという、スカウトとしてのこだわりというかプライドがあり、それを実現するために研究を重ねている。キャンプファイアという場面での点火は、火に対する意識を理解し掴み取る、最も重要な場面だ。キャンプファイアをスカウトの心に位置づける瞬間と言ってもいい。

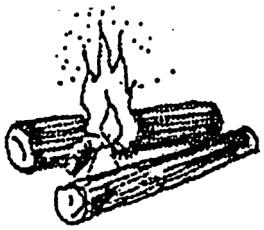
それを体現し、参加者に汲み取ってもらうためである。「これがスカウトだ」と。

保護者から指導者になった方に理解し難い考えかもしれないが、このようなこだわりやプライドは、スカウト精神を形作るこひとつの大きな要素であると思ってもらいたい。



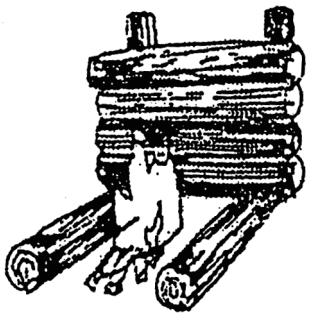
○**星形の火** (Star fire, Indian Fire)

アメリカインディアンによって好まれるので「インディアンの火」とも、また薪が少なくて済むので「怠け者の火 」(Lazyman's fire) とも、いう。薪を放射線状に並べるので、この名が生じた。石や煉瓦を放射線状に並べてその中心で火を焚くのもこの一種である。



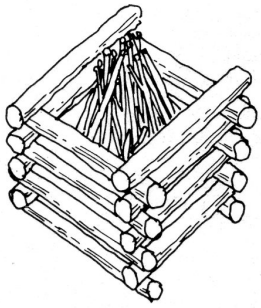
○**狩人の火** (Hunter's fire)

狩人が好んで作るのでこの名が生じた。鉄道枕木くらいの生木を２本、並べて、その間で火を焚く。常に風や煙が手前から奥に抜けるように、風向によって枕木の位置を変える。陸軍でしばしば行なわれる炊爨壕は風向が変化すると掘り直さなければならないが、狩人の火はたんに枕木の位置を直せばよい。



○**ネスムックの火** (Nessmuk's fire)

大キャンパーであるネスムック (en) が好んで使ったことからこの名が生じた。火熱を反射するから、“Reflector” とも、火背に木を並べるから “back log fire” ともいう。仮に直径 1 尺 (30.3cm ほど) の立木を倒したとすると、長さ 5 尺 (1.51m ほど) くらいの丸太 3 本を作って火背の木とする。つまり火熱を反射させる壁 (reflector) である。石や煉瓦が多い地方であればそれを利用する。背は高ければ高いほどよい。熱を反射させるほかに煙突がわりにする。つぎに杭 2 本を作って地上に斜めに平行して建てる。火背の木をこれに横に並べかける。最太のものを最下に置き、しだいに細いのを積む。その前方にこれに接して薪架として直径 5,6 寸の丸太を焚く。直径 6 寸 (18.2cm ほど) くらい、長さ 1 丈 (3.03m ほど) くらいの丸太が 13,14 本あればひと晩じゅう火を焚き続けることができる。



○**井桁** (Parallel cross fire)

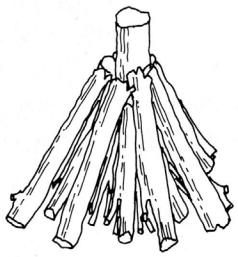
最も一般的な薪の組み方。形の良い、適当な太さ・長さ（直径 10 ～ 15cm、長さ 60 ～ 90cm）の薪で組む。しっかりとした太い薪から順番に井桁に組む。やや下段か中段に棚（かまどでいうロストル）を入れ、小型の薪やソダなどの火のつきやすいものをその上に、空気の流れを考慮しながら組上げる。井桁がぐらつかないように、薪が重なる部分にナタ目を入れて安定させることもある。

○ティーピー型 (Teepee fire)

ピラミッド型ともいう。

細くて長めの薪のときは、この組み方がいい。

中心に太めの薪を立てて、それに寄りかからせるように組む。もちろん、火のつきやすい細めの薪やソダや背板薪などは内側に入れて組み上げる。



○六角星型 (Triangle cross fire)

太くて短い薪は、六角星型に組むといい。

３本の薪を三角に順次組み上げていく。

（11）プログラムと演出

営火のプログラムとしては、特に決まったものはないが、大切なことは、何を目的とした営火であるか、そしてどのように展開するのかを決めることで、その目的にあったテーマが必要になり、それを基本にプログラム作る。

①プログラムの作成

30～40 人くらいの隊営火では 60～90 分位を目安として考える。その時間帯の中で何か一つ印象に残るものがほしい。始めと終わりの言葉、又途中で話をする等が考えられるが、終わりの言葉で感銘を与える事がコツの様だ。

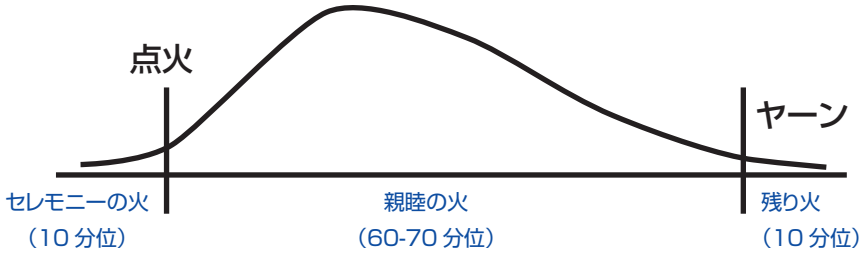
スカウトのキャンプファイアでは、終わりの言葉ではなく、ヤーン（Yarn）をすることが習わしとなっている。

スカウト達がもうすこしやりたいな．・・・という時間で終わることがコツ。

○全体の流れ

全体の流れとしては、静かなセレモニーから入って次第に盛り上がっていき、やがて波が引くように静かに終り、ヤーンでしめくくる、といったパターンが多く取り入れられている。

静－動－静という流れだ。そしてこの流れはエールマスターによって司られている。



○プログラムの組み立て

プログラム作成上、各班（組）から出てくる歌、替え歌、アクションソング、スタンツ（寸劇）等が何であるか、又静かなものか、陽気で賑やかなものか・・・によってプログラムの順番が決まってくる。つまり静－動－静のリズムに当てはめる。

そして、ほとんどの場合、実施プログラムを作るための時間に余裕があまりないことが多い。そこであらかじめ基本プログラムを作っておいて、各班（組）には「営火出し物カード」を渡して記入して提出させる。

それによって静～動～静の順位でバランスよく当てはめていき、エールマスターや他のリーダーが間を埋めるようにする。リーダー自身の出し物もあらかじめ決めておく。実施の時に考えているようでは、流れが止まってしまう。事前の準備は十分に行うこと。

撤　　営

(1) 指導上のねらい

1.「撤営は次のキャンプの大切な準備である」。その順序は、「指導者のためのスカウトキャンプ」に詳しく出ているので、それを事前に確認させる。
2. サイトの清掃と現状復帰については、スカウトキャンプでは、その痕跡を一切残さないことを美徳としている。これって何のために？　・・・これについては、講師のあなた自身で考えよう。
3. 撤収時に多少のメンテナンスを含んだ、洗浄＆手入れをすることが大切。その作業の次には倉庫に収納することを考える。つまり、収納に適した形状に整えることが必要となる。
4. 撤営は、単にキャンプを畳み、メンテし、収納するだけではない。キャンプ地借用返還の手続き、お世話になった方々へのお礼、キャンプ地への感謝、そして「班」としてのキャンプへの評価・反省が当然含まれることも理解する。
5. 基本的には、初期性能の維持、もしくはそれに近い性能を保つための措置が「メンテナンス」と「保管」である。その意味と方法について知らせる。
6.「保管」とは、最初にあったように、使用後に、次も同じように「問題なく」使えるようにしまっておくこと。
　収納の状態（折り方、形、重ね順など各部への負荷のかかり具合等）、部品と数量や汚れのチェック。また、収納する場所が性能を保てる環境にあるのかなどに注意する。
7. 初期の性能を保てるよう、手入れ（保守、整備）をすることが「メンテナンス」。
　キャンプ用品の材質・素材によって、また使用する目的や方法によって、メンテナンスの方法・ポイントは変わっていく。

(2) 撤営について、その意味と順序

①「撤営は次のキャンプの大切な準備である」とは

○すなわち、物的には「次回のキャンプには、中味を確認することなく、それを安心して使える状態にしておくことと」、その習慣をつける（意識→段取り→実践→確認）ことである。
○精神的には、感謝の心を込めて、するべき処置をして、大切に保管すること」である。
○施設（キャンプ場）や装備を借りる手続きがあるということは、当然、返すという手続きもある。→（7）に示す
○順序としては、「指導者のためのスカウトキャンプ」に詳しく出ているので、それを事前に確認しておくこと。

・徹営許可・・・やって見せる
〈申請〉上班→副長→隊長
〈許可〉隊長→副長→上班→参加者
・徹営にかかれ〈号令〉

(3) WB研修所における撤営のポイント

1.「撤営について」

①撤営に当たって

○完全手入れと、貸与品リスト表との照合による自主点検。
○破損品、不足品などについては、「荷札」に記入し、班担当所員に報告する。（後刻、班担当所員→隊長→QM）
○班員は、班長を中心に撤営の分担を決め、分担により、素早く＆確実に撤営する。
○班担当所員によって、返納品を点検する。
○サイト整備を完全に行う。
○隊長により最後の点検を受ける。「感謝」のみを残す。

②注意事項

【教材・教具】

○最初の状態に整理し返納する。

○工作物、展示物は、班で相談して自由に持ち帰ってよい。

○余ったものは、ギアボックスとは別にして返納する。

【食糧品】

○余ったものは、班で相談して、自由に持ち帰ってよい。

【炊具】

○炊具箱は、清掃し十分に乾燥させる。

○全ての炊具類は、十分に洗って乾燥させてから、炊具箱に格納し、順次他のものを入れていく。

○ポリタンク（水缶）も十分に洗って乾燥させる。

○紛失品、破損品に注意する（破損したものは荷札に明記し、炊具箱の取っ手に表示する）

○乾燥させるとき、点検を受ける時は、シートの上に広げる。

【資材】

○竹・木・板などは種類別にし、長短別に分類し束ねる。

○工作したときのヒモなどは、よく取り除く。

【テント・タープ】

○よく汚れを落とし、乾燥させ、折り目をずらして畳む。

○紛失品、破損品に注意する（破損したものは荷札に明記し、収納袋のヒモに表示する）

○ペグはよく洗い、乾燥の上、格納する。

○収納袋に収納するのは、点検後。

【工具】

○水洗いし、よく乾燥させてから錆防止の油を塗る。

○紛失品、破損品に注意する（破損したものは荷札に明記し、工具箱の取っ手に表示する）

○乾燥させるとき、点検を受ける時は、シートの上に広げる。

【ゴミ等】

○生ゴミ、燃やせるゴミ、燃やせないゴミ、資源ゴミに分別する。

2. 返納について

①個人装備

- パクストゥ 1 に集積する。

②返納計画

- 返納は、担当所員、場所、時間などをチャートを活用して明確に伝える。

配給物品名	担当所員	場　所	時　刻	備　考
教材・教具				
テント類				
炊具類				
工具類				
資材関係				
食糧品				
ゴミ等				

※雨天のときは、＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿で行う。

③返納確認

- 担当所員は、配給物品リストにより、返納者とチェックしながら返納点検を行う。

④返納品の集積→返納

- 点検を終えた返納物品は、班後の集積所に集める。
- 全ての返納物品が揃ったら、備品倉庫に班ごとに収納する。
- 奉仕員は、各点検や備品倉庫の収納の補助員としてついてもらう。

○表にまとめると・・・

時刻	項目	内容	準備品
	撤営にあたって	①完全な手入れと、貸与品リストとの照合による自主点検をする。 ②破損品、不足品等については、荷札に記入し、担当者に連絡する。 ③各班の班員は、班長は中心に撤営の分担を決め、分担により素早く撤営する。 ④各副長によって、返納品の点検をする。 ⑤サイト整備を完全行う。 ⑥公式にキャンプを去るために、隊長による最後に点検を受ける。その際には制服を着る。	
	注意事項	**【教材教具・成果品】** ①最初の状態に整理し、返納する。消耗したものはそのままで良い。 ②展示物は、班で相談して自由に持ち帰ってよい。 **【食料品】** ①余ったものは、班で相談して持ち帰る。 **【炊具】** ①炊具箱および全ての炊具は、良く洗い、水を切って乾燥し、順次他の品物を入れいく。 ②紛失品、破損品に注意する。（荷札にその状況を明記する） ③乾燥させるとき、しまう点検を受けるときは、ブルーシート等の上に広げる。 **【資材】** ①竹は、今後のために状態及び長さを揃えて７本を基本に束ねる。 ②工作したときのヒモ等などは、よく取り除く。 **【テント類】** ①良く乾燥させる。 ②紛失品、破損品（破損箇所）を荷札に記入する。 ③ペグは良く洗い、乾燥の上、防錆処理を施して格納する。 **【工具類】** ①水洗いし、良く乾燥させてから油（CRC556）を塗る。 ②紛失品、破損品（破損箇所）を荷札に記入し、袋又は箱に表示する。 ③乾燥させるとき、返納点検を受けるときは、ビニールシート等の上に広げる。 **【ゴミ類】** ①原則として、ゴミは全て持ち帰る。 ②生ゴミのみ、所定の場所（返納場所）にもっていく。 **【その他】** ①撤営が完了し、返納準備ができたら、まず、班で点検を行い。合格であれば、上班に報告し、制服に着替え、隊としての点検を受ける。 ②隊の点検が完了したら、４日間過ごしたサイトに弥栄を。また、残すのは感謝のみ。	
	返納について	①個人備品は、点検完了後、野外研修棟に置く。 ②返納時間は、　○○時○○分から、班装備を配給した場所にて。	
	閉所式（次のセッション）の連絡	【閉所式】 ①閉所式は、サイト中央の広場。 ②○○：○○までに集合する。 ③服装は正装 ④班旗、当番班シンボル、任務表、班長・次長章を忘れないように 【次のセッション】 ①場所と時間、持ち物など	
	注意事項	①安全に、役割分担で、効率よく。 ②作業着に着替えて、作業を行う	
	撤営の指示	隊長：　　撤営に当たり簡単な注意 隊長→所長：撤営の指示を受ける 所長→隊長：撤営の許可 隊長→各班：「撤営にかかれ」	

(4) 班装備の撤営時メンテナンス

・テント　・フライシート　・グランドシート　・ペグ　・工具
・炊具　・毛布、寝具　・ロープ類　・キャンピングストーブ
・ランタン　等

○メンテナンスとは、基本的には、初期性能の維持、もしくはそれに近い性能を保つこと、劣化を回復し最大限の性能を発揮させる・・・ための措置のことをいう。

①用具全般に対しての基本

- 汚れはとる（洗う、拭く、ぬぐう、ブラッシングなど）。
- 濡れていたら干す、乾かす。できる限り「天日」で。太陽光の熱による感想と紫外線による殺菌効果も期待。
- 潤滑が必要なところはグリスアップ、錆がで出そうなところには防錆油を塗る。（CRC556 等）
- 故障は補修を試み、だめだったら専門業者に修理を依頼する。
- 部品が破損したものは交換し、また、性能的に安全が確保できない場合も交換する。
- 修理も交換もできないならば、廃棄（若しくは転用）し新しいものと交換する。

②テント、タープに対しての基本

- 水分の残り　→　カビの発生による布地の劣化、アレルギーの誘因。
- 泥の付着　　→　酸化による布地の劣化
- 折り目の固定→　摩擦等負荷による防水機能の劣化

……があるので、それを除去し防止すること、回復することを収納前に行います。

③家型テント、ドームテント、タープの標準的なしまい方

○基本的には、設営時に取り出した順序、部品と数量のチェックの逆を行います。たたむ時も、折り目、空気抜き、たたむ大きさ、収納順序など、幕体へ擦れや負荷のかかり具合等に注意させます。

○特に、泥や樹液などの汚れの有無についてはしっかりと確認して、これらを除去してからしまうこと。（ただし、布に付いた樹液を落とすことはまず難しい。・・・そのことを考慮し、初めから樹液が垂れてこない場所を選んで設営することが大切。）

④ナイフ・ナタ・鎌などの刃物や、工具の正しい手入れと保管の方法

○ここではまず、危険防止の能力や、刃物・工具等の安全使用レベルを高めることを第一に考える。つまり基本的な取り扱い方を知る。

○刃物を使う上で、いちばん基本的なことは研ぐことである。
ところが、研ぎは「面倒くさい」「下手だ」とういう理由で、ついつい敬遠されてしまいがち。
　カナダでは「鋭くないナイフと斧は、グリズリーより危険だ」と言われている。
　切れないナイフ・包丁は、役に立たないばかりか、余計な力が必要となるので、非常に危険だということを、しっかりと伝える。

○ナイフは使う前に研ぐのではなく、暇がある時に研いでおく習慣をつける。

○現代のナイフには、堅い性質の鋼材（ATS-34、440-C）が使われている。そのため包丁を研ぐような、日本に従来からある水砥石では、砥石ばかりが減り、研ぐことはできない。→専用の砥石を。

○普通の研ぎでは、中目の合成砥石を使う。これを使って研ぐときは、水ではなく「ホーニングオイル」と呼ばれる油を使う。スムーズにエッジを動かすためだけでなく、砥石との接点に生まれる「熱」を冷ます役割

●和洋包丁の安全な使用法と、研ぎ及び手入れ。

○一般的に、和包丁は片刃（右利き・左利き）、洋包丁は両刃である。

○ステンレス製の場合は、台所用中性洗剤とスポンジで洗ったあと、乾いた布でさっと拭いて、包丁立て等に差して自然乾燥させる。火であぶってはいけない。

○和包丁の多くはハガネでできているため、自然乾燥後に食用油（オリーブオイルなど）を薄く塗って、新聞紙などんくるんで湿気のないところに保管する。使うときは一度洗ってから使う。

○研ぐ場合、包丁とナイフとでは研ぎ方が異なる。包丁は直線部分が多く、ナイフは曲線部分が多いから。またエッジと呼ばれる刃先に付けた角度も異なる。包丁はだいたい 10 度だが、ナイフは 20 ～ 30 度となっている。

○菜切包丁と出刃包丁の刀身（ブレード）の厚みをみれば解るが、力をかけるもの（出刃）は厚くなっている。当然エッジ角も大きい。ナイフ同様だ。それを薄く（エッジ角を小さく）研いでしまうと刃こぼれがしやすくなる。

がある。天ぷら油は成分に問題があるため使ってはダメ（さびる可能性あり。）

○次の 4. で扱う和包丁はフラットに研いで切刃をつける。しかし、ナイフの場合は、幾分鈍角に研ぎ、切刃（カッティングエッジ）を微細な鋸刃状にしなくてはならない。エッジ角は一般的に 25 度だが、ナイフによって異なるので、購入時に確認を取る。一般的には大きなナイフほど鈍角に、小型のものほどやや鋭角に研ぐ。

○ナイフの使用後は、使ったときに付いた汚れや油を水で洗って落とし、拭いた後、十分に乾かす。フォールディングナイフは構造が複雑なので、錆びて開かないということがないように可動部には油を差しておく。

○ナタや斧、鎌は、研いだ後は専用のケースに入れておく。ケースが無ければ新聞紙にくるんででもいいので、刃をガードしておくこと。

○のこぎりは、使用後水分やゴミを乾いたウエスで拭き取り、油をひいて（CRC556 をスプレー）、ケースに入れて工具箱に収納する。

○シャベルは、水で泥を良く洗い落として、拭いて乾燥させ、油をひいて（CRC556 をスプレー）おく。

⑤移動を考慮した収納する。

○いかにコンパクトに収納（スタッキング）するかは、前項で述べた。

○ここで、注意することは、運搬時に互いの接触による傷みをいかに防止するか・・・ということだ。

炊事の用具には、「自分自身は痛まない（例えばステンレス）」ものや「自分自身が痛む（ホーローやプラスチック）」ものがある。要は「自分自身が痛む」ものをいかに保護しながら詰めていくかを考える。

(5) サイトの清掃を行い、感謝の心で原状復帰を行う。

①サイトの清掃と現状復帰については、スカウトキャンプでは、その痕跡を一切残さないことを美徳（誇り）としている。

○すなわち・・・

- ゴハン粒 1 つ、工作紐の切れっ端 1 つ落ちていない状態
- 掘った溝や穴の痕跡が全く解らない状態
- 草が踏みつぶされた痕跡がない状態
- そして、残すモノは素晴らしい思い出と「感謝の心」だけである。

・・・というように、何ひとつ痕跡を残さないことを徹底することを伝える。

○では、これって何のために？　・・・それは、講師のあなたが考えよう。
→他の何・誰のためでもない。それは自分自身のため。自分の心の中にある「スカウティング・スピリッツ」 のためなのである。「私はスカウトである」という名誉と誇りのためなのである。

○我々はボーイスカウトである。「ボーイスカウトにお貸ししたあとはきちんと整備されている。さすがボーイスカウトさんですね。」とよく言われる。これは、我々の先輩たちが脈々と築いてきた結果として獲得できた「ボーイスカウトへの信頼」である。

信頼を得るためにきちんと撤収をするのではない（受動的）。更なる信頼を我々の行動によって得ていくためである。我々の行動の結果が「信頼」を維持し、守っていくのである（能動的）。

→「最後の最後まできちんとやり遂げる」ことの意味と意義を、まさしく行動によって示している良い例である。

→1 度失ってしまった「信頼」を取り返すのは、並大抵のことではできない。

(6) 装備の梱包・パッキングと収納と集積

● P.6. ⑧より

「スカウティングはゲームである」ということを思い出してもらいたい。「スカウティングは（楽しい）ゲームである」とも言う。

では「楽しい」とは、どんな状況をいうのだろうか。単刀直入に言うと、それは**「力を出し切ること」**なのである。所長の入所の言葉の中に

「3 つ目は、規律と秩序を守りつつも、自ら楽しむという意識と姿勢で積極的に行動し、ベストを尽くすこと」

とあった。「ベストを尽くす」＝「力を出し切ること」なのである。誰かに押しつけられてやるのではなく、自分がやりたいから全力でやる。その「自らの全力の取り組み」で達成感や充実感を得ることこそが、スカウトにとっての「楽しい」瞬間なのである。

だから、辛い作業やハードな活動にも「楽しい」があてはまり、「楽しい」からこそ「ゲーム」になるのである。むしろハードであればあるほど「楽しい」の度合いが高まるのである。

①梱包とパッキング

○収納の最終形を考慮し、かつ運搬性をよくする梱包・収納を行うことは容易に理解できるだろう。考えるのはたやすいが、実際にやってみると以外と難しい。そんな経験はないだろうか。

→例えば、スーパーで買い物をして、それを段ボール箱やレジ袋に詰めるとき、全く同じモノを同じだけ買ったにも拘わらずAさんはそれをきっちり詰められ、Bさんはどうやっても入りきれなく残ってしまう。これは「空間把握能（認識）力」とちょっとしたコツを知っているかの問題。要は、入れ物の形状を把握し、そこに、隙間の無いように、入れるモノの形状を組み合わせて入れていくことができるかどうかである。

（パックへのパッキングも同じ。）

○小さくまとめること（きちんと折りたたむ、空気を抜く、スタッキング）は、ただまとめるだけでなく、その用具をよく観察することから始まるので、材質・性質・硬軟・重さ、傷や破損の有無などを確認することにも繋がる。

また、圧縮・圧迫による傷みにも気を配りたい。

○また、適したサイズの容器にきちんと詰めるということは、デッドスペースをどれだけ少なくするか・・・ということである。1つの容器にたくさん詰められるということは、収納保管のスペースを減らすことができるということであるが、その反面、たくさん詰めるのだから当然重くなるし、次回の使い勝手も損なわれる。○それから、固定容器（コンテナ・ボックス）ではなく、テントの収納ケースやトートバッグのような布製の入れ物の場合は、できだけ四角形に収納する。

→四角→積み重ねられる。丸・球→積み重ねられない。

②班装備、個人装備の集積と点検を受ける準備

○土浦訓練野営場で実施されるスカウトコースにおいては、梱包やパッキングを終えた、班キャンプ装備は、最初に上班の点検確認を受ける　（以下（6）①と関連）。

- その場所は班サイト。点検確認を終えたら「K広場」指示された場所に置く。それは、班サイトをきれいに正装をする際に邪魔にならないわうにするため。
- しかし、K広場の広さの関係から、各自の個人装備は、各班サイトの点検の邪魔にならないところにまとめて置いておく。

○そして、各班は、サイト内をくまなく点検し、ご飯粒1つ、麻紐1本、木の削りくず1つないように、整備する。

「残すは、感謝のみ」である。

○それを終えたら、班サイトに横隊に整列して、班長は上班に点検を受けられる状態になったことを伝える。

○班長は、伝え終わったら班に戻り、副長を待つ。

○上班は、それを副長に伝える。（複数の班が同時に点検準備完了をしてき場合、各班長は上班がK広場現れるのを待ち、点検準備完了を伝える。上班は、班サイトに確認に赴く。またK広場で副長に伝える）

（7）撤収点検は、制服で受ける。

①点検を受ける準備が整ったら「制服」着替える。

②「制服」着替えるは、どうしてであろう？　是非考えていただきたい。

○制服を着ること、とはどういう状態を意味するのか・・・

ⓐ「撤収点検」とは、全ての撤営作業が終了して、キャンプサイトを撤退する準備ができたときに行う、キャンプとしての公式な点検である。

→だから「制服」

ⓑ一切の痕跡を残さず撤営を完了した、自信とけじめ、そしてスカウトとしての姿勢・気概を表す。(Leave No Trace)

→だから「制服」

ⓒいつでも帰途につけるという「準備」が完了したことを表す。

→だから「制服」

ⓓキャンプを過ごした野営地への感謝の心を改めてきちんと表す。

→だから「制服」

※つまりスカウトの名にかけて、「名誉にかけて、最後の最後まできちんとやり遂げた」姿勢の表れとして「スカウト」としての自信、そして名誉の証として、「スカウト」として受ける点検だからである。

○こう言うと、多分に精神性が前面に出てしまうが、何のためにキャンプを行うのか、自然から何を受け止め享受するのか、多くの人々の関わりによってキャンプができるいうことをどう捉えるのか・・・・を実体験(実感)するのが、スカウトキャンプであり、それがキャンプの教育的効果であることを考えると、スカウトとしてどうあればいいのかが見えてくる。したがって、制服を着るということが持つ大きな意味が理解できるのではないだろうか。

「スカウトキャンプは目的ではなく、(自分を磨く)方法である」

(8) 班装備の隊→コース(県連)への返納

班のキャンプで使う、キャンプ用品一式は、県連から借りたものである。借りたからにはきちんと整備して、そこに「感謝」の気持ちを載せて返却したいものだ。

本来の隊キャンプ・班キャンプであれば、班キャンプ用品は班にその管理が任されているハズ。従って、下記のような「手続き&セレモニー」は必要ないが、このコースでは、キャンプ用班を県連から貸与されていることから、敢えてそれを行うことによって、「おきて」の実践(スカウトは感謝の心を持つ)を大いに意識させる。

①班による点検→隊への返納

- 班員の役割分担と協力により、班装備の撤収ができたら、班の備品係がその点検を行う。点検は真剣にきっちりと行う。
- この際、班長は点検を受ける側となる。
- このときの班の意識としては、ベストを尽くして班備品を整備・点検したことを胸に秘め「備品係に指摘させないぞ!」という姿勢で点検に臨んでもらいたい。それは対決姿勢ではなく、備品係にとっては点検で不備を指摘することは,決して嬉しいことではないという、いや、とてもイヤで辛いことであるのだ。その気持ちを汲んでの「指摘をさせないように、ベストを尽くして班備品を整備ぞ!」という思いやりの気持ちからである。
- 班の備品係の点検に合格したら、上級班長に報告する。
  上級班長は、その班の「ベストを尽くして班備品を整備·点検したぞ!」という「スカウトは誠実である」その気持ちを読み取って、視線で装備の状況を確認し、隊に返納を認める。
- しかし、上級班長の目には不備が映るかもしれない。その場合は、班長と備品係に具体的に伝え、それをきちんと修正できたら、隊に返納するように指示する。ここにも「スカウトは誠実である→信頼する」を意識させる。

②隊による点検

- 上班は、各班で確認をしたら、K 広場に戻り、副長に「○○班。点検をお願いします」と申請する。

★返納のセレモニーについて

これを行うのは、「おきて」を実践にベストを尽くした結果を自ら確かめることであり、同時に、スカウトが自信をもって取り組んで出した結果に対しては、全幅の信頼をおいて認めるという、スカウトの名誉とスカウト精神を掴み取るためである。

その意図を理解しなければ、単なる形式的なものになってしまう。コースにおいては、その点に留意されたい。

この返納セレモニーに対して、やれ形式的だの、やれ権威主義だのという輩がいるが、上記の意図の理解を促したいものだ。

複数の班が同時に点検準備完了を上班に伝えてくた場合、上班は、自分なりの基準（報告が早い班順、服装が整っている班順など納得できる基準による）で申請を受ける。上班はその基準に従い、順に班サイトに確認に赴く、確認を終えたら、副長に申請する。

- 副長は、上班から申請があったらそれを受け、２人でその班サイトに赴く。
  - 「生活担当副長」は、返納班装備の点検を行う。立ち会いスカウトは備品係。
  - 「プログラム担当副長」は、サイト内の点検を行う。その間スカウトは整列をしたまま。改善が必要であれば、班長に指示をする。

③隊から県連への返納

- 隊への返納が終えた班から、県連への返納のための指示された集積場所に全ての班装備を運ぶ。
- そこには「隊長」が「QM」とともに待っている。（隊長と QM は②の状況を確認し、返納が受けられる状況になったと判断したならば、集積場に向かう）
- 全ての班の班装備が運び終えた参加者は、再度Ｋ広場に集合し、生活担当副長が班の備品係を連れて、集積場に赴き、備品係を横隊に整列させ、隊長と対面する。

  生活担当副長：「お借りした班装備を返却できる状態になりました。」
  隊長：「よし、各班とも自信を持ってベストな状態にしてあるということだな？」
  備品係；「はい！」
  ★隊長はＱＭ向かう
  隊長：「このコースでお借りしました、班のキャンプ装備、できる限りの整備をし、自信をもってお返しいたします。」
  ＱＭ：「解りました。返納を受領致します。」
  ★副長、備品係は隊長と共に敬礼をする。
  副長：「全員まわれ右、早足でＫ広場に戻れ。」
- 再度、Ｋ広場に集合し、上班の指示で、個人装備を持って、野外食堂に集合させる。集合が完了次第、班装備を所定の倉庫・位置に運び込む。

(9) 撤営後のまとめ

撤営直後は、何かとバタバタ慌ただしいが、借用装備を収納して、制服に着替えたら、一旦集まって「まとめ」をする。そして、スカウト・キャンプにおける「スカウティング」のココロについて、再度確認を促してもらいたい。

1. このように、スカウトキャンプは、単に野営技能を身につけるだけの場ではない。指導者にとって、最も重要なスカウトの教育の場である。
2. 何を身につける？　そう、「スカウティング・スピリッツ＝スカウト精神」である。
3. では、スカウティング・スピリッツとは何か？　それは端的に言えば「ちかい」と「おきて」に言い表されている。そして、そこから派生する「スカウトとして持つべき」意識であり、姿勢であり、態度である。
   それを、意識して実行し、繰り返し、自分の資質として定着させること。それを以て、社会に出て行き、いろいろな場面でそれを発揮し、社会をよりよい方向に導くことができること。
   →それが「スカウティング」である。
4. 楽しく、役立ち、そしていろいろな興味を提供してくれるキャンプは、いかに多くの野営の知識と技能を身につけているか・・・で、より素晴らしいものになっていく。

●研修隊「解隊式」次第

総合司会は、QM もしくは主任所員
隊内に係る部分は、A 副長

時刻	項目	司会者の言葉	担当	内　　容	準備品
	準備		班長	①貸与品のとりまとめ（返納のため） ②持ち物、服装、場所についての確認 ③アワードを班旗から外す ④班長は、班長章・次長章をとりまとめる ⑤当番班シンボル、任務表を持参する	ダンボール
	集合		上班	①U字形に集合させる ②各自服装点検 ③「気をつけ」	
	開式のことば	「只今から研修隊解隊式を始めます」			式次第
	所長挨拶	「所長あいさつ」	所長	①研修所独自の式であることを加え、これまでの隊の努力をたたえる。	
	役務解任 班編制解体	「役務解任および班編制の解体を行います」	A 副長 A 副長 隊長 A 副長 A 副長 A 副長 隊長	①隊長はセンター位置に移動 →当番班を呼ぶ 「当番班は、隊長の前へ」 ②「当番班長は、隊長に当番班任務表当番班シンボルを返納してください」 →当番班長は、当番班シンボル、任務表を隊長に返納する。 →隊長は、それを B 副長に渡す。 「当番班を解きます。ご苦労様でした。」（敬礼） →当番班は戻る。隊長はそのまま。 ③「班長、次長は、班旗を持って隊長の前へ」 →班長、次長は、編成式同様に並ぶ。 「班長は、班長章、次長章を返納ください。」 →班長は、班長章・次長章を隊長に返納する。→ B 副長に渡す。 「班長は、班旗を返納ください。」 →班長は、班旗と班長章・次長章を隊長に返納する。→ B 副長に渡す。 「班長、次長を解任し、班編制を解きます。ご苦労様でした。」（敬礼） ⑥班長、次長は戻る →隊長はそのまま。	
	上級班長解任	「上級班長の解任を行います」	A 副長 隊長 A 副長 隊長	①上級班長の解任を行います。上級班長は隊長の前へ」 →上級班長は、隊長の前に進む。 「上級班長章を返納ください。」 →上級班長は、上級班長章を隊長に返納納する。→隊長は B 副長に渡す。 ②「上級班長の役務を解きます。ご苦労様でした。」（敬礼）	

時刻	項目	司会者の言葉	担当	内　　容	準備品
	隊旗返納	「隊旗返納」	所長 隊長	①所長と隊長は向かい合う ② A 副長は、隊旗を隊長に渡し、元の位置まで下がる。 ③隊長は参加者の方に向き 「この隊旗の下によくがんばりましたね。最高の成果を以て、隊旗が返納できます。ありがとう。」 ④隊長は回れ右し、所長に返納。 所長は隊旗を受け取り、巻き取って AQM に渡す。 AQM は、隊旗を後ろに下げる。 ⑤隊長は敬礼をして自席に戻る。 所長はそのままの位置で	
	隊長・副長の解任 研修隊の解隊	「隊指導者の解任、並びに解隊宣言を行います。」	司会 所長	①「隊長、副長前へ」 ②隊指導者は所長の前に進み出る（敬礼） ③「隊長，副長の任を解きます。」 「併せて、研修隊『茨城第１隊』を解隊します。ご苦労様でした」（敬礼） ④隊長・副長は敬礼をして自席に戻る。 所長はそのままの位置で	隊指導者名簿
	閉式のことば 班担当所員の解任	「これをもちまして、研修隊隊編成式を終わります」 「続きまして、班担当所員の解任を行います。」	司会	①「班担当所員、前へ」 ②班担当所員は所長の前に進み出る（敬礼） ③「班担当所員の任を解きます。。ご苦労様でした」（敬礼） ④所長・班担当所員は敬礼をして自席に戻る。	
	※「続きまして、閉所式を行います。」 ※この間に、杉浦所員は走って、閉所式の集合位置に行き、集合をかける。				

※所長以下、各所員は閉所式の場所に移動する。
※開設担当は、履修証（修了証）の盆、ウオグル（胸章）の盆の２つの盆を準備する。
（3 期では 1 つの盆に両方を載せてあった。履修証の読み上げ・授与にウオグル装着のタイミングが合わず、どんどんその間が開いてしまいった。どうして、盆を 1 つにしたのか？　毎年やっているので分かっているはずだろう。
この様な小さな所作が、所員一生懸命になってが作り上げた雰囲気を台無しにすることになる。単なる作業ではない。
雰囲気を壊さず、さらにそれを深められるよう効果を熟慮し、準備・動いてもらいたい。）
※上班は、参加者を閉所式の隊形（U字形）に整列させる。
全員の服装を正させ、確認してから司会者に準備完了の合図をし、自席に戻る。

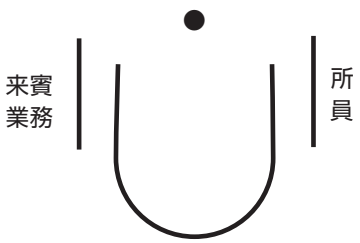
「閉所式」式次第

司会：開設担当

時間	項目	司会の言葉	担当	内容	準備品
	集合		（上班） 開設	U字形に集合（杉浦） 名簿順に並ばせる。→服装の確認を行う	参加者名簿
14:20	開式のことば	「ただ今より、WB研修所スカウトコース茨城第３期の閉所式を行います。」	司会		閉所式プログラム
14:21	修了証授与	「履修証の授与を行います」	所長 隊長	①「履修証の授与を行います。○○○○さん、所長の前にお進みください。」 →所長は、最初の修了証を読み上げ授与する。 →隊長は、参加者にウォグルを着けてあげる。 →他の方は、拍手を送る。 ②「これからは、所長が皆様の前に行き、履修証を授与します。」 →所長は順次移動し、授与をしていく。 ③続いて、隊長は、ウオグルをつけていく。 ④終わったら、元の位置に戻る。	・履修証 ・ウオグル ・お盆
14:31	所長挨拶	「所長挨拶」	所長		
–:–	開設責任者挨拶	「主催者あいさつ ○○茨城県連盟理事長」	理事長	本人が来ていない場合は、この項目はなし。	
13:35	連盟歌斉唱	「連盟歌斉唱」	所員	・担当所員は、一歩前に出て歌い出す。連盟歌を全員で斉唱する。	
14:37	国旗儀礼	「国旗儀礼」 「国旗に正面」 「元の位置に」	所員	①正副掲揚手２名は掲揚柱前へ進む。 ②「全員、国旗に正対」 →全員国旗に向き注目する。 ③掲揚手は、国旗に敬礼。正手はロープをほどき、定位置に移動。 ④「降ろせ！」 →掲揚手は国旗を降ろす。 →合図と同時に、全員「敬礼」する。 →旗が降りると同時に、所長に併せて「敬礼」を降ろす。 ⑤正手は綱を素早くきちんと留め、また、正副掲揚手は素早く国旗をたたみ、所長の前に進み、敬礼して国旗を渡す。 ⑧旗手は自席に戻る。	国旗
14:40	閉式のことば	「これをもちまして、WB研修所スカウトコース茨城第３期・閉所式を終わります」 『休め」	司会	・全員「休め」の姿勢をとる。 ・指導者養成委員長は、来賓、県連役員を案内し退場する。	
	所員回礼		所長	・所長より回礼に入る。 ・所長は、参加者への回礼が終わったら、参加者の最後尾に並び、所員と回礼。	
	別れの歌		所長	①各所員・業務は参加者の間に入る。 ②所長より手を組み、リードする。 ③所長が歌い出し、全員合わせて歌う。	別れの歌歌詞
	弥栄三唱			①コーススタッフは、参加者に「いやさか」をおくる。 ②参加者も、所員に「いやさか」をおくる。（←事前に仕込んでおく）	
	解散		（隊長）	「これで、WB 研修所茨城第○期の全ての項目が終了しました。一旦、○○にお戻りください。」	

※この場所で、業務連絡は行わない。配付物、回収物、食事当の連絡は、一旦戻った場所で行う。

○来賓・業務の並び順
①理事長
②所長
③事務局長
④司会
⑤ QM
⑥業務・・・



○所員の並び順
①主任所員
②隊長
③副長
④上班
⑤班担当

ＢＳ茨発第　　号
令和　　年　月　日

ウッドバッジ研修所スカウトコース 茨城第○期 参加許可および参加案内

様

ウッドバッジ研修所
スカウトコース茨城第○期
所　長　　○○　○○

あなたのウッドバッジ研修所スカウトコース課程茨城第○期への参加を許可します。下記案内にしたがって参加ください。

記

1．期　　間　　令和○年○月○日（○）　～○日 (○)
2．集　　合　　○月○日（○）　９時 00 分（受付　8:45 ～ 9:00）
　　※遅参の場合、入所を認めないこともあります。
3．集合場所　　土浦市立土浦青少年の家　（別紙地図参照）
　　〒 300-0844　茨城県土浦市乙戸 1099
4．解散予定　　○月○日（○）　14:00 頃
5．服　　装　　指導者正装（半袖上着・長ズボン・ハットもしくは中折れ帽）
6．参 加 費　　20,000 円。　※茨城県連盟参加者は補助（¥5,000）があります。差額を振り込んでください。
7．事務的事項
　① 参加費は、事前に下記口座に振り込んでください。
　　振込先　　茨城県信用組合　偕楽園前出張所
　　振込番号　　（普通）０００１６８０
　　名義人　　日本ボーイスカウト茨城県連盟　事務局長　八城貞子
　② 参加できなくなった場合は、茨城県連盟事務局まで、速やかに電子メールでお知らせ下さい。
　③ 参加許可書受領後に参加できなくなった場合は、参加費の納入義務が生じます。
8．アクセス
　自家用車：常磐自動車道「桜・土浦」IC から荒川沖に向かって約 5 分。
　　※なお、研修所期間中は車の出し入れはできません
　電車利用：JR 常磐線「荒川沖」下車　徒歩約 20 分／タクシー約 7 分。
9．問い合わせ・連絡先
　ボーイスカウト茨城県連盟事務局　　（開局は、火・木・土の 10:00-17:00）
　　〒 310-0034　茨城県水戸市緑町 1-1-18
　　TEL：029-226-8482　　FAX：029-224-3773
　　E-mail：　ibaraki @ scout-ib.net
　★緊急連絡及び遅参連絡先（期間中のみ）
　　携帯電話　　➡ 090-7230-8544（開設担当：高橋）または 000-0000-0000（所長：郡司）
10．持ち物
　別紙参照の上、ご持参ください。（宅配等は取り扱いません）
　　※全ての携行品はバックパック 1 つ+ハバザック（デイパック）1 つにまとめて携行ください。
　　※娯楽用品、初日の昼食以外の食品、アルコールなどの不適当な飲料水などの持ち込みはできません。
11．他県参加者の前泊について
　・他県からの参加者については、前泊が可能です。宿泊室＋朝食（¥2,000）です。
　・寝具は持参の寝袋をご使用ください。
　・希望の方は、○月○日（金）午後 5 時までに茨城県連事務局に E メールで申込みください。
　（所属県連、氏名、交通手段、到着時間等を明記）

個人携行品一覧

番号	確認	品　　名	数量	備　　考
1		参加許可書	1 部	
2		登録証	1 部	今年度のもの。
3		指導者手帳	1 冊	必要事項を記入し、写真を貼付。
4		顔写真	2 枚	2.5x3.5　裏面に団名・氏名を明記　　2枚　（白黒で可）
5		初日の昼食	1 式	おにぎり　スカ弁・カブ弁
6		健康保健証（写し）	1 部	コピー可
7		リーダーハンドブック	1 冊	ボーイスカウト隊のものを
8		日本連盟教育規定	1 冊	令和元年度版
9		スカウト歌集	1 冊	
10		冊子「基本原則」	1 冊	課題研修で使用したもの
11		図書（右記）	各 1 冊	①指導者のためのスカウトキャンプ　　②安全入門
12		筆記用具、文具	1 式	多色ボールペン、ラインマーカー、色鉛筆・はさみ等の文具
13		個人用ノート	1 冊	B5 版のもの
14		クリアファイル	1-2 枚	A4 版
15		クリップボード	1 個	A4 のもの。
16		上履き	1 足	室内用運動靴。スリッパ等は不可です
17		ハバザック、もしくはデイパック	1 個	
18		スリーピングバッグ（寝袋）	1 個	厚手の 3 シーズン用か、「快適睡眠温度域温度：6 度」程度のもの
19		キャンプマット	1 個	キャンプベッドは使用不可です。
20		折りたたみ椅子	1 脚	小型のもの（座面の高さが 30cm 程度）
21		ナイフ	1 本	カッターは不可。
22		ロープ	1 本	スカウトロープ（6 m練習用）　※スカウト用 6m を使用します。
23		工作用ひも	1 式	麻紐等（野営工作用）
24		水筒	1 個	小型のもの
25		マイカップ	1 個	
26		食器セット、スプーンセット・箸	1 式	食器セットは皿 2、器 2 以上。
27		米 8 合	8 合	1 合ずつ小袋に小分けして
28		懐中電灯	1 式	LED ヘッドライト（できればランタンになるもの）予備電池も
29		新聞紙	2日分	
30		作業手袋	1 双	できれば革製（軍手の場合は綿 100% のものを）
31		作業着、作業帽	1 式	
32		寝間着、着替え	2 泊分	
33		防寒着	1 式	朝晩は寒い。
34		雨具（レインスーツ）、雨靴	1 式	雨具は、上下セパレートのもの。雨靴はゴム長。
35		タオル	必要数	汗拭き用
36		ハンカチ、ティッシュ	必要数	
37		洗面用具・入浴用品	1 式	
38		個人用救急キット、持薬	1 式	
39		マッチまたはライター	1 個	
40		雑巾　および　布巾	1 式	
41		ビニール袋	1-2 枚	ゴミ袋、濡れたものを収納する場合等に使用
42		裁縫道具	1 式	
43		レジャーシート	1 枚	濡れた地面に物を置くとき等に使用
44		野営靴・靴手入れ具	1 式	運動靴かトレッキングシューズ。
45		トイレットペーパー	1 巻	
46		プレートコンパス	1 個	（例）シルバコンパス・レンジャー（タイプ 3）
47		その他、セッション・野営生活で必要と思われるもの		

★以上の装備をザック（1 つ）及びハバザック（若しくはデイパック 1 つ）にパッキングして持参してください。（手持ちは不可とします。）

★ビデオ、IC レコーダー等の録音装置は不可とします。（スマホの機能含む）

★携帯電話、スマホ、カメラの使用は制限されます。また、充電への配慮は特にしません。施設の電源は使えません。

★研修期間中の飲酒、SNS の利用は禁止事項となっています。守れない場合は退所していただきます。

各班装備一覧

番号	品　　名	数量	単位	確認	備　　考
1	テント（ドーム）	2	式		
2	タープ	1	式		
3	班用炊具	1	式		
4	班用工具	1	式		
5	班用教具	1	式		
6	練習用国旗セット	1	式		
7	ポリタンク	2	個		
8	ポリバケツ	2	個		
9	かけや	1	個		
10	スコップ	1	個		
11	ランタン	2	個		
12					
13					
14					
15	＊カセットコンロ	1-2	式		隊長の判断で貸与
16	＊薪（時計）ストーブ	1	式		隊長の判断で貸与
17	＊ブルーシート	2	枚		隊長の判断で貸与
18	＊蚊取り線香のケース				
19					
20					
21					
22					

資材・消耗品等

番号	品　　名	数量	単位	確認	備　　考
1	食器洗いスポンジ				
2	亀の子たわし				
3	スチールたわし				
4	ラップ				
5	アルミフォイル				翌日のおにぎり用
6	食器洗い洗剤				
7	クレンザー				
8	＊カセットガス				隊長の判断で配給
9	蚊取り線香				蚊がいる季節のみ
10	竹材				野営工作用
11	＊コンパネ				各班２枚程度
12					
13					
14					
15					

研修所準備品

分　野	品　　名	数量	単位	担当	対　　応
事前	履修証			開設	事務局から受け取り
受付	名札用紙及び名札		袋	作成	
	参加者用名札ケース		個	倉庫	野外活動なので、ソフトケース+安全ピン仕様
	所員用名札ケース		個	倉庫	参加者に同じ
	業務および開設用名札ケース		個	倉庫	首下げ式可
	受付チェック　出欠・提出物用名簿		枚	作成	
点検・入門	入所時・点検表		枚	作成	2 枚 / 人
	班分け表　（所員用）		枚	作成	
	ブルーシート		枚	倉庫	荷物点検用。班数分。1800×2700
	道心門		個	倉庫	
セレモニー	国旗　（掲揚小）	2	枚	購入	*
	研修隊旗		枚	開設	事務局から受け取り
	式次第　開所式・閉所式		枚	HB より	
	式次第　隊編成式・解隊式		枚	HB より	
	お盆（朱塗り）小		枚	購入	* 紀州塗　PC 尺 3 寸 黒無地　¥3,000
	班旗	4	枚	倉庫	スカウトコース用レターケース内収納。 （フクロウ、カッコー、キツツキ、ヤマバト：各 1）
	班旗の棒		本	倉庫	B-P ハウスマーク付
	班長、次長章		式	倉庫	スカウトコース用レターケース内収納。 （班長 5、次長 5、上班 1、いずれもケース付）
掲示版	コルクボード大		式	倉庫	購入
	基本日課		枚	作成	
	今日の目標		枚	作成	
	笛の合図		箱	作成	
所員掲示板用	押しピン		箱	倉庫	
	参加者顔写真表		式	作成	ハードケースに入れる。所員 R、セッション用
配付物関係	所員用資料配付ボックス		個	倉庫	
	参加者用資料配付ボックス		式	倉庫	
	ハンドアウト用袋		式		
記録等	ファイル（所員用+ QM）		冊	購入	
	ファイル（記録用）		台	購入	
	カメラ		式	借用	本体、三脚、ストロボ、カードリーター
	記録メディア		枚	購入	SD カード等
教具ボックス	所員用教具ボックス		式	倉庫	所員 R
	業務、開設用教具ボックス		式	倉庫	
当番班貸与品	当番班章レプリカ	1	個	倉庫	スカウトコース用レターケース内収納。【在庫 1】
	当番班の任務（巻物）	1	個	倉庫	スカウトコース用レターケース内収納。【在庫 1】
セッション支援	パソコン		台		基本的に各自
	スキャナー		台		
	ドキュメントスキャナー		枚		
	プリンター		式		所員ルーム用。コピー機能付。プリンターインクの調達が難しくなったら新規に購入。
	プリンターインク		式		
	USB ケーブル		本		
給食関係	鍋、炊飯器		台		
	食器		式		
	調理器具		式		
	コーヒーメーカー		台		
生活関係	シャンプー		本		
	ボディソープ		本		
	ティシュー		式		

スカウトコース・セッション用備品の所在

区分	品　　名	数量	単位	収蔵	収蔵形態	内容物等
	ホワイトボード		枚	♣	直置き	大：中：小：
	ホワイトボートマーカーセット	1	式	♥	専用ケース	イレーサー、黒・赤・青（各太、中、細）
	イーゼル	1	台	♣	直置き	
	マグネット	1	式	♥	倉庫	ハンディケース入り。
	同　スクリーン	2	台	♥	棚の上	大小。
	コードドラム	6	個	♥	棚の上	20m:6、10m:1
	OA タップ	2	個	♥	棚の箱	
	2穴パンチ　大	2	個	♥	所員ギア BOX	
	お盆（朱塗り）小	2	個	♥	購入	* 紀州塗　PC 尺 3 寸 黒無地　¥3,000
	名札ケース	40	枚	♥	棚・カゴ	* 日連品番 71535；10 枚入り
	道心門	2	個	♥	棚	2 つあり。
	班旗の棒		本	♥	立て掛け	B-P ハウスマーク付
§6-3	焚火台	1	台	♥	購入	* スノーピーク焚火台 L　¥30,000
スカウトコース用レターケースに入れて管理						
	班旗	4	枚	♥	専用ケース	フクロウ、カッコー、キツツキ、ヤマバト：各 1
	班長章、次長章	1	式	♥		班長 5、次長 5、上班 1、いずれもケース付
	組長章、次長章	1	式	♥		班長 5、次長 5、
	当番班章	1	個	♥		2 ビーズ大
	当番班の任務（巻物）	1	個	♥		革製、首下げ式
	国旗　（掲揚小）	2	枚	♥	購入	* 掲揚用日連品番 46026。
	ギルウェル・CF アッシュ	1	個	♥		小瓶入り
	プレートコンパス	5	個	♥	購入	* シルバ社・レンジャー TYPE3。
スカウトコース用プログラムボックスに入れて管理						
§6-1	イカ釣り集魚灯	4	個	♥	購入	* 班数　4 色 4 本 ¥1,500
§6-1	ホワイトボード（小）	4	枚	♥		A3 サイズ。♣
§8,11	レーザー距離計	1	台	♥	購入	*DTAPE レーザー距離計　¥3,000
§8,11	スカウトロープ	5	本	♥	購入	*6m。予備
§9	クリップボード	4	個	♥	倉庫	
§12	隊集会用；宝箱	1	個	♥	倉庫 / 購入	*3 期で破損→購入 ¥2,000 位（大小セット）
§12	隊集会用；石型 隠し キーボックス	2	個	♥	購入	*¥1,000 位 / 個
§12	隊集会用；封筒その他	1	式	♥		
県連事務局で管理。　事前に連絡して借用する						
	プロジェクター	2	台	♠	事務局	エプソンの黒（EB-W420 3000lm WXGA ） 電源コード、HDMI コード、レーザーポインター。
	書画カメラ	1	台	♠	事務局	エプソン白に同梱されている
§6-2	模擬ファイアセット	1	セット	♠	事務局倉庫	
	研修隊旗（ケース、三脚）		枚	♠	事務局	

収蔵場所

♠：県連事務局、及び県連事務局倉庫
♥：乙戸倉庫、小
♣：乙戸倉庫、大

★日連定型訓練　課題

WB研修所　（スカウトコース）

課題１

日本連盟発行書籍「基本原則」、「日本連盟規程集」教育規程第１章「一般原則」を読み、スカウト運動の理念と日本連盟の方針を理解し、指導を受けた内容を記述してください。

課題２

スカウティング・フォア・ボーイズの第Ⅸ章、第Ⅲ章、第Ⅰ章、第Ⅱ章の順に熟読し、指導を受けた内容を記述してください。

課題３

スキルトレーニングにおいて以下の項目を履修し、指導を受けた内容を記述してください。

(1) ロープワーク
(2) 地図とコンパス
(3) 刃物の取り扱い
(4) 野営技能

課程別研修（ビーバースカウト課程、カブスカウト課程、ボーイスカウト課程、ベンチャー課程）

当該隊リーダーハンドブックを熟読し、指導を受けた内容を記述してください。
※ VS 課程は VS スカウトハンドブックも熟読する。

団委員研修所　課題研修

課題１

日本連盟発行書籍「団の運営と団委員会」を熟読しし、指導を受けた内容を記述してください。

課題２

日本連盟教育規程「第１章 一般原則」、「第２章加盟登録」、「第３章 団」、「第４章 都道府県連盟」「第５章 地区」、「第７章 教育の方法 (7-33 ～ 7-43)」を熟読しし、指導を受けた内容を記述してください。

課題３

ボーイスカウト隊リーダーハンドブック「第３部 隊の運営」の「８章 隊指導者」、「９章 隊の運営」、「10 章 隊を支える組織」を熟読し、指導を受けた内容を記述してください。

団委員実修所　課題研究

課題１

自団の状況が把握できる、直近３年間の下記資料を入手し、コース参加時にお持ちください。

①部門別スカウト数
②指導者数の推移
③進級の状況
④隊集会等の開催及び出席状況
⑤指導者の研修歴
⑥予算書・決算書及び事業計画書・報告書
⑦団委員会の組織と業務体制
⑧育成会・団委員会・団会議の開催状況
⑨育成会・団の規約など

課題２

日本連盟発行書籍の「団の運営と団委員会」を精読し、自団の実状と違うところを列記してください。

課題３

課題１及び課題２をもとに、コミッショナーや先輩指導者と話し合い、その内容を簡潔にまとめてください。

課題４

団委員（長）として、学びたいことを列記してください。

「課題研修まとめ用紙」

課程　　氏名：

課題１	・ハンドブックの内容と自隊との違い
	・指導やアドバイスの内容
	・指導後の感想

※課題について指導を受けた内容を記述し、申込書と一緒にご提出ください。

2019 Jan.

★スキルトレーニング課目一覧

ロープワーク

①次のロープ結びについて実演できる

- 本結び
- ひとえつぎ
- ふた結び
- もやい結び
- ８の字結び
- てぐす結び
- 巻き結び
- ねじ結び
- ちぢめ結び
- 引きとけ結び
- トートラインヒッチ
- 角しばり
- すじかいしばり
- 馬つなぎ
- 垣根結び
- アイスプライス
- バックスプライス
- からみ止め

地図とコンパス

① 16 方位と方位角の呼び方をおぼえ、プレートコンパスを使用することができる。

②地形図に座標軸および磁北線を記入し座標読みができる。

③地形図上に示された２個の目標物と現在地との方位角、標高差、および道路に沿った歩行距離を読むことができる。

④地形図上に示された 10 種 10 個以上の地図記号を判別することができる。

⑤１線式または２線式路線記録法により野帳を記入し、略地図を作成できる。

野営技能（野営工作、野外炊事含む）

①家型テントの設営、撤営と維持管理ができる。

②フライシート（タープテント）の設営、撤営と維持管理ができる。

③班サイトの設計と維持管理ができる。

④ BS 隊を想定した３泊以上のキャンプを経験する。

⑤班の炊事に適する２種以上のかまどを使い、薪で炊事ができる。

⑥薪以外の燃料を２種以上使用して炊事ができる。

⑦食料の貯蔵と保管方法について説明できる。

⑧班キャンプに必要な野営工作物を２種以上作成し、活用することができる。

⑨キャンプ中の危険防止と衛生を保つ方法を説明できる。

通信（手旗、信号、サイン等）

①ハイキングにおいて、自然物を利用した追跡記号を通信文を含めて配置できる。

②カタカナ手旗信号で 20 字程度の通信文を意味を間違えずに発信・受信できる。

刃物の取り扱い

①刃物の携帯に関する法律について説明できる。

②ナイフの正しい使い方と安全について説明できる。

③ナイフの研ぎ方が実演できる。

④なた、オノの正しい使い方と安全について説明できる。

⑤なた、オノの研ぎ方が実演できる。

計測と簡易測量

① 100 メートルの距離を誤差５%以内で歩測できる。

②簡易測量法を用いて、到達できない２点間の距離を測る。

③簡易測量器具を用いて樹木などの高さを測る。

救急法

①他の人に次の応急手当ができる。

- うちみ
- 手首足首のねんざ
- 目のちり
- 足のまめ
- 虫ささ れ
- 切り傷
- やけど
- 鼻血
- 熱中症
- ひどい日焼け
- 毒蛇にかまれた傷
- 犬にかまれた傷

②直接圧迫止血法ができる。

③ショック、食中毒、ガス中毒のそれぞれの症状を知り、応急処置ができる。

④心肺蘇生法が正しくできる。

⑤ AED の取り扱いが正しくできる。

⑥他の１名と協力して急造担架が作れる。

※**青字**は、WB 研修所スカウトコースの課題研修「課題 3」の細目となります。

★スキルトレーニング課目と指導者研修の対応表

項　　目	進級課目	WB 研修所入所要件	細目を履修する研修等	備　　考
ロープワーク				
①次のロープ結びについて実演できる				
・本結び	初級	○	野活研ロープ基本	
・ひとえつぎ	初級		野活研ロープ基本	
・ふた結び	初級		野活研ロープ基本	
・もやい結び	初級	○	野活研ロープ基本	
・８の字結び	初級		野活研ロープ基本	
・てぐす結び	２級		野活研ロープ基本	
・巻き結び	２級	○	野活研ロープ基本	
・ねじ結び	２級	○	野活研ロープ基本	
・ちぢめ結び	２級		野活研ロープ基本	
・引きとけ結び	２級	○	野活研ロープ基本	
・トートラインヒッチ	２級		野活研ロープ基本	
・角しばり	１級	○	野活研ロープ基本	
・すじかいしばり	１級	○	野活研ロープ基本	
・馬つなぎ	１級			
・垣根結び	１級			
・アイスプライス	１級			
・バックスプライス	１級			
・からみ止め	１級			
地図とコンパス				
① 16 方位と方位角の呼び方をおぼえ、プレートコンパスを使用することができる。	２級	○	野活研ハイク基本	
②地形図に座標軸および磁北線を記入し座標読みができる。	２級 *		野活研ハイク ST1	
③地形図上に示された２個の目標物と現在地との方位角、標高差、および道路に沿った歩行距離を読むことができる。	２級		野活研ハイク ST1	
④地形図上に示された 10 種 10 個以上の地図記号を判別することができる。	２級		野活研ハイク基本	
⑤１線式または２線式路線記録法により野帳を記入し、略地図を作成できる。	１級		野活研ハイク ST2	
野営技能（野営工作、野外炊事含む）				
①家型テントの設営、撤営と維持管理ができる。	野営章 野営管理章	○	100% 講座	
②フライシート（タープテント）の設営、撤営と維持管理ができる。	野営管理章	○	100% 講座	
③班サイトの設計と維持管理ができる。	野営章		野営法（基本）	
④ BS 隊を想定した３泊以上のキャンプを経験する。	野営章			
⑤班の炊事に適する２種以上のかまどを使い、薪で炊事ができる。	野営章	○	100% 講座	
⑥薪以外の燃料を２種以上使用して炊事ができる。	野外炊事章		野営法 ST1	
⑦食料の貯蔵と保管方法について説明できる。	１級		野営法 ST1	
⑧班キャンプに必要な野営工作物を２種以上作成し、活用することができる。	野営章		野活研ロープ ST2 野営法 ST1	

項　　目	進級課目	WB 研修所入所要件	細目を履修する研修等	備　　考
⑨キャンプ中の危険防止と衛生を保つ方法を説明できる。	野営管理章	○	野営法 ST1	
通信（手旗、信号、サイン等）				
①ハイキングにおいて、自然物を利用した追跡記号を通信文を含めて配置できる。	* 通信章 *2 級章		SUS「計測と通信」	
②カタカナ手旗信号で 20 字程度の通信文を意味を間違えずに発信･受信できる。	1 級		SUS「計測と通信」	
刃物の取り扱い				
①刃物の携帯に関する法律について説明できる。	―		SUS「刃物」	
②ナイフの正しい使い方と安全について説明できる。	―	○	100% 講座 SUS「刃物」	
③ナイフの研ぎ方が実演できる。	―		SUS「刃物」	
④なた、オノの正しい使い方と安全について説明できる。	2 級		SUS「刃物」	
⑤なた、オノの研ぎ方が実演できる。	―		SUS「刃物」	
計測と簡易測量				
① 100 メートルの距離を誤差５%以内で歩測できる。	2 級		SUS「計測と通信」	
②簡易測量法を用いて、到達できない２点間の距離を測る。	1 級		SUS「計測と通信」	
③簡易測量器具を用いて樹木などの高さを測る。	1 級		SUS「計測と通信」	
救急法				
①他の人に次の応急手当ができる。				
・うちみ	―			
・手首足首のねんざ	BS 救急法			
・目のちり	2 級			
・足のまめ	―			
・虫ささされ	2 級			
・切り傷	2 級		普通救命講習	
・やけど	2 級		普通救命講習	
・鼻血	2 級			
・熱中症	2 級			
・ひどい日焼け	―			
・毒蛇にかまれた傷	BS 救急法			
・犬にかまれた傷	BS 救急法			
②直接圧迫止血法ができる。	1 級		普通救命講習	
③ショック、食中毒、ガス中毒のそれぞれの症状を知り、応急処置ができる。	BS 救急法			
④心肺蘇生法が正しくできる。	BS 救急法		BS 救急法	
⑤ AED の取り扱いが正しくできる。	菊		普通救命講習	
⑥他の１名と協力して急造担架が作れる。	1 級		BS 救急法	

※「SUS」＝スキルアップセミナー　「SBS」＝スカウティング基本セミナー　「RT」＝ラウンドテーブル

道心門について

1．佐野常羽氏が指導者訓練所を修験道の修行になぞらえ、「山中道場」と称して訓練を実施したわけですが、なぜ修験道を選んだのか・・・。

(推測)

BSは今でこそ女子スカウトの加入を認めていますが、当時はやはり「男の世界」でした。

修験道もその行場においては、「女人結界」が多く存在し、一部の行場には、今も女性の立ち入りを禁じているところがあります。（今は別途女性の為の行場が開かれているようです）

要するに「男の世界」を標榜するために、修験道をモチーフにしたのではないでしょうか?

ウッドバッジ研修所やウッドバッジ実修所に参加された方はご存知ですが、最初に「道心門」をくぐりますね。これは佐野氏が開催された指導者訓練所以来の伝統です。私達が参加(当時は入所といいました）したころは、所長が「道心門」を背にして、

「皆さんの地位と名誉をここで私に預けてください。
それができない人はここからお帰りください」
と言われたものです。

私には地位も名誉もなかったので、預けようがなかったため、素直に門をくぐりましたが・・・。

2．その「道心門」の件ですが、以前、ある方の推測で「身分を平にするためではなかったか?」との推察案を聞かせていただきました。

これも推測なのですが、佐野氏は海軍少将であったことから、彼の部下である、海軍将校が当初この指導者訓練に参加したようです。

当時の海軍将校といえば、かなりエライ人たちです。

同時、ごく一般の職業の方も参加されました。

こういった身分の違い(当時の）の中で、同じテントに寝て、対等な立場で研修するということは、何かのきっかけというか、意味付けが必要であり、れが「道心門」ではないかということです。

また、佐野氏は清規三事の3つ目に「道心堅固」と示しています。

この「道心」は信仰に裏打ちされた強い心と言う意味でしょう。修験道もその修行に入るときは俗界の身分等を捨てて入るものです。

1はその裏づけの1つになると思います。

3．さらに・・・。

修験道の入門にあたり、山上ヶ岳に行くまでに修行をする人は「発心（ほっしん)」「修行(しゅぎょう)」「等覚(とうがく)」「妙覚（みょうがく)」の4つの門をくぐらなければなりません。

その第1の門が吉野町の金峯山寺の近くにあります。「銅の鳥居（かねのとりい)」といい、現在は重要文化財に指定されています。

別名・・・というより本当の名前が「発心門」です。

吉野町のホームページの観光案内の説明では、銅の鳥居のことについて、以下のとおり記されています。

「黒門からの急坂を登りつめたところにあります。高さ約7,5 m、柱の周囲約3.3 m、すべて銅製。1348（正平3)年に高師直の兵火で焼失したあと、室町時代に再建されたものです。正しくは発心門。山上ヶ岳までの間に発心・修行・等覚・妙覚の四門があり、これが最初の門です。

行者たちはここから向こうを冥土と見たて、ひとつ門をくぐるごとに俗界を離れて修行する決心を強めていきました。」

(推測)

佐野常羽氏(秘書であった吉川氏かも知れません）はこのことをよく存じておられて、発心門をモチーフに「道心門」を用いられたのではないでしょうか。

「道心」とは道徳心、仏法を信奉する心を表す言葉と理解されます。転じて信仰心を表しているのかもしれませんね。

「発心門」をモチーフにしていたとしたら、「ここは修行の行場への結界門である」ということを言いたかったのではないでしょうか。

「鳥居」は「俗界」と「神界、佛界」を区別する結界の意味を表すという宗教上の意味を持つものです。

以上が私の推測です。

だからといって、指導者訓練が修験道のように厳しい修行であるべきとは思いませんし、そうであってはならないと思います。

あくまでも日本の指導者訓練がそういうモチーフで始まったのではないか・・・と私が考えているだけです。誤解なきようにお願いします。

(2007/9/10「ボーイスカウト北葛城第7団 団委員長のつぶやき」より。https://blogs.yahoo.co.jp/kitakaturagi7/20104792.html)